



20th
Anniversary
1996-2016

THE COMMEMORATIVE BOOKLET OF
THE 20TH ANNIVERSARY OF FOUNDATION OF THE JOINT GRADUATE SCHOOL

兵庫教育大学**連合学校教育学研究科**
20周年記念誌



兵庫教育大学



上越教育大学



岡山大学



鳴門教育大学

JOINT GRADUATE SCHOOL (PH.D PROGRAM) IN SCIENCE OF SCHOOL EDUCATION,
HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

連合学校教育学研究科創立 20 周年記念式典記念行事

と き：平成 28 年 9 月 24 日（土）

ところ：神戸ポートピアホテル

神戸市中央区港島中町 6 丁目 1 0-1

（1）記念式典

〔14 時 30 分～15 時 30 分（受付：14 時 00 分～）〕

会場：本館地下 1 階 和楽

（2）記念講演

〔15 時 40 分～17 時 00 分〕

会場：本館地下 1 階 和楽

（3）記念祝賀会

〔17 時 30 分～19 時 00 分（受付：17 時 00 分～）〕

会場：本館 3 0 階 プレンデトワール

目 次

I ごあいさつ

兵庫教育大学長 福田光完	1
上越教育大学長 佐藤芳徳	2
岡 山 大 学 長 森田 潔	2
鳴門教育大学長 山下一夫	2

II 創立20周年記念式典等実行委員会委員長あいさつ

連合学校教育学研究科長 松村京子	3
------------------------	---

III 連合大学院創立20周年記念式典記念行事日程

4

IV 連合研究科20年間の歩み

5

V 記念講演会（15時40分～17時00分）

1 講演者プロフィール	9
2 記念講演概要	
「What does it mean to know in teaching?	
New Views of Learning and Approaches to Research on Teaching」	10

VI 連合研究科資料

1 数字とグラフでみる連合大学院の現況	42
2 学位論文題目一覧（平成18年度～）（課程博士・論文博士）	50
3 在学者の研究題目一覧	70
4 連合学校教育学研究科役職員名簿（平成8年～平成28年度）	76
5 教育実践学論集論文題目	78
6 共同研究プロジェクトの成果	89
7 学生研究発表会の記録	124

I ごあいさつ

連合大学院創立 20 周年を迎えて

大学院連合学校教育学研究科が創立 20 周年を迎えられたことは誠に喜ばしく、関係の皆様方のこれまでの御尽力に心から敬意を表したいと思います。

教育実践学の確立をめざし、平成 8 年に発足した本研究科は、新構想三教育大学と岡山大学が協力体制で博士（学校教育学）を学位として提供するわが国唯一の教育学系の博士課程として誕生し、爾来、創立 10 周年記念式典を経て、無事ここに創立 20 周年記念式典を迎えることになりました。

過去 10 年間を振り返ると、関係者皆様の着実な取り組みによって、教育実践学を不動の地位に高めたことは、本研究科の設立当初の目的を十分に果たされてきたと確信いたします。具体的には、毎年 3 件以上の多様なプロジェクト研究を推進し、成果を学術論文や海外における発表等を通して教育実践学の発展に寄与されてきました。また、平成 24 年度には「教育実践学コンピテンシー」を策定して博士課程のカリキュラム改革に取り組み、毎年の D1 セミナーをはじめ、教育の成果も明らかです。創立以来変わらず志願者が常に一定数確保できていること、その結果として平成 28 年度から学生定数が 32 名に増員となったことも、本研究科の誇るべき足跡です。

これまで本研究科を修了した学位取得者は、260 名以上となり、全国の学校現場における指導的な立場として活躍されている方や、国公私立の大学教員となって教員養成に尽力されている方も多くおられます。教育学関係で博士の学位を取得した者は、わが国では極めて少なく、全博士学位取得者のわずか 2 % 以下です。しかし、その限られた博士の学位を取得された方々と本研究科が果たす役割は十分大きいのです。

今後、さらに本研究科が発展し、教育学系の博士課程の中でも、全国的にトップランクの博士課程となるには、まず博士論文やそれに付随した研究論文の質の向上が重要です。良い論文は、他の研究者によって多く引用されます。国内の研究者だけを相手にしては、ドメスティックな枠から拡大することはありません。教育実践学は、世界的な研究領域ですので、国際的に認められなければなりません。そのためには、英語で執筆する機会を増やす必要があります。もちろん分野によっては日本語の論文は重要ですが、国際的な教育学関連の学術雑誌は沢山あります。さらに今後は、社会の変化に伴い、ますますサイエンス・テクノロジーと教育は融合していくと予測できます。人間の認知、行動パターンも脳研究の発展でかなり解明されてきていますし、人工知能・ロボット研究と人間との関係は学校現場においても重要な課題になる時代がやってきます。今こそ、これらの研究領域についても本研究科で果敢に取組み、教育実践学に新しい風を吹き込むような最先端研究を担う博士課程であってほしいと希望します。

今後とも本研究科が、多くの関係者や志願者に支えられ発展し、10 年後の創立 30 周年には、世界的にもよく知られた教育学系の博士課程となっていることを切に願っています。どうか皆様方のご協力とご支援を賜ります様、お願い申し上げます。



兵庫教育大学長
福田光完

連合学校教育学研究科創立 20 周年に寄せて

連合学校教育学研究科が創立 20 周年を迎えました。本研究科の創設及び発展にご尽力賜った幾多の皆様に深く感謝申し上げるとともに、共に慶びたく存じます。本研究科は、科学技術の高度化、教育環境の急激な変化及び社会の多様化などに的確に対応できる高い識見と優れた教育実践を遂行できる資質能力を有する人材育成を行い、学校教育の質的改善と改革に貢献するという理念のもとに設立されました。課程修了者及び論文提出により学位を授与された人は、学校教育におけるリーダーとしての役割を十分に果たし、日本の教育ひいては世界の教育を牽引しています。本研究科が、今後ますます国際化・多様化する社会において、新たな教育課題を積極的に解決し指導的役割を果たしうる人材を育成し続けることを心より願っています。



上越教育大学長
佐藤芳徳

創立 20 周年を祝して

この度連合学校教育学研究科創立 20 周年を記念して、記念式典が開催されますことを内外の関係者の方々とともに喜びたいと思います。

本研究科は、平成 21 年度に既設の学校教育実践学専攻及び教科教育実践学専攻に加えて新たに先端課題実践開発専攻を設置し、学校教育の実践課題に学校現場において取り組む高度専門職業人としての教師にふさわしい人材の養成を行ってきました。

また、20 年という節目の年に学生定員が 8 名純増となったことは本研究科の実績が高く評価されたものであり、誠に喜ばしいことです。

今後も、学校教育の質的改善・改革への寄与を改めて誓うとともに、4 大学が一層協力して本研究科を更に発展させていきたいと思います。



岡山大学長
森田 潔

日本の教師教育の大黒柱に

日本の教師の教育水準は、第二次世界大戦前の師範学校レベルから、戦後一挙に大学レベルへと上がり、1970 年代まで世界一高かったのです。しかし、1980 年代以降、欧米やアジアの多くの国が大学院レベルへと着々と進めているのに対し、日本は教師教育の高度化と専門職化は遅れ、修士レベル化はなかなか進展していません。

このような状況下において、私たちの連合学校教育学研究科(博士課程)が 20 周年を迎えることは、誠に意義深いものです。出る杭を打とうとする風潮の強い日本にあって、関係各位のたゆまぬ努力によって出る杭は着実に大きくなりました。

今後ますます発展し教師教育の大黒柱として、実践に根ざした学校教育学の確立と、学校教育への貢献に寄与していきたいと思います。



鳴門教育大学長
山下一夫

Ⅱ 創立 20 周年記念式典等実行委員会委員長あいさつ



あらたな飛躍に向けて

創立 20 周年記念式典等実行委員会委員長
兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科長
松村 京子

本連合学校教育学研究科は、平成 28 年 3 月で 20 周年を迎えました。本研究科は平成 8 (1996) 年 4 月に、兵庫教育大学を基幹大学として、上越教育大学、岡山大学、鳴門教育大学の 4 大学の連合研究科として発足しました。教員養成系大学としては日本で初めて設立された博士課程です。学校教育に関わる多様な教育実践や教育的諸課題を研究対象とし、実践を重視した「教育実践学」という新たな学問分野の構築を目指したもので、高度の研究指導能力を有する実践者及び実践に根ざした研究者を育成することを使命としています。平成 28 年 3 月までに、課程博士 268 人、論文博士 127 人、合計 395 人に博士の学位を授与しています。そして、修了生は累計で約 6 割が大学・短期大学の教員となり、教員養成等に関わっています。

この間、平成 11 (1999) 年 3 月に『教育実践学の構築』を、平成 18 (2006) 年 9 月には『教育実践学の構築 第 2 集』を刊行し、教育実践学の体系化への方向性を示しました。平成 12 (2000) 年から刊行を開始した『教育実践学論集』は現在、第 17 号を数え、学会や教育実践の場で広く認知されるに至っています。また、平成 19 (2007) 年度から 21 (2009) 年度にかけては、大学院教育改革支援プログラムの採択を受け、教育実践学コンピテンシーの育成を目指した教育課程等の再編にも取り組むとともに、平成 21 (2009) 年には新専攻(先端課題実践開発専攻)を設置しました。さらに、近年の特筆すべきことは、平成 28 年 4 月から入学定員に 8 人の純増が認められ、32 人となったことです。このことは、より多くの学位取得者育成を本研究科が期待されていることを示しています。

この他、本研究科では、国際インターンシップ、国際学会派遣など、大学院生の研究支援を進めるとともに、連合大学院の特色を生かした共同研究プロジェクトを立ち上げ、4 大学の研究者の密接な連携の下で研究を推進しています。

本研究科では、研究成果を広く教育界や社会に還元するとともに、教育実践研究を推進する研究者の育成を進めてまいります。また、教育実践学が一層、充実・発展したものとなるよう、研究科構成員の力量を高め、国内外での研究交流を推進していきたいと考えています。

今回の 20 周年記念行事を飛躍への貴重な礎石として、本研究科がますます発展していくよう、今後ともご支援、よろしくお願い申し上げます。

Ⅲ 連合大学院創立20周年記念式典記念行事日程

期日：平成28年9月24日（土）

場所：神戸ポートピアホテル

（１）記念式典（14時30分～15時30分）……本館B1階 和楽（受付 14時00～）

次第

- | | | | |
|---|-----------|-------------------------|---------|
| 1 | 開式の辞 | 兵庫教育大学長 | 福田 光完 |
| 2 | 祝辞 来賓 | 文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長 | 柳澤 好治 様 |
| | 来賓 | 東京学芸大学長 | 出口 利定 様 |
| | 来賓 | 兵庫県副知事 | 荒木 一聡 様 |
| 3 | 来賓紹介 | | |
| 4 | 構成大学役職員紹介 | | |
| 5 | 祝電披露 | | |
| 6 | 連大20年の歩み | 連合学校教育学研究科長 | 松村 京子 |
| 7 | 閉式の辞 | 上越教育大学長 | 佐藤 芳徳 |

（２）記念講演（15時40分～17時00分）……本館B1階 和楽（受付 15時10分～）

進行 連合学校教育学研究科研究主幹 西岡伸紀

『What Does it Mean to Know in Teaching?』

New Views of Learning and Approaches to Research on Teaching』

（教育における、「知る」ことの意味

学習に関する新しい視点と、教育研究の様々なアプローチ）

ゲストスピーカー

Vanderbilt University Peabody College, Professor Dr. Ilana Horn

（アメリカ・ヴァンダービルト大学ピーボディ校 教授 イラーナ・ホーン 氏）

（３）祝賀会（17時30分～19時00分）……本館30階 プレンデトワール（受付 17時00～）

次第

- | | | | |
|---|--------|----------------------------|----------|
| 1 | 開会挨拶 | 岡山大学理事・副学長 | 阿部 宏史 |
| 2 | ソプラノ独唱 | | 高橋 昌子 |
| | | （岡山大学大学院教育学研究科教授 | 虫明 眞砂子） |
| | | 電子ピアノ：松下 智子 様 | |
| | | 「歌の翼に」メンデルスゾーン作曲 | |
| | | 「Stand Alone」小山薫堂作詞／久石 譲作曲 | |
| | | NHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』より | |
| 3 | 乾杯 | 連合学校教育学研究科長 | 松村 京子 |
| 4 | スピーチ | 東京学芸大学連合学校教育学研究科長 | 大石 学 様 |
| | | 連合学校教育学研究科長（初代） | 濱名 外喜男 様 |
| | | 名誉教授 | |
| | | 博士課程同窓会長 | 三浦 義行 様 |
| 5 | 閉会挨拶 | 鳴門教育大学長 | 山下 一夫 |

IV 連合研究科20年間の歩み

平成8年4月1日 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科設置（入学定員24人）
平成8年度予算成立の関係から佐藤学長が研究科長事務取扱（～5/10）

平成8年4月13日 連合学校教育学研究科平成8年度入学試験実施（91人出願）

平成8年4月26日 連合学校教育学研究科第1回入学式を挙行（25人入学）

平成8年5月11日 初代研究科長に濱名外喜男就任

平成8年6月5日 研究科開設記念式典挙行

平成8年7月29日 第1回総合共通科目の実施

○第1期生に対する3泊4日の合宿による初の総合共通科目を実施。



平成11年3月 連合学校教育学研究科第1回学位記授与式を挙行
課程博士第1号の学位記を授与。平成11年3月末修了者は計8人。

平成11年3月 「教育実践学の構築」刊行

○連合研究科の学術論文集「教育実践学論集」の創刊に先立つ準備号として、教育実践学とは何かを明確に示すため、研究科内にWGを設置し「教育実践学の構築」を刊行（全264頁）。

WG座長は佐藤光（専任教官）、委員は新井郁男（上）、小宮三彌（上）、中瀬正堯（兵）、中村哲（兵）、丸林英俊（鳴）、西園芳信（鳴）、松浦正史（兵）の各教授。

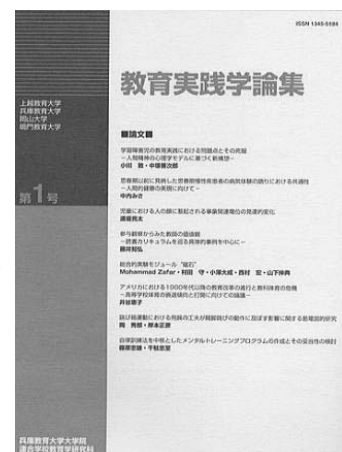
このWGメンバーは、次年度から刊行する「教育実践学論集」の第1期編集委員に選出。



平成12年3月 「教育実践学論集」創刊

○研究科の研究活動の推進及び研究者間の研究交流を図り、教育実践学の構築と発展に貢献するための論文集として創刊。平成18年3月発行の第7号までに計65編を採録。

本論集に掲載する学術論文は、①教育実践記録で、実践の意図やねらい、実践内容の分析を含み内容、研究方法に新規性、独創性のあるもの、②教育実践に係わる教育内容・教育資料・教材開発あるいは過去教育思想・教育制度・教育実践・教育内容を分析したもので、3人のレフェリー審査結果に基づき採録を決定。東京学芸大学連合大学院との審査相互協力も実施。第4号以降、業績論文誌（A論文誌）に認定。



平成12年4月 研究科長に中瀬正堯就任

平成12年9月 論文博士第1号の学位記を授与

平成12年12月 研究科長に山下伸典就任

平成14年4月 フレックスタイム・カリキュラム制度の適用拡大

○現職教員等の受入れの推進、及び在学中における研究者への就職の機会を確保し学位取得を推進するため、総合共通科目を除いた授業科目（専門科目、課題研究）及び学位論文の作成等の指導について、それまでの2年間の限定的適用から修業年限3年間の全期間に拡大。

平成14年12月 研究科長に山下伸典再任

平成15年3月 遠隔リアルタイムコラボレーションシステム（RCS）の導入

○4大学からの交通の便を考慮し、大阪市で開催している研究科の諸会議の半数をインターネットを利用したRCS会議や電話会議を導入。会議開催のための経費（会場費と旅費、移動時間）を大幅に節減。同システムの遠隔教育への活用の推進取組みを開始。

平成15年4月～ 共同研究プロジェクトの創設

○構成4大学の教員が所属大学、専門領域の枠を越え、また研究科学生もチーム構成員として参加するプロジェクト型の研究を推進するための研究費予算（3年継続）を創設。研究科内で公募し、採択された3つのプロジェクト（A・B・C）が平成15年度から研究活動を開始。

平成15年5月 連合学校教育学研究科自己点検・自己評価報告書公表

○総説、管理・運営、教育課程、学位、教官の教育研究活動、学生の受け入れと教育研究活動等、研究施設の現状と予算の7章により構成（全112頁）。

平成16年3月 連合学校教育学研究科（博士課程）外部評価報告書公表

○外部評価委員を、岡本靖正（東京学芸大学名誉教授）、新井邦二郎（筑波大学心理学系長）、有光友學（横浜国立大学教育人間科学部長）、高倉翔（明海大学長）、古川郁夫（鳥取大学大学院連合農学研究科長）の5名に委嘱し、平成16年1月に評価委員会を開催。

平成16年4月 国立大学法人化に伴う新たな協定書の締結

○法人化後の研究科教員の身分、人件費、勤務条件について協定する必要から、それまでの構成大学間協定書を廃止し、新たに「兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の設置及び運営に関する構成国立大学法人間協定書」と付属の「覚書」を締結。

これを機に、研究科専任教授は「専任教官」から「研究主幹」に、また「連合研究科幹事」はその職務の範囲を明確化し「副研究科長」に名称を変更。

平成16年4月 研究科長に岩田一彦就任

平成16年4月 連合学校教育学研究科大阪サテライト設置

○交通の便のよい環境での博士課程の授業、研究指導の場を確保すると同時に、共同研究プロジェクトの拠点、研究科の会議スペースとして活用するため、大阪市北区中之島のキャンパス・イノベーションセンター（大阪地区）に設置。



サテライトの401号室



センターの全景

平成16年4月～ 「D1セミナー」の実施

- 同じ配属大学の同期生の交流の場を提供するとともに、学生個々の研究課題のブラッシュアップと入学当初に3年間の教育課程日程を徹底周知することを目的として、各副研究科長主催により構成大学別のD1セミナー（1泊2日）を実施。

平成16年4月～ 「教育実践学フォーラム」の創設

- キャンパス・イノベーションセンター内の大阪サテライトを拠点とし、学校教育実践にかかる諸問題をテーマに関係分野研究者、大学院生、学校教員、教育関係職員等を対象とした「教育実践学フォーラム」を立ち上げ、社会への発信と貢献への取組を開始。

平成16年12月～ 学生研究発表会を創設

- D2学生を対象に、研究課題のリフレクションや学位論文作成への一里塚として連合講座代表学生による研究発表、質疑応答、課程修了者の講演等を内容とする研究発表会を合宿形式により毎年11月頃に開催。この研究発表会は主指導教員の参加を前提としており、研究指導に関する主指導教員研修（FD）を併せて開催。



平成17年4月 基幹大学教員組織の大学院化

- 兵庫教育大学教員組織の大学院化に伴い、研究科委員会を研究科教授会に改正。

平成17年4月 連合研究科基幹研究プロジェクトの開始

- 連合大学院の10年を振り返って、その実績と評価に焦点を当てつつ、教育実践学の構築の今後の方向性を示すための基幹研究プロジェクト「教育実践学の理論構築及びモデル研究」を開始。このプロジェクトは研究科の国際化対応を主眼に研究計画を策定。同時に連合大学院10周年記念事業として「教育実践学の構築」を出版するための教育実践学研究会（ワーキング）を兼ねた組織として活動。

平成17年4月 大阪サテライトの拡充

- 1年間の利用実績からスペース拡充を決定し、1室（41㎡）を追加賃借し、2室（計85㎡）での運用拡大を図り、常駐事務スタッフ1人を配置。

平成18年3月 博士の学位授与数が合計150人に到達（課程博111人、論博39人）

平成18年4月 研究科長に岩田一彦再任

平成18年4月 連合大学院の新たな飛躍のための取組の開始

- 『新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－（中央教育審議会答申、平成17年9月5日）』並びに『大学院教育振興施策要綱（文部科学省、平成18年3月30日策定）』を踏まえた取り組みに着手。平成18年度から専門科目の構成大学別開講方式を4構成大学一元開講方式へ変更。学生の国際的研究活動を支援するための「研究科学生国際学会派遣制度」を創設。

平成18年 9 月 連合大学院創立10周年記念式典挙行

○記念国際シンポジウム「21世紀に果たすべき学校教育の使命と展望」

記念共同研究プロジェクト研究発表会

記念出版 「教育実践学の構築—モデル論文の
分析と理念型の提示
を通して—」



平成19年 9 月 大学院教育改革支援プログラム採択

学校教育実践学研究者・指導者の育成をテーマとして掲げ、教育実践学コンピテンシーを備えた研究者・指導者を育成

平成20年 4 月 研究科長に安部崇慶就任

平成21年 3 月 「教育実践学論集」創刊10周年記念特集号発刊

記念特集として沿革、論文題目一覧、採択状況、歴代編集委員会委員一覧を掲載。これまでの累計投稿件数205、採択数116



平成21年 4 月 先端課題実践開発専攻を設置

今日の学校現場を取り巻く諸課題や新たに出現する複合的な先端諸課題に対応するため、先端課題実践開発専攻を設置

平成22年 4 月 研究科長に原田智仁就任

平成26年 4 月 研究科長に松村京子就任

平成27年 4 月 研究科運営会議を設置

運営の効率化と教授会との役割の明確化を図るため、運営協議会を設置

平成28年 3 月 博士の学位授与数 395人（課程博268人、論博127人）

平成28年 4 月 入学定員を増員

新しい教員養成教育を担う実践的研究者養成のため24人を32人に増員

平成28年 4 月 研究科長に松村京子再任

平成28年 9 月 連合大学院創立20周年記念式典挙行

記念講演「アメリカにおける博士課程の研究と教育」

V 記念講演会（15時40分～17時00分）

1. 講演者プロフィール



イラーナ・セイデル・ホーン Ilana Seidel Horn

アメリカ ヴァンダービルト大学ピーボディ校教授(数学教育)

Web: <http://teachingmathculture.wordpress.com>

カリフォルニア大学バークレー校大学院博士課程修了
博士(数学教育)

スタンフォード大学大学院教育学研究科博士研究員, ワシントン大学教育大学院准教授(数学教育), ヴァンダービルト大学ピーボディ校准教授(数学教育)を歴任し, 2015年より現職。

keywords: Secondary mathematics education,
teachers' informal and formal learning,
high school departments as contexts for teacher and student learning,
classroom discourse, teachers' discourse,
motivation and engagement, equitable mathematics teaching

What Does it Mean to Know in Teaching?
New Views of Learning and Approaches to Research on Teaching

Ilana Horn
Vanderbilt University

It is an honor to be speaking at the 20th anniversary celebration of Hyogo University of Teacher Education's PhD program. My name is Ilana Horn and I am a professor at Vanderbilt University Peabody College, a sister university of this institution.

In preparing for this visit, I have enjoyed the opportunity to learn more about your programs and the work you do here. I have been asked to share some insights about what it means to be a scholar of teaching from my time in American universities.

As it happens, I started my PhD program at the University of California, Berkeley almost exactly 20 years ago. In this way, my own development as researcher of teaching overlaps with this institution's history. I will tell the story of how the field of teacher learning research in the US has shifted during that time through my own story, including the issues that scholars have addressed and the changing methods for doing so.

The title of my talk today is *What Does it Mean to Know in Teaching?: New Views of Learning and Approaches to Research on Teaching*. Before I begin, I will give you a brief overview of what I will share with you today. First, I am going to provide a brief history of learning theory in the United States. I do this to provide background for some of the research I will share with you, with a particular focus on the importance of *sociocultural theory*. Second, I will explain how sociocultural theories opened up new lines of inquiry in the study of teaching. Next I will explain how this line of inquiry differed from dominant paradigms for research on teaching. I will illustrate this difference by describing a study I conducted in the sociocultural tradition. Finally, I will reflect on the implications of my talk on the field of research in teacher education.

A Brief History of Learning Theory

In the late 19th and early 20th centuries, U.S. research on learning was dominated by **behaviorism**. Seeking a rigorous empirical basis for a study of behavior, researchers like E.L. Thorndike and B.F. Skinner sought to explain how learning happened by documenting what they could see empirically.

Out of this theory, we have ideas like *operant conditioning*, where actions are shaped by stimulus and responses in the environment to ultimately change behavior. Skinner famously made little operant conditioning chambers called "Skinner boxes" that successfully "taught" pigeons to dance. Through the boxes, food was dispensed in response to the pigeon's movements. If he turned his head to the left — the stimulus — he would get a food pellet — the response. The next time, he had to turn his head a little further to get his food. Eventually, through operant conditioning, the pigeon learned to turn in a full circle — to "dance" — to get food.

Behaviorism explained some forms of learning, but it couldn't explain everything. In the 1950s, the **cognitive revolution** began. Researchers like Jerome Bruner began to critique behaviorism, noting that a sole focus on behavior precluded a study of how people created *meaning*, a central question in understanding why people do what they do. Researchers realized they could do empirical studies that included a theory of the mind. Using methods like case studies and talk aloud protocols, investigators could examine how people made sense of the world.

Cognitive science, as it came to be called, led to important insights like *schema theory* and *conceptions*. A *schema* is a general system for understanding how knowledge is represented and how it is used.

Researchers can look for evidence of different schemata (the plural of schema). Like the behaviorists, they observed what people did. However, they augmented this by asking people to explain their thinking through interviews and surveys.

To give an example of a schema, let's take the word "dog." When I say "dog" what do you imagine? You probably think of four-legged animals that bark, are furry, have tails. But how do you know that these are all dogs?

How do you know that these are not?

This is the question that underlies the idea of schemata.

The examination of schemata started to point to the importance of culture. Schemata are closely related to prototypes. So, for example, when I say the word "furniture" what do you think of? I am truly curious. Linguists have found that when you say the word "furniture" to Americans, they think the best examples are *chair* and *sofa*. When you say the word "*möbel*" to Germans, however, they think the best examples are *bed* and *table*. Our schemata and our prototypes — the building blocks of concepts in the world — are culturally specific.

By the early 1990s, this increasing recognition of the importance of language, culture, and context shifted our ideas about learning yet again. Language and culture were not just the setting for development and thinking — some kind of external variable to be controlled for — they were, in fact, fundamental components of these mental processes. This insight meant that, to explain some learning phenomena, researchers needed to do more than describe mental structures.

This required another broadening of research methods. Using linguistics, anthropology, and sociology, learning researchers wanted to account for how concepts stretched beyond individual minds and into the world. Deeply influenced by Soviet psychologist, Lev Vygotsky, researchers working in this sociocultural tradition examined learning as it happened *in interactions in the world*, requiring new units of analysis. That is, instead of studying individuals as they learned, researchers sought ways to study *individuals in context*.

Incorporating Sociocultural Theory with the Study of Teaching

My own research takes up these sociocultural insights to re-think how we study teacher learning. Let me paint a bit of a picture for you about the various strands of inquiry that shaped my work.

First, when I entered my doctoral program at UC Berkeley in the mid-1990s, debates between cognitive and sociocultural perspectives on learning were quite active in my courses and in research groups. Although most arguments centered on questions of student learning, there was a growing interest in what was often called “out-of-school learning.” Influenced by anthropological researchers like Jean Lave, a small group of scholars studied **workplace learning**, a particularly pressing topic in our modern information economy, where workers must constantly adapt to a rapidly changing world.

Meanwhile, in educational policy studies, there was a growing recognition that research on school organization, curriculum, and teacher professional development had overlooked a central question: How do teachers’ learn? Since almost all school improvement efforts want to improve instructional quality — through curricular reform, changes in scheduling or assessment techniques — they all depend on what happens inside of classrooms. And that, of course, depends on what happens with teachers.

For this reason, educational policy scholars like Judith Warren Little were recognizing that ***teachers’ learning is an underanalyzed component of any efforts at school change or instructional improvement.*** Yet it was not central to policy designs — let alone to analyses of their effectiveness.

The moment was ripe for somebody to connect these ideas. My work starts with the policy-based observation that *designs for instructional change must consider teacher learning*. I then use methods and insights from sociocultural theories of learning to examine *how teachers’ learning happens in the school as a workplace*. As the sociocultural theorists suggest, what teachers know and learn is not solely a product of what is in their individual heads. Concepts for teaching draw on culturally specific practices and language in the world. For instance, in the U.S., we start grouping children by ability levels at a very young age. The concept of a “high ability 6 year old” makes sense for American teachers in a way that it would not in countries that do not use this form of tracking so early. There are consequences to that concept having social meaning, as educators make decisions about their schools and classrooms and parents advocate for certain experiences.

By using sociocultural perspectives to explain teachers’ learning, my research is both more culturally specific *and* theoretically specific than much prior work. Although the details of what I find about U.S. teachers may not generalize to other countries, it is my hope that my descriptions of teachers’ learning can be more generalizable. To do this work, I needed to find my way with other influential ideas in teacher education while developing methods for my investigations.

Reconciling Sociocultural Theory with Dominant Paradigms

Undoubtedly, the most influential idea in U.S. teacher education in the 1990s was Lee Shulman's concept of *pedagogical content knowledge*. Pedagogical content knowledge – what we call PCK in English — points to the kinds of understandings that lie at the intersection of subject matter knowledge and teaching knowledge. For example, PCK includes:

- regularly taught topics in a subject area;
- useful representations of ideas;
- powerful analogies, illustrations, examples, explanations, and demonstrations;
- what makes the learning of specific topics easy or difficult.

All of these — and probably more -- make up what Shulman called the “missing paradigm” in teacher education.

It is hard to overstate the influence of Shulman's ideas in the U.S. The two articles he wrote to introduce PCK have been cited over 13,000 times — each.

The influence of this idea extends beyond scholarly debates. Teacher education programs re-organized to newly emphasize teachers' content learning and connect it to the work of teaching. Instead of studying generic principles for curriculum or teaching, researchers investigated what it meant to teach specific content. Whole research programs developed to identify, develop, and measure PCK.

Some of the deepest work in this field has been in the content area of mathematics education. And it has yielded some powerful findings. For instance, teachers' mathematical knowledge for teaching — another term for PCK — is **significantly related to student achievement gains.**” (Hill, Rowan & Ball, 2005). So teachers' PCK matters for students' learning. Likewise, there is **a significant, strong, and positive association between levels of [PCK] and the quality of instruction** (Hill et al., 2008). Shulman clearly identified something that we, as a field, have been able to pursue empirically and ascertain its power.

Shulman's paradigm answers some urgent questions in teacher education. The implications are clear. Good teaching does demand a specialized form of knowledge that is related to but distinct from content knowledge and generic teaching knowledge. This knowledge has identifiable consequences for both student learning and the quality of instruction. The focus on PCK in both research and practice has yielded important results.

Notably, Shulman's construct fits well within the paradigm of cognitive science. That is, PCK and its related knowledge structures are reminiscent of the schemata that cognitively oriented researchers wanted to identify. PCK describes knowledge structures that signal expert teaching practice — mental maps, prototypes, and related conceptions.

So what is the problem? Shouldn't we just simply keep this productive research program moving forward?

Recall that the power of cognitive science was the re-introduction of the mind in studies of learning. Indeed, understanding the knowledge structures of successful teachers is a great contribution. It gives us an image of expertise. PCK gives us something to document, design for, and develop in teachers and schools.

Recall also that a limit of cognitive science was that it granted less attention to the cultural tools for and social consequences of those knowledge structures. While PCK-related research can give us something powerful to guide our work, it does not provide an understanding of

(1) how teachers develop this type of knowledge, or

(2) how it might “work” in particular settings — different teachers, different students, different cultural resources.

The Sociocultural Turn

For this reason, I take the sociocultural turn in my own work. I develop this critique of cognitively oriented studies of teacher knowledge and learning to better understand these two questions.

The sociocultural turn requires us to re-interpret previous findings in teacher education research. To do so, we need to account for more than what teachers, as *individuals*, know, and instead looking at what teachers, as *individuals-in-context*, can do and make sense of.

Okay. So let’s take teachers as individuals-in-context. The primary context for teaching is school. As it turns out, school is a powerful cultural institution.

In the democratic ideal, schools play the role of equalizers by helping children develop according to their needs and potential. Sociologists of education find that, in the U.S. more than in most developed countries, schools often contribute to *social stratification*, meaning that children maintain their social status through schooling. For this reason, U.S. schools are frequently places for *social reproduction* more than *social transformation*. In other words, middle class American children can statistically expect middle class educational outcomes. Likewise, children living in poverty can expect to maintain their lower social status.

What is going on in schools that lead to such *status maintenance*? Clearly, there is differential treatment of children that lends the institution a *conservative impulse*. That is, as children move through schooling, things are kept more the same than they are transformed, and these outcomes are measurable on a social level. Whatever we believe about teaching and learning of individuals, social processes are playing a big role in academic outcomes. Children’s social and cultural are affecting what they are learning, pointing to a need for sociocultural analyses.

I argue that the ways that these underlying social processes also point to a need to understand how they influence *teachers' learning*. In other words, we need to see teachers as individuals-in-contexts, drawing their understanding from the social world.

Recall earlier the example of the “high ability six year old.” I stated that that concept makes more “sense” to U.S. teachers than teachers in other countries because of the ways that we group children into academic tracks at very young ages. This common practice, academic tracking, is one of the many ways schools contribute to social stratification. Educational researchers like Jeannie Oakes have documented how tracking contributes to social stratification. In the U.S., children from lower class households or who come from culturally minoritized populations are overrepresented in lower academic tracks. This creates, on the social level, a schema of high and low ability rooted in class, linguistic, and racial prejudices. Lower-ability classes look like this. Higher ability classes look like this.

If teachers develop this biased concept of ability, rooted in their social world, we can see how schooling can reproduce social stratification. The famous Pygmalion in the classroom (1968) experiment found that teachers’ expectations had a profound effect on student outcomes. If we are building schools that reinforce biased concepts, we can see how schools reproduce social stratification.

It can be productive to think of teachers as individuals-in-contexts, where their concepts about teaching develop through social and cultural processes.

Example Study: Teachers’ Learning in Context

In 2002, I did postdoctoral work at Stanford University with Professor Jo Boaler. She was in the midst of a longitudinal project comparing students’ mathematics learning at two high schools taking different approaches to teaching. One school, which we called Railside, had fundamentally changed its teaching to help students make sense of mathematical ideas — what I will call for short a “progressive approach.” A second school, Greendale, had *some* of its teachers involved in progressive teaching, but at the same time, there were other math teachers who had no interest in teaching in that way. They maintained what I will call a “traditional approach” to their instruction. The two mathematics departments, as teacher learning environments, can be understood, in part, through their curricular organization, pictured here.

For simplicity, let’s start with Railside’s curriculum. Students entered the math curriculum with a two-semester sequence, Algebra A and Algebra B. They progressed along each year, qualifying for college by the time they completed the fourth course in the sequence. I realize you do not organize your math curriculum like this in Japan, but you do not need to worry about the course titles as much as the point here: students were eligible for college once they reached this course here, Algebra 2.

Look, in contrast, at Greendale’s curriculum. Students could enter in one of three tracks. This upper level track was the “progressive approach” track that used integrated mathematics and project-based learning. This middle track was the “traditional approach.”

This bottom track was a “remedial” track for students whose skills were not seen strong enough for the college preparatory curriculum of the first two tracks.

So, what do these two different teaching environments do for teachers’ learning? How do they shape what they know? How do they co-constitute concepts?

I spent a lot of time observing and interviewing teachers and students. I wanted to understand how these different environments shaped ideas about mathematics, learning, and teaching. I won’t be able to get into all the details here, but you can read up if you are interested.

For the purposes of this talk, what is important to note was the ways this social organization shaped teachers’ understandings of their work. One example: at Greendale, I asked all of the teachers whether they agreed or disagreed with the statement that “not all students were capable of learning all aspects of mathematics.” At Greendale three teachers disagreed with the statement, while two others agreed with it.

At Railside, in contrast, all of the teachers “strongly disagreed” with the statement.

Believing that ***all students were capable of learning mathematics*** changed how the teachers worked together. In addition, that belief was reflected in their curriculum organization. There was no remedial track that kept some “less capable” students separate. At Railside teachers reported spending significantly more time planning together (an average of 195 minutes per week versus 25 minutes per week) and all responded positively to statements like “I can count on my colleagues to help me.”

I observed and recorded the two groups of teachers’ conversations as they planned together. Drawing on methods from cognitive science, I analyzed these conversations as “found talk aloud protocols.” Just as cognitive science researchers examined the sensemaking of problem solvers by asking participants to “talk aloud” as they thought, I examined the teachers’ sensemaking as they *naturally identified and addressed problems of teaching practice in their conversations*. In this way, my methods built off of insights from cognitive science while taking an anthropological approach to looking at the social world as it is.

I found important differences in the ways the two groups of teachers collaborated. Social organization and beliefs reinforced each other at Railside, making collegial collaboration an important part of their work. Social organization and beliefs opened up avenues for teacher inquiry, as they worked together to craft their lessons and support their students’ success. They would identify problems of practice, bringing up a lot of their own doubt and uncertainty as they sought their colleagues’ advice. In contrast, the Greendale teachers’ conversations focused on procedures, like who was going to cover the after school tutoring clinic, and not on classroom practice. The social organization of teachers’ learning had an impact on teachers’ individual sensemaking, even the teacher at Greendale who was most committed to a progressive approach to mathematics teaching

had somewhat deficit views of her students. For instance, she saw the separate remedial track as a good idea since it allowed her, as a teacher, to address students' lack of confidence. She adapted her teaching by lowering her expectation of her students, not requiring them to complete their homework.

When I interviewed these groups of teachers and watched them teach, I saw important differences in how they made sense of their work — especially how they made sense of their students' learning. When a student struggled at Greendale, teachers were more likely to attribute it to a fixed attribute of that child. When a student struggled at Railside, teachers were more likely to see it as a temporary problem, one that can be overcome with further effort on the part of the student and teacher.

Linking back to the Pygmalion effect study, these differences in teachers' conceptions and beliefs made a difference for student achievement. Students persisted in their mathematical studies at Railside, in part, because their teachers' persisted in believing in them.

Thirty-six students entered Greendale in the school's remedial track. Only one of them qualified for college. In contrast, I saw many students enter Railside with *lower* achievement scores than those 36 students who, nonetheless, ended up qualifying for college. This suggests that the students in Greendale's remedial track were disadvantaged by the curriculum structure, but also the ideas the teachers developed about them, as students, as a result of that structure.

When I reflect on what I learned by studying the Greendale and Railside teachers, PCK alone does not help me understand the differences in how they taught. I can go through each of the teachers and see that almost all of them had strong content knowledge, with varying degrees of pedagogical sophistication. I see something that came *before* any measurable difference in PCK would matter:

The difference I see between the two groups of teachers are in their beliefs about students' capabilities, which are, in turn, linked to their pedagogical decision-making.

Implications for Teacher Education

I have done quite a few studies on teachers' workplace learning now, so my conclusion comes not only out of the Railside study but out of the many studies that followed.

This, to me, is one of the biggest takeaways from a sociocultural perspective. PCK emphasizes the organization of information — that list of regularly taught topics in a subject area; useful representations of ideas; powerful analogies and so on. That is declarative knowledge for teaching. Its appeal is that we can pin it down, name it, “deliver” it in teacher education.

However, what distinguishes the accomplished teachers I have studied is their pedagogical judgment — the way that they interpret situations, attend to all the complexity, and weigh the trade offs for their instructional choices.

So the single biggest implication for a sociocultural perspective, in my view, is the need to support **pedagogical judgment**.

In the U.S., I am currently involved in a project that is designed to help teachers think on their feet through the use of clinical simulations. Using an approach to professional education modeled after medical education, we use actors to improvise interactions with student teachers. By design, we have something “unexpected” happen in the simulations as a way of helping teachers think on their feet. Because the simulation encounters are filmed, we can then use the video records to debrief and discuss the student teachers’ pedagogical judgment.

I have never had the pleasure of seeing Lesson Study in Japan, but from what I have read, Lesson Study supports pedagogical judgment by taking teachers through a process of planning, observing, enacting, and discussing how a lesson went.

The Future of Teacher Education Research

So what does this all mean for the future of research on teacher education? In a recent review of research on teacher education in the United States, Marilyn Cochran-Smith and her colleagues found that the vast majority of studies involve small-scale, single site studies that aim to improve teacher preparation. They conclude that the field needs both **large scale** and **longitudinal** studies to improve the practice of teacher education. They also point out that most teacher education studies investigate how teacher education influences teachers’ **beliefs** more often than it investigates the influence on teachers’ **practice**. Both of these points about teacher preparation research also apply to research on professional development.

I add one more recommendation to their list. In my talk today, I made the point that **research on teacher education and professional development needs to be explicit about its assumptions about the nature of teacher learning**. Our assumptions about teacher learning shape how we, as researchers, look for it. It influences our study designs. Do we think teachers learn like the dancing pigeons? Then we need to look for what reinforces and shapes their behaviors. Do we think that teachers learn by developing mental models — schemata — of what they do? Then we need to identify those. Do we think that teachers learn through their experiences in social and cultural institutions like schools? Then we need to capture those processes.

Our theories of learning also influence our work as teacher educators. A cognitive view of learning suggests that we need to help our students get the right mental models of teaching practices to support their learning. A sociocultural view extends that to think about the dynamic process of pedagogical judgment, as they respond to the range of situations they will encounter.

I realize that it may sound as if I am arguing against a cognitive view of learning. Although there is disagreement on this point in the field of learning sciences, I contend

that cognitive theory *is commensurate* with sociocultural theory. As Jim Greeno once said in a conversation, “cognitive theory is to sociocultural theory as Newtonian physics is to quantum physics.” In other words, sociocultural theory *does not negate* all the findings of cognitive theory. As I described, PCK as a construct — a cognitive construct — has yielded some important findings about teacher learning.

Instead, like quantum physics, a sociocultural perspective takes a more dynamic view of phenomena and demands a more expansive view on what counts.

I thank you for your time and attention, and I look forward to hearing your thoughts and questions.

教育における、「知る」ことの意味 学習に関する新しい視点と、教育研究の様々なアプローチ

イラーナ・ホーン
ヴァンダービルト大学

兵庫教育大学大学院博士課程の創立 20 周年記念式典で講演させていただくことを光栄に思います。私イラーナ・ホーンは、この大学の姉妹校であるヴァンダービルト大学ピーボディ校の教授です。

今回の訪問を準備するにあたり、皆さんのプログラムと活動についてより詳しく学ぶことができ、とても良い経験になりました。今日は、アメリカの大学での私の経験から、教育学の研究者であるということが何を意味するかについて、いくつかの考えを皆さんと共有してほしいというご依頼をいただいています。

偶然にも、私はまさにほぼ 20 年前、カリフォルニア大学バークレー校の博士課程に進みました。この点で、私の教育学研究者としての歩みは、この大学の歴史と重なっているのです。これから、私自身の経験を通して、この 20 年にアメリカでの教育学研究の分野がどのように変化してきたかをお話ししたいと思います。また、研究者が対処してきた問題や、対処のために変化してきた手法についてもご紹介します。

今日の私の講演のタイトルは、「教育における、「知る」ことの意味：学習に関する新しい視点と、教育研究の様々なアプローチ」というものです。本題にはいる前に、これから私が皆さんと共有しようとしていることの簡単な概要をお話しします。まず、アメリカの学習理論の簡単な歴史を紹介します。これは、皆さんにお話しする研究のバックグラウンドを知っていただくためで、特に**社会文化理論**の重要性に着目します。次に、教育学の探求において社会文化理論がどのように新しい地平を切り開いたかを説明します。そして、この新しい探求の地平がどのように教育学研究の主要なパラダイムと異なっていたかを説明します。この差異をより具体的に説明するために、社会文化的慣習にのっとって私が行った研究を解説します。最後に、教育学研究の分野と私の講演との関連についてふりかえります。

学習理論の略史

19 世紀末期から 20 世紀初頭にかけて、学習に関するアメリカでの研究は主に**行動主義**に基づくものでした。行動研究のための正確で実証的な根拠を求めて、E・L・ソーンダイクや B・F・スキナーのような研究者たちは、どのように学習が起きるかについて、実証的に観察できるものを記録することで説明しようとしていました。

この理論から生まれたのが、環境中の刺激や反応が行動を規定し、最終的に行動を変化させるという、**オペラント条件付け**といった考え方です。よく知られているように、スキナーは、「スキナー箱」と呼ばれるオペラント条件付けを行う小部屋をつくり、そこでハトをダンスするように「教育する」ことに成功しました。ハトの動きに応じて、エサを箱の中にいれたので

す。もしハトが頭を左に向けたら——これが刺激です——エサのペレットをもらうことができます——これが反応です。今回は、エサをもらうためにはハトは頭をさらに回さなければなりません。やがて、オペラント条件付けを通して、ハトはエサを得るために、一回転することを——つまりダンスすることを——学習しました。

行動主義は、学習のいくつかの形態を説明しましたが、すべてを説明することはできませんでした。1950年代、**認知革命**が始まります。ジェローム・ブルーナーのような研究者たちが、行動だけに注目することは、人々がどのように**意味**を作りだすかについての研究、すなわち人々の行動の理由を理解するための中心的な問いを排除していると指摘し、行動主義の批判を始めました。研究者たちは、心の理論を含む実証的な研究も可能だということに気が付いたのです。ケース・スタディやトーク・アラウド・プロトコルといった方法を用いれば、調査者はどのように人々が世界を理解しているかを調べることができるのです。

これは認知科学と呼ばれるようになり、**スキーマ理論**や**概念**といった重要な考え方をもたらしました。スキーマとは、どのように知識が表され利用されるかを理解するための一般的なシステムです。

研究者は、異なるスキーマの証拠を探することができます。行動主義者のように、人々が何をするかを観察するのです。ただし、認知主義者は、インタビューやアンケートを通して人々に何を考えているかを説明させることで、観察をさらに向上させました。

スキーマの一例として、「犬」ということばについて考えてみましょう。私が「犬」というとき、皆さんは何を想像しますか？四足で、毛むくじゃらで、しっぽがあって、吠える動物を想像するかもしれません。でも、これらが犬であるとしてどうしてわかるのでしょうか？

または、これらが犬ではないとしてどうしてわかるのでしょうか？

これが、スキーマという考えの根底にある問いです。

スキーマの調査によって、文化の重要性が指摘されるようになりました。スキーマは、プロトタイプと密接に関係しています。たとえば、私が「家具」と言ったら、皆さんは何を思い浮かべますか？私はほんとうに興味があります。言語研究者は、アメリカ人は「**furniture**（ファーニチャー；家具）」と言われると、最も適切な例として椅子とソファを思い浮かべることを発見しました。一方ドイツ人は、「**möbel**（メーベル；家具）」と言われると、最も適切な例として、ベッドやテーブルを思い浮かべるのです。私たちのスキーマと、プロトタイプ——世界の概念を構築するブロック——は、文化によって異なるのです。

1990年初頭までに、言語、文化、そして文脈の重要性に対する認識が高まったことは、学習についての考え方を再び変化させました。言語と文化は、成長と思考のための単なる設定——コントロールできる外部変数のようなもの——ではなく、このような精神的過程の基本的な構成要素なのです。この発見は、一部の学習現象を説明するためには、研究者は精神構造をただ説明する以上のことをしなくてはならないということを意味しています。

このことは、研究手法のさらなる拡大を必要としました。言語学、人類学、そして社会学を利用しながら、学習の研究者はどのように概念が個人の精神を超えて世界へと広がっていくかを説明しようとしていました。ソ連の心理研究者であるレフ・ヴィゴツキーから多大な影響を受け、この社会文化的伝統の中で活動する研究者は、学習を*世界との相互作用*の中で発生するものとして調査しようとし、新しい分析単位を必要としたのです。つまり、学習する個人を研究する代わりに、研究者は*コンテキストの中の個人*を研究する方法を模索したのです。

教育学に社会文化理論を取り入れる

私自身の研究は、このような社会文化的洞察を取りあげ、教師学習の研究法を再考しようとするものでした。私の研究を形づくる問いの様々な要素について、具体的に説明させてください。

まず、私が 1990 年代半ばにカリフォルニア大学バークレー校の博士課程に進んだ頃、学習に関する認知的視点と社会文化的視点との間の論争は、私のコースと研究グループの中でかなり活発に行われていました。ほとんどの議論が生徒の学習を中心とするものでしたが、「学校外学習」としばしば呼ばれるものについての関心も高まっていました。ジーン・レイヴのような人類学者に影響を受け、少数の研究者から成るグループが**職場学習**について研究していました。これは、急速に変化する世界への適応が常に求められる現代の情報経済の中では、非常に差し迫ったトピックです。

同じ頃、教育方針研究において、学校組織、カリキュラム、そして教師の専門性開発に関する研究が、ひとつの重要な問いを見過ごしているという認識が高まっていました。どのように教師自身は学習するのか、という問いです。学校を改善するためのほぼすべての取り組みが、カリキュラムの改造やスケジューリング・評価方法の変更によって、教育の質を高めるものであったために、それらの取り組みは教室の中で起きることだけに左右されていたのです。しかし、当然ながら、それは教師によって何が起きるかということにも左右されています。

このため、ジュディス・ウォレン・リトルのような教育方針研究者は、**学校の変化や教育の改善のためのあらゆる取り組みにおいて、教師学習という要素が過小評価されている**ということ認識しはじめました。それでもなお、方針設計において、教師の学習は重要視されていませんでした——教師学習の効果の分析についてはなおさらのことです。

誰かがこれらの考えを統合しなければならず、時は熟していました。私の研究は、**教育を変更する設計においては教師の学習を考慮しなくてはならない**という、方針ベースの観察から出発しました。それから、学習に関する社会文化理論の方法と考えを利用し、**どのように教師の学習が職場としての学校で生じるか**ということ調べました。社会文化理論者が示唆するように、教師が何を知っていて何を学ぶかということは、彼ら個々人の頭の中だけで決まるものではありません。教えることについての概念には、世界の文化的に異なる慣習や言語が反映されています。たとえば、アメリカでは、非常に早い段階で生徒を能力別にグループ分けしはじめます。「能力の高い6歳児」という概念は、アメリカの教師にとっては理解できるものですが、このような形態の能力別編成を早くに行わない国の教師には同様には理解できないかもしれません。

教育者が学校やクラスについて行う決定や、保護者がある体験について行う主張には、社会的意味を持つ概念との因果関係があるのです。

社会文化的視点を使って教師の学習を説明している点において、私の研究は多くの先行研究よりも、文化的かつ理論的に具体化されています。アメリカの教師に関する私の発見の詳細は、他の国に一般化することはできないかもしれませんが、私は教師の学習についての説明をもっと一般化可能にしたいと考えています。そのため、教師の教育における他の影響力のある考えで道を切り開くとともに、自分の調査方法を開発しなければなりませんでした。

社会文化理論と従来のパラダイムとの調和

疑いなく、1990年代におけるアメリカの教師教育で最も影響力を持っていた考えは、リー・シュルマンの**教育的内容に関する知識**です。教育的内容に関する知識——私たちは英語でPCKと呼んでいます——とは、教科の知識と教育の知識の交差点にあるいくつかの種類の理解を意味しています。たとえば、PCKは次のものを含みます。

- ある教科領域で通常教えられるトピック
- 知識を表現する有益な方法
- 強力な比喻、図示、例示、説明、デモンストレーション
- 特定のトピックの学習を容易に、または困難にするものは何か

これらすべて——そしておそらくこれ以外のものも——シュルマンが教師教育において「欠けているパラダイム」と呼んだものを構成しています。

アメリカにおけるシュルマンの考えの影響を強調してしすぎることはありません。シュルマンがPCKを紹介した2つの記事は、それぞれこれまでに13,000回も引用されています。

この考え方の影響は、研究者間の論争の範囲を超えて広がっています。教師教育プログラムは再構成されて、新たに教師の内容学習を強調し、それを教えるという仕事に結びつけるものになりました。カリキュラムや教授法の包括的な原理を研究する代わりに、研究者は特定の内容を教えるということがどのような意味を持つのかを調べました。研究プログラム全体が、PCKを特定し、開発し、測定するために発達したのです。

この分野における最も深遠な研究は、数学教育の内容的領域です。そこからは、いくつかの強力な発見が得られています。たとえば、教師の指導のための数学的知識——PCKのもうひとつの項目——は、「**生徒の学習成果に多大に関連して**」います。(Hill、Rowan & Ball、2005) すなわち、教師のPCKは生徒の学習にとって意味を持ちます。同様に、**[PCK]のレベルと教育の質には多大で強力な、そして明白な関連があります**(Hill 他、2008)。シュルマンが明確に特定したのは、私たちが研究者として実証的に追及することができ、その力を解明することができるものだったのです。

シュルマンのパラダイムは、教師教育におけるいくつかの喫緊の課題に答えを提供しました。その意味するところは明確でした。良い教育には、内容的知識と包括的な教育知識に関連しているけれども、それらとは異なる特別な形の知識が必要だということです。この知識は、生徒

の学習と教育の質の両方に対して特定可能な結果をもたらします。研究及び実践で PCK に着目することは、重要な結果を生み出したのです。

特に、シュルマンの構成概念は、認知科学のパラダイムによく適合しました。すなわち、PCK 及び関連する知識構造は、認知志向の研究者たちが特定しようとするスキーマを連想させます。PCK は、専門的な教育活動を示す知識構造を説明しているのです——その知識構造には、メンタルマップ、プロトタイプ、そして関連する概念が含まれます。

それでは、何が問題なのでしょう？この生産的な研究プログラムを前に進めるだけではなぜいけないのでしょうか？

認知科学の力によって、学習研究に精神が再度持ちこまれたことを思い出してください。たしかに、成功している教師の知識構造を理解することは大きな貢献をもたらします。私たちに専門性のイメージを与えてくれます。PCK は私たちに教師と学校に関して、記録でき、設計でき、改善できるものを与えてくれるのです。

もうひとつ思い出していただきたいのは、**認知科学の限界は、その知識構造のための文化的道具や社会的帰結に十分な注意を払っていないところにある、ということです。**PCK 関連の研究は、私たちの活動に強力な道しるべを提供する一方で、次の 2 つの問いに関する理解に欠けています。

- (1) どのように教師がこの種の知識を身につけていくか
- (2) どのように、特定の状況——異なる教師、異なる学生、異なる文化資源——において「作用」し得るか

社会文化的転換

以上の理由から、私は自分の研究において社会文化的転換を行いました。私は、教師の知識と学習に関する認知志向の研究を批判的に見ることで、先に述べた 2 つの問いをよりよく理解できるようになったのです。

社会文化的転換は、私たちが教師の教育に関する研究の従来知見を再解釈することを要求します。これを行うためには、私たちは教師が**個人**として知っていること以上のことを把握し、代わりに、教師が**コンテキストにおける個人**として、何ができ、どのように理解しているかに目を向けなければなりません。

それでは、教師をコンテキストにおける個人として考えてみましょう。教育にとって最も重要なコンテキストは、学校です。とどのつまり、学校は強力な文化的施設なのです。

民主主義の理想では、学校は子どもたちが必要とする能力と潜在能力の成長を手助けすることで、平等を実現するという役割を果たす場所です。教育社会研究者は、アメリカでは、他の多くの先進国よりも、学校が**社会階層の固定化**に貢献していることを発見しました。すなわち、学校教育を通して、子どもは社会的地位を維持するということです。この理由から、アメリカ

の学校はしばしば、*社会的変革*の場であるよりも、*社会的再生産*の場となっています。言い換えれば、ミドルクラスのアメリカの子どもは統計的にミドルクラスの教育的成果を獲得することが予期されます。同様に、貧困の子どもはその低い社会的地位を維持することが予期されるのです。

学校で起きていることの何が、そのような*階層の固定化*をもたらすのでしょうか？明らかに、子どもの扱いの差が、学校に*保守的傾向*をもたらしています。すなわち、子どもが学校教育を受ける過程で、物事は変えられるよりむしろ同じままに維持され、その結果は社会階層によって測定可能となっているのです。私たちが個人の教育と学習についてどんな信念を持っていようとも、社会的プロセスは学問的な結果において大きな役割を持っています。子どもの社会的文化的状況は、彼らが学習することに影響を与え、社会文化的分析が必要であることを示唆しています。

私の意見では、これらの根底にある社会的プロセスは、それらが*教師の学習*にどのような影響を与えているかについても理解する必要があることを示唆しています。言い換えれば、私たちは教師を、社会的世界から理解を引きだしている、コンテキスト上の個人として見る必要があります。

先ほどの、「能力の高い6歳児」の例を思い出してください。アメリカでは、非常に早い段階で子どもたちを学問的能力別クラスにグループ分けするために、この概念は他の国よりもアメリカの教師に「理解」されやすいと述べました。この一般的な慣習である能力別編成は、学校が社会階層の固定化に寄与する様々な方法のうちのひとつです。ジーニー・オークスのような教育研究者は、能力別編成がどのように社会階層の固定化に寄与するかを立証しました。アメリカでは、下層階級の家庭または文化的にマイノリティの集団の子どもは、低いレベルの能力別クラスに非常に多く見られます。これにより、社会的レベルで、階級、言語、そして人種の偏見に根差した、能力の高低に関するスキーマが生まれるのです。低い能力のクラスはこういうもの、高い能力のクラスはこういうもの、というスキーマです。

教師がこのように、社会的世界に根差した、バイアスのかかった能力の概念を身につけているとすれば、学校教育が社会階層を再生産していることにも納得がいきます。有名な、教室でのピグマリオン効果の実験（1968）では、教師の期待が学生の成果に深い影響をもたらすことが示されました。もし私たちがバイアスのかかった概念を強化するような学校をつくっているとすれば、学校が社会階層を再生産しているということも理解できます。

教師がコンテキスト上の個人であり、社会的文化的プロセスを通して、教師の教育に関する概念が培われるという考え方から、実りある成果がもたらされるでしょう。

研究事例：コンテキストにおける教師の学習

2002年、私は、博士課程修了後にスタンフォード大学でジョー・ボアラ教授とともに研究を行いました。ボアラ教授は、生徒の数学学習を、異なる教授法を用いる2つの高校間で比較する長期研究を行っている最中でした。1つ目の学校、私たちがレールサイドと呼んでいた学校は、生徒の数学的知識の理解を助けるために教え方のアプローチを根本的に変更していま

した。このアプローチを、省略して「進歩的アプローチ」と呼びましょう。2つ目の学校、グリーンデールでは、進歩的アプローチを行っている教師も何人かいましたが、同時に、そのような教え方には興味のない数学教師もいました。そのような教師は、私が「伝統的アプローチ」と呼ぶ方法で指導を続けていました。

この、教師が学習する環境としての、2つの数学科は、部分的には、ここに図示した彼らのカリキュラム構成を通して説明することができます。

簡単に説明するために、レールサイドのカリキュラムから始めましょう。生徒はまず、2学期で1セットの数学カリキュラムを続けて受講します。代数Aと代数Bです。毎年先に進み、順番に4つ目のコースを修了する頃には、大学に入学できる程度の能力を身につけます。これは、日本の数学カリキュラムの構成とは違うようですが、コースの名前を気にする必要はありません。重要なのは、生徒はこの代数2に到達すると、大学入学資格を得るということです。

今度は、これと比較して、グリーンデールのカリキュラムを見てみましょう。生徒は、3つの能力別クラスのうちひとつにはいることができます。上級クラスは「進歩的アプローチ」のクラスで、総合的な数学とプロジェクトベースの学習を用いた授業が行われます。この中級クラスは「伝統的アプローチ」です。下級クラスは、上の2つのクラスの大学入学を準備するレベルには達していない生徒のための「救済」クラスです。

さて、これらの2つの異なる教育環境は、教師の学習にどのような影響を与えるでしょう？教育環境は、教師の知識をどのように形づくるのでしょうか？どのように概念を相互に構成するのでしょうか？

私は長い時間をかけ、教師と生徒を観察し、インタビューを行いました。これらの異なる環境が、数学や学習、教育に関する考え方をどのように形づくるかを理解したかったのです。ここで詳細をすべてご説明することはできませんが、ご興味があれば調べていただくことができます。

この講演の目的に照らせば、ここで指摘しておくべき重要な点は、この社会的組織が、教師の仕事に対する理解をどのように形づくっていたかということです。ひとつ例をあげましょう。グリーンデールで、私はすべての教師に、「すべての生徒が数学のすべての面を学習できるわけではない」という意見に賛成か反対かをたずねました。グリーンデールでは、3人の教師が反対し、2人が賛成しました。

レールサイドでは、対照的に、教師全員がこの意見に「強く反対する」と答えたのです。

すべての生徒が数学を学ぶことができると信じることは、教師が互いに仕事をする態度を変えました。さらに、この信念は、カリキュラム構成にも反映されていました。「能力の低い」生徒を隔離する救済クラスは設けられていなかったのです。レールサイドでは、教師たちははるかに長い時間をかけて一緒に授業計画を立てていると報告しており（グリーンデールの平均毎週25分に対し、平均毎週195分）、「同僚からの助けを期待できる」といった意見に対して肯定的です。

私は、一緒に授業計画を行う2つのグループの教師の様子を観察し記録しました。認知科学の手法を利用し、これらの会話を「ファウンド・トーク・アラウド・プロトコル」として分析したのです。認知科学の研究者が参加者に自分の考えを「トーク・アラウド（声に出す）」するように依頼することで問題解決者の理解を調べるように、私は教師が会話の中で自然に教育実践の問題を特定し対処する中で理解を調べました。これにより、私の手法は認知科学の考えから出発し、人類学的なアプローチをとって、ありのままの社会的世界を観察することができたのです。

私は2つのグループの教師の協力のしかたに重要な違いを発見しました。ルールサイドでは、社会組織と信念はお互いを強化し、同僚との協働は仕事の重要な一部となっていました。教師が一緒に取り組んで授業を組み立て、生徒の成功を支えようとする過程で、社会組織と信念は、教師たちの探求の道を開いていました。教師は教育実践における問題を特定し、疑問や不安に思っていることを持ち寄り、同僚のアドバイスを求めていたのです。対照的に、グリーンデールの教師の会話は手続に集中していました。誰が放課後の補習を担当するかといったようなことであり、教室内での活動に関するものではありませんでした。教師学習の社会組織は、教師の個人的な理解に影響があったのです。グリーンデールでは、数学を教える上で進歩的アプローチに最も熱心な教師ですら、生徒に対する見方に欠けたものがありました。たとえば、この教師は、生徒の自信のなさや教師として対処できるため、個別の救済クラスを良い考えだと思っていました。生徒に対する期待を下げることで指導のやり方を調整し、宿題を最後までやってくることを生徒に求めなかったのです。

私はこれらの教師のグループにインタビューを行い、授業を観察し、彼らの仕事に対する理解に重要な違いがあることに気が付きました——特に、生徒の学習をどのように理解しているかという点です。グリーンデールで生徒が壁にぶつかったときは、教師は子ども本来の固定的な性質のせいにしていました。ルールサイドで生徒が壁にぶつかったときは、教師はそれを一時的な問題にとらえ、その部分で生徒と教師がさらに努力すれば乗り越えられるものとする傾向がありました。

もういちどピグマリオン効果の研究につなげて考えてみると、教師の見方と信念におけるこれらの違いは、生徒の成果にも違いをもたらしていました。ルールサイドで、生徒たちが数学の学習をやり通していたのは、ひとつには、教師が生徒を信じ通したからだったのです。

グリーンデールへの入学時、36人が救済クラスに振り分けられました。そのうち、ひとりだけが大学入学レベルに達することができました。対照的に、ルールサイドでは、入学時にはこの36人の生徒より低い成績でありながら、最終的には大学入学レベルに達した生徒がたくさんいたのです。これは、グリーンデールの救済クラスの生徒は、カリキュラム構造によって、そしてそのような構造の結果として教師が彼ら生徒に対して抱くようになった考えによって、不利益を被っていたということです。

グリーンデールとルールサイドの教師を研究することで私が学んだことをふりかえると、PCKだけでは、彼らの教え方の違いを理解することはできません。ひとりひとりを見れば、ほぼす

すべての教師が、強力な内容的知識と、様々な程度の教育学についての教養を持っていました。測定可能なPCKの違い以前に、重要なものがあるということがわかります。

2つの教師グループに私が見出した違いは、生徒の能力についての信念における違いであり、逆に、それが教師の教育的意思決定に関連しているのです。

教師教育における意義

私はこれまでに教師の職場における多くの研究を行ってきました。私の結論はルールサイドの事例だけに基づくのではなく、その後に行った多くの研究にも支えられています。

この結論は、私にとって、社会文化的視点から得られる最も考慮すべき点のひとつです。PCKは情報の組織化を重視します——ある教科領域で通常教えられるトピック、知識を表現する有益な方法、強力な比喻などのリストです。これは、叙述的な教育の知識です。PCKの魅力は、正確に特定し、名前をつけ、教師教育に「届ける」ことができることです。

しかし、私の研究では、有能な教師が持つ特徴は、彼らの教育的判断——状況を解釈し、複雑さに対処し、指導における選択のトレードオフを見極める方法——でした。

したがって、私の意見では、社会文化的な視点を用いることの唯一にして最大の意味は、**教育的判断**をサポートする必要性です。

アメリカで現在私が関与しているプロジェクトは、臨床シミュレーションを通して、教師のすばやい決断を手助けすることを目的に設計されています。医療教育をお手本につくられた専門家教育のアプローチを利用し、俳優を使って教育実習生のやりとりを即興で行います。シミュレーションで「予期しない」事態が発生するように設計しており、それは教師のすばやい決断を手助けする方法のひとつです。シミュレーションの場面は撮影されているため、録画を使って感想を聞いたり教育実習生の教育的判断を議論したりすることができます。

私は日本の授業研究を観察する機会に恵まれたことはこれまでありませんが、読んだかぎりでは、教師が授業計画、観察、実行、そしてどのように授業が行われたかの議論を行うことで、授業研究は教育的判断を支えています。

教師教育研究の未来

では、これらは教師教育研究の未来において何を意味しているのでしょうか？ある最近のアメリカの教師教育研究の報告書において、マリリン・コ克蘭＝スミスとその同僚は、研究の大部分が小規模で一か所を対象としており、教師育成の改善を目的にしたものだと報告しています。そして、この分野において、より**大規模で長期的な研究**を行うことで、教師教育の実践を改善する必要があると述べています。また、ほとんどの教師教育研究が、教師教育がどのように教師の**実践**に影響するかよりも、どのように教師の**信念**に影響するかを調査していると指摘しています。教師育成の研究に関わるこれらの2つの指摘は、専門性開発の研究にも適用することができます。

もうひとつ、彼らのリストに提言を加えたいと思います。今日の講演で、私は**教師教育と専門性開発の研究では教師の学習の本質についての前提を明確にしなければならない**と指摘しました。教師の学習についての前提は、研究者としての教師学習に対する見方を形づくるからです。この前提は、研究の設計を左右します。教師はダンスをするハトのように学習すると思いますか？そうであるなら、何が教師の行動を強化し形づくるかを探さなければなりません。または、教師は自分が何をするかについての精神的モデル——スキーマ——を身につけていくことで学習すると思いますか？そうであるなら、そのスキーマを特定しなければなりません。それとも、教師は学校のような社会文化的施設での経験を通して学習すると思いますか？それなら、その過程を把握しなければなりません。

また、私たちの学習理論は、教師を教育する者としての私たちの活動を左右します。学習についての認知科学的視点は、学生が教育実践の正しい精神モデルを獲得することを手助けし、学習をサポートする必要があることを示唆しています。社会文化的視点は、それをさらに延長させ、教師は幅広い状況に遭遇し反応することを踏まえ、教育的判断のダイナミックなプロセスについて考えることが必要だとしています。

私は、自分が学習を認知科学的に見ることに反対しているように聞こえると自覚しています。学習科学の分野ではこの点について反対意見もあるものの、私は認知理論が社会文化理論と**対立するものだと強く主張**します。ジム・グリーンノがかつて会話の中で述べたように、「社会文化理論にとっての認知理論は、量子力学にとってのニュートン物理学のようなもの」なのです。つまり、社会文化理論は、認知理論の発見のすべてを**否定するものではありません**。先に説明したように、構成概念としての PCK——認知的構成概念——は教師学習について重要な知見を引き出しました。

その一方、量子力学のように、社会文化的視点はさらにダイナミックな視点で現象をとらえ、何が重要かについてより広い見方を要求するのです。

本日はご清聴ありがとうございました。皆さんのお考えやご質問をぜひお聞かせください。

WHAT DOES IT MEAN TO KNOW IN TEACHING?

NEW VIEWS OF LEARNING AND APPROACHES TO RESEARCH ON TEACHING

Ilana Horn

Vanderbilt University

Hyogo University of Teacher Education 20th Anniversary

24 September 2016



About 20
years ago...

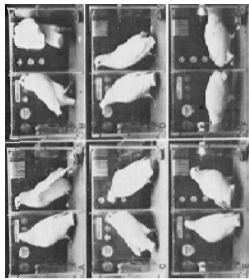


WHAT DOES IT MEAN TO KNOW IN TEACHING?

- Brief history of U.S. learning theory
 - *Sociocultural theory*
- New lines of inquiry in study of teaching
- Why is this different?
- Example from my research
- Implications for the field of teacher education research

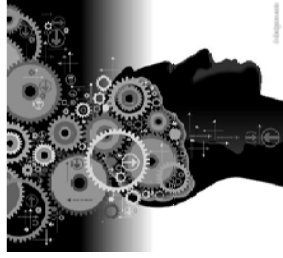
A BRIEF HISTORY OF LEARNING THEORY

1900: BEHAVIORISM

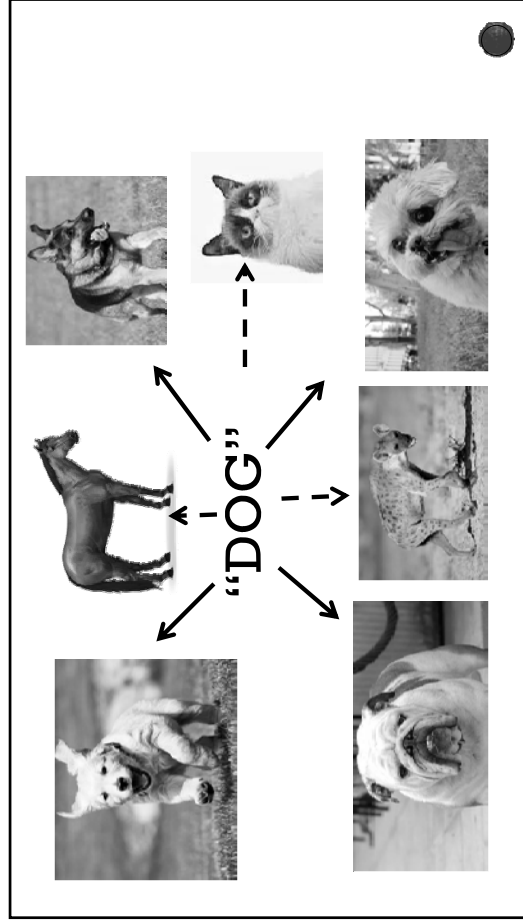
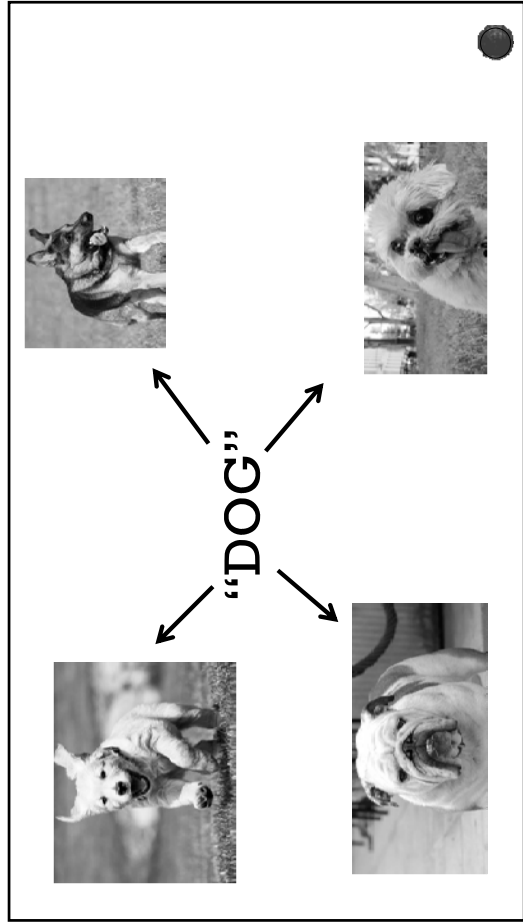


- Key theorists: *E.L. Thorndike and B.F. Skinner*
- Empirical analysis of learning as *change in behavior*
- Methods: Observe and induce changes in behavior
- Example: Operant Conditioning and "Skinner Boxes"

1950S: COGNITIVE SCIENCE



- Key theorists: *Jerome Bruner, Noam Chomsky, Herbert Simon*
- Critique: need for meaning, theory of the mind
- Methods: observations, case studies, talk aloud protocols
- Examples: *conceptions, schema theory*



SCHEMA AND PROTOTYPES

“Furniture”

“Möbel”

Concepts are cultural



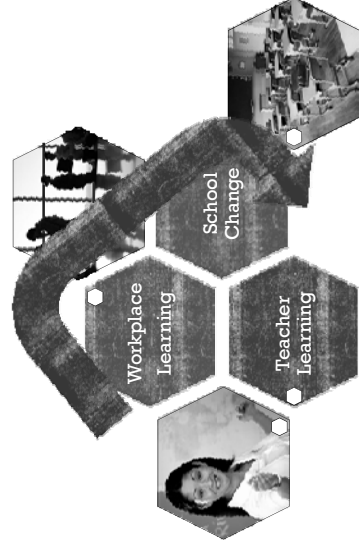
1990S: SOCIOCULTURAL



- Key theorists: Lev Vygotsky, Michael Cole, Jean Lave
- Critique: language and culture are fundamental to concepts and development
- Methods: linguistics, anthropology, sociology
- Individuals → *individuals-in-context*

SOCIOCULTURAL THEORY AND THE STUDY OF TEACHING

NEW QUESTIONS



SOCIOCULTURAL QUESTIONS

- Designs for instructional change must **consider teacher learning**
- Teacher learning happens in **school-as-a-workplace**
- Concepts rooted in **culturally-specific practices**
- Example: “high ability 6 year old”



RECONCILING SOCIOCULTURAL THEORY WITH OTHER PARADIGMS

PEDAGOGICAL CONTENT KNOWLEDGE (PCK)

- Understandings at the intersection of *subject matter knowledge* and *teaching knowledge*.
 - Regularly taught topics
 - Useful representations
 - Powerful analogies, examples, explanations...
 - What makes a topic easy/difficult
- “Missing paradigm” in teacher education



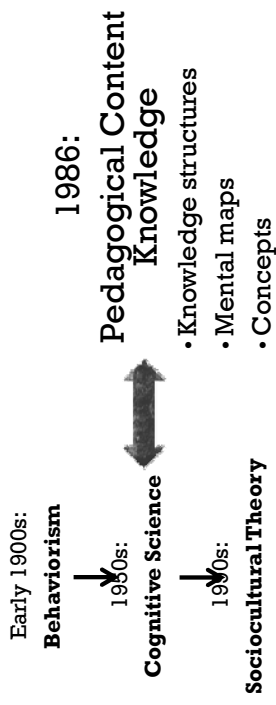
INFLUENCE OF PCK

- 1986 and 1987 papers cited over 13,000 times – *each*
- Teacher education programs reorganized
- New programs of research on *identifying, developing, measuring* PCK

SOME FINDINGS WITH PCK

- “Teachers’ mathematical knowledge for teaching **significantly related to student achievement gains** in both first and third grades after controlling for key student- and teacher-level covariates.” (Hill, Rowan & Ball, 2005)
- “There is a **significant, strong, and positive association between levels of MKT and the mathematical quality of instruction**, and there are a number of important factors that mediate this relationship, supporting or hindering teachers’ use of knowledge in practice.” (Hill et al., 2008)

WHAT IS THE NATURE OF PCK AS *KNOWLEDGE*?



LIMITS OF COGNITIVE SCIENCE → LIMITS OF PCK

PCK is a **powerful construct** but it does not help us explain...

- *how* teachers develop knowledge
- *how* it might “work” in particular settings

THE SOCIOCULTURAL TURN IN TEACHER EDUCATION

REMINDER: SOME SHIFTS...

Cognitive

- Individuals
- Identifying *norms*
- “Mental structures”



Sociocultural

- Individuals-in-contexts
- Understanding how situations shape understandings
- “Meaning-making processes”

TEACHERS AS INDIVIDUALS- IN-CONTEXTS



School is a powerful
institution

SCHOOL AS A CONTEXT

- Schools as *equalizers*?
- Schools contribute to **social stratification**
- Social reproduction > social transformation
- Children largely ***maintain social status*** as they go through U.S. schooling

HOW DO THESE UNDERLYING SOCIAL PROCESSES INFLUENCE TEACHERS’ LEARNING?

“HIGH ABILITY 6 YEAR OLD”

- In the U.S., we place children in academic tracks at a very young age.
- **Tracking** contributes to social stratification
- Children from working class households, minoritized groups overrepresented in lower tracks.
- Concepts of **ability** linked to **social reality** linked to **social processes**.



TEACHERS ARE INDIVIDUALS-
IN-CONTEXTS.

CONCEPTS ABOUT TEACHING
DEVELOP THROUGH SOCIAL
PROCESSES.

EXAMPLE: TEACHERS IN LEARNING IN CONTEXTS



COMPARING MATH TEACHING AND LEARNING

Railside High School

- Changed its teaching to help students make sense of mathematical ideas

Progressive Department

Greendale High School

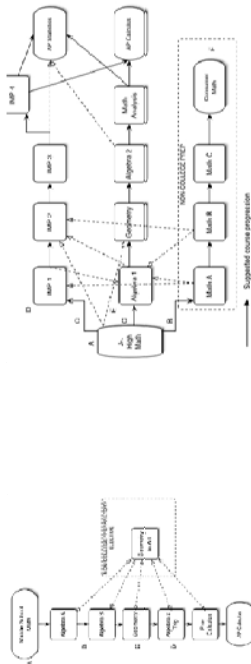
- Some teachers involved in progressive teaching, others maintained a traditional approach

Mixed Department

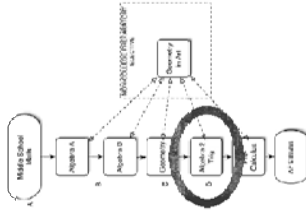
COMPARING MATH TEACHING AND LEARNING

Railside High School

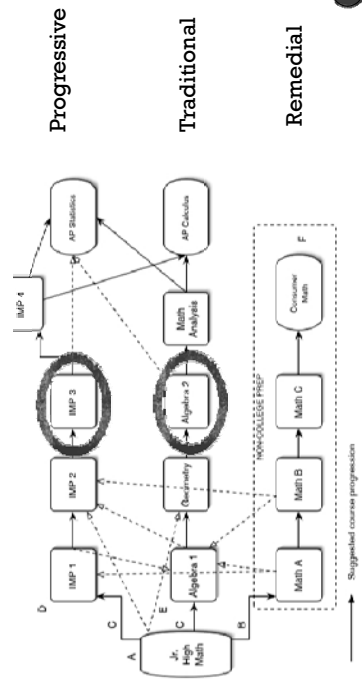
Greendale High School



RAILSIDE'S CURRICULUM



GREENDALE'S CURRICULUM



FOR MORE DETAILS...



ARTICLES

Turnaround Students in High School
Mathematics: Constructing Identities of
Competence Through Mathematical Worlds

Ilana Seidel Horn
University of Washington

HOW DID THESE DEPARTMENTS CREATE DIFFERENT LEARNING ENVIRONMENTS FOR THE TEACHERS?

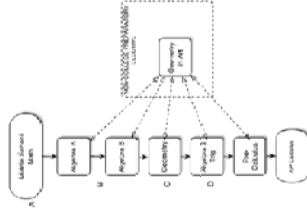
“Not all students are capable of learning all aspects of mathematics”

- *Greendale:*
2 out of 5 teachers agreed
- *Railside:*
100% of teachers “strongly disagreed”

SOCIAL PROCESSES & CONCEPTS

Railside:

“All students are capable of learning”



SOCIAL PROCESSES & CONCEPTS

Railside:

- Spent 195 minutes/week planning together
- “I can count on my colleagues to help me”
- Shared problems of practice
- Expressed uncertainty



SOCIAL PROCESSES & CONCEPTS

Greendale:

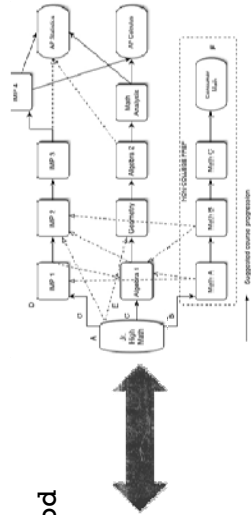
- Spent 25 minutes/week with colleagues
- Talked about logistics
- Did not share problems of practice



SOCIAL PROCESSES & CONCEPTS

Greendale:

Remedial track is a “good idea”



SOCIAL PROCESSES & CONCEPTS

Greendale:

Fixed attribution:
“The child had learned as much as possible. There is nothing left to do.”



Railside:

Growth attribution:
“The child needs to strengthen his student skills so he can do better next time.”

SOCIAL PROCESSES & CONCEPTS

Greendale:

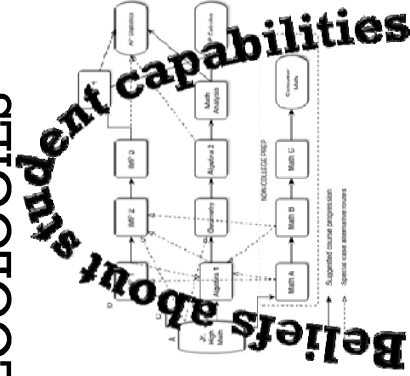
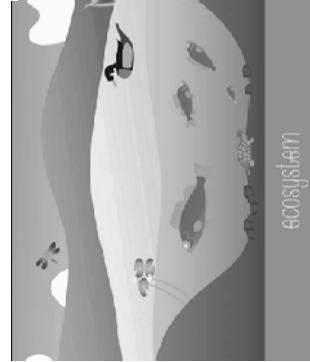
36 students entered remedial track
1 qualified for college

Railside:

Many students entered with lower achievement scores and still qualified for college

Students in Greendale’s remedial track disadvantaged by curriculum and by ideas teachers developed about them as a result.

CONCEPTUAL ECOLOGIES

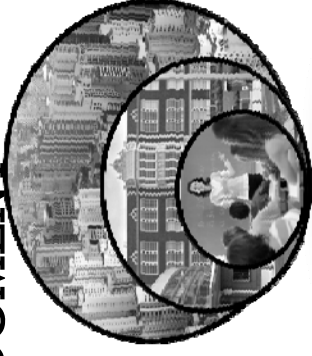


IMPLICATIONS FOR TEACHER EDUCATION

BEYOND PCK: PEDAGOGICAL JUDGMENT

How teachers...

- Interpret situations
- Attend to complexity
- Weigh trade offs of instructional choices



USING SIMULATIONS TO DEVELOP PEDAGOGICAL JUDGMENT



Elizabeth Self

USING SIMULATIONS TO DEVELOP PEDAGOGICAL JUDGMENT



THE FUTURE OF TEACHER EDUCATION RESEARCH



WHERE ARE WE?

Majority of U.S. research:

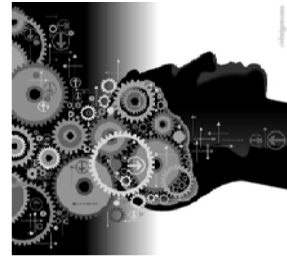
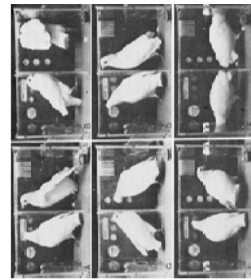
- involves *small-scale* single site studies

What we need:

- large-scale, longitudinal research
- investigations of teacher practice
- should be explicit about what teacher learning is



HOW DO TEACHERS LEARN?



THANK YOU FOR YOUR TIME!

ありがとうございました

Iana Horn

Vanderbilt University

VI 連合研究科資料

1 数字とグラフで見る連合大学院の現況

平成28年度 連合大学院 構成大学・連合講座別教員・学生数一覧

平成28年5月1日現在

1. 教員数

専攻	連合講座	兵庫教育大学					上越教育大学					岡山大学					鳴門教育大学					合 計				
		教 授	准 教 授	講 師	助 教	計	教 授	准 教 授	講 師	助 教	計	教 授	准 教 授	講 師	助 教	計	教 授	准 教 授	講 師	助 教	計	教 授	准 教 授	講 師	助 教	計
学校教育 実践学専攻	学校教育方法	4	3			7	8	2			10	9	1			10	5	1			6	26	7	0	0	33
	学校教育臨床	13	4			17	6	1		1	8	5	3			8	9	1	1		11	33	9	1	1	44
先端課題 実践開発専攻	先端課題実践開発	13	2			15	8	1			9	4	1			5	6	3			9	31	7	0	0	38
教科教育 実践学専攻	言語系教育	11				11	5	1			6	7	2			9	8	1			9	31	4	0	0	35
	社会系教育	9				9	5	3			8	5	3			8	6	5			11	25	11	0	0	36
	自然系教育	9	1			10	7	3			10	4	2	2		8	9				9	29	6	2	0	37
	芸術系教育	7	4			11	5	3			8	10	1			11	8	2			10	30	10	0	0	40
	生活・健康系教育	7	2			9	7	2			9	12	3			15	10	2			12	36	9	0	0	45
合 計		73	16	0	0	89	51	16	0	1	68	56	16	2	0	74	61	15	1	0	77	241	63	3	1	308

構成大学教員毎の割合

兵庫 29%	上越 22%	岡山 24%	鳴門 25%
--------	--------	--------	--------

2. 学生数

専攻	連合講座	兵庫教育大学				上越教育大学				岡山大学				鳴門教育大学				合 計			
		D 1	D 2	D 3 以上	計	D 1	D 2	D 3 以上	計	D 1	D 2	D 3 以上	計	D 1	D 2	D 3 以上	計	D 1	D 2	D 3 以上	計
学校教育 実践学専攻	学校教育方法	2		2	4	1	1		2	1		2	3	1	3	4	8	5	4	8	17
	学校教育臨床	2	2	8	12	1	2	2	5	1	1	2	4	1	1	4	6	5	6	16	27
先端課題 実践開発専攻	先端課題実践開発	1	2	7	10	1		2	3	1	2	1	4	2		2	4	5	4	12	21
教科教育 実践学専攻	言語系教育	1		1	2		2	1	3	2		1	3	1		3	4	4	2	6	12
	社会系教育	1		2	3		1		1		1	1	2			2	2	1	2	5	8
	自然系教育		1	2	3			2	2	2	1	1	4	2	1	1	4	4	3	6	13
	芸術系教育		2	4	6	1		3	4	1	2	3	6	1		1	2	3	4	11	18
	生活・健康系教育	3	1	3	7		1	1	2		1	2	3	2		2	4	5	3	8	16
合 計		10	8	29	47	4	7	11	22	8	8	13	29	10	5	19	34	32	28	72	132

構成大学学生毎の割合

兵庫 35%	上越 24%	岡山 22%	鳴門 26%
--------	--------	--------	--------

連合学校教育学研究科の志願者・入学者状況

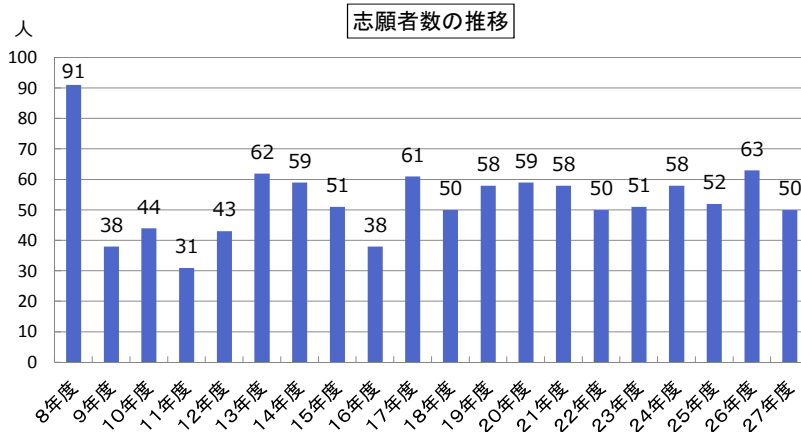
(本資料は、入試課資料に基づくもの)

○年齢別志願者数

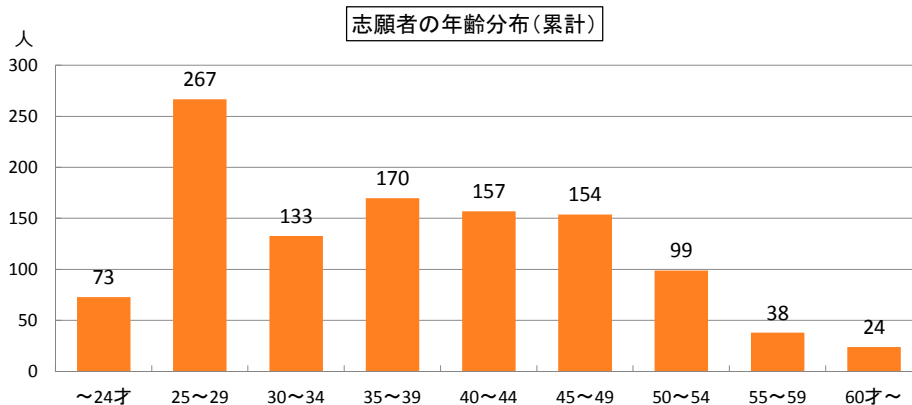
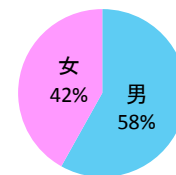
(単位:人)

区 分	～24才	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60才～	合計
平成8年度	3 (0)	27 (13)	15 (3)	19 (4)	12 (4)	11 (2)	1 (1)	1 (0)	2 (0)	91 (27)
平成9年度	4 (1)	11 (1)	9 (4)	5 (1)	3 (0)	2 (2)	2 (0)	1 (0)	1 (0)	38 (9)
平成10年度	7 (3)	11 (4)	9 (5)	7 (3)	6 (3)	3 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	44 (20)
平成11年度	4 (2)	9 (5)	4 (3)	7 (2)	3 (2)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	2 (0)	31 (15)
平成12年度	1 (1)	13 (6)	4 (3)	11 (4)	5 (1)	5 (4)	4 (3)	0 (0)	0 (0)	43 (22)
平成13年度	4 (2)	19 (11)	7 (3)	7 (2)	7 (2)	9 (6)	3 (2)	4 (2)	2 (1)	62 (31)
平成14年度	5 (0)	15 (5)	10 (4)	7 (1)	14 (4)	4 (2)	3 (1)	0 (0)	1 (0)	59 (17)
平成15年度	4 (3)	10 (4)	6 (4)	15 (4)	6 (2)	5 (4)	4 (3)	1 (1)	0 (0)	51 (25)
平成16年度	5 (3)	9 (5)	4 (2)	7 (4)	6 (2)	5 (3)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	38 (19)
平成17年度	2 (0)	21 (13)	6 (5)	7 (1)	10 (3)	12 (3)	2 (2)	1 (0)	0 (0)	61 (27)
平成18年度	3 (2)	13 (9)	9 (6)	8 (3)	5 (3)	3 (2)	8 (1)	1 (0)	0 (0)	50 (26)
平成19年度	4 (2)	17 (9)	8 (4)	9 (2)	6 (2)	10 (6)	3 (2)	1 (1)	0 (0)	58 (28)
平成20年度	1 (1)	15 (9)	7 (2)	6 (4)	10 (2)	11 (5)	7 (4)	2 (1)	0 (0)	59 (28)
平成21年度	2 (0)	12 (4)	10 (7)	7 (3)	13 (5)	6 (1)	5 (3)	3 (1)	0 (0)	58 (24)
平成22年度	7 (3)	11 (5)	3 (1)	7 (5)	7 (3)	7 (2)	7 (1)	1 (0)	0 (0)	50 (20)
平成23年度	5 (4)	9 (4)	1 (0)	5 (3)	9 (2)	10 (3)	9 (3)	3 (1)	0 (0)	51 (20)
平成24年度	2 (2)	11 (1)	6 (1)	5 (4)	8 (4)	9 (3)	11 (1)	3 (1)	3 (0)	58 (17)
平成25年度	2 (1)	7 (3)	2 (1)	8 (4)	7 (1)	16 (7)	5 (1)	4 (2)	1 (0)	52 (20)
平成26年度	6 (1)	12 (4)	3 (0)	11 (5)	7 (4)	9 (6)	6 (2)	4 (1)	5 (3)	63 (26)
平成27年度	1 (1)	10 (2)	3 (0)	5 (4)	6 (1)	8 (5)	10 (5)	2 (1)	5 (3)	50 (22)
平成28年度	1 (0)	5 (2)	7 (5)	7 (2)	7 (3)	9 (5)	6 (5)	4 (0)	2 (2)	48 (24)
合計	73 (32)	267 (119)	133 (63)	170 (65)	157 (53)	154 (72)	99 (41)	38 (13)	24 (9)	1,115 (467)
	7%	24%	12%	15%	14%	14%	9%	3%	2%	100%

注: 女子は(内数)で示す。



志願者の男女比(累計)



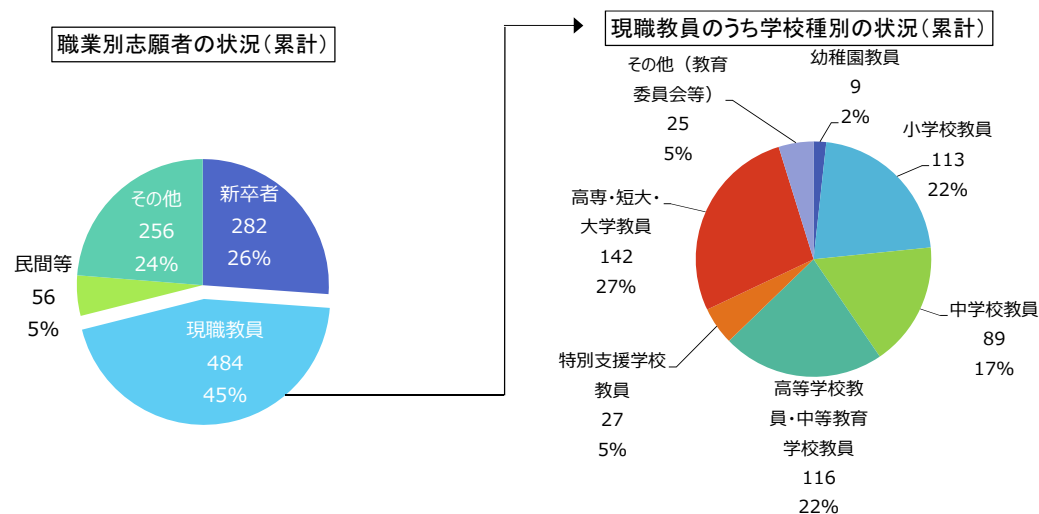
○職業別志願者数

(単位:人)

区 分	新卒者	現 職 教 員												民間等	その他	合計
		初 等 中 等 教 育						高 等 教 育				その他	計			
		幼稚園	小学	中学	高校等	特別	小計	高専	短大	大学	小計					
平成 8 年度	25	2	6	2	11	2	23	0	4	4	8	2	33	3	30	91
平成 9 年度	14	1	2	0	3	1	7	0	1	1	2	3	12	0	12	38
平成10年度	14	0	1	2	2	2	7	0	0	0	0	1	8	4	18	44
平成11年度	16	1	0	1	1	0	3	0	1	0	1	0	4	0	11	31
平成12年度	14	1	4	4	4	1	14	0	3	3	6	0	20	2	7	43
平成13年度	22	2	4	5	4	2	17	0	3	3	6	0	23	1	16	62
平成14年度	18	0	2	3	7	1	13	1	1	1	3	2	18	4	19	59
平成15年度	12	0	7	2	5	1	15	0	5	2	7	0	22	5	12	51
平成16年度	14	0	5	3	4	0	12	0	1	0	1	1	14	2	8	38
平成17年度	20	0	4	4	6	1	15	0	0	7	7	0	22	1	18	61
平成18年度	12	0	6	4	3	2	15	0	2	4	6	2	23	2	13	50
平成19年度	15	0	5	6	9	0	20	0	4	2	6	2	28	6	9	58
平成20年度	15	1	2	8	7	0	18	1	4	3	8	3	29	6	9	59
平成21年度	9	0	5	6	7	2	20	0	3	7	10	0	30	6	13	58
平成22年度	16	1	11	5	8	1	26	0	0	2	2	0	28	0	6	50
平成23年度	11	0	7	4	4	6	21	0	1	9	10	1	32	0	8	51
平成24年度	9	0	10	7	9	0	26	0	3	10	13	2	41	3	5	58
平成25年度	7	0	9	6	6	1	22	1	2	8	11	1	34	2	9	52
平成26年度	11	0	8	4	6	1	19	0	2	10	12	0	31	4	17	63
平成27年度	6	0	7	7	5	0	19	0	2	10	12	1	32	2	10	50
平成28年度	2	0	8	6	5	3	22	0	4	7	11	4	37	3	6	48
合計	282	9	113	89	116	27	332	3	46	93	142	25	484	56	256	1,115
	25%												43%	5%	23%	100%

備考(整理区分)

- (1) 新卒者は、入学志願年度の前年度3月末に修士課程を修了した者(ただし、現職教員の修了者及び4月以降の就業者は除く)。
- (2) 「現職教員の高校等」の欄は、中等教育学校教員を含む。
- (3) 「現職教員のその他」の欄は、教育委員会関係機関等の勤務者とする。
- (4) 「民間等」の欄は、民間会社、病院、公務員(教員を除く)等の勤務者とする。
- (5) 「その他」の欄は、無職、研究生、非常勤の教職員等とする。

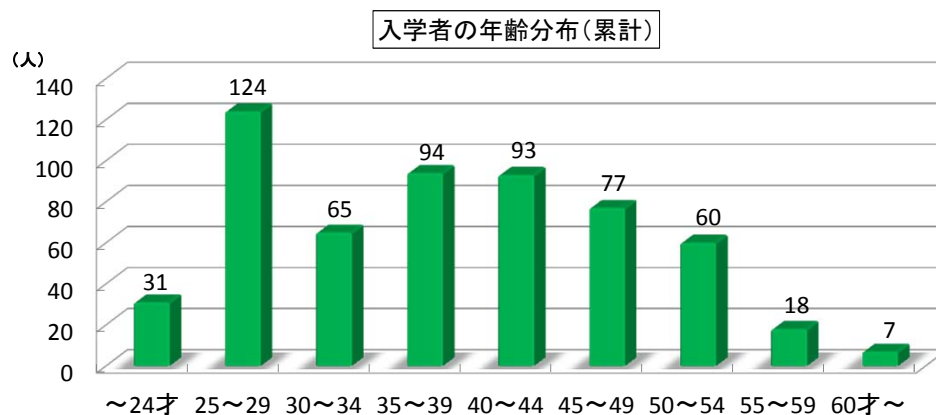


○年齢別入学者数

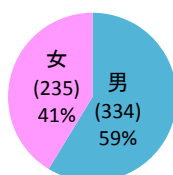
(単位:人)

区 分	～24才	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60才～	合計
平成8年度	0 (0)	7 (3)	5 (1)	5 (2)	3 (1)	3 (1)	1 (1)	0 (0)	1 (0)	25 (9)
平成9年度	2 (0)	7 (0)	4 (3)	4 (1)	3 (0)	2 (2)	1 (0)	0 (0)	1 (0)	24 (6)
平成10年度	4 (1)	6 (2)	6 (2)	3 (0)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	24 (8)
平成11年度	4 (2)	6 (4)	2 (1)	3 (1)	3 (2)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	20 (11)
平成12年度	1 (1)	7 (2)	1 (0)	7 (1)	4 (1)	2 (2)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	24 (8)
平成13年度	0 (0)	11 (8)	3 (1)	3 (1)	2 (1)	5 (3)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	25 (15)
平成14年度	2 (0)	4 (3)	3 (1)	3 (0)	8 (3)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	1 (0)	25 (9)
平成15年度	1 (0)	6 (1)	2 (1)	10 (2)	3 (0)	2 (1)	3 (2)	0 (0)	0 (0)	27 (7)
平成16年度	5 (3)	5 (4)	1 (0)	5 (3)	3 (2)	3 (1)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	24 (13)
平成17年度	0 (0)	7 (5)	3 (3)	3 (0)	6 (1)	8 (1)	2 (2)	1 (0)	0 (0)	30 (12)
平成18年度	1 (0)	5 (3)	6 (4)	6 (1)	3 (1)	2 (1)	6 (1)	0 (0)	0 (0)	29 (11)
平成19年度	1 (0)	4 (3)	6 (4)	7 (2)	3 (1)	7 (5)	1 (0)	1 (1)	0 (0)	30 (16)
平成20年度	0 (0)	8 (4)	3 (1)	0 (0)	5 (1)	7 (2)	6 (4)	2 (1)	0 (0)	31 (13)
平成21年度	2 (0)	7 (2)	4 (3)	5 (1)	9 (4)	2 (0)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	32 (13)
平成22年度	3 (1)	7 (4)	2 (1)	3 (3)	5 (3)	4 (1)	4 (1)	0 (0)	0 (0)	28 (14)
平成23年度	2 (2)	6 (2)	0 (0)	3 (2)	6 (1)	4 (1)	6 (2)	1 (0)	0 (0)	28 (10)
平成24年度	0 (0)	3 (0)	3 (1)	4 (3)	6 (4)	5 (2)	4 (0)	1 (0)	1 (0)	27 (10)
平成25年度	0 (0)	5 (1)	1 (1)	6 (4)	5 (0)	6 (1)	3 (1)	2 (1)	0 (0)	28 (9)
平成26年度	1 (1)	4 (1)	3 (0)	5 (3)	4 (2)	5 (3)	2 (0)	3 (1)	1 (1)	28 (12)
平成27年度	1 (1)	6 (2)	2 (0)	3 (2)	4 (1)	3 (2)	6 (3)	1 (1)	2 (0)	28 (12)
平成28年度	1 (0)	3 (0)	5 (5)	6 (2)	6 (4)	3 (1)	6 (5)	2 (0)	0 (0)	32 (17)
合計	31 (12)	124 (54)	65 (33)	94 (34)	93 (34)	77 (32)	60 (27)	18 (8)	7 (1)	569 (235)
	5%	22%	11%	17%	16%	14%	11%	3%	1%	100%

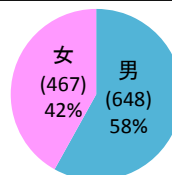
注：女子は(内数)で示す。



入学者の男女比(累計)



(参考)
志願者の男女比(累計)

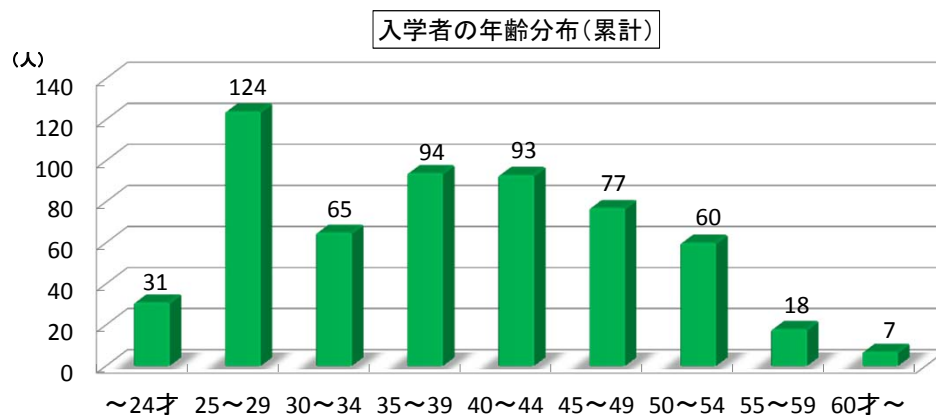


○年齢別入学者数

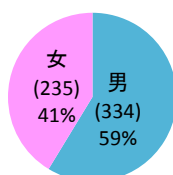
(単位:人)

区 分	～24才	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60才～	合計
平成8年度	0 (0)	7 (3)	5 (1)	5 (2)	3 (1)	3 (1)	1 (1)	0 (0)	1 (0)	25 (9)
平成9年度	2 (0)	7 (0)	4 (3)	4 (1)	3 (0)	2 (2)	1 (0)	0 (0)	1 (0)	24 (6)
平成10年度	4 (1)	6 (2)	6 (2)	3 (0)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	24 (8)
平成11年度	4 (2)	6 (4)	2 (1)	3 (1)	3 (2)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	20 (11)
平成12年度	1 (1)	7 (2)	1 (0)	7 (1)	4 (1)	2 (2)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	24 (8)
平成13年度	0 (0)	11 (8)	3 (1)	3 (1)	2 (1)	5 (3)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	25 (15)
平成14年度	2 (0)	4 (3)	3 (1)	3 (0)	8 (3)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	1 (0)	25 (9)
平成15年度	1 (0)	6 (1)	2 (1)	10 (2)	3 (0)	2 (1)	3 (2)	0 (0)	0 (0)	27 (7)
平成16年度	5 (3)	5 (4)	1 (0)	5 (3)	3 (2)	3 (1)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	24 (13)
平成17年度	0 (0)	7 (5)	3 (3)	3 (0)	6 (1)	8 (1)	2 (2)	1 (0)	0 (0)	30 (12)
平成18年度	1 (0)	5 (3)	6 (4)	6 (1)	3 (1)	2 (1)	6 (1)	0 (0)	0 (0)	29 (11)
平成19年度	1 (0)	4 (3)	6 (4)	7 (2)	3 (1)	7 (5)	1 (0)	1 (1)	0 (0)	30 (16)
平成20年度	0 (0)	8 (4)	3 (1)	0 (0)	5 (1)	7 (2)	6 (4)	2 (1)	0 (0)	31 (13)
平成21年度	2 (0)	7 (2)	4 (3)	5 (1)	9 (4)	2 (0)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	32 (13)
平成22年度	3 (1)	7 (4)	2 (1)	3 (3)	5 (3)	4 (1)	4 (1)	0 (0)	0 (0)	28 (14)
平成23年度	2 (2)	6 (2)	0 (0)	3 (2)	6 (1)	4 (1)	6 (2)	1 (0)	0 (0)	28 (10)
平成24年度	0 (0)	3 (0)	3 (1)	4 (3)	6 (4)	5 (2)	4 (0)	1 (0)	1 (0)	27 (10)
平成25年度	0 (0)	5 (1)	1 (1)	6 (4)	5 (0)	6 (1)	3 (1)	2 (1)	0 (0)	28 (9)
平成26年度	1 (1)	4 (1)	3 (0)	5 (3)	4 (2)	5 (3)	2 (0)	3 (1)	1 (1)	28 (12)
平成27年度	1 (1)	6 (2)	2 (0)	3 (2)	4 (1)	3 (2)	6 (3)	1 (1)	2 (0)	28 (12)
平成28年度	1 (0)	3 (0)	5 (5)	6 (2)	6 (4)	3 (1)	6 (5)	2 (0)	0 (0)	32 (17)
合計	31 (12)	124 (54)	65 (33)	94 (34)	93 (34)	77 (32)	60 (27)	18 (8)	7 (1)	569 (235)
	5%	22%	11%	17%	16%	14%	11%	3%	1%	100%

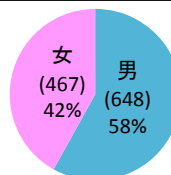
注：女子は(内数)で示す。



入学者の男女比(累計)



(参考)
志願者の男女比(累計)



兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 学位授与状況(標準修業年限超過者含む)

(平成28年3月末現在)

年度 連合講座	入学者数(人)																			学位授与数(人)																			合計 (学位授与率)
	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
学校教育方法	4	4	4	2	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	3	3	3	4	3	63	2	2	1	1	2	2	3	1	1	1	3	3	3	0	3	2	1	2	33 (52.4%)
学校教育臨床	4	4	4	3	4	5	5	5	5	9	9	8	7	6	4	6	5	5	98	1	2	2	0	4	2	3	4	1	3	4	5	3	2	5	2	3	3	49 (50.0%)	
先端課題実践 開発																			21																			11 (52.4%)	
言語系教育	4	4	3	2	4	3	3	4	4	4	3	3	4	3	3	3	2	1	57	1	2	1	0	3	0	1	4	2	1	1	2	1	0	1	1	0	1	22 (38.6%)	
社会系教育	2	2	2	3	4	2	2	3	3	1	3	4	3	2	1	2	2	2	43	2	0	1	2	2	1	1	0	2	3	2	3	1	2	1	0	1	1	25 (58.1%)	
自然系教育	4	3	4	2	2	4	4	3	2	4	4	4	4	4	3	3	3	3	60	2	0	4	1	4	1	5	4	1	3	2	3	2	1	1	2	3	42 (70.0%)		
芸術系教育	3	4	3	4	4	3	3	4	3	4	4	3	4	5	3	3	3	4	64	0	4	2	2	3	3	2	2	2	2	1	2	1	5	3	1	1	2	38 (59.4%)	
生活・健康系 教育	4	3	4	4	2	4	4	4	4	5	4	4	5	4	4	6	5	3	75	0	4	1	2	2	3	3	4	4	3	0	2	3	1	4	6	4	2	48 (64.0%)	
合 計	25	24	24	20	24	25	25	27	24	30	29	30	31	32	28	27	28	28	481	8	14	12	8	20	12	18	19	13	16	13	19	16	14	21	15	15	268 (55.7%)		

(注)1. 年度別の学位授与率は、当該年度の学位(博士課程)授与数と3年前(即々年度)の入学者数で除算した数値である。
2. 連合講座別の学位授与率は、学位授与数合計を入学者数合計で除算した数値である。

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 学位授与状況(標準修業年限修了者のみ)

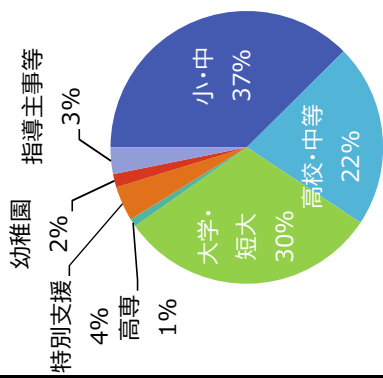
年度 連合講座			入学者数(人)																	学位授与数(人)																	合計 (学位授与率)		
			8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度			
学校教育方法	4	4	4	2	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	3	3	3	4	3	63	2	1	0	1	1	1	1	1	0	1	2	1	3	0	0	1	1	2	19 (30.2%)
学校教育臨床	4	4	4	3	4	5	5	5	5	9	9	8	7	6	4	6	5	5	98	1	1	1	0	3	2	2	1	0	2	3	2	2	0	1	0	0	0	21 (21.4%)	
先端課題実践 開発																4	4	4	5	4	21																	7 (33.3%)	
言語系教育	4	4	3	2	4	3	3	4	4	4	3	3	4	3	3	3	2	1	57	1	2	0	0	2	0	0	2	2	0	0	1	0	0	0	1	1	0	12 (21.1%)	
社会系教育	2	2	2	3	4	2	2	3	3	3	1	3	4	3	2	1	2	2	43	2	0	0	1	2	0	1	0	1	1	1	2	1	1	1	0	1	1	16 (37.2%)	
自然系教育	4	3	4	2	2	4	4	4	3	2	4	4	4	4	4	3	3	3	60	2	0	3	1	2	1	3	3	1	2	2	3	2	2	1	1	2	3	34 (56.7%)	
芸術系教育	3	4	3	4	4	3	3	4	3	4	4	3	4	5	3	3	3	4	64	0	1	0	1	1	1	1	2	0	0	0	1	0	2	0	0	1	1	12 (18.8%)	
生活・健康系 教育	4	3	4	4	2	4	4	4	4	5	4	4	5	4	4	6	5	3	75	0	0	1	1	0	2	3	3	3	2	0	2	1	0	3	4	2	2	29 (38.7%)	
合 計	25	24	24	20	24	25	25	27	24	30	29	30	31	32	28	27	28	27	481	8	5	5	5	11	7	11	12	7	8	12	9	6	9	8	9	10	150 (31.2%)		

(注)1. 年度別の学位授与率は、標準修業年限(3年)で修了した人数を3年前(前々年度)の入学者数で除算した数値である。
2. 連合講座別の学位授与率は、標準修業年限(3年)での学位授与数合計を入学者数合計で除算した数値である。

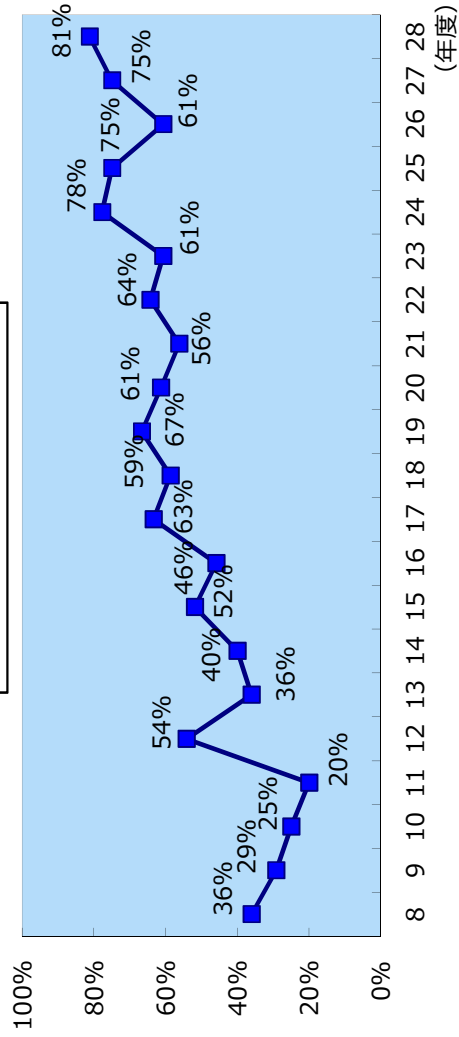
兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の現職教員受け入れ状況
○年度別学校種別現職教員受入状況

入学年度	入学者	現 職						教 員				入学者に占める 現職教員の率	
		幼稚園	小学校	中学校	高校	中等教育学校	特別支援	大学	短大	高专	指導主事等		計
平成8年度	25	1	0	1	2	0	0	2	3	0	0	9	36%
平成9年度	24	0	2	0	1	0	0	0	2	0	2	7	29%
平成10年度	24	0	1	2	2	0	0	0	0	0	1	6	25%
平成11年度	20	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	4	20%
平成12年度	24	1	2	3	3	0	0	1	3	0	0	13	54%
平成13年度	25	1	0	2	1	0	0	2	3	0	0	9	36%
平成14年度	25	0	2	0	4	0	1	1	1	1	0	10	40%
平成15年度	27	0	2	2	5	0	1	1	3	0	0	14	52%
平成16年度	24	0	4	1	4	0	0	0	1	0	1	11	46%
平成17年度	30	0	4	3	5	0	1	6	0	0	0	19	63%
平成18年度	29	0	4	3	1	0	2	4	2	0	1	17	59%
平成19年度	30	0	5	3	5	0	0	3	3	0	1	20	67%
平成20年度	31	0	1	4	6	0	0	3	2	1	2	19	61%
平成21年度	32	0	5	2	4	0	0	4	3	0	0	18	56%
平成22年度	28	1	7	3	5	0	1	1	0	0	0	18	64%
平成23年度	28	0	3	2	3	0	3	5	1	0	0	17	61%
平成24年度	27	0	4	3	3	0	0	9	0	0	2	21	78%
平成25年度	28	0	6	2	3	1	2	6	1	0	0	21	75%
平成26年度	28	0	4	3	2	0	1	6	0	1	0	17	61%
平成27年度	28	0	6	4	3	1	0	7	0	0	0	21	75%
平成28年度	32	0	7	6	4	0	1	6	2	0	0	26	81%
計	569	5	69	50	67	2	13	67	31	3	10	317	56%

学校種別割合(累計)



入学者に占める現職教員の割合



【参考】 第一期中期計画(抜粋)

学生受入方針に応じた入学者選抜を実現するための具体的方策
○ 教育専門職養成の見地から、現職教員等の教育関係者を入学定員の半数程度受け入れる。

【参考】 第二期中期計画(抜粋)

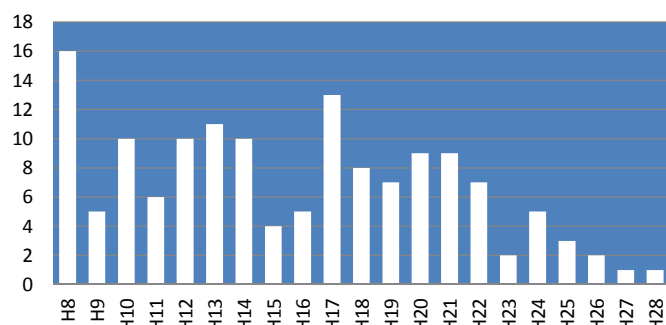
博士課程における教育の具体的措置
学生の受け入れ
○ 博士課程の人材養成の目的を広く固くさせるとともに、学校教育実践に即した研究を充実させる見地から、現職教員をはじめ教育の研究を志す者の受入れを継続的に行う。

連合研究科における留学生の入学状況等について

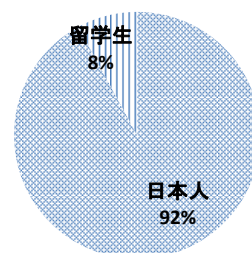
◎志願, 合格, 入学状況

年 度	志 願 者			合 格 者			入 学 者		
	全体	留 学 生 数		全体	留 学 生 数		全体	留 学 生 数	
		国 別 内 訳			国 別 内 訳			国 別 内 訳	
平成8年度	91	16	中国10, 韓国4, 台湾2	25	2	中国2	25	2	中国2
平成9年度	38	5	中国3, 韓国1, ハンガリー1	24	4	中国2, 韓国1, ハンガリー1	24	4	中国2, 韓国1, ハンガリー1
平成10年度	44	10	中国8, 韓国1, パキスタン1	24	2	中国1, パキスタン1	24	2	中国1, パキスタン1
平成11年度	31	6	中国3, バングラデシュ2, 韓国1	20	3	中国1, バングラデシュ2	20	3	中国1, バングラデシュ2
平成12年度	43	10	中国5, 韓国2, メキシコ1 スペイン1, ミャンマー1	24	5	中国3, 韓国1, スペイン1	24	5	中国3, 韓国1, スペイン1
平成13年度	62	11	中国6, 韓国2, メキシコ1 カンボジア1, パナマ1	26	3	中国2, カンボジア1	25	3	中国2, カンボジア1
平成14年度	59	10	中国7, 韓国2, 台湾1	25	3	中国3	25	3	中国3
平成15年度	51	4	中国2, 韓国1, 台湾1	27	1	韓国1	27	1	韓国1
平成16年度	38	5	中国3, インドネシア1, フィリピン1	27	3	中国2, インドネシア1	24	3	中国2, インドネシア1
平成17年度	61	13	中国11, 韓国2	30	4	中国4	30	4	中国4
平成18年度	50	8	中国5, 韓国2, インドネシア 1	30	5	中国3, 韓国1, インドネシア1	29	5	中国3, 韓国1, インドネシア1
平成19年度	58	7	中国5, 韓国1, バングラデシュ1	30	4	中国3, 韓国1	30	4	中国3, 韓国1
平成20年度	59	9	中国5, 韓国1, イラン1, ミャンマー1, チェコ1	31	2	中国1, チェコ1	31	2	中国1, チェコ1
平成21年度	58	9	中国4, 韓国1, 台湾2, フランス1, ミャンマー1	32	3	中国1, 韓国1, フランス1	32	3	中国1, 韓国1, フランス1
平成22年度	50	7	中国4, 台湾1, タイ1, アイスランド1	28	1	台湾1	28	1	台湾1
平成23年度	51	2	中国2	28	0		28	0	
平成24年度	58	5	中国3, アメリカ1, フィリピン1	28	2	中国1, アメリカ1	27	1	アメリカ1
平成25年度	52	3	中国2, 韓国1	28	2	中国1, 韓国1	28	2	中国1, 韓国1
平成26年度	63	2	中国1, 台湾1	28	1	中国1	28	1	中国1
平成27年度	50	1	中国1	28	0		28	0	
平成28年度	48	1	中国1	32	0		32	0	
合 計	1115	144		575	50		569	49	

留学生志願者数の推移



全入学生における留学生・日本人の割合



2 学位論文題目一覧（課程博士・論文博士）

（１） 課程修了による学位取得者

○平成10年度修了者

平成11年3月26日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	遠藤 晶	子どもの手の器用さについての心理学的研究	学校教育学	塩見 邦雄 (兵庫)
学校教育方法	中田 栄	向社会的行動における自己統制の役割とその規程要因の検討	学校教育学	塩見 邦雄 (兵庫)
学校教育臨床	平松 清志	箱庭療法の面接過程に関する臨床的基礎研究	学校教育学	山口 茂嘉 (岡山)
言語系教育	藤井 知弘	読書教育実践学研究 ー「読書論」による学びの構築ー	学校教育学	有澤俊太郎 (上越)
社会系教育	柿本 智正	国家ー教会ー教育 ドイツにおける信教の自由の多元的側面	学 術	藤井 徳行 (兵庫)
社会系教育	劉 美鳳	近世民衆社会の史的研究	学校教育学	高橋 啓 (鳴門)
自然系教育	嶋根 紀仁	On relations between generalized metric spaces and hyperspaces (generalized metric spaces と hyperspaces の関係について)	学 術	溝上 武實 (上越)
自然系教育	原 英光	アカネスイセン Eleutherine Americana の活性成分の構造と 植物を用いた総合化学実験プログラムの開発に関する研究	学校教育学	今倉 康宏 (鳴門)

○平成11年度修了者

平成11年7月31日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
芸術系教育	犬童 昭久	つくることの教育の構築と実践に関する研究	学校教育学	西野 範夫 (上越)

平成11年11月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
芸術系教育	三浦 義行	幼児の造形教育形成に関する研究 ー明治、大正、昭和前期の幼児教育変遷からー	学校教育学	辻田 嘉邦 (兵庫)
生活・健康系教育	永井 純子	学齢期小児の脂質代謝指標およびライフスタイルに関する Community-based Study ー学校と地域の連携による健康教育構築の視点から	学校教育学	勝野 眞吾 (兵庫)

平成12年3月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	黒羽 正見	教育課程経営の継続的更新に関する研究 ー公立S小学校対象の事例研究を通してー	学校教育学	西 穰司 (上越)
学校教育方法	池田 敏子	基礎看護技術教育の体系化とカリキュラム開発 ー看護ニーズの多様化に対応できる自己教育力の育成をめざしてー	学校教育学	近藤 勲 (岡山)
学校教育臨床	津島ひろ江	医療的ケアを要する子どもの教育とトータルケアに関する研究	学校教育学	藤井 聰尚 (岡山)
学校教育臨床	爾 寛明	幼児期における人権教育視座の構築 ーアンタイ・バイアスの視点から見た幼児の生活分析を手掛かりとしてー	学校教育学	田中 亨胤 (兵庫)
言語系教育	王 婉エイ	現代日本語の基礎的研究 ー中国人日本語学習者のためにー	学 術	小野 米一 (鳴門)
言語系教育	時岡 裕純	A Representation of Cultural Conflicts in the Fictional Works of William Golding, with Special Reference to his View Order (ウィリアム・ゴールドディングのフィクションにおける文化葛藤の表象 ーその秩序観に焦点をあててー)	学校教育学	山崎 弘行 (兵庫)
芸術系教育	野浪 俊子	J. デューイの「美的経験」哲学に基づく音楽科カリキュラム開発に関する研究	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)

(注) 留学生の氏名の一部又は全部について、カナで表記しています。

芸術系教育	秋山 敏行	子どもの造形的な活動の論理と展開に関する研究	学校教育学	西野 範夫 (上越)
生活・健康系教育	谷本 義雄	脊髄損傷者のリハビリテーション支援システムの開発に関する基礎的研究	学 術	山本 秀樹 (岡山)
生活・健康系教育	原田 咲織	In Vivo Studies on the Possible Mechanism of Sex Difference in Rat Liver Cytosolic Alcohol Dehydrogenase Activity (ラット肝臓サイトソル内アルコール脱水素酵素活性の性差のメカニズムに関するin vivo レベルの研究)	学 術	今泉 和彦 (上越)
生活・健康系教育	矢埜みどり	TNF誘導アポトーシスにおける脂質の関与と脂質栄養による制御に関する研究	学 術	増澤 康男 (兵庫)

○平成12年度修了者

平成12年9月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
自然系教育	田中 俊一	Basic Concepts of Matter and Models of Elementary Particles (物質の基本理念と素粒子模型)	学校教育学	佐藤 光 (兵庫)
芸術系教育	和田垣 究	韓国伝統音楽におけるリズムの研究 ーブンムルノリ(農楽)の「3拍子」を中心に	学校教育学	水野 信男 (兵庫)

平成13年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	水戸美津子	変容する高齢者像と教育実践への視座	学校教育学	新井 郁男 (上越)
学校教育臨床	中内 みさ	病弱児の心理的援助に関する研究 ー病気の受容の観点からー	学校教育学	上地 安昭 (兵庫)
学校教育臨床	相模 健人	スクールカウンセリングにおけるシステムズアプローチを導入した学校システムとの連携に関する研究	学校教育学	田中 雄三 (鳴門)
言語系教育	佐倉 義信	児童詩創作指導の理論と実践に関する研究	学校教育学	中瀬 正堯 (兵庫)
社会系教育	田 鎬潤	グローバル教育としての小学校社会科カリキュラムと授業の開発 ー韓国における小学校社会科カリキュラムの改善を目指してー	学校教育学	中村 哲 (兵庫)
自然系教育	秋田 美代	数学教育における創造性の育成に関する研究	学校教育学	齋藤 昇 (鳴門)
自然系教育	古屋 光一	中学生の電気領域学習における科学的概念の構成を支援する指導方略に関する実践的研究	学校教育学	戸北 凱惟 (上越)
自然系教育	Mohammad Zafar	The Development of Teaching Materials in Earth Science Education and Petrology of the Garam Chashma Leucogranites, Hindukush Range (Trans-Himalayas), Northwestern Pakistan (地学教育における教材開発および北西パキスタン、ヒンズークシ地域(トランスヒマラヤ帯)に分布するガラムチシマ優白質花崗岩質岩の岩石学的研究)	学校教育学	村田 守 (鳴門)
芸術系教育	新野 貴則	子どもの表現行為の意味と実践に関する研究	学校教育学	増谷 直樹 (上越)
生活・健康系教育	篠原 陽子	自作ガスビュレットによる洗剤および漂白剤の成分の定量とそれに関連した消費者教育教材の構築	学校教育学	藤原 康晴 (鳴門)

○平成13年度修了者

平成13年9月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
生活・健康系教育	長尾 夏樹	認知競合現象のニューラルカオスモデルに関する研究	学 術	西村 治彦 (兵庫)

平成14年3月26日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	松島 るみ	青年期(中学生)における自己開示を規定する要因の検討	学校教育学	塩見 邦雄 (兵庫)

社会系教育	吉田 剛	地理の見方・考え方，地理的技能を育成する社会科地理授業のための学習指導システム ー世界イメージ形成のための方策からー	学校教育学	赤羽 孝之 (上越)
社会系教育	Chowdhury Mohammad Ehsan Karim	Eolian Dust Deposition and Monsoon Changes in the Japanese Islands since the Last Interglacial Period (最終間氷期以降における日本列島の風成塵堆積とモンスーン変動)	学 術	成瀬 敏郎 (兵庫)
自然系教育	鈴木久米男	理科学習指導における観察・実験の役割に関する実践的研究	学校教育学	戸北 凱惟 (上越)
芸術系教育	岡本 信一	「創造的思考力」を育成するための音楽科の学習過程に関する教科教育学的研究	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)
芸術系教育	佐々木貴子	<他者性>の育成を担う美術教育の実践に関する研究	学校教育学	西野 範夫 (上越)
生活・健康系教育	松枝 睦美	青少年期における骨強度獲得過程に関する研究 ー発育・成熟と生活習慣の影響ー	学校教育学	高橋 香代 (岡山)

○平成14年度修了者

平成15年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	坂本 徳弥	小学生のメディア活用に関する研究	学校教育学	中野 靖夫 (上越)
学校教育方法	橋本 秀美	描画法に見られる共感性についての研究	学校教育学	塩見 邦雄 (兵庫)
学校教育臨床	兵藤 好美	高齢者・在宅介護者の精神的健康とソーシャルサポートに関する研究 ー高齢化社会における臨床的教育への示唆ー	学校教育学	田中 宏二 (岡山)
学校教育臨床	松本 剛	大学生のひきこもりに関する臨床心理学的考察 ～学生援助における人間性心理学的アプローチの有効性	学校教育学	上地 安昭 (兵庫)
学校教育臨床	三宅 茂夫	幼児期の道徳性の芽生えを培うコミュニケーション環境の構築	学校教育学	田中 亨胤 (兵庫)
学校教育臨床	Ruiz Dominguez, Francisco Manuel	On the relationship between cognitive dissonance and helping behavior and an application to bystanders of ijime(bullying) (認知的不協和と援助行動に関する研究ーいじめ傍観児への介入を志向してー)	学校教育学	田中 宏二 (岡山)
言語系教育	桑原 哲朗	芦田恵之助の綴り方教師修養論に関する研究	学校教育学	有澤俊太郎 (上越)
言語系教育	河野 順子	<対話>による説明的文章の学習指導の実践と理論の構築 ーメタ認知の内面化の理論提案を中心にー	学校教育学	菅原 稔 (兵庫)
言語系教育	土屋 紀子	An Experimental Exploration into Facilitating Second Language Listening Comprehension (第2言語におけるlistening能力の育成に関する実証的研究)	学校教育学	松畑 熙一 (岡山)
社会系教育	兼松 儀郎	中等教育と高等教育とのアーティキュレーションに関する実証的研究 ー多次元的アプローチによるー	学校教育学	佐々木正道 (兵庫)
社会系教育	吉水 裕也	社会科における問題発見構造とカリキュラム開発	学校教育学	岩田 一彦 (兵庫)
自然系教育	山根平太郎	ウレアーゼモデル錯体の合成と構造・性質および金属含有酵素の教材化に関する研究	学校教育学	中尾 安男 (岡山)
自然系教育	鄭 黎	理科学習を支援する教材の開発と実践応用に関する研究	学校教育学	山下 伸典 (兵庫)
自然系教育	佐藤 康浩	Finite switchboard state machines and fuzzy finite switchboard state machines (有限スイッチボード・ステート・マシンとファジー有限スイッチボード・ステート・マシン)	学 術	黒木 伸明 (上越)
自然系教育	斯迪克艾尔肯	鉱物の蛍光に関する分光学的研究	学 術	山下 信彦 (岡山)

芸術系教育	澁谷 由美	真宗大谷派声明の音楽学的研究 －《伽陀》に象徴されるその諸相－	学校教育学	水野 信男 (兵庫)
芸術系教育	藤原 宏夫	石見神楽の研究 －神楽の技法と認知の問題を中心に－	学 術	水野 信男 (兵庫)
芸術系教育	董ホウショウ	子どもの「内的な能力」を育てる音楽授業の方法論に関する研究 －日本の音楽授業研究の実践事例を通して－	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)
生活・健康系教育	佐野 哲也	和服製作への画像処理技術の応用に関する研究	学 術	山本 秀樹 (岡山)
生活・健康系教育	阿濱 茂樹	技術科教育における生徒理解を重視した実践学的研究	学校教育学	松浦 正史 (兵庫)

○平成15年度修了者

平成15年9月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	山下 文代	ソーシャル・サポートが児童の攻撃性関連性格とストレス反応の関係に及ぼす影響	学校教育学	山崎 勝之 (鳴門)
社会系教育	新木 武志	近現代の都市空間における歴史表象の研究 －歴史表象分析による歴史認識の形成をめざして－	学校教育学	二谷 貞夫 (上越)

平成16年3月26日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	佐々木 恵	大学生におけるストレス・コーピングと精神健康の因果関係に関する実証的研究	学校教育学	塩見 邦雄 (兵庫)
学校教育臨床	佐藤 和順	幼稚園生活におけるジェンダー形成の多重構造に関する研究 －ジェンダー・バイアス・フェードアウト保育の構築－	学校教育学	田中 享胤 (兵庫)
学校教育臨床	手島由紀子	知的障害者の自己決定に必要な学習と支援に関する研究	学校教育学	藤井 聰尚 (岡山)
自然系教育	諏訪田文男	A study of generalized metric properties (一般距離空間の属性の研究)	学 術	溝上 武實 (上越)
芸術系教育	加藤 晴子	「こもりうた」にみる音楽教育的機能 －音楽感覚の形成を視点とした教育実践への提案－	学校教育学	有道 惇 (岡山)
芸術系教育	高橋 順子	日本における軍楽の受容とその作品にみる日本の特徴に関する研究	学校教育学	有道 惇 (岡山)
芸術系教育	加納 暁子	演奏表現を中心とした音楽の指導内容とその学習に関する教育実践学的研究	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)
生活・健康系教育	胡 習之	水中収束衝撃波の塑性加工への応用	学 術	可児 弘毅 (岡山)
生活・健康系教育	伊藤 大輔	北アイルランドと日本の技術科カリキュラムのデザインに関する研究	学校教育学	山崎 貞登 (上越)
生活・健康系教育	岡崎 愉加	思春期の食生活が性成熟に与える影響	学校教育学	高橋 香代 (岡山)

○平成16年度修了者

平成16年9月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	小栗 裕子	大学生の英語学習と動機づけ －リスニング指導からの研究－	学校教育学	塩見 邦雄 (兵庫)
芸術系教育	飯田 史帆	生活とつくる行為にかかわる教育の実践に関する研究	学校教育学	西村 俊夫 (上越)

平成17年3月28日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	牛 志奎	中国における教員法制的整備及びその運用に関する研究	学校教育学	若井 彌一 (上越)
学校教育方法	谷田 増幸	現代英語圏における道徳教育論の展開と諸相 －R. S. ピーターズにおける教育哲学の構想を基点として－	学校教育学	木内 陽一 (鳴門)
学校教育臨床	淘江七海子	看護基礎教育におけるコミュニケーション能力の育成 －言語的応答を中心に－	学校教育学	井上 和臣 (鳴門)

学校教育臨床	加戸 陽子	神経心理学的検査による発達障害の検討 －Keio版Wisconsin card sorting test の注意欠陥／多動性障害への適用を中心に－	学校教育学	眞田 敏 (岡山)
学校教育臨床	福井 晴子	家庭における就学前造形教育への支援と効果に関する研究 －親子の折り紙遊びによる実践を通して－	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)
言語系教育	大藪 修一	An Empirical Study on the Cognitive Processing of Logical Connectives in EFL Reading (EFLリーディングにおける論理的連結詞の認知処理に関する実証的研究)	学校教育学	伊東 治己 (鳴門)
社会系教育	和田 幸司	中世末・近世播磨丹波における部落寺院の基礎的研究	学校教育学	藤井 徳行 (兵庫)
自然系教育	藤田 彰子	数学教育における創造性の発達に関する研究	学校教育学	齋藤 昇 (鳴門)
自然系教育	Heng Meng	Development of New Methods on Environmental Analysis and their Applications (環境分析の新手法の開発とそれを用いた調査研究)	学校教育学	喜多 雅一 (鳴門)
自然系教育	池田 仁人	低学年児童の科学的思考の萌芽に関する研究	学校教育学	戸北 凱惟 (上越)
自然系教育	佐伯 昭彦	テクノロジーを活用した数学的活動の教材開発とその有効性に関する研究	学校教育学	黒木 伸明 (上越)
自然系教育	謝 光明	Non-commutative Valuation Rings in the Quotient Rings of Ore Extensions (オーレ拡大の商環の中の非可換付値環)	学 術	丸林 英俊 (鳴門)
芸術系教育	藤田 知里	イギリス ヴィクトリア朝における学校美術教育と社会との関わり	学校教育学	森岡 茂勝 (兵庫)
生活・健康系教育	安部 恵子	小学校児童の体力・運動能力と生活習慣に関する基礎的研究 －学校における健康教育プログラム作成を目的に－	学校教育学	勝野 眞吾 (兵庫)
生活・健康系教育	磯部 征尊	技術科評価基準の開発とカリキュラムのデザイン	学校教育学	山崎 貞登 (上越)
生活・健康系教育	アリム パタル	茶カテキン－大豆タンパク質複合体の抗菌活性及び脂質応答性に関する研究	学 術	前田 英雄 (鳴門)

○平成17年度修了者

平成17年9月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	小田久美子	幼児期の塗り絵遊びを応用した輪郭画用紙における絵画表現の発達の変容	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)

平成18年3月28日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	川島 範章	批判的思考態度の形成と深化に関する研究 －高校生用思考態度質問紙の開発による－	学校教育学	塩見 邦雄 (兵庫)
学校教育臨床	加藤 哲則	聴覚障害児のきこえに関する自己評価の研究	学校教育学	星名 信昭 (上越)
学校教育臨床	榮 玲子	母親役割の獲得過程に関する縦断的研究 －子どもに対する愛着と母親意識の分析を中心として－	学校教育学	橋本 俊顯 (鳴門)
学校教育臨床	高木 亮	教師の職業ストレスに関する研究	学校教育学	洲上 克義 (岡山)
言語系教育	石津 正賢	大村はま国語教室における読書生活指導の研究	学校教育学	世羅 博昭 (鳴門)
言語系教育	劉 笑明	日本語情意表現の記述的研究	学 術	吉田 則夫 (岡山)
言語系教育	田村 澄香	現代日本語における名詞文の時間表現についての研究	学 術	世羅 博昭 (鳴門)
言語系教育	宮迫 靖静	Effects of oral reading practice on Japanese learners of English as a foreign language (音読練習が日本人英語学習者に及ぼす影響)	学校教育学	高塚 成信 (岡山)

自然系教育	多賀 優	マグマの結晶分化過程の精密解析とその実践的応用	学校教育学	草地 功 (岡山)
自然系教育	石丸 善康	Mechanism of gonadal development in chick embryos (ニワトリ生殖腺の形態形成機構に関する研究)	学 術	吉岡 秀文 (兵庫)
自然系教育	久保田善彦	理科における学習コミュニティへの参加に関する臨床的研究	学校教育学	西川 純 (上越)
自然系教育	中村 好則	聴覚障害生徒の数学的思考力を育成するための教材の開発に関する研究	学校教育学	黒木 伸明 (上越)
芸術系教育	鈴木慎一朗	昭和前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究	学校教育学	奥 忍 (岡山)
芸術系教育	吉村 治広	学校教育におけるポピュラー音楽の教材化に関する実践学的研究	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)
生活・健康系教育	福田 芳行	フィルタファンに関する研究 ー送風及び集塵機能を併せ持つハイブリッド羽根車の開発ー	学 術	小川 武範 (兵庫)
生活・健康系教育	川西 光子	居住者の生活構造からみた都市の固有性と普遍性に関する研究 ーブラジルと日本の移・植民都市を対象にー	学校教育学	中岡 義介 (兵庫)
生活・健康系教育	日高 正博	「身体運動文化」を中核とした総合学習の理論と展開	学校教育学	後藤 幸弘 (兵庫)
生活・健康系教育	森脇裕美子	学校を基盤とした健康教育に関する国際比較研究 ー性教育及び薬物乱用防止教育を中心としてー	学校教育学	勝野 眞吾 (兵庫)

○平成18年度修了者

平成18年9月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
芸術系教育	上浦千津子	生涯学習社会を展望した美術学習	学校教育学	笹山 幸徳 (兵庫)
生活・健康系教育	丸山 敏則	医療用X線フィルムの画質評価とその応用に関する研究	学 術	山本 秀樹 (岡山)

平成19年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	富久 國夫	教師の職能発達を促す校長の指導助言機能に関する実証的研究 ー授業研究に焦点をあてた教授力量の形成への支援ー	学校教育学	佐竹 勝利 (鳴門)
学校教育臨床	寺田 智礼	きょうだいが中学生の心理的支えと問題行動兆候に与える影響に関する教育臨床的研究	学校教育学	山下 一夫 (鳴門)
言語系教育	岡田 直美	中世勅撰集の研究 ー歌群に紡がれる物語とそのゆくえー	学校教育学	松原 一義 (鳴門)
言語系教育	戸出 朋子	Frequency Effects in Classroom L2 Learning: The Learning of the English Primary Verb Be by Junior High School Students in Japan (教室第2言語学習における頻度の効果: 日本の中学生による英語be動詞の学習)	学校教育学	山岡俊比古 (兵庫)
社会系教育	松井 克行	普遍的価値を構造化する社会科・公民科のカリキュラムと単元の構成と開発 ーBetty A. Reardonのグローバル教育論を手がかりとしてー	学校教育学	中村 哲 (兵庫)
社会系教育	米田 豊	戦前の社会認識教科目の授業構成理論と授業実践の展開 ー小学校「地理」を中心にー	学校教育学	岩田 一彦 (兵庫)
自然系教育	寺田 光宏	理科教育における「ものづくり」の研究	学校教育学	西川 純 (上越)
芸術系教育	三浦 忠士	学ぶと言うことの意味とその成立の過程としての美術の行為に関する研究	学校教育学	西村 俊夫 (上越)
生活・健康系教育	加納 亜紀	幼児におけるテレビ・ビデオ視聴時間と発達との関連	学校教育学	高橋 香代 (岡山)
生活・健康系教育	鬼藤 明仁	ものづくりの学習における動機づけの分析 ー学習の有効性認知に着目してー	学校教育学	松浦 正史 (兵庫)
生活・健康系教育	厚東 芳樹	小学校体育授業における教師の反省的実践のあり方に関する実証的研究 ー授業に対する反省的思考と「出来事」への気づきとの関係についてー	学校教育学	梅野 圭史 (鳴門)

○平成19年度修了者

平成19年9月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	松浦 直己	非行化した少年の諸特性に関する実証的研究 －複数の少年院における多面的調査より－	学校教育学	橋本 俊顕 (鳴門)
社会系教育	NASUTION	インドネシアにおける歴史教育の史的展開と革新	学校教育学	原田 智仁 (兵庫)
生活・健康系教育	大川 尚子	地域の児童生徒における貧血の実態と背景要因についての疫学的研究 －Evidence-based Health Educationのための基礎的知見－	学校教育学	勝野 眞吾 (兵庫)

平成20年3月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	内田香奈子	大学生の感情表出による情動焦点型コーピングと精神的健康に関する心理学的研究	学校教育学	山崎 勝之 (鳴門)
学校教育臨床	甲斐 更紗	ろう学校在籍生徒のアイデンティティ発達支援プログラム開発に関する実践的研究 －社会・文化的視点からの取り組み－	学校教育学	鳥越 隆士 (兵庫)
学校教育臨床	野口理英子	抑うつへの反応スタイルに関する研究 －ruminationの分類に着目して－	学 術	内田 一成 (上越)
言語系教育	平川恵実子	『沙石集』の研究	学 術	松原 一義 (鳴門)
社会系教育	石原 純	生命倫理を視点とした高校公民科の授業開発	学校教育学	中村 哲 (兵庫)
社会系教育	陳 瑜	台北帝国大学理農学部に関する研究 －農学・熱帯農学講座及び製糖化学講座を中心に－	学校教育学	松田 吉郎 (兵庫)
自然系教育	廣瀬 隆司	算数教育における「速さ」の概念獲得過程に関する研究	学校教育学	齋藤 昇 (鳴門)
自然系教育	中尾 賢一	九州北西部の下部～中部更新統口之津層群産貝化石群の古生物地理学的研究	学 術	天野 和孝 (上越)
自然系教育	水落 芳明	理科実験場面におけるCSCLによる相互評価に関する臨床的研究	学校教育学	西川 純 (上越)
芸術系教育	中村 幸子	近代洋画の先駆者・百武兼行に関する研究 －西洋文化受容の教育的視点からの考察－	学校教育学	橋本 泰幸 (鳴門)
芸術系教育	橋本 真由	中学生を対象とした音楽の「構成的創造活動」にみる表現内容の論理性に関する実践的研究	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)
生活・健康系教育	長尾 伸洋	工業高校における省エネルギー教育の体系化	学校教育学	小川 武範 (兵庫)
生活・健康系教育	宮川 洋一	プログラミングにおける問題解決過程の分析に基づく学習支援システムの開発 －イベントドリブン型の言語を活用した学習指導に焦点を当てて－	学校教育学	松浦 正史 (兵庫)

○平成20年度修了者

平成21年3月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	村井 嘉子	救急初療看護における患者 －看護師関係の対話的行為と合意形成の構造研究	学校教育学	増井 三夫 (上越)
学校教育方法	勝間 理沙	児童期における関係性攻撃と感情機能に関する発達心理学的研究	学 術	山崎 勝之 (鳴門)
学校教育方法	梶本 知子	大学生の閾値下抑うつの影響要因に関する実証的研究 －敵意、意識的防衛性ならびに対人ストレスユーモアコーピングの役割－	学校教育学	山崎 勝之 (鳴門)
学校教育臨床	眞野 祥子	注意欠陥／多動性障害児の行動特徴と母親の養育態度との関連性 －母親の育児ストレス、抑うつ、情動面からの分析－	学 術	宇野 宏幸 (兵庫)
学校教育臨床	小関 俊祐	小学生に対する抑うつ低減プログラムの開発	学校教育学	藤田 継道 (兵庫)

学校教育臨床	高橋多美子	幼少期における自然との関わりを豊かにする環境構成と保育実践	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)
学校教育臨床	高柳 伸哉	心気症と身体化障害の発症過程に関する研究	学 術	内田 一成 (上越)
言語系教育	有働 玲子	話しことば教育の実践に関する研究 －大正期から昭和30年代の実践事例を中心に－	学校教育学	堀江 祐爾 (兵庫)
社会系教育	嶋田 典人	近代農村社会と労働力移動	学 術	上原 兼善 (岡山)
社会系教育	峯岸 由治	「地域に根ざす社会科」実践の歴史的展開 －授業内容と授業展開を視点として－	学校教育学	中村 哲 (兵庫)
自然系教育	桐生 徹	理科授業研究における授業検討会の活性化に関する臨床的研究	学校教育学	西川 純 (上越)
自然系教育	橋本 壽夫	水酸化ナトリウム処理による化石および鉱物の教材開発に関する研究	学校教育学	村田 守 (鳴門)
芸術系教育	福井 一真	木を素材とする造形教材開発の理論と実践に関する研究	学校教育学	西村 俊夫 (上越)

○平成21年度修了者

平成21年9月25日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	竹山 典子	異なる文化的背景を持つ子どもへの臨床心理学的支援に関する研究	学校教育学	葛西真記子 (鳴門)
芸術系教育	宮野 周	社会・文化的に構成される「メディア」が誘発する情報社会における造形教育の学びに関する研究	学校教育学	福本 謹一 (兵庫)

平成22年3月26日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	小林 淳一	教員養成系大学における学生の職業選択意識の形成研究 －教職経験と教職決定過程における葛藤の解明－	学校教育学	増井 三夫 (上越)
学校教育方法	西尾 理	戦後日本における平和教育の分析と教材開発研究	学校教育学	増井 三夫 (上越)
学校教育方法	坂井 誠亮	戦後奈良県における小学校社会科の学習評価に関する研究 －初期社会科プラン及び社会科診断テストを中心として－	学校教育学	佐藤 真 (兵庫)
学校教育臨床	西山 久子	学校組織における教育相談の定着のための理論的・実証的研究	学校教育学	洲上 克義 (岡山)
学校教育臨床	吉見 摩耶	心理療法過程に作用するセラピストおよびクライアントの要因に関する研究 －心理臨床家を目指す学生の質的向上を促す効果的な訓練方法についての検討－	学校教育学	葛西真記子 (鳴門)
学校教育臨床	新垣千鶴子	児童の道徳性を育てる道徳教育の研究 ～コミュニティ・アプローチを通して～	学校教育学	渡邊 満 (兵庫)
学校教育臨床	鈴木 裕子	保育における幼児の身体による模倣行為の機能と役割	学校教育学	名須川知子 (兵庫)
言語系教育	曾 罌	An Investigation into Text-based Peer-peer Collaborative Dialogue in a Computer-mediated Learning Environment in the EFL Context: A Sociocultural Perspective (コンピュータ仲介学習環境におけるEFL学習者のピア間での協調的な対話に関する研究－社会文化理論の視点から－)	学校教育学	高塚 成信 (岡山)
社会系教育	王 鑫	国際化時代における環境教育とその展望に関する研究 －横浜市と上海市の環境教育の比較を通して－	学校教育学	佐藤 芳徳 (上越)
社会系教育	菅 良樹	近世大坂における幕府畿内・西国支配機構の研究 －城代・定番制度の検討－	学 術	藤井 徳行 (兵庫)
社会系教育	横井 香織	日本統治期の台湾におけるアジア調査と人材育成	学 術	松田 吉郎 (兵庫)
自然系教育	天野 正己	On Resolutions of Generalized Metric Spaces (一般化された距離空間の分解について)	学 術	溝上 武實 (上越)
自然系教育	神崎 弘範	理科における自作教科書作りの活動についての実践的研究	学校教育学	西川 純 (上越)

自然系教育	五島 政一	問題解決能力を育成するアースシステム教育とその教師教育プログラムの開発に関する実践的研究	学校教育学	小林 辰至 (上越)
芸術系教育	橋本 忠和	市民教育における環境芸術の教材化の研究	学校教育学	初田 隆 (兵庫)
生活・健康系教育	市原 靖士	技術科教育における生徒の認知的実態に即したデジタルコンテンツの教材利用に関する実践的研究	学校教育学	森山 潤 (兵庫)
生活・健康系教育	中川 愛	大学生の対乳児行動に関する音声・行動分析学的研究	学校教育学	松村 京子 (兵庫)

○平成22年度修了者

平成22年9月22日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
言語系教育	陳 崗	日本語心情語彙の歴史的研究 ー「嫉妬」「羨望」「憤怒」の心情を表す和語を対象にー	学 術	吉田 則夫 (岡山)
芸術系教育	包格日樂吐	地域に根ざした造形的なものづくり教育に関する研究 ー中国の内モンゴル自治区バヤンタリヤー地域を中心にー	学校教育学	西村 俊夫 (上越)

平成23年3月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	上田 紋佳	不安認知における自動的処理に関する研究	学 術	寺澤 孝文 (岡山)
学校教育方法	貴志知恵子	高校生における正感情と認知的再解釈コーピングを操作因子とした抑うつ予防への教育的介入研究	学校教育学	山崎 勝之 (鳴門)
学校教育方法	當山 清実	「優秀教員」の職能開発における現職研修の効果に関する研究	学校教育学	佐藤 真 (兵庫)
学校教育臨床	鎌田 雅史	対人関係における社会的勢力の認知と有効性に関する時系列的研究 ー学校教育における社会的勢力ー	学 術	洲上 克義 (岡山)
学校教育臨床	谷村 宏子	保育における自閉症児への音楽療法的活動による支援	学校教育学	名須川知子 (兵庫)
学校教育臨床	吉原 寛	主観的学校ストレスによる高校生の学校ストレスに関する研究	学校教育学	富永 良喜 (兵庫)
言語系教育	伊崎 一夫	これからのあるべき国語教室に関する実践的研究	学校教育学	菅原 稔 (岡山)
社会系教育	中本 和彦	中等地理教育内容開発研究 ー社会認識形成のための地誌学習ー	学校教育学	原田 智仁 (兵庫)
自然系教育	石井 健作	小学校理科授業における「科学言語」の重要性に関する実践的研究	学校教育学	本間 均 (兵庫)
自然系教育	加藤 圭司	文化的発達の視点からとらえる学習者の科学概念構築とその変容に関する研究	学校教育学	松本 伸示 (兵庫)
自然系教育	金子 健治	The Four Question Strategy を用いた仮説設定が中学生の科学的概念形成に与える効果に関する実証的研究	学校教育学	小林 辰至 (上越)
生活・健康系教育	邢 振雷	留学生のための日本語学習支援システムに関する研究	学校教育学	菊地 章 (鳴門)
生活・健康系教育	山口 孝治	優れた体育授業の創造に資する教師の戦略的思考に関する実践的研究 ー「ゲーム理論」からの接近ー	学校教育学	梅野 圭史 (鳴門)
生活・健康系教育	GOHORI JOSEF	村落社会の高齢者における生者と死者とのつながり ー日本の死生観に基づく生き方に関する考察ー	学 術	得丸 定子 (上越)

○平成23年度修了者

平成23年9月22日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
芸術系教育	渡辺 一洋	保育者養成のための造形ワークショップによる学びに関する研究 ーファシリテーションモデル構築による力量形成の実践的検討ー	学校教育学	福本 謹一 (兵庫)

平成24年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	津島 靖子	Continuous performance testによる発達障害の検討	学校教育学	眞田 敏 (岡山)
学校教育臨床	中川 智之	幼児期の集団生活における規範意識の芽生えと公民的資質の基盤形成	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)
先端課題実践開発	長谷川春生	小学生のネットコミュニケーションにかかわるモラル学習に関する研究	学校教育学	久保田善彦 (上越)
言語系教育	坂東 智子	大村はま古典学習指導の研究 ー具体像の解明と歴史的・現代的意義づけー	学校教育学	村井万里子 (鳴門)
社会系教育	大畑 健実	伝統・文化の教育に関するカリキュラム構成とモデル授業の開発 ～小学校社会科の授業実践を中核として～	学校教育学	中村 哲 (兵庫)
社会系教育	井上 敏孝	台湾総督府の築港政策と人材育成事業	学校教育学	松田 吉郎 (兵庫)
自然系教育	寺島 幸生	無機塩－多価アミン2成分系の溶媒和構造と動的性質	学 術	本田 亮 (鳴門)
自然系教育	松岡 学	CODING THEORY AND SKEW POLYNOMIAL RINGS (歪多項式環と符号理論)	学 術	平野 康之 (鳴門)
芸術系教育	吉川 暢子	「ものづくりの場」における子どもの表現に関する実践学的研究 ー親子のかかわりを中心とした他者関係を軸としてー	学校教育学	西村 俊夫 (上越)
芸術系教育	井上 朋子	小学校図画工作科と音楽科における総合芸術教育プログラムの開発に関する研究	学校教育学	初田 隆 (兵庫)
芸術系教育	高見 仁志	小学校音楽科における教師の力量形成に関する研究	学校教育学	竹内 俊一 (兵庫)
芸術系教育	辻 誠	視覚と触覚の感覚統合を促す描画題材の研究	学校教育学	初田 隆 (兵庫)
生活・健康系教育	細谷 里香	Emotional Laborとしての教師の情動調整・表出に関する研究	学校教育学	松村 京子 (兵庫)

○平成24年度修了者

平成24年9月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	若林 上総	発達障害のある生徒が在籍する高等学校の学級における集団随伴性の研究	学校教育学	加藤 哲文 (上越)

平成25年3月26日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	泰泉寺俊弘	高専学生における数学認識の特性と関数の捉え方に関する研究 ー実態調査を中心にー	学校教育学	小野瀬雅人 (鳴門)
学校教育方法	高井 延子	小学校における「国際理解教育型英語活動」開発のための基礎研究	学校教育学	小野瀬雅人 (鳴門)
学校教育方法	椋田 善之	幼稚園から小学校への移行期における子どもの期待や不安の変容過程に関する研究 ー就学前後の子どもへの縦断的なインタビューを用いてー	学校教育学	佐藤 真 (兵庫)
学校教育臨床	伊藤 智里	一幼児の積み木遊びに見られる立体表現力の発達に関する縦断的事例研究	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)
学校教育臨床	北澤 弘二	間主観的視点による広汎性発達障害の中学生への心理的支援 ースクールカウンセリングにおける事例の分析ー	学校教育学	上地雄一郎 (岡山)
学校教育臨床	横内 理絵	広汎性発達障害をとまなう子どもに対する既成曲合奏を用いたコミュニケーション支援	学校教育学	眞田 敏 (岡山)
学校教育臨床	土居 正城	スクールカウンセラーと教員の連携促進に関する研究	学校教育学	加藤 哲文 (上越)
先端課題実践開発	城内 君枝	保護者の学校参加を規定する要因についての研究 ーS県H市における保護者への質問紙調査を通してー	学校教育学	林 泰成 (上越)
先端課題実践開発	亀山 秀郎	幼稚園における自然体験による気付きを中心とした保育内容の展開	学校教育学	名須川知子 (兵庫)

先端課題実践開発	小谷恵津子	地図を用いた社会科学習で形成、活用する概念と社会認識形成 －中学校社会科地理的分野における授業モデル開発を通して－	学校教育学	米田 豊 (兵庫)
先端課題実践開発	佐藤多佳子	国語科における思考指導の在り方に関する研究	学校教育学	松本 修 (上越)
社会系教育	新地比呂志	陳公博の政治思想研究 －改組派活動期を中心として－	学校教育学	松田 吉郎 (兵庫)
自然系教育	松本 榮次	天文学習におけるALCAT導入による半具体的視点移動実現をめ ざす授業開発研究	学校教育学	松本 伸示 (兵庫)
芸術系教育	小崎 真	鑑賞教育における学びのストラテジー －小学校高学年における美術作品鑑賞のあり方を探る－	学校教育学	福本 謹一 (兵庫)
芸術系教育	手塚 千尋	美術教育における協同的な学びに関する実践学的研究	学校教育学	西村 俊夫 (上越)
芸術系教育	藤原 智也	中学校美術科の教科内統合カリキュラムに関する研究	学校教育学	福本 謹一 (兵庫)
生活・健康系教育	開元 多恵	栄養補助食品の摂取が脂質代謝に及ぼす影響 ～食品の栄養特性と栄養教育～	学 術	前田 英雄 (鳴門)
生活・健康系教育	上村 弘子	基本的保健行動における保健指導のあり方と今日的意義	学校教育学	伊藤 武彦 (岡山)
生活・健康系教育	筒井 茂喜	身体接触を伴う運動の教育的効果に関する研究 －共感を促す体育授業の構築に向けて－	学校教育学	増澤 康男 (兵庫)

○平成25年度修了者

平成25年9月20日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
芸術系教育	西園 政史	美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する実践 学的研究 －デジタルカメラを媒介とした表現による教材開発を通して－	学校教育学	西村 俊夫 (上越)

平成26年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	棚野 勝文	戦前の中学校における職員会議の機能と実態 －「職員会議録」の分析による実践史研究－	学校教育学	大野 裕己 (兵庫)
学校教育方法	松宮 新吾	小学校「外国語活動」の教育効果に関する実証的研究 －「日本型小学校英語教育」の創設へ向けて－	学校教育学	小野瀬雅人 (鳴門)
学校教育臨床	則包 和也	統合失調症患者の幻聴症状を把握する面接の実践と効果検証 －認知行動療法の導入と自己対処を援助する看護を目指して－	学 術	津田 芳見 (鳴門)
学校教育臨床	若井(澁江)裕子	アタッチメントとレジリエンスの関連 －獲得された安心感や修正アタッチメント体験の視点から－	学校教育学	葛西真記子 (鳴門)
先端課題実践開発	岡山 万里	美術館における幼児期の鑑賞体験とその援助	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)
先端課題実践開発	井上 和久	特別支援学校と関係機関が連携した要支援の子どもの早期から の地域支援モデルの研究	学校教育学	井澤 信三 (兵庫)
言語系教育	伊達 正起	An Empirical Study on the Effectiveness of Task Repetition and Noticing of Forms on Facilitating Proceduralization of Linguistic Knowledge in Oral Task Performance (口頭でのタスクパフォーマンスにおけるタスクの繰り返しと 言語形式の気づきが言語知識の手続き化の促進に及ぼす有効性 に関する実証的研究)	学校教育学	高塚 成信 (岡山)
自然系教育	小川 博士	オーセンティック・ラーニングに依拠した理科授業デザインと その効果に関する研究	学校教育学	松本 伸示 (兵庫)
生活・健康系教育	田中 響	乳児との対面時の母親の視線及び応答性に関する縦断研究	学校教育学	松村 京子 (兵庫)
生活・健康系教育	竹口 幸志	行動と精神活動の方向性に基づいた情報倫理教育の枠組みの構 築	学校教育学	菊地 章 (鳴門)
生活・健康系教育	池田 拓人	近代日本における学校柔道の教授内容・方法に関する歴史的研 究	学校教育学	永木 耕介 (兵庫)

生活・健康系教育	角 和博	技術教育における教師と生徒の相互作用を考慮した学習支援のシステム化	学校教育学	菊地 章 (鳴門)
生活・健康系教育	萩嶺 直孝	計測・制御システムに対する生徒の技術評価・活用力を育成する学習指導方法に関する実践的研究	学校教育学	森山 潤 (兵庫)
生活・健康系教育	升本 絢也	個人間協応における力の制御と学習	学 術	乾 信之 (鳴門)

○平成26年度修了者

平成26年9月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
生活・健康系教育	長田 則子	教師の感性的省察力の実体とその深化 ー体育授業を窓口にしてー	学校教育学	梅野 圭史 (鳴門)

平成27年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	白井 克尚	1950年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関する歴史的研究 ー郷土教育全国連絡協議会の教師たちの取り組みを中心にー	学校教育学	梅野 正信 (上越)
学校教育臨床	岩崎 眞和	青年期の感謝と自己の発達に関する実証的研究	学校教育学	五十嵐透子 (上越)
学校教育臨床	永浦 拓	ストレスマネジメント理論に基づく「心の健康教育プログラム」に関する研究	学校教育学	富永 良喜 (兵庫)
学校教育臨床	中瀬 浩一	聴覚障害児の教育支援のための聴能評価ツールの開発と活用に関する実践的研究	学校教育学	鳥越 隆士 (兵庫)
先端課題実践開発	山内 敏男	歴史事象の相互関連の導出を組み込んだ実践開発研究 ー中学校社会科歴史授業における認識の深化を目指してー	学校教育学	米田 豊 (兵庫)
先端課題実践開発	新山 順子	保育者養成における人との関わりから展開する即興的な身体表現の実践	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)
言語系教育	William Ludwel Quint Oga-Baldwin	Student engagement and motivation in primary foreign language classes: A mixed-methods longitudinal study (小学校外国語活動における児童の主体的な学びと動機づけに関する混合方法を用いた縦断的研究)	学校教育学	中田 賀之 (兵庫)
社会系教育	紙田 路子	自主的自立的価値観形成を目指す小学校社会科内容編成の研究	学校教育学	桑原 敏典 (岡山)
自然系教育	伊丹 芳徳	中等教育における磁性に関する科学実験教材の開発	学校教育学	喜多 雅一 (岡山)
自然系教育	中島 雅子	理科教育における観念の形成過程の自覚化という視点を重視した自己評価に関する研究	学校教育学	松本 伸示 (兵庫)
芸術系教育	清田 哲男	多感覚間相互作用と記憶による観察画表現の研究	学校教育学	初田 隆 (兵庫)
生活・健康系教育	奥井 一幾	地域資源を活用したNonformal Educationプログラムの開発 ー学校・地域間連携に関する概念検討を基盤としてー	学校教育学	得丸 定子 (上越)
生活・健康系教育	笹山 健作	青少年の体力づくりに関する教育実践学的研究	学校教育学	足立 稔 (岡山)
生活・健康系教育	中原 久志	技術科教育におけるものづくり活動時の生徒の感情状況の分析に基づく情意的支援の在り方の検討	学校教育学	森山 潤 (兵庫)

○平成27年度修了者

平成27年9月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
芸術系教育	川北 雅子	学校音楽教育における阿波人形浄瑠璃の教育的価値と教材としての可能性に関する研究	学校教育学	長島 真人 (鳴門)

平成28年3月26日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	平田 幸男	関連性評定質的分析法による授業研究会の機能の分析に関する研究	学校教育学	森廣浩一郎 (兵庫)

学校教育方法	山崎 宣次	特徴単語を用いた小学校通知表所見の記述支援に関する研究	学校教育学	森廣浩一郎 (兵庫)
学校教育臨床	松井 幸太	高等学校の運動部活動における指導者の関わりと生徒の心理的成長	学校教育学	山下 一夫 (鳴門)
学校教育臨床	荊木まき子	教員とスクールカウンセラーの協働による学校支援に関する研究	学校教育学	安藤美華代 (岡山)
学校教育臨床	加藤 由美	若手保育者の困難感と対処に着目した心理教育的介入に関する研究	学校教育学	安藤美華代 (岡山)
先端課題実践開発	池田 浩之	高機能自閉症スペクトラム障害者の心理的特性を踏まえた就労支援プログラムに関する研究	学校教育学	井澤 信三 (兵庫)
先端課題実践開発	太田 誠	算数学習における子どもの自律性の進展とその要因に関する研究 －RPDCAサイクルを活かした算数の学び－	学校教育学	黒崎東洋郎 (岡山)
社会系教育	趙 従勝	中国・海南島の農業近代化 －日本占領時期の海南島農業調査・開発・教育を中心に－	学校教育学	松田 吉郎 (兵庫)
自然系教育	那須 悦代	国際標準をめざした高校化学教材の開発 －熱力学と電極電位を中心にして－	学校教育学	喜多 雅一 (岡山)
自然系教育	山岡 武邦	発問フレームワークに依拠した理科授業デザイン	学校教育学	松本 伸示 (兵庫)
自然系教育	山田 貴之	小学校理科授業における科学的な思考力の育成に関する指導法の実証的研究 －4QS(The Four Question Strategy)による仮説設定能力とプロセス・スキルの育成の手立て－	学校教育学	小林 辰至 (上越)
芸術系教育	三盃美千郎	子どもの造形行為における意味生成過程の根拠としての生命的な<場>に関する実践的研究	学校教育学	松本 健義 (上越)
生活・健康系教育	栢木 紀哉	ものづくり工程における計測・制御学習の展開と学習支援システムに関する研究	学校教育学	大橋 和正 (岡山)
生活・健康系教育	川島 芳昭	能動学習を伴った情報教育に関する研究	学校教育学	菊地 章 (鳴門)

(2) 論文提出による学位取得者

○平成12年度取得者

平成12年9月6日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
自然系教育	小林 辰至	原体験を基盤とした科学的問題解決学習のモデル化に関する研究	学校教育学	戸北 凱惟 (上越)

平成12年3月15日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
言語系教育	田中 武夫	The Roles of Practice in Second Language Acquisition: The Complementary Roles of Comprehension and Production Practice in Grammar Instruction (第二言語習得における練習の役割 – 文法指導における理解練習と表出練習の相補的役割について –)	学校教育学	次重 寛禧 (兵庫)
自然系教育	鈴木 誠	理科教育における自己効力に関する基礎的研究 – 新しい学習指導の可能性 –	学校教育学	戸北 凱惟 (上越)

○平成13年度取得者

平成13年9月5日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	佐藤 暁	モデルパターン動作の獲得度を指標とした脳性まひ児の動作不自由と動作発達に関する分析	学校教育学	藤田 継道 (兵庫)

平成14年3月14日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
自然系教育	森本 弘一	環境が生物に及ぼす影響を示す教材の開発 – 紫外線を中心にして –	学校教育学	山下 伸典 (兵庫)
自然系教育	石井 俊行	子どもの学習過程の解明に基づいた理科学習指導に関する基礎的研究 – 中学校理科第1分野の基礎・基本の重視を中心として –	学校教育学	山下 伸典 (兵庫)
生活・健康系教育	森山 潤	学習指導の改善に向けたプログラム作成作業における思考過程の構造的分析	学校教育学	松浦 正史 (兵庫)

○平成14年度取得者

平成14年9月4日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	湯浅 恭正	障害児教育における授業実践の成立に関する教授学的研究	学校教育学	藤井 聰尚 (岡山)
芸術系教育	西園 芳信	「芸術の知」の能力の育成を目的とした小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究	学校教育学	西野 範夫 (上越)
生活・健康系教育	井谷 恵子	アメリカの体育における健康関連フィットネスに関する研究 – 1980年代以降のフィットネス教育の変容を中心に –	学校教育学	勝野 眞吾 (兵庫)

平成15年3月13日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
社会系教育	梅野 正信	戦後初期における中学校社会科歴史教科書の成立に関する研究	学校教育学	二谷 貞夫 (上越)
自然系教育	山本 勝博	理科教育への定量的な扱いを支援する教材開発と実践的応用に関する研究	学校教育学	山下 伸典 (兵庫)
自然系教育	西川 純	巨視的時間の距離感形成に関する研究	学校教育学	山下 伸典 (兵庫)
生活・健康系教育	伊藤 政展	Relation of Repetition Effect and Response Programming in Serial Reaction Time (系列反応時間における反復効果と反応プログラミングのかかわり)	学校教育学	三浦 望慶 (上越)
生活・健康系教育	岳野 公人	ものづくり学習の構想設計における生徒の思考過程に関する研究	学校教育学	松浦 正史 (兵庫)

○平成15年度取得者

平成15年9月3日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	田村 隆宏	幼児の語彙学習を促す要因に関する研究	学校教育学	塩見 邦雄 (兵庫)

社会系教育	岡山真知子	弥生時代における水銀朱の生産と流通	学校教育学	成瀬 敏郎 (兵庫)
社会系教育	佐長 健司	社会形成教育の開発的研究	学校教育学	岩田 一彦 (兵庫)

平成16年3月11日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	吉利 宗久	アメリカ特殊教育におけるインクルージョンの法制と実践に関する研究	学校教育学	藤井 聰尚 (岡山)
自然系教育	中込 雄治	多様な考え方を引き出す数学教材の開発に関する研究	学校教育学	黒木 伸明 (上越)
自然系教育	三崎 隆	認知型を主とする観察の構造とそれを支える理科教育の実践的研究 ー地層観察事例を中心としてー	学校教育学	戸北 凱惟 (上越)
自然系教育	小池 守	直接体験を取り入れた化学領域における実験教材の開発と教育実践に関する研究	学校教育学	高津戸 秀 (上越)
自然系教育	桐山 信一	物理における環境教育を視野に入れた教材化に関する実践的研究	学校教育学	本間 均 (兵庫)

○平成16年度取得者

平成16年9月3日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	光田 尚美	ベスタロッチャー教育思想における「愛」の概念とその教育実践学的意義に関する研究	学校教育学	森川 直 (岡山)
社会系教育	韓 承希	近世における朝日関係に関する総合的考察 ー朝鮮通信使を中心としてー	学校教育学	上原 兼善 (岡山)

平成17年3月28日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
社会系教育	關 浩和	構成主義的学習論を視点とした社会科授業構成とモデル授業開発	学校教育学	中村 哲 (兵庫)
自然系教育	田中 孝志	穀類に含まれるステロールの分析およびステロールを題材とした実験教材の開発に関する研究	学校教育学	高津戸 秀 (上越)
自然系教育	荻原 彰	日米比較を中心とした、初等中等教育における環境教育の制度と内容に関する研究	学校教育学	戸北 凱惟 (上越)
生活・健康系教育	増尾 慶裕	技術科教育における生徒の学力形成を支援する構成的学習指導モデルの構築とその効果	学校教育学	松浦 正史 (兵庫)
生活・健康系教育	山本 利一	技術科教育における技能習得過程の認知的要因の分析に基づく教材・教具の開発と学習支援の方策 ー金属加工の学習指導を中心としてー	学校教育学	松浦 正史 (兵庫)
生活・健康系教育	吉澤 千夏	母子のままごと遊びにおける食のスク립トに関する縦断的研究	学校教育学	大瀧ミドリ (上越)

○平成17年度取得者

平成17年9月28日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	齋藤 一雄	知的障害児のリズム同期の発達とその指導に関する研究	学校教育学	星名 信昭 (上越)
言語系教育	梅澤 実	小学校における「読み」の学習指導法の開発に関する研究 ー表象主義的アプローチと状況論的アプローチの止揚をめざしてー	学校教育学	世羅 博昭 (鳴門)
言語系教育	竹内 理	外国語学習成功者の研究 ー学習方略の視点からー	学校教育学	太田垣正義 (鳴門)
生活・健康系教育	田中 陽子	小学校裁縫科教育の歴史	学校教育学	松村 京子 (兵庫)

平成18年3月28日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	栗原 慎二	学校における時間制限カウンセリングの研究	学校教育学	上地 安昭 (兵庫)

社会系教育	小泉 憲和	近代日本史における外交官・重光葵の研究	学校教育学	藤井 徳行 (兵庫)
芸術系教育	北澤 晃	<子ども－私>の成り立ちと教育の基礎学としての造形遊び	学校教育学	西村 俊夫 (上越)
生活・健康系教育	白濱 博	工業高校教育の電気領域における基礎的・基本的な技術習得のための教材・教具の開発	学校教育学	玉井 輝雄 (兵庫)

○平成18年度取得者

平成18年9月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	黄 喜珊	日中比較を通しての教師効力感の研究 －尺度の開発と影響要因の検討を中心にして－	学校教育学	藤田 継道 (兵庫)
社会系教育	外山 公美	カナダの州オンブズマン制度研究 －日本のとカナダの比較研究と日本オンブズマン制度の課題－	学 術	藤井 徳行 (兵庫)

平成19年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	名古屋恒彦	戦後知的障害教育における生活中心教育の教育課程及び指導法の変遷に関する研究	学校教育学	八幡ゆかり (鳴門)
学校教育臨床	西山 修	保育内容「人間関係」に係わる保育者の効力感と自我同一性の形成に関する研究	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)
学校教育臨床	足立 正	幼児期における蹴動作の発現及び発達に関する研究	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)
学校教育臨床	金 恩英	Social facilitation and error monitoring: an ERP study in Children (社会的促進とエラーモニタリング：子どもを対象にした事象関連電位研究)	学校教育学	藤田 継道 (兵庫)
学校教育臨床	太田 正己	障害児教育現場における授業研究法の実証的研究 －授業改善のための授業批評法の開発－	学校教育学	柳原 正文 (岡山)
社会系教育	室谷 茂	国名と地名からみたアジア文化地域の考察とその比較研究	学校教育学	成瀬 敏郎 (兵庫)
自然系教育	SANTI IRAWATI	Non-commutative Valuation Rings and Their Global Theories (非可換付値環とその大域理論)	学 術	丸林 英俊 (鳴門)

○平成19年度取得者

平成19年9月30日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
言語系教育	下西善三郎	西行 長明 受容と生成	学 術	松原 一義 (鳴門)

平成20年3月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	木村 松子	戦後の女性教員運動と教育研究の歴史的展開に関する研究 －奥山えみ子の記述と語りを通して－	学校教育学	西 穰司 (上越)
社会系教育	志村 喬	現代イギリス地理教育の展開 －『ナショナル・カリキュラム地理』改訂を起点とした考察－	学校教育学	大嶽 幸彦 (上越)
社会系教育	黄 麗雲	台湾における「端午扒龍船」の研究 －長崎ペーロン及び沖縄ハーリーとの比較を通じて－	学 術	松田 吉郎 (兵庫)
自然系教育	宮下 治	野外自然体験学習の推進を図る学校教育と教員の在り方に関する実践研究 －学習評価と学習支援の新たな方法の提言－	学校教育学	西川 純 (上越)
自然系教育	益田 裕充	中学生の科学的な概念の深化・拡大に関する研究	学校教育学	小林 辰至 (上越)
自然系教育	大澤 力	科学性の芽生えを促進する幼児期自然教育におけるビオトープの実践的研究	学校教育学	小林 辰至 (上越)
自然系教育	佐々 有生	広島高等師範学校附属小学校の図画教育 －吉田俊造、堀孝雄、大竹拙三、3人にみる実践－	学校教育学	橋本 泰幸 (鳴門)
芸術系教育	今 由佳里	小学校における音楽表現学習の研究 －スイス・フランス語圏の音楽教育を中心に－	学校教育学	奥 忍 (岡山)

○平成20年度取得者

平成20年9月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	池島 徳大	いじめ解決への学校教育臨床的支援	学校教育学	渡邊 満 (兵庫)
言語系教育	五百蔵高浩	A Study of Japanese EFL Learners' Acquisition of Word Stress in Morphologically Complex Words (日本人英語学習者の形態論的に複雑な語の語強勢習得に関する研究)	学校教育学	太田垣正義 (鳴門)
社会系教育	小南 浩一	近代日本の選挙と地域政治構造の変容 ー兵庫県第三区を中心にー	学校教育学	藤井 徳行 (兵庫)
生活・健康系教育	渡部 昌史	中学校期におけるスポーツ活動と骨強度獲得過程	学校教育学	高橋 香代 (岡山)

平成21年3月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
言語系教育	岩中 貴裕	Roles of output and noticing in English language learning: Effects of exposure to relevant input immediately after output on the incorporation of linguistic forms (英語学習におけるアウトプットと気づきの役割: アウトプットの直後に関連したインプットに触れることが言語形式の取り込みに与える影響)	学校教育学	高塚 成信 (岡山)
自然系教育	荒井 豊	中学校理科における視点移動能力の育成を目指すモデル教材と実践的カリキュラム開発	学校教育学	西川 純 (上越)
自然系教育	小野寺 力	半導体ひずみ量子井戸構造の設計と教材化に関する研究	学 術	室谷 利夫 (上越)

○平成21年度取得者

平成21年9月25日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
言語系教育	Moedjito	A Study on factors determining global intelligibility of EFL learners' speech (EFL学習者による発話の global intelligibility を決定する要因に関する研究)	学校教育学	伊東 治己 (鳴門)

平成22年3月26日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	岡田 信吾	発達障害者に対する日常生活場面における社会的行動の指導に関する研究 ーソーシャルストーリー™による介入を中心としてー	学校教育学	柳原 正文 (岡山)
言語系教育	竹野純一郎	Phonological Memory and Other Contributing Factors Affecting Listening Comprehension of Japanese Learners of English (日本人英語学習者の聴解に影響を及ぼす音韻記憶および重要な要因に関する研究)	学校教育学	高塚 成信 (岡山)
社会系教育	吉田 正生	「対話」力の育成をめざした歴史授業の構成	学校教育学	岩田 一彦 (兵庫)
芸術系教育	齊藤百合子	音楽的経験における意味生成を原理とした小学校音楽科授業構成の研究	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)

○平成22年度取得者

平成22年9月22日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	岩佐 幸恵	高機能広汎性発達障害児の自律神経機能及び前頭葉機能の発達に関する研究	学校教育学	八幡ゆかり (鳴門)
先端課題実践開発	林 美代	幼児期の道徳性の芽生えに関する研究 ー共に育つ場の形成をめざしてー	学校教育学	渡邊 満 (岡山)
言語系教育	吉川 芳則	説明的文章の学習活動の構成と展開に関する研究	学校教育学	堀江 祐爾 (兵庫)
芸術系教育	溝口希久生	小学生を対象とした「創造的音楽づくり」にみる音楽的発達に関する研究 ー表現内容の論理性に注目してー	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)

生活・健康系教育	岡崎 勘造	大学生の身体活動・運動を促進させる方策に関する研究	学校教育学	高橋 香代 (岡山)
生活・健康系教育	村松 浩幸	技術科教育におけるアイデアの創造と共有に基づく体験的知的財産学習法の開発	学校教育学	森山 潤 (兵庫)

平成23年3月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	大杉 成喜	特別支援教育における情報技術の活用に関する研究	学校教育学	佐藤 真 (兵庫)
社会系教育	疋田 晴敬	社会的価値観形成の公民教育授業開発研究	学校教育学	西村 公孝 (鳴門)
社会系教育	水山 光春	社会科環境教育における社会認識と市民的資質の統合的育成に関する研究	学校教育学	岩田 一彦 (兵庫)
生活・健康系教育	灘本 雅一	高齢者の自立度を向上させるトレーニング法に関する研究 －自覚的運動強度を用いた複合的トレーニングが下肢筋機能に及ぼす影響－	学 術	後藤 幸弘 (兵庫)
生活・健康系教育	上原 禎弘	体育授業における教師の言語的相互作用の役割と機能 －体育授業の〈文法〉を求めて－	学校教育学	梅野 圭史 (鳴門)

○平成23年度取得者

平成23年9月22日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
自然系教育	SRI RAHAYU	Learning Chemistry at School Level: Students' Conceptions and Design of A Learning Environment (学校段階における化学の学習：生徒の概念と学習環境の設計)	学校教育学	喜多 雅一 (岡山)
生活・健康系教育	島田 和典	工業高校における生徒の自己概念の形成と影響	学校教育学	森山 潤 (兵庫)

平成24年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	佐々木弘記	教育センターにおける反省的実践家としての専門的力量形成を目指した教員研修に関する研究	学校教育学	尾上 雅信 (岡山)
社会系教育	西村 公孝	社会形成力を育成する社会科・公民科カリキュラムの開発と実践 －政治領域における小中高一貫の視点から－	学校教育学	中村 哲 (兵庫)
生活・健康系教育	脇本 景子	小学校高学年の給食時の健康関連行動に関する評価尺度の開発 －行動変容段階と、自己効力感、意思決定バランス、及びライフスキルとの関連性－	学校教育学	西岡 伸紀 (兵庫)
生活・健康系教育	田中 譲	「方略ゲーム」を用いたサッカーの学習指導の展開 －体力向上も企図して－	学校教育学	後藤 幸弘 (兵庫)
生活・健康系教育	紅林 秀治	計測・制御学習を例とした技術教育のシステムの考察	学校教育学	菊地 章 (鳴門)

○平成24年度取得者

平成24年9月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	土屋 武志	解釈型歴史学習の歴史的研究 －学習方法をめぐる変遷・転換過程の批判的検討－	学校教育学	梅野 正信 (上越)
学校教育臨床	宮本 政子	周産期にある母親の精神的健康に関する研究 －妊娠期の抑うつスキーマの特徴と抑うつ気分に関連する要因－	学 術	葛西真記子 (鳴門)
社会系教育	齋藤 尚文	日本統治期台湾における小運送業の研究 －台湾丸マ・後藤組の事業活動を中心に－	学 術	松田 吉郎 (兵庫)
自然系教育	見市 淳子	理科教育における体験を通した生命理解と生命観育成のための実践的研究	学校教育学	小林 辰至 (上越)
自然系教育	古川 武憲	香川県まんのう地域に分布する上部白亜系和泉層群北縁相の地質学的研究とその教材化	学校教育学	村田 守 (鳴門)
自然系教育	平田 豊誠	理科における作問指導を通した思考力育成と評価に関する実践的研究	学校教育学	松本 伸示 (兵庫)

生活・健康系教育	逸見 正	高校工業科の授業における生徒のセンスに関する実践的研究	学校教育学	森山 潤 (兵庫)
生活・健康系教育	服部 伸一	児童生徒のQuality of Lifeの向上に関する学校保健学的考察－QOLに関連するライフスタイル要因の検討－	学校教育学	門田新一郎 (岡山)

平成25年3月26日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
先端課題実践開発	二見素雅子	明治後期の保育内容における「公正さ」に関する研究	学校教育学	名須川知子 (兵庫)
生活・健康系教育	潮田ひとみ	高等学校家庭科被服管理分野に関する教材開発のための基礎的研究	学校教育学	福田 光完 (兵庫)

○平成25年度取得者

平成25年9月20日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育臨床	大谷 博俊	知的障害教育における進路指導に関する実践的課題の論究－特別支援学校の教育課題・課題の関係者・課題の進展過程からの分析－	学校教育学	津田 芳見 (鳴門)
言語系教育	福島知津子	A Study on Interactive Writing Instruction for Japanese EFL Learners (日本人英語学習者を対象にしたInteractive Writing Instructionに関する研究)	学校教育学	伊東 治己 (鳴門)
言語系教育	長井 志保	Assimilation, Sexuality and Racism: Japanese American Nisei Writer Hisaye Yamamoto (同化, セクシュアリティ, 人種差別 ー日系アメリカ人二世作家ヒサエ・ヤマモトー)	学 術	前田 一平 (鳴門)
言語系教育	米崎 里	An Empirical Study on the Effectiveness of Output Activities Focused on Oral Reading for Improving EFL Learners' Speaking Skill (スピーキング力を高めるための音読を軸としたアウトプット活動の有効性に関する研究)	学校教育学	伊東 治己 (鳴門)
自然系教育	戸倉 則正	沖積平野における自然災害, 特に水害のメカニズムを学校教育で取り扱う意義とその課題	学校教育学	藤岡 達也 (上越)

平成26年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	前原 裕樹	バフチンの対話理論による教育実践解釈および教育実践開発に関する研究	学校教育学	佐藤 真 (兵庫)
学校教育臨床	柘植 欽也	「対話」に基づく道德教育のあり方に関する研究－マルティン・ブーバーの教育思想に依拠して－	学校教育学	渡邊 満 (岡山)
学校教育臨床	藤原 忠雄	教師ストレスへの支援の在り方に関する基礎的研究－性, 年代, 校種による差異, 及び包括的なストレス構造の検討－	学校教育学	富永 良喜 (兵庫)
学校教育臨床	村中 智彦	知的障害児の教育臨床における先行操作に基づく課題遂行の促進	学校教育学	大庭 重治 (上越)
言語系教育	佐藤臨太郎	Exploration Into the Effects of Recasts and Self-initiated Self-repair During the Output-based Interactive Activities on Japanese EFL Learners' English Learning (アウトプットを伴うインタラクティブな活動におけるリキャストや自己修正の, 外国語として英語を学ぶ日本人学習者の英語学習への効果についての検証)	学校教育学	高塚 成信 (岡山)
芸術系教育	金 奎道	音楽科教育において異文化芸術を経験することの意義と指導方法に関する実践的研究	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)

○平成26年度取得者

平成26年9月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	辰野 浩美	児童期における正負感情の経験と感情表出性が心身の健康に及ぼす影響	学校教育学	山崎 勝之 (鳴門)
自然系教育	田中 謙介	身近な物質の定量分析を可能にする教材の開発と教育実践に関する研究	学校教育学	喜多 雅一 (岡山)

平成27年3月27日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	熊谷慎之輔	教師の職能発達を支え促す「学校・家庭・地域の連携協力」のあり方に関する研究	学校教育学	尾上 雅信 (岡山)
学校教育方法	佐々 祐介	論証指導における操作的証明の機能に関する研究 ～中学校数学科における学習環境デザインを通して～	学校教育学	梅野 正信 (上越)
学校教育臨床	下司 実奈	聴覚障害児を持つ保護者の障害認識支援のための実践的研究	学校教育学	鳥越 隆士 (兵庫)
先端課題実践開発	富田 昌平	幼児期における空想世界に対する認識の発達	学校教育学	高橋 敏之 (岡山)
自然系教育	藤田 正紀	高校化学教材の再検討による新規化学教材の開発	学校教育学	喜多 雅一 (岡山)

○平成27年度取得者

平成27年9月24日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	新福 悦郎	いじめ問題関係判決書を活用した授業の構成要素に関する研究	学校教育学	越 良子 (上越)
先端課題実践開発	岡本 邦広	行動問題を示す発達障害児をもつ保護者と教師との効果的な連携方法の検討	学校教育学	井澤 信三 (兵庫)
社会系教育	石井 清文	鎌倉幕府における連署制の研究 ー北条時房・重時を中心としてー	学校教育学	小南 浩一 (兵庫)
芸術系教育	兼平 佳枝	音楽科授業における比喩的表現による意味共有に関する教育実践学的研究	学校教育学	西園 芳信 (鳴門)

平成28年3月26日授与

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	専攻分野の名称	主指導教員(大学)
学校教育方法	多田 孝志	グローバル時代の対話型授業の研究	学校教育学	梅野 正信 (上越)
学校教育臨床	伊藤 信寿	ペアレント・トレーニングにおける母親の養育行動と経験学習プロセス	学校教育学	宇野 宏幸 (兵庫)
先端課題実践開発	別惣 淳二	教育実習カリキュラムによる資質能力形成の評価に関する研究 ー兵庫教育大学の実地教育科目を事例にしてー	学校教育学	渡邊 満 (岡山)
社会系教育	二井 正浩	グローバルヒストリー教育論研究 ー世界史教育の再構築ー	学校教育学	原田 智仁 (兵庫)
自然系教育	SET SENG	Cambodian Students' Competency and Teaching Material Development on Chemistry at Secondary Level (カンボジアの生徒の学力と中等段階における化学教材の開発)	学校教育学	喜多 雅一 (岡山)
芸術系教育	佐藤 昌彦	次世代ものづくり教育研究 ー日本人は責任の問題をどう解決するのかー	学校教育学	松本 健義 (上越)
生活・健康系教育	田中 光	幼児期における体格・運動能力の発達・発達評価に関する研究	学校教育学	加賀 勝 (岡山)
生活・健康系教育	本村 猛能	我が国の情報教育の成立・展開期における学習者の意識から見たカリキュラム評価	学校教育学	森山 潤 (兵庫)

3 在学生の研究題目一覧

○平成20年度入学者（1人）

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	主指導教員(大学)
学校教育臨床	角田智恵美	児童生徒の心理的健康課題への有効な対応方法と教員研修 ー不登校・児童虐待を中心としてー	小倉 正義 (鳴門)

○平成21年度入学者（5人）

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	主指導教員(大学)
学校教育臨床	王 穎	聾学校幼稚部における語彙指導に関する研究	我妻 敏博 (上越)
学校教育臨床	佐野 和規	高校生の自己破壊行為に関する学校臨床心理学的アプローチ ー生物・心理・社会・スピリチュアルモデルに基づく介入方法の研究ー	加藤 哲文 (上越)
言語系教育	堀田 誠	A Study of Word Recognition in English Vocabulary Learning by Japanese Elementary School Students	大場 浩正 (上越)
社会系教育	小林 隆	子どもの社会認識過程の解明と社会科の授業改善	關 浩和 (兵庫)
生活・健康系教育	長瀬 大	オントロジー理論に基づく技術・家庭科における対象世界の体系的なモデ リングに関する研究	川崎 直哉 (上越)

○平成22年度入学者（2人）

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	主指導教員(大学)
先端課題実践開発	中橋 和昭	公立学校の道徳指導における「崇高なもの」の取り扱いに関する研究	林 泰成 (上越)
芸術系教育	西澤 久美	自己表現力の育成を目的としたミュージカル教材の開発 ーイメージに関わらせた指導内容に着目してー	長島 真人 (鳴門)

○平成23年度入学者（12人）

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	主指導教員(大学)
学校教育方法	楠木伊津美	専門職性をはぐくむ管理栄養士養成制度のあり方	尾上 雅信 (岡山)
学校教育方法	澤田 真弓	大正新教育期における遊戯論の特質に関する研究	木内 陽一 (鳴門)
学校教育臨床	伊藤瑠里子	セクシュアル・マイノリティのソーシャルサポートに関する研究	葛西真記子 (鳴門)
学校教育臨床	大塚美菜子	各発達段階におけるRDIの効果およびその持続性について ーランダム比較試験を用いた検証ー	市井 雅哉 (兵庫)
学校教育臨床	河合 篤史	夜間学校に通う生徒の語りとその解釈 ーナラティブ・アプローチを手がかりとしてー	辻河 昌登 (兵庫)
学校教育臨床	瀧井 美緒	トラウマ体験後の症状に対する認知と受診行動に関する研究	富永 良喜 (兵庫)
言語系教育	西脇 俊彦	アウトプットにつながる文型指導の理論的研究とその効果の検証	山森 直人 (鳴門)
社会系教育	菊地八穂子	市民的資質教育としての小学校社会科単元開発研究	桑原 敏典 (岡山)
自然系教育	井上 陽子	科学的リテラシー育成を目的とした理科の統合・再構築に関する研究 ー高等学校「生物」における生命科学に焦点をあててー	小林 辰至 (上越)
自然系教育	園山 博	植物ホルモンの働きを学ぶ教材開発と授業実践に関する研究	吉岡 秀文 (兵庫)
芸術系教育	神保 悠	造形表現行為を生成する活動のデザインと学習過程の評価に関する実践学 的研究	松本 健義 (上越)
芸術系教育	津田由加子	幼児の造形活動における「動機付け」の歴史的変遷に関する研究	初田 隆 (兵庫)

○平成24年度入学者（11人）

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	主指導教員(大学)
学校教育方法	荒金 誠	フランクルにおける「Geist」思想に関する研究 ー生きる意味充足への支援を射程にー	尾上 雅信 (岡山)

学校教育方法	須田 幸次	図書をテーマとするブログシステムを用いた学習における児童相互のコミュニケーション活動の効果	森廣浩一郎 (兵庫)
学校教育臨床	上田 純平	心の健康教育における認知的心理教育に関する研究	岩井 圭司 (兵庫)
学校教育臨床	大島 崇	高齢者虐待への臨床心理士の心理的支援の可能性 ー被虐待者・虐待者と虐待対応者の両者への支援を考えるー	有園 博子 (兵庫)
学校教育臨床	森下左知子	教師の精神的健康の維持・促進について	葛西真記子 (鳴門)
先端課題実践開発	長島 利行	高等学校におけるモラルスキルトレーニングプログラムの開発的研究	林 泰成 (上越)
先端課題実践開発	吉田 美奈	添い寝が子どもの心理的発達に与える影響 ー信頼感・自立心・依存心の発達を中心としてー	浜崎 隆司 (鳴門)
先端課題実践開発	吉津 晶子	世代間交流活動における指導力形成カリキュラムに関する実証的研究	溝邊 和成 (兵庫)
自然系教育	西村 徳寿	数学学習における視覚的表現と論理の関係に関する研究	岡崎 正和 (岡山)
芸術系教育	佐野真知子	美術鑑賞教育で育てる資質能力・目標・学習内容の構造化と義務教育9年間を見据えた美術鑑賞教育カリキュラムの構築	福本 謹一 (兵庫)
生活・健康系教育	工藤 雄司	中学校「技術・家庭科」におけるコンピュータを利用した制御を中核とした環境・エネルギー変換等に関する教材・教具の開発と授業実践	平田 晴路 (岡山)

○平成25年度入学者（13人）

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	主指導教員(大学)
学校教育方法	福谷 泰斗	背景知識と一枚ポートフォリオを活用した、教えて考えさせる授業の構築とその教育効果の検証	皆川 直凡 (鳴門)
学校教育臨床	今里有紀子	スクールカウンセラーのメンタライジング能力の査定と促進に関する研究	上地雄一郎 (岡山)
学校教育臨床	片桐 亮	セクシュアリティの「名付け」の意味に関する心理臨床学的考察	辻河 昌登 (兵庫)
学校教育臨床	吉川 修司	精神分析的生徒指導論	辻河 昌登 (兵庫)
先端課題実践開発	杉中 康平	「社会的リテラシー」育成に焦点をおく道徳教育プログラムの開発に関する実践的研究	谷田 増幸 (兵庫)
先端課題実践開発	馬場 訓子	幼稚園教育におけるティーム保育の実践と教師の専門職性	高橋 敏之 (岡山)
言語系教育	脇本 聡美	文学としての絵本を導入した初等教育における英語教育プログラムと教員養成プログラムの開発に関する研究	吉田 達弘 (兵庫)
社会系教育	品川 勝俊	高等学校公民科における水資源学習の授業開発と評価	西村 公孝 (鳴門)
芸術系教育	桐山 由香	声によるふしづくりと音高認知の関係	新山 真弓 (兵庫)
芸術系教育	本間 美里	対話による美術鑑賞授業における学習過程に対応した記述分析法の開発	松本 健義 (上越)
生活・健康系教育	羽田野修一	電動船外機の開発と小型漁船を使った環境性能の検証	伊藤 陽介 (鳴門)
生活・健康系教育	山内 愛	オーストラリア連邦におけるSchool Based Youth Health Nurseとわが国の養護教諭との比較研究	三村由香里 (岡山)
生活・健康系教育	四元 照道	高等学校工業科電気領域におけるエネルギー変換に関する教材開発	小山 英樹 (兵庫)

○平成26年度入学者（28人）

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	主指導教員(大学)
学校教育方法	植原 俊晴	対話に媒介された操作的思考が学習者の知識の構成に与える影響	川上 綾子 (鳴門)
学校教育方法	塩見 善則	民間校長の役割・意義と任用・研修	大野 裕己 (兵庫)

学校教育方法	富岡 直美	大学生の自己調整能力を高める授業モデルの開発とその教育効果の検証	皆川 直凡 (鳴門)
学校教育臨床	桑原 晴子	身体とイメージの関連性に関する心理臨床学的研究	上地雄一郎 (岡山)
学校教育臨床	戸口太功耶	セクシュアルマイノリティの説明モデルの体系化 ー教員とカウンセラーが現場で活かせる知識に向けてー	葛西真記子 (鳴門)
学校教育臨床	野寺 美那	発達障害のある子どもをもつ母親の育児感情に影響を及ぼす要因に関する検討	宇野 宏幸 (兵庫)
先端課題実践開発	浅野 光俊	社会科教育における知識とそのとらえ	米田 豊 (兵庫)
先端課題実践開発	上田 裕子	大学生のリフューザルスキルとライフスキルを育成する薬物乱用防止教育プログラムの開発	松本 剛 (兵庫)
先端課題実践開発	佐藤 克士	小学校社会科産業学習の実践学的研究	吉水 裕也 (兵庫)
先端課題実践開発	高畑 芳美	就学前教育施設における子育ての支援 ー自立的な子育て・親育ちを促すための支援の在り方についてー	名須川知子 (兵庫)
先端課題実践開発	山本 真也	自閉症スペクトラム児・者の移行支援におけるシミュレーション訓練による社会的行動の獲得と般化に関する研究 ー随伴性分析をもとにした指導を中心にー	井澤 信三 (兵庫)
先端課題実践開発	龍 祐吉	学業的延引行動に関する実証的研究	浜崎 隆司 (鳴門)
言語系教育	谷木 由利	小・中学校における発達過程をふまえた読書生活指導の構想	村井万里子 (鳴門)
言語系教育	森 慶子	音声言語刺激に対する脳反応の研究 ー機能的MR IおよびN I R Sによる解析ー	余郷 裕次 (鳴門)
言語系教育	米崎 啓和	リスニングの下位能力を伸ばす指導法開発に関する実証的研究	高塚 成信 (岡山)
社会系教育	太田 満	多民族・多文化学習としての小学校歴史カリキュラム研究	原田 智仁 (兵庫)
社会系教育	保立 雅紀	小中高一貫の経済教育カリキュラム研究 ー市場における企業の公正な競争に関する教材内容構成開発ー	西村 公孝 (鳴門)
自然系教育	栗原 淳一	中学校理科における空間認識能力を育成する指導と自己評価の効果に関する実証的研究	小林 辰至 (上越)
自然系教育	小山 和男	学校教育における諸現象の数理的分析のための理論形式の開発	庭瀬 敬右 (兵庫)
自然系教育	澤田 一彦	地域に根ざした科学と教育 ～郷土に分布する江若花崗岩の岩石鉱物学的な解明とその成果に基づいた教員研修による楽しく分かる授業づくりの研究～	村田 守 (鳴門)
芸術系教育	安藤 郁子	生きづらさを抱える人の芸術表現に関する実践的研究 ー支援者との相互行為に着目してー	高石 次郎 (上越)
芸術系教育	大西 洋史	図画工作科の授業における教師のパフォーマンスについて	初田 隆 (兵庫)
芸術系教育	小田原祐子	子供の想像力を豊かにする現代音楽の探究	齊藤 武 (岡山)
芸術系教育	小林 佳子	ピアノ演奏における視線移動とミスタッチとの関連性 ー学習モデル開発のための実験的研究ー	小川 容子 (岡山)
芸術系教育	山下世史佳	生涯学習の視点からみた高齢者への歌唱指導に関する研究	虫明眞砂子 (岡山)
生活・健康系教育	西岡美智子	音声言語と手話による言語指導時の先天性聴覚障害幼児の視線に関する研究	松村 京子 (兵庫)
生活・健康系教育	阪東 哲也	情報モラルの形成に対する学習者の個人内特性が与える影響 ～個に応じた情報モラル教育のあり方の検討～	森山 潤 (兵庫)
生活・健康系教育	馬 文鵬	仮想現実感技術を用いた教育環境の開発に関する研究	伊藤 陽介 (鳴門)

○平成27年度取得者(28人)

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	主指導教員(大学)
学校教育方法	永井 明子	児童期における関係性攻撃が健康・適応と仲間関係に及ぼす影響 ー関係性攻撃への教育的介入の可能性を考慮してー	山崎 勝之 (鳴門)
学校教育方法	原田 聡	学校事故に関する民事裁判例を用いた安全教育プログラムの開発	梅野 正信 (上越)
学校教育方法	古田 紫帆	教職経験の短い教員や学生の自律的な授業研究を促す教育方法の開発	川上 綾子 (鳴門)
学校教育方法	横嶋 敬行	児童期におけるエクスプリシットならびにインプリシット心的特性が健 康・適応に及ぼす影響	山崎 勝之 (鳴門)
学校教育臨床	石田 脩介	小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の学習支援プログ ラムの策定に関する研究	大庭 重治 (上越)
学校教育臨床	下中村 武	高校における聴覚障害のある生徒への支援に関する研究	鳥越 隆士 (兵庫)
学校教育臨床	大門 秀司	動的学校画のアセスメント法としての有効性に関する研究	宮下 敏恵 (上越)
学校教育臨床	高橋 彩	自閉症スペクトラム児の特別な興味を活用した教育的介入及びその効果に 影響を与える要因に関する研究 ービデオヒーローモデリングを中心としてー	大竹 喜久 (岡山)
学校教育臨床	二重佐知子	祖父母世代との日常的交流が発達障害児と祖父母自身に与える影響	田中 淳一 (鳴門)
学校教育臨床	安本 末味	DVや虐待による心理的影響の受けやすさ ーマインドコントロールのされやすさに関係する要因を探るー	岩井 圭司 (兵庫)
先端課題実践開発	小野間正巳	意志決定能力の育成を意図した社会科授業構成理論開発研究	米田 豊 (兵庫)
先端課題実践開発	佐々木 聡	中学校・高等学校における学校適応の支援に関する研究	松本 剛 (兵庫)
先端課題実践開発	林 牧子	造形的イメージワークによる保育者の専門性としての自他の発見と受容	高橋 敏之 (岡山)
先端課題実践開発	渡邊 祐三	独自性のある保育課程の編成と持続的学びを促す保育内容の実践	高橋 敏之 (岡山)
言語系教育	山本 淳子	An Inquiry into the Role of Motivation in Japanese University EFL Classrooms	大場 浩正 (上越)
言語系教育	渡邊 政寿	The Effects of Extensive Reading for Japanese Learners of English ーDevelopment of High School Students' Writing Ability through Extensive Readingー	大場 浩正 (上越)
社会系教育	井上 昌善	民主的な議論の指導に基づく社会科授業のあり方に関する研究	桑原 敏典 (岡山)
社会系教育	山西 康之	近世期但馬国の被差別部落	浅倉 有子 (上越)
自然系教育	大林 正法	小学校段階における図形の論理的説明の水準に関する研究	岡崎 正和 (岡山)
自然系教育	川真田早苗	学校防災教育プログラム開発に関する実践的研究 小学校の総合的な学習の時間を対象として	村田 守 (鳴門)
自然系教育	高橋 信幸	理科探究学習における概念化応用指導モデルの実践的研究	松本 伸示 (兵庫)
芸術系教育	小林久美子	美術教育における平和学習の研究 ー「戦争画」と「反戦画」の比較鑑賞授業を通してー	初田 隆 (兵庫)
芸術系教育	高橋 潤子	映像と音楽の相互作用がもたらす学生への影響 ーテレビCMの変遷に着目してー	齊藤 武 (岡山)
芸術系教育	寺元 幸仁	教師の「遊びなおし」と子どもが主体的に活動する造形遊びに関する研究	高木 厚子 (兵庫)
芸術系教育	星野 ゆみ	就学前児童及び小学校低学年児童を対象とした音の記憶・共有・伝播	小川 容子 (岡山)
生活・健康系教育	勝本 敦洋	児童・生徒の発達段階における学習適時性に即したもののづくり学習の実践 開発	森山 潤 (兵庫)
生活・健康系教育	中山いづみ	小地域分析による児童生徒の健康課題の分布とその背景に関する研究	伊藤 武彦 (岡山)

生活・健康系教育	山崎 恭平	デジタルものづくり教育による技術科教員の教科専門力の向上に関する研究	黎 子椰 (上越)
----------	-------	------------------------------------	--------------

○平成28年度取得者(32人)

連合講座名	氏 名	論 文 題 目	主指導教員(大学)
学校教育方法	池田 明子	介護福祉教育における「介護過程」の展開能力形成に関する質的研究	住野 好久 (岡山)
学校教育方法	梶原 正史	学校の機能を強化し、教育課題の克服をめざす学校経営に関する研究 -家庭や地域社会の教育力を協働的な視点で活用する方策について-	大野 裕己 (兵庫)
学校教育方法	白川 正樹	現代アメリカの学校認証評価と学校改善支援についての研究 -認証評価協会の現代的変容に着目して-	大野 裕己 (兵庫)
学校教育方法	戸田登美子	看護学生の看護行為者としての自己認識に影響を及ぼす要因とその変容過程について	川上 綾子 (鳴門)
学校教育方法	新元 朗彦	学級内ネットワークの構築が、創発コミュニケーションに及ぼす影響	越 良子 (上越)
学校教育臨床	石原みちる	スクールカウンセリングにおける教師に対するコンサルテーションの有効性	安藤美華代 (岡山)
学校教育臨床	印銀 清佳	発達障害のある児童生徒の行動問題に対する教師研修プログラムの開発	加藤 哲文 (上越)
学校教育臨床	隅田 伸子	聴覚障害幼児の手話ナラティブ発達と効果的な読み聞かせについての実践的研究	鳥越 隆士 (兵庫)
学校教育臨床	立本千寿子	音・リズムが乳幼児の安心感に与える影響に関する研究 -育ちの場における心音・鼓動の感受を通して-	小倉 正義 (鳴門)
学校教育臨床	中根 征也	発達障害児の発達性協調運動障害に対する運動指導の有効性の検討	石倉 健二 (兵庫)
先端課題実践開発	王子 明紀	社会認識形成と市民的資質育成との接続をめざした授業開発研究 -中学校地誌学習における価値判断・意志決定学習に着目して-	米田 豊 (兵庫)
先端課題実践開発	大島 崇行	ICTに支援された授業観察の可視化による授業研究に関する臨床的研究	水落 芳明 (上越)
先端課題実践開発	大森 弘子	子育て支援を促進する保育者の専門性と力量形成	西山 修 (岡山)
先端課題実践開発	永井 知子	子育て支援における養育者の援助要請に関する実証的研究	浜崎 隆司 (鳴門)
先端課題実践開発	西田 寛子	自校の教育課題解決に向けた組織的な取組を生み出す教育改善プログラムの開発的研究 -学校組織マネジメントとカリキュラム・マネジメントの融合理論の開発と-	久我 直人 (鳴門)
言語系教育	青山 聡	日本人英語学習者の言語習得を促す効果的な訂正的フィードバックに関する研究	高塚 成信 (岡山)
言語系教育	岩坂 泰子	小学校の外国語教育実践における児童の相互行為能力発達の研究	吉田 達弘 (兵庫)
言語系教育	千種 彰典	国語科授業における読む力を高める実践的研究	村井万里子 (鳴門)
言語系教育	福田 衣里	ブレイジャリズム(盗用・剽窃)防止のための英語文献引用能力訓練システムの構築	高塚 成信 (岡山)
社会系教育	渡邊 幸太	ESDの視点を取り入れた溜池学習の授業開発と実践	南埜 猛 (兵庫)
自然系教育	有元 康一	局所体における格子基底縮小とその応用	平野 康之 (鳴門)
自然系教育	井上 典明	算数・数学における創造性を育成する学習指導法の開発	秋田 美代 (鳴門)
自然系教育	林田 亜紀	身体性認知の視点からの図形の証明活動における理解の促進に関する研究	岡崎 正和 (岡山)
自然系教育	宮崎 唯	小学校におけるIndigenous Knowledge (IK) に関する研究とその活用	喜多 雅一 (岡山)
芸術系教育	飯村 論吉	戦後日本の小学校音楽科教科書における打楽器の扱いに関する史的発展 -各打楽器の演奏技法を視点として-	時得 紀子 (上越)

芸術系教育	島田 郁子	音楽科における単元学習の特性と指導方法に関する研究	長島 真人 (鳴門)
芸術系教育	仙田 真帆	スポーツ従事者のパフォーマンス向上における音楽の意味と意義	小川 容子 (岡山)
生活・健康系教育	石井有美子	小学校高学年の身体に関するセルフエスティームの育成 -二次性徴を肯定的に受け止めるための指導方法の開発と評価-	西岡 伸紀 (兵庫)
生活・健康系教育	小野麻美子	思春期・青年期を対象とした被援助志向性を高めるための健康教育プログラムの開発及び評価	西岡 伸紀 (兵庫)
生活・健康系教育	世良 啓太	技術科教育における技術ガバナンス能力の育成を図る学習指導方法の検討	森山 潤 (兵庫)
生活・健康系教育	長井 映雄	生涯学習の視点からの高等学校総合学科情報系列の授業開発	菊地 章 (鳴門)
生活・健康系教育	山下 泰史	イオン液体を用いた生物試料形態のSEM観察	宮本 賢治 (鳴門)

4 連合学校教育学研究科 歴代役職者一覧

役 職 等		平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
研 究 科 長		佐藤修策 (事務取扱～ 5.10) 濱名外喜男 (5.11～)	濱名外喜男	濱名外喜男	濱名外喜男	中洲 正典 (～11.30) 山下 伸典 (12.1～)	山下 伸典	山下 伸典	山下 伸典	岩田 一彦	岩田 一彦
	研 究 主 幹 (～16.3 専任教官)	佐藤 光 (5.11～)	佐藤 光	佐藤 光	山崎 弘行	塩見 邦雄	塩見 邦雄	塩見 邦雄	塩見 邦雄	勝野 真吾(～ 11.30) 渡邊 満 (12.1～1.31) 西園 芳信 (2.1～)	福本 謹一
副研究科長 (～16.3 連合研究 科幹事)	兵庫	中洲 正典	中洲 正典	中洲 正典	中洲 正典	辻田 嘉邦	辻田 嘉邦	成瀬 敏郎	成瀬 敏郎	渡邊 満	渡邊 満
	上越	林 康久	林 康久	林 康久	小宮 三彌	小宮 三彌	二谷 貞夫	二谷 貞夫	有澤俊太郎	有澤俊太郎	有澤俊太郎
	岡山	田中 宏二	田中 宏二	三好 恒明	三好 恒明	藤井 聰尚	藤井 聰尚	松畑 照一	近藤 勲	草地 功	草地 功
	鳴門	佐々木保行	佐々木保行	田村 一郎	田村 一郎	小野 米一	小野 米一	田中 雄三	田中 雄三	西園 芳信	西園 芳信
学校教育方法	兵庫	講座代表者 塩見 邦雄◎	講座代表者 塩見 邦雄◎	講座代表者 塩見 邦雄◎	講座代表者 塩見 邦雄◎	荒木 紀幸	荒木 紀幸○	荒木 紀幸◎	荒木 紀幸◎	安部 崇慶○	安部 崇慶○
		講座副代表者 荒木 紀幸	講座副代表者 荒木 紀幸	講座副代表者 荒木 紀幸	講座副代表者 荒木 紀幸	安部 崇慶	安部 崇慶	安部 崇慶	安部 崇慶	加治佐哲也	加治佐哲也
	上越	講座代表者 新井 郁男	講座代表者 新井 郁男	講座代表者 若井 彌一	講座代表者 若井 彌一	高田喜久司	高田喜久司	中野 靖夫	中野 靖夫○	西 穰司	西 穰司
		講座副代表者 若井 彌一	講座副代表者 若井 彌一	講座副代表者 高田喜久司	講座副代表者 高田喜久司	中野 靖夫	中野 靖夫	西 穰司	西 穰司	中野 靖夫◎	中野 靖夫◎
学校 教育 臨床	岡山	講座代表者 近藤 勲	講座代表者 近藤 勲	講座代表者 森川 直	講座代表者 森川 直	近藤 勲○	近藤 勲◎	近藤 勲	森川 直	近藤 勲	近藤 勲
		講座副代表者 森川 直	講座副代表者 森川 直	講座副代表者 近藤 勲	講座副代表者 近藤 勲	森川 直	森川 直	森川 直	北神 正行	北神 正行	北神 正行
	岡山	講座代表者 松田 伯彦○	講座代表者 木村 捨雄○	講座代表者 木村 捨雄○	講座代表者 木村 捨雄○	木村 捨雄◎	木村 捨雄◎	山崎 勝之○	山崎 勝之○	木内 陽一	木内 陽一
	鳴門	講座副代表者 木村 捨雄	講座副代表者 田中 祐次	講座副代表者 田中 祐次	講座副代表者 佐竹 勝利	佐竹 勝利	佐竹 勝利	佐竹 勝利	佐竹 勝利	佐竹 勝利	佐竹 勝利
先導課題実践開発	兵庫	講座代表者 上地 安昭◎	講座代表者 上地 安昭◎	講座代表者 田中 亨胤○	講座代表者 田中 亨胤○	田中 亨胤	田中 亨胤	藤田 継道○	藤田 継道○	藤田 継道○	藤田 継道○
		講座副代表者 田中 亨胤	講座副代表者 田中 亨胤	講座副代表者 藤田 継道	講座副代表者 藤田 継道	藤田 継道	藤田 継道	渡邊 満	渡邊 満	田中 亨胤	田中 亨胤
	上越	講座代表者 小宮 三彌○	講座代表者 小宮 三彌○	講座代表者 細井 房明	講座代表者 細井 房明	細井 房明◎	細井 房明◎	星名 信昭	星名 信昭	星名 信昭○	星名 信昭○
		講座副代表者 細井 房明	講座副代表者 細井 房明	講座代表者 小宮 三彌	講座代表者 大塚 文雄	星名 信昭	星名 信昭	鈴木 慎一	鈴木 慎一	松岡 洋一	松岡 洋一
言語系教育	岡山	講座代表者 藤井 聰尚	講座代表者 藤井 聰尚	講座代表者 藤井 聰尚◎	講座代表者 藤井 聰尚◎	山口 茂嘉	山口 茂嘉	眞田 敏	眞田 敏	松岡 洋一	松岡 洋一
		講座副代表者 山口 茂嘉	講座副代表者 山口 茂嘉	講座代表者 山口 茂嘉	講座代表者 山口 茂嘉	眞田 敏	眞田 敏	松岡 洋一	松岡 洋一	山口 茂嘉	(～4.10)山口 茂嘉 (4.11～6.12) 田中 宏二 (6.13～) 柳原 正文
	岡山	講座代表者 田中 雄三	講座代表者 田中 雄三	講座代表者 福井 康之	講座代表者 福井 康之	田中 雄三○	田中 雄三○	浅野 弘嗣◎	浅野 弘嗣◎	橋本 俊顕	橋本 俊顕
	鳴門	講座副代表者 浅野 弘嗣	講座副代表者 浅野 弘嗣	講座副代表者 位頭 義仁	講座副代表者 位頭 義仁	橋本 俊顕	橋本 俊顕	橋本 俊顕	橋本 俊顕	山下 一夫	山下 一夫
社会系教育	兵庫	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	—	—	—	—	—	—
		講座副代表者 —	講座副代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	—	—	—	—	—	—
	上越	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	—	—	—	—	—	—
		講座副代表者 —	講座副代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	—	—	—	—	—	—
自然系教育	岡山	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	—	—	—	—	—	—
		講座副代表者 —	講座副代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	—	—	—	—	—	—
	岡山	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	—	—	—	—	—	—
	鳴門	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	講座代表者 —	—	—	—	—	—	—
芸術系教育	兵庫	講座代表者 次重 寛福◎	講座代表者 次重 寛福◎	講座代表者 向川 幹雄	講座代表者 向川 幹雄	山岡俊比古	山岡俊比古	菅原 稔	菅原 稔	菅原 稔	堀江 祐雨
		講座副代表者 向川 幹雄	講座副代表者 向川 幹雄	講座代表者 山崎 弘行○	講座代表者 山岡俊比古○	菅原 稔	菅原 稔	山岡俊比古	山岡俊比古	山岡俊比古○	山岡俊比古○
	上越	講座代表者 有澤俊太郎○	講座代表者 有澤俊太郎○	講座代表者 池内 正幸	講座代表者 有澤俊太郎	有澤俊太郎	有澤俊太郎	平野 綱枝	平野 綱枝	下西善三郎	下西善三郎
		講座副代表者 池内 正幸	講座副代表者 池内 正幸	講座代表者 有澤俊太郎	講座代表者 〔欠員〕	〔欠員〕	〔欠員〕	平野 綱枝	有澤俊太郎◎	加藤 雅啓	加藤 雅啓
生活・健康系教育	岡山	講座代表者 南本 義一	講座代表者 南本 義一	講座代表者 松畑 照一	講座代表者 松畑 照一	松畑 照一◎	松畑 照一◎	吉田 則夫	吉田 則夫	高塚 成信	高塚 成信
		講座副代表者 福田 利徳	講座副代表者 福田 利徳	講座代表者 福田 利徳	講座代表者 福田 利徳	吉田 則夫	吉田 則夫	高塚 成信○	高塚 成信○	福田 利徳	福田 利徳
	岡山	講座代表者 太田垣正義	講座代表者 太田垣正義	講座代表者 小野 米一◎	講座代表者 小野 米一◎	太田垣正義	太田垣正義	世羅 博昭	小野 米一◎	太田垣正義	太田垣正義
	鳴門	講座代表者 世羅 博昭	講座代表者 世羅 博昭	講座代表者 太田垣正義	講座代表者 太田垣正義	世羅 博昭○	世羅 博昭○	伊東 治己	伊東 治己	松原 一義○	松原 一義○
生活・健康系教育	兵庫	講座代表者 岩田 一彦◎	講座代表者 岩田 一彦◎	講座代表者 成瀬 敏郎○	講座代表者 成瀬 敏郎○	藤井 徳行	藤井 徳行	佐々木正道	佐々木正道	中村 哲◎	中村 哲◎
		講座副代表者 成瀬 敏郎	講座副代表者 成瀬 敏郎	講座代表者 藤井 徳行	講座代表者 藤井 徳行	佐々木正道	佐々木正道	中村 哲	中村 哲	松田 吉郎	松田 吉郎
	上越	講座代表者 二谷 貞夫	講座代表者 二谷 貞夫	講座代表者 二谷 貞夫◎	講座代表者 二谷 貞夫◎	大嶽 幸彦	大嶽 幸彦	大嶽 幸彦○	大嶽 幸彦○	赤羽 孝之○	赤羽 孝之○
		講座副代表者 大嶽 幸彦	講座副代表者 大嶽 幸彦	講座代表者 大嶽 幸彦	講座代表者 大嶽 幸彦	二谷 貞夫	赤羽 孝之	赤羽 孝之	赤羽 孝之	佐藤 芳徳	佐藤 芳徳
生活・健康系教育	岡山	講座代表者 田中 史郎	講座代表者 田中 史郎	講座代表者 田中 史郎	講座代表者 上原 兼善	上原 兼善○	上原 兼善○	上原 兼善○	上原 兼善○	高山 芳治	高山 芳治
		講座副代表者 〔欠員〕	講座副代表者 〔欠員〕	講座代表者 〔欠員〕	講座代表者 〔欠員〕	〔欠員〕	〔欠員〕	(15.1.21～)	野邊 政雄	野邊 政雄	野邊 政雄
	岡山	講座代表者 田村 一郎○	講座代表者 田村 一郎○	講座代表者 岡 義記	講座代表者 岡 義記	後藤 修三◎	後藤 修三◎	高橋 啓	高橋 啓	(～9.2代行) 9.3 西村 公孝 (～9.2欠員) 9.3 齋木 哲郎	西村 公孝
	鳴門	講座副代表者 岡 義記	講座副代表者 岡 義記	講座代表者 後藤 修三	講座代表者 後藤 修三	高橋 啓	高橋 啓	〔欠員〕	〔欠員〕	齋木 哲郎	齋木 哲郎
生活・健康系教育	兵庫	講座代表者 柳原 弘志	講座代表者 柳原 弘志	講座代表者 矢吹 治一	講座代表者 矢吹 治一	澁江 靖弘	澁江 靖弘	本間 均	本間 均	渡辺 金治	渡辺 金治
		講座副代表者 矢吹 治一	講座副代表者 矢吹 治一	講座代表者 渡辺 金治○	講座代表者 渡辺 金治○	本間 均	本間 均	澁江 靖弘	澁江 靖弘	松本 伸示◎	松本 伸示◎
	上越	講座代表者 渡邊 隆○	講座代表者 中川 清隆○	講座代表者 中川 清隆○	講座代表者 中川 清隆○	黒木 伸明○	黒木 伸明○	高津戸 秀	高津戸 秀	森 博	森 博
		講座副代表者 清上 武實	講座副代表者 清上 武實	講座代表者 田中 博	講座代表者 田中 博	高津戸 秀	高津戸 秀	清上 武實◎	清上 武實◎	室谷 利夫	室谷 利夫
生活・健康系教育	岡山	講座代表者 田羅 征伸	講座代表者 田羅 征伸	講座代表者 田羅 征伸	講座代表者 田羅 征伸	中尾 安男	中尾 安男	草地 功○	草地 功○	山下 信彦	山下 信彦
		講座副代表者 中尾 安男	講座副代表者 中尾 安男	講座代表者 中尾 安男	講座代表者 中尾 安男	山下 信彦	山下 信彦	山下 信彦	山下 信彦	土井 幸雄	土井 幸雄
	岡山	講座代表者 丸林 英俊◎	講座代表者 丸林 英俊◎	講座代表者 清水 宏次	講座代表者 清水 宏次	清水 宏次◎	清水 宏次◎	跡部 紘三	跡部 紘三	松岡 隆○	松岡 隆○
	鳴門	講座代表者 福岡 登	講座代表者 福岡 登	講座代表者 丸林 英俊	講座代表者 丸林 英俊	成川 公昭	成川 公昭	成川 公昭	成川 公昭	杉山 徳雄	杉山 徳雄
生活・健康系教育	兵庫	講座代表者 辻田 嘉邦○	講座代表者 辻田 嘉邦○	講座代表者 辻田 嘉邦◎	講座代表者 辻田 嘉邦◎	水野 信男	水野 信男	水野 信男	水野 信男	杉山 直樹	杉山 直樹
		講座副代表者 水野 信男	講座副代表者 水野 信男	講座代表者 水野 信男	講座代表者 水野 信男	森岡 茂勝	森岡 茂勝	杉山 直樹	森川 京子	森川 京子	竹内 俊一 (代行)
	上越	講座代表者 太田 將勝	講座代表者 太田 將勝	講座代表者 西野 範夫	講座代表者 西野 範夫	西野 範夫◎	西野 範夫◎	西村 俊夫○	西村 俊夫○	西村 俊夫○	西村 俊夫○
		講座副代表者 山形 忠順	講座副代表者 山形 忠順	講座代表者 山形 忠順	講座代表者 山形 忠順	山形 忠順	山形 忠順	茂手木潔子	茂手木潔子	茂手木潔子	茂手木潔子
生活・健康系教育	岡山	講座代表者 三好 恒明◎	講座代表者 三好 恒明◎	講座代表者 三好 恒明	講座代表者 三好 恒明	有道 惇	有道 惇	有道 惇	有道 惇	小川 尊一	小川 尊一
		講座副代表者 小川 尊一	講座副代表者 小川 尊一	講座代表者 小川 尊一	講座代表者 小川 尊一	小川 尊一	小川 尊一	小川 尊一	小川 尊一	奥 忍	奥 忍
	岡山	講座代表者 中川 存	講座代表者 中川 存	講座代表者 西園 芳信○	講座代表者 西園 芳信○	西園 芳信○	西園 芳信○	西園 芳信○	西園 芳信○	橋本 泰幸	橋本 泰幸
	鳴門	講座副代表者 西園 芳信	講座副代表者 西園 芳信	講座代表者 西田 威汎	講座代表者 西田 威汎	橋本 泰幸	橋本 泰幸	橋本 泰幸	橋本 泰幸	小林 孝子○	小林 孝子○
生活・健康系教育	兵庫	講座代表者 小川 武範◎	講座代表者 小林 篤	講座代表者 増澤 康男	講座代表者 増澤 康男	増澤 康男	増澤 康男	勝野 眞吾◎	勝野 眞吾◎	福田 光光○	福田 光光○
		講座副代表者 小林 篤	講座副代表者 玉井 輝雄	講座代表者 玉井 輝雄	講座代表者 玉井 輝雄	勝野 眞吾	勝野 眞吾	西村 治彦	西村 治彦	後藤 幸弘	後藤 幸弘
	上越	講座代表者 三浦 望慶○	講座代表者 三浦 望慶◎	講座代表者 川崎 直哉	講座代表者 川崎 直哉	大瀧ミドリ	大瀧ミドリ	三浦 望慶	三浦 望慶	伊藤 政展	伊藤 政展
		講座副代表者 大山 秀夫	講座副代表者 大山 秀夫	講座代表者 三浦 望慶◎	講座代表者 三浦 望慶◎	川崎 直哉	川崎 直哉	大瀧ミドリ	大瀧ミドリ	川崎 直哉	川崎 直哉
生活・健康系教育	岡山	講座代表者 山本 秀樹	講座代表者 山本 秀樹	講座代表者 杉原 繁子	講座代表者 杉原 繁子	可児 弘毅◎	可児 弘毅◎	高橋 香代	高橋 香代	山本 秀樹	山本 秀樹
		講座副代表者 杉原 繁子	講座副代表者 杉原 繁子	講座代表者 可児 弘毅	講座代表者 可児 弘毅	高橋 香代	高橋 香代	山本 秀樹	山本 秀樹	門田新一郎	門田新一郎
	岡山	講座代表者 岡田美津子	講座代表者 岡田美津子○	講座代表者 藤原 康晴	講座代表者 藤原 康晴	藤原 康晴◎	菊地 章	菊地 章○	菊地 章○	前田 英雄◎	前田 英雄◎
	鳴門	講座副代表者 吉田 肇	講座副代表者 吉田 肇	講座代表者 河野 和豊	講座代表者 河野 和豊	菊地 章	菊地 章	前田 英雄	前田 英雄	梅野 圭史	梅野 圭史

◎：講座代表者等会議員議長 ○：同副議長

平成28年4月1日現在															
役 職 等			平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度		
研 究 科 長			岩田 一彦	岩田 一彦	安部 崇慶	安部 崇慶	原田 智仁	原田 智仁	原田 智仁	原田 智仁	松村 京子	松村 京子	松村 京子		
研 究 主 幹 (～16.3 専任教員)			福本 謹一	福本 謹一	福本 謹一	松村 京子	松村 京子	松村 京子	松村 京子	松村 京子	西岡 伸紀	西岡 伸紀	西岡 伸紀		
副研究科長 (～16.3 連合研究 科幹事)	兵庫	渡邊 満	渡邊 満	岩井 圭司	岩井 圭司	岩井 圭司	岩井 圭司	松本 伸示	松本 伸示	松本 伸示	松本 伸示	松本 伸示	遊間 義一		
	上越	溝上 武實	溝上 武實	溝上 武實	溝上 武實	小林 辰至	小林 辰至	西村 俊夫	梅野 正信	梅野 正信	梅野 正信	川崎 直哉	川崎 直哉		
	岡山	上原 兼善	上原 兼善	土井 幸雄	土井 幸雄	柳原 正文	柳原 正文	渡邊 満	渡邊 満	渡邊 満	尾上 雅信	尾上 雅信	寺澤 孝文		
	鳴門	橋本 俊顕	橋本 俊顕	松岡 隆	松岡 隆	井上 和臣	井上 和臣	菊地 章	菊地 章	葛西真記子	葛西真記子	村田 守	村田 守		
学校教育方法	兵庫	講座代表者	安部 崇慶◎	安部 崇慶◎	加治佐哲也	加治佐哲也	佐藤 真	佐藤 真◎	佐藤 真◎	佐藤 真◎	(代行)森廣浩一郎	森廣浩一郎	大野 裕己		
		講座副代表者	加治佐哲也	加治佐哲也	佐藤 真	佐藤 真	安部 崇慶	渡邊 隆信	渡邊 隆信	渡邊 隆信	(代行)大野 裕己	(代行)大野 裕己	中間 玲子		
		上越	講座代表者	増井 三夫	増井 三夫	若井 彌一	増井 三夫◎	増井 三夫◎	梅野 正信	梅野 正信	越 良子	越 良子◎	越 良子◎	越 良子	
		講座副代表者	若井 彌一	若井 彌一	増井 三夫◎	(代行) 南部昌敏	梅野 正信	越 良子	越 良子	(代行) 中山勲次郎	(代行) 中山勲次郎	梅野 正信	梅野 正信◎		
	岡山	講座代表者	北神 正行	北神 正行	森川 直	森川 直	尾上 雅信◎	尾上 雅信◎	寺澤 孝文	寺澤 孝文	住野 好久	住野 好久	住野 好久	青木多寿子	
		講座副代表者	山口 晴久	山口 晴久	山口 晴久	山口 晴久	寺澤 孝文	寺澤 孝文	寺澤 孝文	寺澤 孝文	住野 好久	住野 好久	寺澤 孝文◎	寺澤 孝文◎	高瀬 淳
		講座代表者	山内 陽一	山内 陽一	山崎 勝之◎	山崎 勝之◎	小野瀬雅人	小野瀬雅人	佐古 秀一◎	佐古 秀一◎	皆川 直凡	皆川 直凡	皆川 直凡	皆川 直凡◎	
		講座副代表者	山崎 勝之◎	山崎 勝之◎	木内 陽一	木内 陽一	木内 陽一	木内 陽一	山崎 勝之	山崎 勝之	佐古 秀一	佐古 秀一	佐古 秀一	川上 綾子	
	鳴門	講座代表者	田中 享胤	田中 享胤	富永 良喜	富永 良喜	鳥越 隆士◎	鳥越 隆士◎	市井 雅哉	市井 雅哉	宇野 宏幸◎	宇野 宏幸◎	宇野 宏幸◎	有園 博子◎	
		講座副代表者	富永 良喜	富永 良喜	富永 良喜	富永 良喜	鳥越 隆士	鳥越 隆士	市井 雅哉	市井 雅哉	宇野 宏幸	宇野 宏幸	有園 博子	有園 博子	石倉 健二
		上越	講座代表者	鈴木 情一◎	鈴木 情一◎	我妻 敏博	我妻 敏博	我妻 敏博◎	我妻 敏博◎	内田 一成◎	大庭 重治◎	大庭 重治◎	加藤 哲文	加藤 哲文	大庭 重治◎
		講座副代表者	我妻 敏博	我妻 敏博	我妻 敏博	我妻 敏博	内田 一成	内田 一成	内田 一成	内田 一成	大庭 重治	大庭 重治	加藤 哲文	加藤 哲文	大庭 重治◎
岡山	講座代表者	柳原 正文◎	柳原 正文◎	柳原 正文◎	柳原 正文◎	測上 克義	測上 克義	測上 克義	測上 克義	上地雄一郎◎	上地雄一郎◎	大竹 喜久	大竹 喜久	安藤美華代	
	講座副代表者	測上 克義	測上 克義	測上 克義	測上 克義	測上 克義	測上 克義	上地雄一郎	上地雄一郎	上地雄一郎	上地雄一郎	大竹 喜久	大竹 喜久	安藤美華代	
	講座代表者	井上 和臣	井上 和臣	井上 和臣	井上 和臣	八幡ゆかり	八幡ゆかり	八幡ゆかり	八幡ゆかり	田中 淳一	田中 淳一	田中 淳一	田中 淳一	葛西真記子	
	講座副代表者	山下 一夫	山下 一夫	山下 一夫	山下 一夫	八幡ゆかり	八幡ゆかり	八幡ゆかり	八幡ゆかり	田中 淳一	田中 淳一	田中 淳一	田中 淳一	葛西真記子	
先端課題実践開発	兵庫	講座代表者	—	—	—	—	渡邊 満◎	名須川知子	名須川知子◎	米田 豊	米田 豊◎	鬼頭 英明	鬼頭 英明	清邊 和成◎	
		講座副代表者	—	—	—	—	名須川知子	米田 豊	米田 豊	鬼頭 英明	鬼頭 英明	新井 肇	清邊 和成	松本 剛	
		上越	講座代表者	—	—	—	鈴木 情一◎	松本 修	松本 修	林 泰成◎	木村 吉彦	水落 芳明	水落 芳明	水落 芳明◎	
		講座副代表者	—	—	—	—	西川 純	林 泰成	林 泰成	久保田善彦	水落 芳明	木村 吉彦	木村 吉彦	木村 吉彦	
	岡山	講座代表者	—	—	—	—	高橋 敏之	高橋 敏之◎	高橋 敏之◎	高橋 敏之	高橋 敏之	黒崎東洋郎◎	黒崎東洋郎◎	高橋 敏之	
		講座副代表者	—	—	—	—	高橋 敏之	高橋 敏之	高橋 敏之	高橋 敏之	高橋 敏之	黒崎東洋郎	黒崎東洋郎	高橋 敏之	
		講座代表者	—	—	—	—	黒崎東洋郎(10.1～)	黒崎東洋郎	黒崎東洋郎	黒崎東洋郎	黒崎東洋郎	高橋 敏之	高橋 敏之	西山 修	
		講座副代表者	—	—	—	—	黒崎東洋郎	黒崎東洋郎	黒崎東洋郎	黒崎東洋郎	黒崎東洋郎	高橋 敏之	高橋 敏之	西山 修	
	鳴門	講座代表者	—	—	—	—	兼松 徹郎	橋川喜美代◎	浜崎 隆司	浜崎 隆司◎	浜崎 隆司◎	飯根 健二	飯根 健二	久我 直人	
		講座副代表者	—	—	—	—	浜崎 隆司	橋川喜美代	浜崎 隆司	浜崎 隆司	浜崎 隆司	飯根 健二	飯根 健二	久我 直人	
		講座代表者	—	—	—	—	浜崎 隆司	橋川喜美代	浜崎 隆司	浜崎 隆司	浜崎 隆司	飯根 健二	飯根 健二	久我 直人	
		講座副代表者	—	—	—	—	浜崎 隆司	橋川喜美代	浜崎 隆司	浜崎 隆司	浜崎 隆司	飯根 健二	飯根 健二	久我 直人	
言語系教育	兵庫	講座代表者	山岡俊比古	山岡俊比古	前田 貞昭	前田 貞昭	大嶋 浩	大嶋 浩	山口 眞琴	山口 眞琴	谷 明信	谷 明信	吉川 芳則		
		講座副代表者	堀江 祐爾◎	堀江 祐爾◎	山岡俊比古	山岡俊比古	前田 貞昭	前田 貞昭	大嶋 浩◎	大嶋 浩◎	山口 眞琴◎	山口 眞琴◎	谷 明信		
		上越	講座代表者	平野 絹枝	平野 絹枝	下西善三郎	野村眞木夫	加藤 雅啓	加藤 雅啓	平野 絹枝	加藤 雅啓	下西善三郎	下西善三郎	押木 秀樹	
		講座副代表者	下西善三郎	下西善三郎	平野 絹枝◎	平野 絹枝◎	野村眞木夫◎	野村眞木夫◎	下西善三郎◎	下西善三郎	大場 浩正	大場 浩正	大場 浩正◎		
	岡山	講座代表者	菅原 稔	菅原 稔	高塚 成信	高塚 成信	菅原 稔	菅原 稔	高塚 成信	高塚 成信	木村 功	木村 功	高塚 成信		
		講座副代表者	高塚 成信	高塚 成信	吉田 則夫◎	吉田 則夫◎	高塚 成信	高塚 成信	木村 巧	木村 巧	高塚 成信	高塚 成信	木村 功◎		
		講座代表者	松原 一義	松原 一義	伊東 治己	伊東 治己	村井万里子	村井万里子	伊東 治己	伊東 治己	前田 一平	前田 一平	余郷 裕次		
		講座副代表者	伊東 治己◎	伊東 治己◎	伊東 治己◎	伊東 治己◎	村井万里子	村井万里子	前田 一平	前田 一平	村井万里子◎	村井万里子◎	村井万里子◎	石濱 博之	
	鳴門	講座代表者	松田 吉郎◎	松田 吉郎◎	原田 智仁	原田 智仁	難波 安彦	難波 安彦	關 浩和◎	關 浩和◎	關 浩和◎	關 浩和◎	南笙 猛◎	南笙 猛	
		講座副代表者	原田 智仁	原田 智仁	難波 安彦	難波 安彦	中村 哲	中村 哲	松田 吉郎	松田 吉郎	關 浩和	關 浩和	關 浩和	小南 浩一	
		上越	講座代表者	赤羽 孝之	赤羽 孝之	佐藤 芳徳◎	佐藤 芳徳◎	佐藤 芳徳	佐藤 芳徳	浅倉 有子◎	浅倉 有子◎	志村 喬	志村 喬	志村 喬	
		講座副代表者	佐藤 芳徳	佐藤 芳徳	赤羽 孝之	赤羽 孝之	浅倉 有子	浅倉 有子	志村 喬	志村 喬	志村 喬	志村 喬	志村 喬	志村 喬	
岡山	講座代表者	高山 芳治	高山 芳治	野邊 政雄◎	野邊 政雄◎	野邊 政雄	野邊 政雄	野邊 政雄	野邊 政雄	野邊 政雄	桑原 敏典	桑原 敏典	野邊 政雄◎		
	講座副代表者	野邊 政雄	野邊 政雄	野邊 政雄◎	菅 浩伸	菅 浩伸	菅 浩伸	菅 浩伸	菅 浩伸	菅 浩伸	野邊 政雄	野邊 政雄	川田 力		
	講座代表者	齋木 哲郎◎	齋木 哲郎◎	西村 公孝	西村 公孝	梅津 正美◎	梅津 正美◎	西村 公孝	西村 公孝	梅津 正美	梅津 正美	梅津 正美	梅津 正美		
	講座副代表者	西村 公孝	西村 公孝	齋木 哲郎	齋木 哲郎	西村 公孝	西村 公孝	梅津 正美	梅津 正美	西村 公孝◎	西村 公孝◎	西村 公孝			
社会系教育	兵庫	講座代表者	吉岡 秀文◎	吉岡 秀文◎	渡辺 金治	渡辺 金治	澁江 靖弘◎	澁江 靖弘◎	小池 敏司	小池 敏司	澁江 靖弘	澁江 靖弘	濱中 裕明		
		講座副代表者	小池 敏司	小池 敏司	澁江 靖弘	澁江 靖弘	小池 敏司	小池 敏司	澁江 靖弘	澁江 靖弘	小池 敏司	小池 敏司	庭瀬 敬右◎		
		上越	講座代表者	西川 純	西川 純	森 博	森 博	天野 和孝	松本 健吾	松本 健吾	高津戸 秀	高津戸 秀	中川 仁◎		
		講座副代表者	中川 仁	中川 仁	小林 辰至◎	小林 辰至◎	中川 仁	中川 仁	中村 雅彦	中村 雅彦	中川 仁◎	中川 仁◎	中村 雅彦		
	岡山	講座代表者	小倉 久和	小倉 久和	跡部 紘三	跡部 紘三	曾布川拓也◎	曾布川拓也◎	安藤 元紀	安藤 元紀	喜多 雅一	喜多 雅一	岡崎 正和		
		講座副代表者	土井 幸雄	土井 幸雄	喜多 雅一	喜多 雅一	稲田 佳彦	稲田 佳彦	曾布川拓也◎	曾布川拓也◎	(代行)岡崎 正和	岡崎 正和	稲田 佳彦		
		講座代表者	今倉 康宏	今倉 康宏	村田 守	村田 守	村田 守	村田 守	秋田 美代	秋田 美代	村田 守◎	村田 守◎	秋田 美代		
		講座副代表者	松岡 隆◎	松岡 隆◎	平野 康之◎	平野 康之◎	成川 公昭	成川 公昭	村田 守◎	村田 守◎	平野 康之	平野 康之	本田 亮		
	自然系教育	兵庫	講座代表者	初田 隆	初田 隆	竹内 俊一	竹内 俊一	竹内 俊一◎	竹内 俊一◎	初田 隆◎	初田 隆◎	新山 眞弓	新山 眞弓	新山 眞弓	
			講座副代表者	(～9.5代行) 9.6	竹内 俊一	初田 隆	初田 隆	福本 謹一	福本 謹一	竹内 俊一	竹内 俊一	初田 隆	初田 隆	初田 隆	
			上越	講座代表者	西村 俊夫	西村 俊夫	西村 俊夫◎	西村 俊夫◎	西村 俊夫	西村 俊夫	後藤 丹	後藤 丹	松本 健義◎	松本 健義◎	
			講座副代表者	茂手木深子	茂手木深子	茂手木深子	(代行) 平野俊介	(代行) 平野俊介	(代行) 平野俊介	松本 健義	松本 健義	後藤 丹	後藤 丹	後藤 丹	
岡山		講座代表者	小川 尊一	小川 尊一	小川 尊一	小川 尊一	虫明眞砂子	虫明眞砂子	虫明眞砂子◎	虫明眞砂子◎	泉谷 淑夫	泉谷 淑夫	泉谷 淑夫		
		講座副代表者	奥 忍◎	奥 忍◎	虫明眞砂子	虫明眞砂子	泉谷 淑夫	泉谷 淑夫	泉谷 淑夫	泉谷 淑夫	虫明眞砂子◎	虫明眞砂子◎	齊藤 武		
		講座代表者	橋本 泰幸◎	橋本 泰幸◎	村澤由利子◎	村澤由利子◎	長岡 強◎	長岡 強◎	頃安 利秀	頃安 利秀	長島 真人	長島 真人	長島 真人		
		講座副代表者	村澤由利子	村澤由利子	長岡 強	長岡 強	頃安 利秀	頃安 利秀	(代行) 山本 朝彦	(代行) 内藤 隆	(代行) 内藤 隆	(代行) 内藤 隆	(代行) 内藤 隆		
鳴門		講座代表者	福田 光完	福田 光完	後藤 幸弘◎	後藤 幸弘◎	後藤 幸弘◎	後藤 幸弘◎	増澤 康男	増澤 康男	増澤 康男	増澤 康男	小山 英樹	森山 潤◎	
		講座副代表者	後藤 幸弘◎	後藤 幸弘◎	松村 京子	岸田 恵津	岸田 恵津	岸田 恵津	永木 耕介	小山 英樹	岸田 恵津◎	岸田 恵津◎	前田 智子		
		上越	講座代表者	山崎 貞登	山崎 貞登	伊藤 政展	伊藤 政展	川崎 直哉	川崎 直哉	立屋敷かおる◎	黎 子椰	川崎 直哉◎	得丸 定子		
		講座副代表者	立屋敷かおる	立屋敷かおる	山崎 貞登	山崎 貞登	立屋敷かおる	立屋敷かおる	黎 子椰	黎 子椰	得丸 定子	得丸 定子	山崎 貞登	山崎 貞登	
生活・健康系教育	岡山	講座代表者	門田新一郎	門田新一郎	大橋 和正	大橋 和正	河田 哲典◎	河田 哲典◎	足立 稔	足立 稔◎	平田 晴路	平田 晴路	伊藤 武彦◎		
		講座副代表者	大橋 和正	大橋 和正	河田 哲典	河田 哲典	足立 稔	足立 稔	平田 晴路	平田 晴路	伊藤 武彦	伊藤 武彦	佐藤 園		
		講座代表者	梅野 圭史◎	梅野 圭史◎	木下 凱文	木下 凱文	前田 英雄	前田 英雄	梅野 圭史◎	梅野 圭史◎	伊藤 陽介	伊藤 陽介◎	乾 信之		
		講座副代表者	木下 凱文	木下 凱文	前田 英雄◎	前田 英雄◎	梅野 圭史	梅野 圭史	伊藤 陽介	伊藤 陽介	乾 信之	乾 信之	西川 和孝		

5 教育実践学論集題目一覧

○創刊号 平成12(2000)年3月

論 文 題 目	執筆者
学習障害児の教育実践における問題点とその克服 ー人間精神の心理学モデルに基づく新構想ー	小川 敦・中塚善次郎
思春期以前に発病した思春期慢性疾患者の病気体験の語りにおける共通性 ー人間的健康の実現に向けてー	中内みさ
児童における人の顔に惹起される事象関連電位の発達的变化	渡邊亮太
参与観察からみた教師の価値観 ー読書カリキュラムを巡る具体的事例を中心にー	藤井知弘
総合的実験モジュール“磁石”	Mohammad Zafar・村田 守 小澤大成・西村 宏・山下伸典
アメリカにおける1980年代以降の教育改革の進行と教科体育の危機 ー高等学校体育の衰退傾向と打開に向けての論議ー	井谷恵子
跳び箱運動における用具の工夫が開脚跳びの動作に及ぼす影響に関する筋電図的研究	岡 秀郎・岸本正彦
自律訓練法を中核としたメンタルトレーニングプログラムの作成とその妥当性の検討	藤原忠雄・千駄忠至

○第2集 平成13(2001)年3月

論 文 題 目	執筆者
一自閉症児における課題の選択が課題従事行動に与える効果	村中智彦・藤原義博・小林貞子
「ミニ・カウンセリング」を用いたカウンセリング実習の指導を経験して ー受講した院生の感想文を基にした実習経験の報告ー	阪 武彦
教師の実践スタンスによる幼児の言語コミュニケーションの生成	三宅茂夫
通常学級に在籍する慢性疾患児の学校生活に関する実態調査	松本久美子・吉利宗久 藤井聰尚
養護学校高等部生徒の複数の集会場面における奇声の改善 ー学校場面に適合した機能的アセスメントに基づく指導ー	平澤紀子・藤原義博
小学校国語科教育におけるインダクティブ・アプローチ導入の基礎理論	森 篤嗣
文化遺産による歴史認識形成の課題と展望 ー史跡出島のメタヒストリーをとおしてー	新木武志
「見える」ことを規定する教授学的要因について ー体育指導論の立場からー	阪田尚彦

○第3集 平成14(2002)年3月

論 文 題 目	執筆者
社会的絆の理論の展開とインプリケーション ー社会化プロセスと「行為」としての逸脱へのパースペクティブー	松岡 律
幼稚園における持続的遊び集団の相互作用過程 ーボールズの相互作用過程分析をとおしてー	三宅茂夫
幼稚園教諭の意識変革に基づく保育スキル変容に関する研究 ー援助スキル分析を手がかりにしてー	佐藤和順
『エミール』における教育実践学論考 ー哲学的視座から捉えた他者性との関連ー	清重友輝・中塚善次郎
台湾における軽度知的障害児に対する子どもの意識ー縦断的検討ー	糠 明珊
説明的文章の学習指導における<他者>と出会う第1次のデザイン	河野順子
社会科教育へのGIS援用のために ー低価格アプリケーションの可能性ー	立岡裕士

○第4集 平成15（2003）年3月

論 文 題 目	執筆者
中国における教員表彰制度に関する考察	牛 志奎
わが国の大学生における健康教育の現状と課題	佐々木恵・山崎勝之
幼稚園におけるジェンダー・フリー・プログラムに関する研究 ージェンダー・バイアス・フェードアウト保育を目指してー	佐藤和順・田中亨胤
〈他者〉との〈対話〉を促す説明的文章セット教材の学習指導 ー理論と実践の検討ー	河野順子
「国際理解」と「教育」のあいだ	小西正雄
「総合的な学習としての音楽劇」における有効な支援のあり方 ー実践分析に見られる「教師の支援」と「児童の反応」を手がかりとしてー	高見仁志
ラグビーフットボール競技における「calling」の意義 ー実践的実験科学分析の観点からー	田中弘之・山中一剛・一森勇人 坂田好弘

○第5集 平成16（2004）年3月

論 文 題 目	執筆者
ペスタロッチー教育思想におけるsehende Liebe概念とその実践学的意義	光田尚美
大村はま国語教室における文学の鑑賞指導の研究 ー单元「ここにこう生きている少年少女」を中心にー	石津正賢
名詞文過去形の「XハY」の時間性 ー「想起」をめぐるー	田村澄香
近世播磨国における部落寺院本末関係の一考察	和田幸司
ヴィクトリア朝盛期の日用生産品と大衆美術教育 ー職業美術教育を中心としてー	藤田知里
生活文化の視点からの「こもりうた」の学習へのアプローチ ー事例研究をもとにー	加藤晴子
師範学校における音楽教育 ー「師範教育令改正」（1943）前後の動向を中心としてー	鈴木慎一郎
ブラジル南部三州地域における「移民都市」の空間構造に関する比較研究 ープランニング思想の解明をめざしてー	川西光子・中岡義介
小学校体育授業における教師の授業中の「出来事」に対する気づきに関する研究 ー熟練度の相違を中心としてー	厚東芳樹・梅野圭史・上原禎弘 辻 延浩
ラグビーフットボール競技における投距離と上肢の筋力との関係 ー筋力トレーニングが等速性筋力と投能力に及ぼす影響ー	田中弘之・佐々木弘幸 村上智計・土井剛志・山中一剛

○第6集 平成17（2005）年3月

【論文】

論 文 題 目	執筆者
倉橋惣三の保育思想における子どもの権利保障論 ー児童保護論を中心にー	狐塚和江
地域教材の成立過程とその意図についての一考察 ー「米百俵」教材を中心としてー	木村松子
M. マッケンジーの「教育の新理想」としての「自由」概念とその史的意味 ーイギリス新教育運動の多義性の内実解明にむけてー	山崎洋子
教職科目における障害児教育関連科目の設定の現状と課題	河合 康
情意表現から見た終助詞	劉 笑明
地方小都市に住む高齢女性の社会集団加入 ー岡山県高梁市の事例ー	野邊政雄
社会教育施設における絵画教室についての一考察 ー生涯学習の視点からー	上浦千津子

地域の音楽学習のための教材開発 －《撫養の子守唄》を事例として－	今 由佳里
ヴィクトリア朝盛期の日用製品と大衆美術教育 －ヘンリー・コウルと初等美術教育を中心として－	藤田知里
奈良女高師附小における溝上泰子の家事科教育の構想と実践 －家庭科における「子ども」と「科学」の統合に関する研究－	原田省吾・佐藤 園

【特集：教育実践学構築への道】

論 文 題 目	執筆者
教育実践学構築への道	岩田一彦
学校教育方法連合講座の基本概念 －教育実践学に向けた方向性－	中野靖夫
教育実践学としての学校教育臨床学の構築に向けて	藤田継道
教科教育実践学であること	山岡俊比古
社会科教育実践学の性格と課題	中村 哲
自然系教育連合講座の基礎概念について －科学立国の立場から－	松本伸示・丸林英俊
芸術教育実践学の基本概念	西村俊夫
生活・健康系連合講座の教育実践学の基本的方向性	前田英雄・梅野圭史

○第7集 平成18（2006）年3月

論 文 題 目	執筆者
教師の職能発達を支える校長の指導助言機能 －授業研究を中心に－	富久國夫
中学生の適応感を高める「総合的な学習の時間」 －「知的広がり」要因を組み込んだ共分散構造分析から－	角谷詩織
ゼミナールにおける属性の異なる構成員間の会話に関する研究 －ゼミナールにおける会話構造－	西川 純・久光敏史 久保田善彦・戸北凱惟
中学生の心理的支えと同胞の種類に関する研究 －同胞なし，同胞男性，同胞女性，同胞異性，同胞混成別による比較を通して－	寺田智礼
What Relationships Do the Efficiency of Phonological Coding and Working Memory Capacity Have with Reading Comprehension for Japanese Learners of English?	宮迫靖静・高塚成信
為氏の見た『定家卿百番自歌合』52番右歌	岡田直美
地方小都市に住む高齢女性の主観的幸福感	野邊政雄
社会科教育実践力育成のための教育実習指導の改善 －「教育実習到達目標段階表（社会科）」の開発と試行を通して－	梅津正美・加藤寿朗
国名と地名からみた西アジア・北アフリカ文化圏の考察	室谷 茂
部落寺院毛坊主に関する一考察 －丹波国多紀郡惣道場西誓寺を事例として－	和田幸司
音楽科教師の力量形成に関する研究 －教授行為の基盤となる教師の内面的思考「判断」「選択」を中心として－	竹内俊一・高見仁志
音楽科教育における「異化」作用の生成 －「イメージの知」による〈学び〉の意味生成を求めて－	岡本信一
百武兼行と松岡壽のローマにおける絵画修業 －西洋画受容の過程と美術観の形成－	中村幸子
バスケットボールの技術指導における技能を向上させる指導語に関する研究	平松聡明・山本忠志・三野 耕 成山公一

○第8集 平成19（2007）年3月

論 文 題 目	執筆者
協働する教師集団に関する事例研究	松原美砂
国際教育協力における「授業研究」の有効性 －南アフリカ人教師による生物の授業を事例として－	小野由美子・近森憲助 小澤大成・喜多雅一
聾学校生徒，教師，保護者による補聴器の主観評価に対する因子分析	唐 鶴英
知的障害を伴う自閉症児の要求言動行動の行動型及び行動連鎖に関する研究 －要求充足者の位置を独立変数として－	吉川和幸・藤原義博
個人心理療法における居場所の活用に関する一考察 －被害妄想を呈した青年の事例を通して－	高田豊司
ペアレント・トレーニングがADHD児を持つ母親の養育行動に及ぼす効果	伊藤信寿・柳原正文
大学院でカウンセリングを学んだ教師の指導態度とアイデンティティ観の変容 －A教育大学の修了生への調査より－	葛西真記子・春木幸恵
『徒然草』と本居宣長 －青年期の受容と晩年の批判－	下西善三郎
昭和20・30年代における「話すこと」「聞くこと」の指導の一考察 －関口重平の実践を中心にして－	有働玲子
台北帝国大学設立構想に関する研究	陳 瑜
価値追求型の公民科授業構想 －「校則と自己決定権」を事例として－	疋田晴敬
HOW TO ENHANCE LEARNERS' MOTIVATION FOR SCIENCE STUDIES －Application of activity based science lesson in Sri Lankan and Japanese high schools－	KAHANDUGODA MANAGE Nadeera S. K・西條典子・村田勝夫
指導内容の視点からみた小学校における「創造的音楽づくり」の発展的様相 －3，4，6年生の事例分析を通して－	溝口希久生
前方支持回転の技術指導における動作と効果的指示内容に関する研究	松下健二・高梨里絵・上野洋介
体育授業における教師の言語的相互作用に関する研究 －小学校高学年：学習集団機能を中心として－	上原禎弘
小学校体育授業に対する教師の反省的思考に関する研究 －小学校低学年担任教師の場合－	厚東芳樹・梅野圭史・山口孝治
体育授業における人間関係力を高める運動教材の開発過程に関する研究 －小学校4年生：スポーツチャンバラにおける学習過程の最適化－	武田庸助・林 修・梅野圭史 木原資裕

○第9集 平成20（2008）年3月

論 文 題 目	執筆者
自律的学校経営を促す教員人事に関する事例研究 －東京方式からの示唆と課題－	岡本喜代治
平和教育における「科学的認識」の考察 －『歴史地理教育』における平和教育実践記録の分析を通して－	西尾 理
教育センターにおけるグループモデレーションを用いた研修プログラムの開発と試行	佐々木弘記
総合的な学習の実践に関する研究 －話し合い活動による探究過程の創出と活性化の試み－	岡本義裕
ネガティブ・ライフ・イベントと抑うつに関連におけるruminationの媒介効果	野口理英子・藤生英行
定時制高校に在籍する特別な教育的支援を必要とする生徒に関する調査 －担任教諭評価に基づいて－	松浦直己・吉田恵子
小学校国語科「書くこと」領域における学習指導の工夫に関する研究 －「伝え合い」を重視した入門期の指導－	伊崎一夫
小学校英語学習における認知的側面 －認知的発達段階に即した学習とその促進－	山岡俊比古
Changing Identities in an Online Learning Community in the EFL Context － A use of Moodle in a Japanese college English class －	ZENG Gang・吉田達弘 高塚成信

フィンランドにおける小学校英語担当教員養成システムに関する研究	伊東治己
『雑談集』巻4の歌群をめぐり一考察	平川恵実子
大坂城代就任者の基礎的考察	菅 良樹
台北帝国大学理農学部「農学・熱帯農学講座」の研究成果について	陳 瑜
台湾における「端午扒龍船」の早期変遷について ー清朝の方志資料と日本統治期の相関資料を主にー	黄 麗雲
チャートおよび珪質頁岩などの遠洋性堆積物中の放散虫化石を用いた中学校授業および 課外クラブ活動での実践例	橋本寿夫・村田 守・西村 宏 藤岡達也
女子サッカー選手における自立的発達と達成動機との関連についての因子分析的研究	内井宏至
ラグビーフットボール競技におけるキックを加味したパス攻撃の工夫とその実践	津山大器・成山公一・山本忠志 三野 耕

○第10集 平成21（2009）年3月

題 目	執筆者
教育実践学論集第10号の発刊にあたって	安部崇慶

【創刊10周年記念特集】

論 文 題 目	執筆者
創刊10周年に寄せて	加治佐哲也
救急看護の看護継続教育プログラム開発に関する基礎研究 ーコミュニケーションスキル開発の観点の構成ー	村井嘉子
中学生の作文評価のための基準の信頼性と妥当性 ー分析的項目と総合項目による評価の検討ー	石原千亜紀・山田剛史
「良い」教師ー「資質・能力（コンピテンス）のある」教師 ー教職の専門性に関するドイツならびに国際的な議論についてー	カール＝ノイマン・渡邊 隆信
集団社会的スキル訓練の抑うつ低減効果 ーターゲットスキルの設定に焦点をあててー	小関俊祐・木村泰博・山口真美 高橋 史・嶋田洋徳 佐々木和義・藤田継道
教師のストレスに関する探索的研究 ー性、年代、校種における差異の検討ー	藤原忠雄・古市裕一・松岡洋一
幼児の身体的コミュニケーションにおける模倣の機能	鈴木裕子
ソーシャルストーリー TM の記述の内容が自閉症生徒のアイコンタクト形成に及ぼす影響	岡田信吾・大竹喜久・柳原正文
大学院生の道徳的意識に及ぼす遍路体験の影響	田村隆宏・南 隆尚
身体語を含む日韓両言語のことわざの意味の比較研究 ー「かお」をめぐってー	賈 惠京
How can we help with difficulties in English writing?: Japanese novice college writers' dilemmas observed from dialogue journals	近藤淑子・高塚成信 GARDNER Scott
「地域に根ざす社会科」実践の歴史的展開 ー授業内容と授業展開を視点にしてー	峯岸由治
日本における華僑学校の変遷とその地域的特徴 ー神戸中華同文学校と横浜山手中華学校を中心にー	王 鑫
シドニーの職業階層と所得階層の変化 ーバウムによる「都市の分極化仮説」検証以降ー	野邊政雄
和声学習初歩における躓きを修正する指導法に関する研究	齊藤 武
介護施設における高齢者の社会的ネットワーク ー介護理念・地域性・家族関係・性別等による影響の観点からー	郷堀ヨゼフ・細江容子 シコラ＝ヤン・得丸定子

健康教育の授業実践が小学4年生の日常生活における身体活動量に及ぼす影響	足立 稔・高濱真希・笹山健作 石井明美・横山宏子 沖嶋今日太・水内秀次
中学年児童を対象とした「だるま浮き」からと「背浮き」からの指導過程の有効性の比較	下田 新・芹澤博一・山崎有希 ・後藤幸弘
球種の違いが高校生のサッカー授業（ゲーム）に及ぼす運動強度への影響について －弾みにくいボールと通常のボールの比較から－	田中 譲

○第11集 平成22（2010）年3月

論 文 題 目	執筆者
アメリカのTeaching Expertise研究にみる教師の実践的力量に関する文献的検討	厚東芳樹・長田則子・梅野圭史
コミュニティ心理学アプローチによるニューカマー児童の支援 －S-HTP法を用いた実践－	竹山典子・今田雄三
治療同盟と面接評価に影響を及ぼすセラピスト側の要因 －学生セラピストを対象とした内的作業モデルとクライアント反応評定を用いて－	吉見摩耶・葛西真記子
スポーツ活動経験とレジリエンスの関連 －時間的展望、身体的自己知覚の視点から－	葛西真記子・澁江裕子 宮本友弘・松田 保
「優秀教員」の職能開発における現職研修の効果に関する研究 －校内研修に対する効果意識を基にして－	當山清実
『新勅撰集』夏歌の五月雨歌群に関する一考察 －歌群に見られる花散里の物語－	岡田直美
芦田恵之助の読み方教授における教育者の堪能に関する研究	桑原哲朗
自己との関わりを意識化する古典学習指導の考察 －大村はまの単元学習指導「古典入門－古典に親しむ」（昭和25年）を中心に－	坂東智子
日本語教育の方法を応用した話し言葉教育の試み －ロールプレイを用いた高等学校国語科の授業－	森 篤嗣・豊田 誠
心情語「くち惜し」の語史 －「惜し」「くやし」との関係から	陳 崗
中国ハルビン市における小中学校教師の環境教育に対する意識	尹 喜淑
中学生の「理科嫌い」「数学嫌い」の検討 －潜在意識調査法FUMIE Testの活用－	内田昭利・守 一雄
日本における授業研究を主体とした研修を通じた南アフリカ理科教員の変容	小澤大成・小野由美子 近森憲助
教育者養成のためのワークショップによる学びに関する研究	渡辺一洋
総合表現型カリキュラムの実践への一考察	時得紀子
よい体育授業を行うための教師の力量に関する研究 －『教育素材を見抜く力』と『子どもを見抜く力』に着目して－	野津一浩
ラグビーフットボール競技におけるELVs2008の実践的検証	村岡 陽平

○第12集 平成23（2011）年3月

論 文 題 目	執筆者
明治中期の幼児教育関係書における保育者の「公正さ」概念についての比較	二見素雅子
教師の組織的省察に基づく教育改善プログラムの開発的研究 －「教師の主体的統合モデル」の基本理論－	久我直人
学校の特色づくりにおけるリーダーシップと組織対応 －5校園の事例間比較研究－	武井敦史・田中 響・辻 誠高 見仁志・杉山美也子 二見素雅子
学校設置・管理運営への教育関連企業の参入意識に関する調査研究	大野裕己・末松裕基・山下晃一
教職志望大学生の就職不安への予防介入に関する予備的研究	小野稔文・安藤美華代

大学生におけるsense of coherenceとアタッチメント・スタイルおよび知覚されたソーシャル・サポートの関連	岩崎眞和・五十嵐透子
高校生の主観的学校ストレス、ストレス反応、および友人関係の関連における性差の検討	吉原 寛・藤生英行
幼児の原体験と両親の子どもの遊びに対する養育態度との関連性	亀山秀郎・嶋崎博嗣
パウロ・フレイレの教育論における「対話」に関する一考察	原 安利
幼児の音の聴取・表現力と行動特性 ー「聴く・つくる」活動を通してみる幼児像ー	立本千寿子
大学生の心理相談抵抗感に関する中日比較研究	姜 鳳麗・浅川潔司・南 雅則 祁 秋夢
幼稚園における実効のある保育目標の明確化手順の開発 ー私立清和幼稚園でのアクション・リサーチー	山中秀馬・横松友義
小学校外国語活動における子どもの動詞フレーズに関する音声形式と意味の繋がり	柏木賀津子
The Effects of Phonological Representation on Japanese Sixth-Grade Students' Recognition of English Words	堀田 誠, 平野絹枝
近世初頭における本願寺定衆の役割と位置 ー九条西光寺を事例としてー	和田幸司
中国地方山村における人口移動の動向 ー岡山県苫田郡富村の事例ー	野邊政雄
価値の制度化による社会関係の分断を探究する社会科授業開発 ー単元「優生保護法からみた私たちと現代社会」(中学校公民的分野)を事例としてー	岩野清美
1907年の港湾調査会設立の意義に関する一考察	井上敏孝
徳島県教育会の義太夫に関する教育思想 ー『義太夫調査書』(1913)を中心にー	川北雅子
中学校学習指導要領美術科における色や形などの基礎的学習に関する考察 ー戦後昭和期における昭和33年新設の独立領域「色や形などの基礎練習」の位置づけとその後の変遷を中心にー	藤原智也
よい体育授業を行うための教師の力量の構造化試案 ー『教育素材を見抜く力』と『子どもを見抜く力』に着目してー	野津一浩・後藤幸弘

○第13集 平成24(2012)年3月

論文題目	執筆者
How Wide Is the Gulf between PPP and TBLT?	宮迫靖静
小学校1年生が捉えた幼稚園と小学校の違いと環境への適応過程に関する研究 ー修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてー	棕田善之・佐藤 真
小学校教員養成スタンダードに関する開発的研究 ー大学卒業時における「教員としての最小限必要な資質能力」の同定と構造化ー	別惣淳二・鈴木 篤・龍輪飛鳥 渡邊隆信・大関達也・藤原賢二
出会いの材「クロツグミ」実践における対話生 ーバフチンの対話論における多声(性)の観点からー	前原 裕樹
共通項目数が等化の精度に及ぼす影響 ー大規模学力テストデータを用いた探索的研究ー	泉 毅・山野井真児・山田剛史 金森保智・対馬英樹
(旧制)中学校における職員会議の実態と機能に関する事例研究 ー第一神戸中学校における明治後期と昭和戦中期を比較してー	棚野 勝文
心的外傷体験をもつ女兒の教育場面におけるレジリエンスとアタッチメントの検討 ー書籍の会話分析を通してー	澁江 裕子・葛西真記子
特別支援学校(聴覚障害)幼稚部における名詞指導の現状に関する研究	王 穎
中学校生活に対する予期不安と入学後の学校適応感に関する研究	南 雅則・浅川潔司・福本理恵 古河真紀子・松本 剛・ 古川雅文
子どもの権利の再考 ー賀川豊彦の子どもへのまなざしからー	加納史章

How Japanese EFL Learners' Oral Reading Skill is Related to Their Speaking Ability : Focusing on Read and Look Up and Personalized Oral Reading	米崎 里・伊東治己
保育課程に基づく保育実践の自己評価観点明確化手順の開発 ー私立御南保育園でのアクション・リサーチー	渡邊祐三・横松友義
ヒサエ・ヤマモトの“A Fire in Fontana”における人種差別と‘Fear of Responsibility’	長井志保
海外日本語教育実習における現職教員の変容的学習に関する事例研究	小野由美子
陳公博における「民主主義革命論」の形成と理念そして挫折	新地比呂志
生命保険会社のディスクロージャーと資産運用	青葉暢子
海南島における港湾調査 ー台湾総督府による「南支那及南洋調査書」分析を中心にー	井上敏孝
台湾における1970年代の社会福祉政策 ー民主主義現階段社会政策の展開を中心にー	今井孝司
半具体的視点移動を用いた小学校理科天体分野の「観測型」学習の可能性	松本榮次・松本伸示
中学生の「数学嫌い」「理科嫌い」は本当か ー潜在意識調査から得られた教育実践への提言ー	内田昭利・守 一雄
理科授業における場面解決型の作問指導における思考過程 ー問題推敲時の思考が問題に表出されることによる表現力としての評価可能性の検討ー	平田豊誠・松本伸示
音楽科授業における教師の思考に関する基礎的研究 ードナルド・ショーンの反省的実践家理論を手がかりとしてー	高見仁志
韓国の民俗芸能カンカンソーレの音楽科教材としての可能性	金 奎道
身体接触を伴う運動「カバディ」の教育的効果について ー小学校3年生児童を対象としてー	筒井茂喜・日高正博・上原禎弘 後藤幸弘
体育科における「遊び」の定義と実践における有効性と可能性	佐々敬政, 中島友
小学校体育授業における教師の実践的知識への介入が教授活動に及ぼす効果 ー教師の教授戦略と授業の「出来事」への気づきとの関係を中心にー	山口孝治, 長田則子, 上原禎弘 梅野圭史

○第14集 平成25（2013）年3月

論 文 題 目	執筆者
教師の組織的省察に基づく教育改善プログラムの理論と実践 ー「教師の主体的統合モデル」における組織的教育意思形成過程の展開とその効果ー	久我直人
劇The Real Thingにおける「対話」についての一考察 ー「言語ゲーム」を通してー	山本ますみ
新任保育者の抱える困難 ー語りの質的検討ー	加藤由美, 安藤美華代
一自閉症児における構成見本合わせ課題による観察反応の効果 ー刺激過剰選択性に対する選択反応への影響ー	奥山高光, 井澤信三
幼稚園教育におけるティーム保育の成立条件	馬場訓子・中平絢子・高橋敏之
社会関係資本が保護者の学校参加に及ぼす影響 ー保護者のネットワークに着目してー	城内君枝
規範に着目した社会科概念探求学習の新展開 ー小学校第4学年小単元「水はどこから」の場合ー	紙田路子
円地文子の幻想文学 ーその語りの特徴についてー	マジュール＝ポリヌ
The Effect of Task Repetition and Noticing of Forms on Proceduralization of Linguistic Knowledge (タスクの繰り返しと言語形式の気づきが言語知識の手続き化に及ぼす効果)	伊達正起・高塚成信
新美南吉「ごんごろ鐘」論 ー庶民的感情の発見ー	林 家靖
社会科教科書のデジタル化に関する基礎的研究 ーメディア分析による教科書の構造の解明と課題ー	岡崎 均

過疎山村に住む高齢女性の主観的幸福感 ー岡山県鏡野町富地域の事例ー	野邊政雄
陳公博における革命理念の特質 中間勢力「施存統、譚平山、鄧演達」との比較をと おして	新地比呂志
1939～1945年における日本人の海南島農業調査	趙 従勝
障がいがある人への造形活動支援の在り方 ー粘土制作の実践から見えてくる場の意義ー	田谷麻美
音楽科における異文化芸術の学びの特性に関する一考察 ー音楽科授業において生ずるズレに着目してー	金 奎道

○第15集 平成26（2014）年3月

論 文 題 目	執筆者
テストレットの長さが項目反応理論のパラメタ推定に与える影響	山野井真児・泉 毅・山田剛史
教員養成課程の大学生における児童虐待に関する意識	上本めぐみ・李 璟媛
児童の学習意欲の形成に関する学校心理学的研究 ー学習規律と学級適応感との関連についてー	真田穰人・浅川潔司 佐々木聡・貴村亮太
中学生の意識と行動の構造に適合した教育改善プログラムの開発的研究 ー教育再生のシナリオの理論と実践ー	久我直人
小学校外国語活動の教育効果と課題に関する研究 ー日本型早期英語教育の学習モデルの構築と検証ー	松宮新吾
1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開 ー岡山県・月の輪古墳発掘運動の中の教育実践に着目してー	白井克尚
保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向と課題	新山順子・高橋敏之
保育者養成課程における世代間交流指導のためのクロス・トレーニング・プログラムの 試み ー実習参加学生の質問紙調査からの考察ー	吉津晶子・溝邊和成
保育園の「園外へ歩いて出かける活動」に関する保育課程編成時の留意点 ーカリキュラムマネジメントの観点からの考察ー	森 英子・横松友義
高校生における学業的延引行動に及ぼす動機づけ、学習方略の影響	小川内哲生
文芸取締問題をめぐる自然主義批評圏の〈基準〉 ー永井荷風『ふらんす物語』の〈発禁〉を起点としてー	黒田俊太郎
過疎山村に住む高齢女性と別居子の関係 ー岡山県鏡野町富地域の事例ー	野邊政雄
Kashmir3Dによる電子国土基本図（オルソ画像）の地理教材としての利用可能性	立岡裕士・青葉暢子
科学の論理と子供の論理との統合をめざす社会科授業研究のケーススタディ ー小学校第5学年「日本の水産業」を事例にしてー	佐藤克士・吉水裕也
中華民国時期海南島の調査・開発について ー農業近代化の視点からー	趙 従勝
日本統治時代における高雄港築港事業 ー砂糖積み出し港から工業港への変遷ー	井上敏孝
R. オズボーンの所説を中心にした構成主義に基づく理科教育論の特質と構造	中島雅子・松本伸示
タマネギ外皮を用いた広領域型科学実験プログラムの開発研究	早藤幸隆・今倉康宏
「結晶の壁のぼり」の現象をエネルギー的視点からとらえさせる高校生のための教材の 開発	那須悦代・喜多雅一
動機づけにおけるほめ言葉の現状と課題 ー幼児の造形活動からー	津田由加子
震災5か月後の被災地中学生の運動スポーツ活動と非活動時間 ー青森市と東松島市の2校比較を通じてー	岡崎勘造・鈴木宏哉 佐々木桂二
持久走の授業における体力水準が異なる生徒の態度変化について	笹山健作・尾川登太郎 足立 稔

○第16集 平成27（2015）年3月

論文題目	執筆者
中学生の自己愛傾向と学校適応感との関連	佐々木聡・浅川潔司・真田穰人 南 雅則
カラオケ利用料金の支払い場面における自閉性障害生徒の援助行動の指導	若林上総・加藤哲文
小学校教務主任のリーダーシップによる協働的職場風土構築に関する研究 ーSCAT法による質的分析ー	荊木まき子・杉本伸一 淵上克義・安藤美華代
初任臨床心理職者用リアリティ・ショック体験尺度の開発	遠藤裕乃・岡本かおり
ティーム保育に関する研究の動向と課題	馬場訓子・高橋 慧
『東京朝日新聞』の文芸委員会報道 ーメディアの〈続き物〉創出への意思とその当事者性ー	黒田俊太郎
リスニングにおける予測文法力を活性化する指導法についての一考察	米崎啓和
大正期中等学校の国語及漢文科における文学教育論	浮田真弓
意見文課題における説得のアピールの日西対照研究 ー日本とスペインの学生の作文比較ー	西條結人・田中大輝 小野由美子
山村に住む高齢女性の集団加入 ー岡山県鏡野町富地域の事例ー	野邊政雄
北条重時の連署就任とその政権運営 ー執権北条時頼と連署重時との確執の萌芽	石井清文
ベンズアルデヒドのカニッツアーロ反応を用いた化学実験教材の開発と実践	早藤幸隆・今倉康宏
オーセンティック・ラーニングに依拠した理科授業が科学・理科学習態度に与える効果 ー小学校第5学年理科「天気の変化」を事例としてー	小川博士・松本伸示 桑原不二朗・平田豊誠
教材の機能という観点から捉えた韓国伝統音楽の授業構成 ー韓国における小学校での授業観察を通してー	金 奎道
造形活動における指導言のあり方について	津田由加子
Cambodian Student Competencies in Chemistry at Lower Secondary School Compared to regional neighbors and Japan	セツト セイン SIENG Sovanna・喜多 雅一

○第17集 平成28（2016）年3月

論文題目	執筆者
操作的思考課題の解決を含む学習活動がルール獲得に及ぼす効果とそのプロセス ー中学校理科における状態変化の学習に着目してー	植原俊晴
ユニバーサル学校予防教育「自己信頼心（自信）の育成」プログラムの効果 ー小学校3年生を対象にし、教育目標達成後の波及効果を考慮してー	横嶋敬行・山崎勝之 内田香奈子・村上祐介
学校と地域の関係性モデルの開発と検討 ーコミュニティ・スクールの社会心理学的分析からスクール・コミュニティへの展望ー	日渡 円・竹西亜古・大関達也 安藤福光・武藤久慶・平原俊一 澤野幸司・西田隆之・藤田 亮
小中移行期における児童の学校適応感に関する研究 ー中学校生活への期待感・不安感に注目してー	和田邦美・小倉正義
小学生が描く動的学校画の描画特徴の発達の变化に関する実証的研究	大門秀司・宮下敏恵
生徒との関係性を育む臨床教育学的アプローチについて ー特別支援学級のA子の事例を通してー	吉川修司
トラウマ症状に対する対処方法に関する研究	瀧井美緒・上田純平・富永良喜
学校現場での集団介入に活用できる認知の誤り尺度の開発	上田純平・瀧井美緒・富永良喜
視覚障害児のインクルーシブ教育における支援の組織化 ー視覚障害教育の教材供給における論点整理のためにー	高橋眞琴・植村 要・佐藤貴宣

交換日記にみる母親の障害受容過程と教師の言葉掛けとの関係 ー幼稚園教育における親支援の事例研究ー	虫明淑子・西山 修・高橋敏之
親と子育てを共有する「ラーニング・ストーリー」の試み ー子育て支援ルームにおける親子の遊びの記録からー	高畑芳美
ライフスキルを強化する薬物乱用防止教育後の効果評価 ーテキストマイニングによる内容分析を通してー	上田裕子・鬼頭英明
太平洋戦争期のハワイにおける幼稚園教育に関する研究	塩路晶子
学級経営における小学校教師に必要な資質能力に関する研究 ー教師のコンピテンシーを考えるー	林 夏代・木村直子
英語学習初期の日本人幼児に対する音声指導は音素の範疇化が発達することを促進する のか	伊達正起
中学校読書指導における「ブックリスト」の機能と条件に関する考察 ーS50年版『改訂標準中学国語』（教育出版）を手がかりにー	谷木由利
日本軍占領下の海南島教育 ー海南師範学校を中心にー	趙 従勝
教員養成系大学・学部におけるシラバスからみたGIS教育の現状	矢部直人・橋本暁子
高齢女性が過疎山村に住み続ける理由の一考察 ー岡山県鏡野町富地域の事例ー	野邊政雄
土の黒さ（腐植量と鉄含有量）に関する研究とその教材性の検討	三好美恵・喜多雅一
表現者と共にいるということ ー生きづらさを抱える人の芸術表現に関する実践的研究ー	安藤郁子・高石次郎
嗅覚・触覚を意識した観察が児童生徒の絵画表現に及ぼす影響の研究	清田哲男
高齢者の歌唱時における涙の表出についての一考察 ー歌唱活動による日常生活の創造ー	山下世史佳・虫明眞砂子
授業実践を通じた学生・指導者・研究者の学びと意識の変容 ー小学校音楽授業におけるデザインベース研究の導入ー	早川倫子・小川容子
体育授業に対する学習戦略のモデル構築 ー中学校生徒を対象にしてー	長田則子・梅野圭史・池上哲也 小林 徹

6 共同研究プロジェクトの成果

記号	プロジェクトの名称	プロジェクト代表者		研究年度
		氏 名	所属	
D	スクールリーダー育成のための教育プログラムの開発 ー地域診断による環境要因分析からマネジメント能力・評価能力の育成までー	高橋 香代	岡山	H16～H18
E	教育実践学の理論構築及びモデル研究	岩田 一彦	兵庫	H17～H19
F	教育実践の観点から捉える「教科内容学」の研究	西園 芳信	鳴門	H18～H20
G	初等教育段階における系統的英語教育に関わる教師教育プログラムの協働開発 ー連合大学院の特性を生かした学校教育実践学構築のモデルとしてー	勝野 眞吾	兵庫	H18～H20
H	教師の実践的指導力育成の方略に関する日独共同研究 ー学部・大学院の養成・研修カリキュラムにおける教育科学教育と実習教育（インターンシップ）の機能的位置づけを中心にしてー	渡邊 満	兵庫	H19～H21
I	社会系教科目の授業実践を支援する学習材の開発 ー教師・学習材・子どもの相互関係の解明をめざしてー	草原 和博 ※1 西村 公孝	鳴門	H20～H22
J	「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践の総合的研究	安部 崇慶	兵庫	H21～H23
K	情動知能を育む教育「人間発達科」の新たな展開 ー児童生徒の問題行動防止教育プログラムの開発に関する実践的・学際的・国際的アプローチー	松村 京子	兵庫	H21～H23
L	健康と適応を守る学校予防教育の国際比較研究 ー独自性と共通性の探求から、新たな発展への模索ー	山崎 勝之	鳴門	H22～H24
M	地域における理数教育活性化のための教員研修モデル・プログラムの開発・評価に関する教育実践学的研究	小林 辰至	上越	H23～H25
N	社会科授業研究における教育実践学的方法論の構築と展開 ーPDCAに基づく授業理論の有効性の検証と社会科授業研究スタンダード開発ー	梅津 正美	鳴門	H24～H26
O	持続可能な社会を構築する学校安全、防災教育・防災管理の実践的研究	藤岡 達也 ※2 宮下 敏恵 村田 守	上越 上越 鳴門	H24～H26
P	システマ的思考に基づいたイノベーション力の育成を図る技術・情報教育体系に関する研究	森山 潤	兵庫	H25～H27
Q	芸術表現教育におけるコンピテンシー育成のためのプログラム開発に関する研究	時得 紀子	上越	H26～H28 (進行中)
R	包括的健康教育プログラム構築に向けての国際学術研究 ー生命科学、行動科学、情動科学の複合領域の視点によるアプローチー	鬼頭 英明 ※3 吉岡 秀文 伊藤 武彦	岡山	H27～H29 (進行中)
S	災害で大切な人を亡くした子どもの教育・心理支援の指針 ー日本・中国・アメリカ・インドネシアにおける調査研究ー	富永 良喜	兵庫	H27～H29 (進行中)
T	現代的学校教育問題への効果的な対応が可能な教員・臨床心理士の養成研究 ー性の多様性に関する国際研究と価値観の変容研究ー	葛西真記子	鳴門	H28～H30 (進行中)

※1 草原和博（H20.4～H21.3）、西村公孝（H21.4～H23.3）

※2 藤岡達也（H24.4～H25.9）、宮下敏恵（H25.10～H26.3）、村田 守（H26.4～H27.3）

※3 鬼頭英明（H27.4～H28.3）、吉岡秀文（H28.4～H28.8）、伊藤武彦（H28.9～現在）

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの 名称	スクールリーダー育成のための教育プログラムの開発 ー地域診断による環境要因の分析からマネジメント能力・評価能力の育成ー		
研 究 期 間	平成16年4月1日～平成18年3月31日	プロジェクト記号	D
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎高橋 香代・教授・岡山大学		古市 裕一・教授・岡山大学	
北神 正行・教授・岡山大学		淵上 克義・教授・岡山大学	
佐古 秀一・教授・鳴門教育大学		伊藤 武彦・助教授・岡山大学	
岩井 彌一・教授・上越教育大学		西岡 伸紀・教授・兵庫教育大学	
加治佐 哲也・教授・兵庫教育大学			
田中 宏二・教授・岡山大学			
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。 平成16年度から平成18年度まで、兵庫教育大学連合大学院学校教育学研究科の共同研究プロジェクトD「スクールリーダー育成のための教育プログラムの開発ー地域診断による環境要因の分析からマネジメント能力・評価能力の育成ー」は、次の目的をもって取組まれたものである。 現代教育改革の中で進められつつある自律的な学校経営の実現は、教育現場におけるスクールリーダーのマネジメント力に大きく依存しており、その力量の育成と向上には新たな教育プログラムの開発が不可避となっている。変化の激しい社会状況下で多くの教育課題を抱える現在、スクールリーダー育成のためには、地域診断等根拠に基づいた学校改善計画の立案と目標設定、具現化するための教育組織マネジメント能力、評価能力をいかに育成・向上させていくかについての研究と実践に取り組む必要がある。特に、学校現場でのフィールド活動で実践的に方法や内容について深めていくとともに、判断する根拠の提示など説明責任を果たすスキルの獲得など新たな状況への対応が必要となっている。 平成18年7月に中央教育審議会から「今後の教員養成・免許制度の在り方について」と題する答申が提出され、その中で教員養成に特化した専門職大学院である「教職大学院」の創設が提案された。その中で、教職大学院の主要な機能として、「一定の教職経験を有する現職教員を対象に、地域や学校における指導的役割を果たし得る教員として、不可欠な確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えた「スクールリーダー(中核的中堅教員)」の養成」が掲げられている。今後、スクールリーダーの養成方法として、大学院での教育が本格化する兆しがあるといえる。 このような政策的な動向も視野に入れて、本共同研究プロジェクトは新たな学校経営環境のもとで求められるスクールリーダーの専門的力量的育成のために、教育プログラムの開発を目的としたものである。 平成16年度には、下記の調査研究を実施し、報告書を作成した。 1) 学校管理職に必要とされる力量に関する調査を行うために、岡山県教育委員会主催「平成16年度新任教頭研修講座」を企画・後援し、学校管理職に必要とされる力量に関する調査を行った。 2) ワークショップ「スクールリーダー育成のための教育プログラムの開発」開催（平成16年12月4日）し、岡山県内教育委員会と論議を深めた。 3) 地域診断による環境要因の分析研究は、コミュニティスクールにおける取り組みを事例として、岡山市立岡輝中学校区をフィールドとして実施した。 4) 学校危機管理体制づくりに関する研究は、資料収集とあり方についての論議を行い、学校危機管理体制作りの実態調査等を行なうための準備を行った。 平成17年度には、平成16年度の基礎資料の収集と学校管理職に必要とされる力量に関する調査、コミュニティスクールにおけるフィールド研究の成果をもとに、下記の事業を実施した。 1) 学校管理職養成教育プログラム開発に関する調査（平成17年8月から9月） 昨年度に続き岡山県教育委員会主催「平成17年度新任教頭研修講座」を共同開催し、育成プログラムの調査・分析を行った。あわせて、本年度は岡山県内公立学校の現職校長・教頭1461名、2004年度退職校長113名を対象に学校管理職養成教育プログラム開発に関するアンケート調査を実施し分析した。スクールリーダー養成の最も望ましい形態として、教職大学院を挙げる者が校長の場合、33.1%、教頭の場合が37.9%と回答している。また、「岡山県に教職大学院・現職教員コースが設置された場合、教員に入学を進めるか」の結果では、「そう思う」とする割合が、校長の場合70.9%、教頭の場合69.6%と7割の管理職が肯定する回答を寄せている。下記の			

シンポジウムで発表するとともに、平成17年度研究成果報告書にその結果をまとめた。

2) シンポジウム開催（平成17年11月19日）

題目「学校経営におけるマネジメント能力をいかに育てるか

ー学校組織マネジメントの独自性と個性性」

シンポジウムは「学校経営におけるマネジメント能力をいかに育てるか」をテーマに、フィールド研究に基づいた地域診断と、リスクマネジメント能力の育成、ならびにスクールリーダー育成の展望としてプログラム開発の方向性と課題を取り上げた。司会は北神正行（岡山大学）、淵上克義（岡山大学）が担当し、下記の内容・発表者である。参加者は、岡山県教育委員会、岡山市教委、倉敷市教委、岡山県内公立学校の現職校長・教頭等150名の参加者があった。シンポジウムの時間が非常に短く感じるほど刺激的なシンポジウムであった。

(1) マネジメントのための地域診断ーコミュニティスクールの事例を通して

1) 学校を取り囲む地域環境の変遷と学校経営

森谷正孝（岡山市立岡輝中学校長）

2) 地域環境をとらえる指標

伊藤武彦（岡山大学助教授）

(2) リスクマネジメント能力の育成

1) 地域特性を踏まえた学校安全対策の具体化と評価

西岡伸紀（兵庫教育大学教授）

2) 事例・事故から学ぶ学校の危機管理

若井彌一（上越教育大学教授）

(3) スクールリーダー育成の展望ープログラム開発の方向性と課題

佐藤博志（岡山大学助教授）

指定発言者：勝野真吾（兵庫教育大学副学長）

竹井千庫（岡山県教育庁教職員課参事）

平成18年度には、これまでの調査結果やワークショップ・シンポジウム議論を踏まえて、研究成果をまとめて公表するために、調査結果の整理や情報収集ならびに原稿依頼と編集作業を行い、平成19年3月「学校組織マネジメントとスクールリーダーースクールリーダー育成プログラム開発に向けてー」（編集 北神正行、高橋香代、学文社）として発刊した。

この著書の概要ならびに具体的な構成・著者は下記の通りである。

まず、第1章では現代学校経営改革の動向の分析とともに、そこで求められるスクールリーダーの新たなリーダーシップの内容について検討している。

また、第2章から第4章では、学校の組織という点に着目して、その活性化や組織開発に向けての課題や地域特性を踏まえた学校づくりの在り方という観点から、基本的な枠組みの論述とともに、そうした力量形成に向けての教育プログラムの提案を行っている。

続く第5章から第7章では、学校のリスクマネジメントの側面から、必要とされる力量の内容とその育成に向けたプログラムの提案がされている。

第8章から第10章では、スクールリーダー育成のシステムの問題として、大学院教育の在り方や教育委員会との連携について、教育プログラムの提案とともに具体的な検討を行っている。

第11章では岡山県教育委員会が実施している学校管理職対象の組織マネジメント研修について、その有効性及課題について論述し、第12章では岡山県の公立学校長・教頭等を対象とした調査研究をもとに、教育プログラム開発の可能性について分析を行っている。

こうした内容構成のもとで、一つはスクールリーダー育成の理論的な整理を、もう一つの観点ではそれぞれの分野領域で求められる専門的力量育成に向けたプログラムの提案という構成で編集しており、教職大学院での教育や教育センター等での管理職研修等に役立つと考えている。

「学校組織マネジメントとスクールリーダー

ースクールリーダー育成プログラム開発に向けてー」の構成

はじめに

高橋香代（岡山大学教授）

第1章 学校経営改革とスクールリーダーの役割変容

北神正行（岡山大学教授）

第2章 学校組織の活性化と校長のリーダーシップ

淵上克義（岡山大学教授）

第3章 学校改善と組織変革ー学校組織の個業化、統制化、協働化の比較を通してー

佐古秀一（鳴門教育大学教授）

第4章 学校経営と地域診断・学校分析

伊藤武彦（岡山大学助教授）

第5章 発達支援のリスクマネジメント

ー問題行動（反社会的行動）に対する理解と支援、矯正教育からの示唆ー

松浦直己（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）

第6章 学校保健におけるリスクマネジメント

田嶋八千代（埼玉県立常磐高等学校長）

第7章 学校安全のリスクマネジメント

西岡伸紀（兵庫教育大学教授）

第8章 スクールリーダー育成と大学院教育

若井彌一（上越教育大学教授）

第9章 スクールリーダー育成と大学院教育の実際

丸山直也（岡山大学大学院教育組織マネジメント専攻・岡山県倉敷市立南中学校教頭）

第10章 スクールリーダー育成と大学・教育委員会の連携

ー兵庫教育大学の養成プログラムー

加治佐哲也（兵庫教育大学教授）

第11章 岡山県における学校組織マネジメント研修の実施状況および成果と課題

金光一雄（岡山県教育庁教職員課総括副参事）、宮野正司（前岡山県教育長）

第12章 スクールリーダー育成の展望—プログラム開発の方向性と課題—

佐藤博志（岡山大学助教授），加納亜紀（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）

研究の最終報告書である「学校組織マネジメントとスクールリーダー—スクールリーダー育成プログラム開発に向けて—」（学文社）以外には，平成16年度研究成果報告書，平成17年度研究成果報告書を発行した。また，研究成果の一部を，伊藤武彦が第63回日本公衆衛生学会で「エクセル上の地図描画プログラムの作成（続報）」，第64回日本公衆衛生学会で「通学区域表示システムの作成とそれを用いた分析の試み」の題目で，発表した。

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの 名称	教育実践学の理論構築及びモデル研究		
研 究 期 間	平成17年4月1日～平成20年3月31日	プロジェクト記号	E
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎岩田 一彦・研究科長・兵庫教育大学	小川 昌文・教授・横浜国立大学（元上越教育大学）		
福本 謹一・研究主幹・兵庫教育大学	梅野 圭史・教授・鳴門教育大学		
佐藤 真・教授・兵庫教育大学	渡邊 満・副研究科長・兵庫教育大学（推進担当者）		
渡邊 隆信・准教授・兵庫教育大学	溝上 武實・副研究科長・上越教育大学（推進担当者）		
青木多寿子・准教授・広島大学（元岡山大学）	上原 兼善・副研究科長・岡山大学（推進担当者）		
山岡俊比古・教授・兵庫教育大学	橋本 俊顯・副研究科長・鳴門教育大学（推進担当者）		
中村 哲・教授・兵庫教育大学	有澤俊太郎・前副研究科長・上越教育大学（推進担当者）		
小林 辰至・教授・上越教育大学	草地 功・前副研究科長・岡山大学（推進担当者）		
西村 俊夫・教授・上越教育大学	西園 芳信・前副研究科長・鳴門教育大学（推進担当者）		
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。 ●平成17年度 本年度は、1)教育実践学に関連する基礎的な教育理論の動向把握、2)教育実践学の研究モデルの追求、3)教育実践学的展開を行う組織・機関の特定と実地調査、4)研究成果の教育的活用と「教育実践学の構築 第3集（仮称）」の刊行の研究計画事項のうち、1)～3)に関して、下記のような研究活動を展開した。 ○研究会等開催状況 ・5月9日（月）第1回研究会（於：大阪サテライト） 研究グループとして、①教授方略の体系化に関わる教育実践学研究、②総合学習・市民的資質 形成に視点を置いた教育実践学研究、③教師によるカリキュラム編成に関する教育実践学研究的の3つに区分することを確認し、これまでの個々の研究ベースと本プロジェクト研究への貢献について検討した。 ・10月16日（日）第2回研究会（於：大阪サテライト） 各研究グループの研究課題について進捗報告を行い、研究課題の遂行をより充実するため、渡邊隆信助教授（方法・兵庫）及び小川昌文教授（芸術・上越）の2名を構成員に追加することを決定し、本年度の海外調査計画と次年度の国際シンポジウムの開催について意見交換を行った。 ・2月6日（月）Mini国際シンポジウム（於：兵庫教育大学芸術棟） 基幹研究であるプロジェクトEが主体となり、英国から来日のアーサー教授、デービス上級講師を招き、市民性教育をテーマにMini国際シンポを開催した。 ・3月29日（水）第3回研究会開催（於：大阪サテライト） 本年度の海外調査報告（欧州班、米国班、中国上海班）を行い、各研究課題についての初年度の研究結果の発表を行った。また、国際シンポジウムの構成案、及び研究科創立10周年記念式典等実行委員会に提出するための招へい研究者リストを作成した。 ○教育実践学構築ワーキング（於：スペースアルファ神戸） プロジェクトEの活動と並行して、研究科の基幹研究として、著書『教育実践学の構築—モデル論文の分析と理念型の提示を通して—』を刊行するための執筆者全員を対象として教育実践学構築研究会を7月30日～31日に、また、ワーキング構成員と副研究科長による第2回目の研究会を開催し、教育実践学の理念、現状、展開モデル、展望について内容構成のすり合わせを実施した。 ○調査活動 ・12月14日～12月19日：中国上海（華東師範大学、同済大学及び近郊諸学校）の訪問調査を実施 ・2月27日～3月8日：ドイツ（ブラウンシュバイク工科大学、オルデンブルグ大学）及びイギリス（ヨーク大学、ロンドン大			

学)の訪問調査を実施

・2月27日～3月8日：アメリカ合衆国（インディアナ大学、ニューヨーク大学、南フロリダ大学及び近郊諸学校）の訪問調査を実施

●平成18年度

◎平成18年度の研究計画

連合学校教育学研究科設立10周年の記念行事と連動して、中間報告を含めたシンポジウムなどの成果報告を行う。シンポジウムを含め実践学の構築に関連する国内外の優れた研究者の招聘を行い、連合学校教育学研究科以外の組織との交流や人的交流を活性化して研究の実質的な深化を図るようとする。

海外との人的交流に関しては、特定教科の授業論的なものよりも現代の教育課題に対応した学際的・横断的なプログラムなどの教育実践、学力論、教育評価など広く示唆を与えることのできる研究者で、長期的に国際交流が可能な人材を選定する。教育実践学モデル論文の整理に関連しては、その特徴分析など具体的な作業を行うと共に、具体的教育実践を行うことも視野に入れて新たな授業研究モデルを模索する。

◎研究経過

全体会議（H18.3.29）

全体計画の確認と18年度の計画の確認を行った。

全体計画は、以下の通り

- (1)教育実践学の理論構築に関する内外の文献調査を行うこと
 - (2)モデル論文を内外から収集・分析して、理念型を開発すること
 - (3)教育実践学の展開が行われている研究組織の実地調査をして、その実態を明らかにすること
 - (4)外国の研究者で教育実践学の構築に有効な示唆を与えることのできる人を招きフォーラム、シンポジウムを開催すること
 - (5)1から4までの研究成果を講義・演習に反映させる仕組み、内容の開発を行うこと
 - (6)研究成果を「教育実践学の構築第3集」として刊行すること
- (3)に関して海外の研究組織を訪問するため、以下のテーマ別にグループ編成を行い、海外調査旅行を行った。
- ・グループ1 「総合学習・市民的資質形成に視点をのせた教育実践学研究」 ドイツ、イギリス
 - ・グループ2 「教師によるカリキュラム編成に関する教育実践学研究」 アメリカ
 - ・グループ3 「教授方略の体系化に関わる教育実践学研究」 ニュージーランド、中国、韓国

・第1回全体会議開催（H18.7.1:大阪サテライト）

各グループの海外調査報告を主体として、教育実践学の構築に関する討議を行った。海外調査の成果として教育実践学に示唆を与えることのできる研究者との情報交換が蓄積されると同時に、連合大学院10周年記念行事の一環として国際シンポジウムを開催した。

・連合大学院10周年記念国際シンポジウムの開催（H18.9.23:国際会議場グランキューブ大阪）

渡邊満副研究科長を責任者として国際シンポジウムを開催し、ヴェリアルヴィー教授（フィンランド）、ノイマン教授（ドイツ）、パロン教授（アメリカ）、鍾教授（中国）の4名による招待講演を実施した。

・第2回全体会議開催（H19.1.13:大阪サテライト）

研究自体の進捗については、17、18年度の研究成果を中間報告書として3月中旬に刊行した。

●平成19年度

研究会

6月23日（土）（於：大阪サテライト）各グループでの研究の進捗状況の報告を行った。

12月23日（日）（於：大阪サテライト）各グループで研究の成果報告を行い、研究全体の総括を行った。

特別講演会

・平成19年9月25日（火）「学習材としての社会科教科書の機能とその活用に関する調査研究」（於：兵庫教育大学芸術棟）

講師：アンソニー・ヘインズ氏（The Professional and Higher Partnership CEO）

講演題目：市民性教育と学習材—優れた実践のための諸原則—

・平成20年1月10日（木）「市民性教育課題の解決に向けた新提案」（兵庫教育大学附属図書館）

講師：Prof. Cathie Holden : University of Exeter

「市民性教育課題の解決に向けた新提案—教授学的論争問題の視点から—」

講師：Dr. Peter Brett : St. Martin's College

「市民性教育課題の解決に向けた新提案—参画と社会連携の視点から—」

研究成果の報告

3年間の研究成果は最終報告書として3月末に刊行した。そのうち以下はA論文として公表されたものである。

【成果】A論文

(1) 永益泰彦・小林辰至：「高校生の仮説設定能力に関する要因の構造—生物I選択者における質問紙調査の分析から—」，理科教育学研究，日本理科教育学会，第48巻 第2号，pp. 63-70，2007.

(2) 小林辰至・永益泰彦：「社会的ニーズとしての科学的素養のある小学校教員養成のための課題と展望」，科学教育研究，日本科学教育学会，第30巻 第3号，pp. 185-193，2007.

(3) 福本謹一：「芸術教育の世界的な動向分析と課題—ユネスコ芸術教育会議2006を中心に—」，大学美術教育学会誌，大学美術教育学会，第39号pp. 311-318，2007

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの名称	教育実践の観点から捉える「教科内容学」の研究		
研究期間	平成18年4月1日～平成21年3月31日	プロジェクト記号	F
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎西園 芳信・教授・鳴門教育大学	大石 雅章・教授・鳴門教育大学		
頃安 利秀・教授・鳴門教育大学	松岡 隆・教授・鳴門教育大学		
余郷 裕次・教授・鳴門教育大学	松本 伸示・教授・兵庫教育大学		
福本 謹一・教授・兵庫教育大学	梅野 圭史・教授・兵庫教育大学		
山木 朝彦・教授・鳴門教育大学	後藤 幸弘・教授・兵庫教育大学		
秋田 美代・准教授・鳴門教育大学	増井 三夫・教授・上越教育大学		
西村 公孝・教授・鳴門教育大学	村井万里子・教授・鳴門教育大学		
奥村 高明・国立教育政策研究所	林 修・准教授・中国学園大学		
大倉 泰裕・国立教育政策研究所	村井 嘉子・D3・上越教育大学		
大熊 信彦・国立教育政策研究所			
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。 ○研究の課題と目的 「国立の教員養成大学・学部の在り方に関する懇談会」（平成13年）の報告書でも指摘されているように我が国の教員養成における教科専門の教育内容は、教員養成大学・学部の専門科学として確立されておらず、そのために学校教育における教科内容との直接的な結びつきが少ないという実態がある。また実践的指導力をもったスクールリーダーを養成することを目的として新しく設置された教職大学院のカリキュラムも、その中心となるものは教育課程の編成、教科等の実践的指導方法、生徒指導、学級経営、教育実習等の教職に関する授業科目のみで、各教科の教科内容の授業科目を欠いたものになっている。 このような課題意識から、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科共同研究プロジェクトFは「教育実践の観点から捉える『教科内容学』の研究」というテーマの下、「小・中・高等学校各教科の教科内容の選択や構成の原理と枠組みを析出することによって、児童・生徒の学力育成に寄与する教員養成の教科内容（教科専門）の在り方を検討し、提案する」ことを目的にし、研究を推進してきた。平成18年4月から21年3月までの3年間の研究活動とその成果は、次の通りである。 18年度の研究 ○目標：18年度は、1）「教科内容学」研究の現状と課題の把握2）各教科の教科内容の選択や構成方法の現状と課題の把握を中心に、下記のような研究活動を展開した。 ○研究経過 ・7月31日（月）第1回研究会（於：鳴門教育大学） 第1回の研究会では、プロジェクトFの研究課題、研究方法、研究計画について、検討した。 ・9月24日（日）第2回研究会（於：大阪イノベーションセンター・多目的スペース4） 第2回研究会では、①教科内容学研究の現状と課題の把握、②各教科（国語科・社会科・算数数学科・理科・音楽科・美術科・体育科）の教科内容研究の現状と課題を把握するために、①基調講演「教科教育学としての教科内容学研究の現状と課題」講師大槻和夫（安田女子大学教授）と②各教科の教育実践からみた教科内容の現状と課題についての発表を行い、討議を行った。 ・3月21日（水）第3回研究会（於：大阪イノベーションセンター・多目的スペース4） 第3回研究会では、①教科内容学研究の研究方法と②各教科の教科内容の構成原理を究明するために、①基調講演「教育実践の観点から捉える教科内容研究の研究方法」増井三夫（上越教育大学教授）と②各教科の教科内容の選択や構成方法について発表し、教科内容の「学」としての研究方法と教科内容の選択や構成の視点について、プロジェクトメンバーが共通理解することをした。 19年度の研究 ○目標：19年度は、1）各教科の教科内容の選択や構成方法の現状と課題について論点を整理すること、2）各教科の教科内容構成の原理とそのモデルを提案することを目標にし、下記のような研究活動を展開した。			

○研究経過

・平成19年10月18年度の研究目標、各教科（国語科・社会科・算数・数学科・理科・音楽科・美術科・体育科）の教科内容の構成方法の研究と課題について整理し、その上で、19年度の研究目標となる各教科の教科内容の選択や構成方法について論点を整理した。そして、これらの内容を1年次の報告書「教育実践の観点から捉える『教科内容学』の研究」（平成19年10月）としてまとめた。

・平成20年1月24日（木）調査研究教科内容学研究と実践について、先行して行っている広島大学大学院教育学研究科と教育学部を尋ね、その後の研究成果と実際についてインタビューによる調査をした。

・20年2月23日（土）第4回研究会（於：大阪イノベーションセンター・多目的スペース2）第4回研究会では、各教科の教科内容構成原理とモデルの提案のために、①広島大学大学院教育学研究科「教科内容学」モデルについての調査研究報告と②各教科の教科内容構成原理とモデルの提案を行い、これらの発表と討議から③全教科に共通する教科内容構成の原理について、共通理解を図った。

20年度の研究

○目標：20年度は、教育実践の観点から捉えた教員養成の教科内容構成（教科専門）の在り方を検討し、そのモデルを提案することを目標として、下記のような研究活動を展開した。

○研究経過

・平成20年11月29日（土）30日（日）第5回研究会（於：大阪イノベーションセンター・多目的スペース3）第5回研究会では、教育実践の観点から捉えた教員養成の教科内容構成（教科専門）の在り方を検討するために①基調講演「算数・数学に係わる内容学の可能性と課題」講師中村光一（東京学芸大学教授）と②教員養成としての各教科（国語科・社会科・算数・数学科・理科・音楽科・美術科・体育科）の教科内容構成原理と枠組みの提案を行い、検討を行った。

・12月23日（火）13時00～17時00 第6回研究会（於：大阪イノベーションセンター・大阪サテライト）第6回研究会では、このプロジェクトの研究成果の出版計画と内容、及び原稿執筆計画について、検討した。

・21年3月21日（土）最終報告としてのシンポジウム開催（於：大阪イノベーションセンター・多目的スペース2）
テーマ 教員養成のための「教科内容学」の在り方—教育実践から捉える「教科内容学」の構築を目指して—
共催：京都教育大学大学院連合教職実践研究科

プログラム

第1部基調講演

演題「京都教育大学大学院連合教職実践研究科における教科内容学の要望と課題」

講師堀内孜（京都教育大学大学院連合教職実践研究科教授）

第2部各教科の事例発表

第3部パネルディスカッション

テーマ「教員養成のための『教科内容学』の在り方をめぐって」

司会 ○西園芳信（鳴門教育大学大学院教授）

パネリスト ○増井三夫（上越教育大学大学院教授）

○土屋武志（愛知教育大学教授）

○今岡光範（広島大学大学院教授）

○中村光一（東京学芸大学教授）

○研究成果の報告

平成20年度には、これまでの6回の研究会、調査研究、シンポジウムの議論を踏まえ、研究成果をまとめ公表するために、原稿依頼と編集作業を行い、平成21年3月に『教育実践の観点から捉える教員養成のための教科内容学研究』（編著西園芳信、増井三夫、風間書房）として発刊した。（全256頁）

この著書の概要並びに具体的な構成・著者は下記の通りである。

序章では、本研究の課題と方法について述べ、第1章では、教員養成としての教科内容学（教科専門）研究の歴史を概括することによって、「教科内容学」研究の成果と課題を捉え、そこから「教科内容学」の学的研究の特質を導出している。第2章から第8章では、各教科（国語科、社会科、数学科、理科、音楽科、図画工作・美術科、体育科）の教科内容構成の原理と枠組みについて、①これまでの教員養成の教科内容（教科専門）構成の実態、②教育実践から捉える教科内容構成の原理、③教員養成の教科内容（教科専門）構成の在り方、の視点から提案している。そして、終章では、本研究の成果と課題を述べている。

本研究の成果は、これまでの教科専門のパラダイムを転換し、教員養成大学・学部の教科内容「学」についてシラバス案までを含め提案したところにある。以下の章立ての（ ）内は、頁数。

はじめに(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・西園芳信

目次(3)・・

序章研究の課題と経過(7)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・西園芳信

第1章教員養成としての教科内容学（教科専門）研究の歴史(22)・・・・・・・・増井三夫

第2章国語科の教科内容構成の原理と枠組み(30)・・・・・・・・村井万里子 余郷裕次

第3章社会科の教科内容構成の原理と枠組み(30)・・・・・・・・西村公孝 大石雅章

第4章数学科の教科内容構成の原理と枠組み(30)・・・・・・・・松岡 隆 秋田美代

第5章理科の教科内容構成の原理と枠組み(30)・・・・・・・・・・・・・・・・松本伸示

第6章音楽科の教科内容構成の原理と枠組み(30)・・・・・・・・西園芳信・頃安利秀・大熊信彦

第7章美術科の教科内容構成の原理と枠組み(30)・・・・・・・・福本謹一・山木朝彦・奥村高明

第8章体育科の教科内容構成の原理と枠組み(30)・・・・・・・・梅野圭史・後藤幸弘・林 修

終章研究の成果と今後の課題(6)・・・・・・・・・・・・・・・・増井三夫

おわりに(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・増井三夫

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの名称	初等教育段階における系統的英語教育に関わる教師教育プログラムの協働開発ー連合大学院の特性を生かした学校教育実践学構築のモデルとしてー		
研 究 期 間	平成18年4月1日～平成21年3月31日	プロジェクト記号	G
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎勝野 眞吾・副学長・兵庫教育大学		今井 裕之・准教授・兵庫教育大学	
戸北 凱惟・副学長・上越教育大学		吉田 達弘・准教授・兵庫教育大学	
田中 雄三・理事・鳴門教育大学		中田 賀之・准教授・兵庫教育大学	
平野 絹枝・教授・上越教育大学		太田垣正義・教授・鳴門教育大学	
大場 浩正・准教授・上越教育大学		伊東 治己・教授・鳴門教育大学	
石濱 博之・准教授・上越教育大学		兼重 昇・准教授・鳴門教育大学	
山岡俊比古・教授・兵庫教育大学		山森 直人・准教授・鳴門教育大学	
高橋美由紀・教授・愛知教育大学			
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。 ・最初に以下の8つの課題を確認した。 1 国内の教員養成課程における小学校英語教育関係の教育プログラムの分析 2 国内の教師のための教育・研修プログラムの分析 3 国内の初等教育段階での英語教育プログラムの分析 4 諸外国の初等教育段階での英語教育プログラム及び教師のための教育・研修プログラムの分析 5 初等教育段階での英語教育プログラムの開発 6 国際シンポジウムの開催 7 教師のための教育・研修プログラムの開発 8 報告書の出版 ・本プロジェクトの特徴である連合大学院の特性を生かした協働的研究開発を実現するために、各課題を全員で検討することを前提として、統括を担当する大学を以下のように分担した。 上越教育大学：課題3、課題5 兵庫教育大学：課題2、課題7 鳴門教育大学：課題1 ・協議検討は以下のように異なった形態で行い、結果として、全体会議3回、TV（電話）会議11回、国際シンポジウム1回を行った。 平成18年：全体会議2回、TV（電話）会議2回 平成19年：全体会議1回、TV（電話）会議4回 平成20年：国際シンポジウム1回、TV（電話）会議4回 平成21年：TV（電話）会議1回 ・課題4に関しては、手分けをし、大韓民国、中華人民共和国、台湾、フィンランドについてそれぞれ調査と分析を行った。 ・課題6の国際シンポジウムは「アジアにおける初等英語教育の今後の展開」のタイトルで、平成20年7月20日（日）に、ニチイ学館神戸ポートアイランドセンターにおいて、大韓民国、中華人民共和国、アメリカから専門家を招いて開催した。ほぼ予定どおりの参加人数（126名）を得た。 ・本プロジェクト研究の成果は、最終報告書（202ページ）にまとめている。 ・本プロジェクト研究にかかる研究成果としては、最終報告書以外に、いわゆるA論文として全国学会誌に掲載されたものが4本ある。			

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの 名称	教師の実践的指導力育成の方略に関する日独共同研究 ー学部・大学院の養成・研修カリキュラムにおける教育科学教育と実習教育 (インターンシップ)の機能的位置づけを中心にしてー		
研 究 期 間	平成19年4月1日～平成22年3月31日	プロジェクト記号	H
チーム構成員の氏名・職名等・所属(配属)大学 (◎: チームリーダー)			
◎渡邊 満・教授・兵庫教育大学	原 安利・D3・岡山大学		
森川 直・教授・岡山大学	カール・ノイマン・教授・ブラウンシュヴァイク工科大学		
木内 陽一・教授・鳴門教育大学	ハイデマリ・ケムニツ・教授・ブラウンシュヴァイク工科大学		
渡邊 隆信・准教授・兵庫教育大学	ディートヘルム・クラウゼ=ホトツプ・教授・ブラウンシュヴァイク工科大学		
別惣 淳二・准教授・兵庫教育大学	坂越 正樹・教授・広島大学		
大関 達也・講師・兵庫教育大学	早田 恵美・教諭・久留米市立高牟礼中学校		
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動(研究会開催、調査活動、研究成果の公表等)の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、 簡潔に箇条書きでお書きください。			
<1年目(19年度)の研究活動>			
①日本のプロジェクト構成員が大阪サテライトにて3回(5月、10月、3月)の研究会を開催し、プロジェクト 研究の進め方と各構成員の研究の進捗状況について議論した。			
②渡邊隆信が6月～7月の2ヶ月間、ドイツのブラウンシュヴァイク工科大学に滞在して、ドイツならびに同大 学における教員養成・研修カリキュラムについて調査をおこなった。同時に、ドイツ側のプロジェクト構成員 に対して、日本とりわけ兵庫教育大学の学部・大学院の教員養成・研修カリキュラムについて情報提供をおこ なった。			
③7月14日～21日に、渡邊満、森川直、木内陽一、別惣淳二、大関達也がドイツを訪れ、ブラウンシュバイク工 科大学にてドイツ側のプロジェクト構成員と共に、教師教育に関する専門家会議を開催した。また、教員養成 の第二段階を担当するブラウンシュヴァイク教員研修所を訪問し、試補期間における研修カリキュラムについ て調査した。			
<2年目(20年度)の研究活動>			
①日本のプロジェクト構成員が大阪サテライトにて3回(5月、10月、2月)の研究会を開催し、プロジェクト 研究の進め方と各構成員の研究の進捗状況について議論した。			
②渡邊隆信と別惣淳二が、9月22日から10月2日まで、ドイツのブラウンシュヴァイク工科大学、リューネブルク 大学、オルデンブルク大学を訪問し、教員養成スタンダードに関する大学教員/実習指導教員の日独意識調査 のためのアンケートの作成と協力依頼をおこなった。日本においても、兵庫教育大学、上越教育大学、岡山大 学、鳴門教育大学の大学教員ならびに附属小学校教員を対象に、アンケート調査を実施した。			
③10月18/19日に兵庫教育大学において、ドイツからノイマン教授、ケムニツ教授、クラウゼ=ホトツプ教員 を招き、日本のプロジェクト構成員と合同で、日独の教員養成に関する研究討議ならびに来年度に向けての共 同研究の打合せをおこなった。			
④これまでの研究成果の一部を、カール・ノイマン/渡邊隆信著『『良い』教師ー『資質・能力(コンピテンス)』 のある教師ー教職の専門性に関するドイツならびに国際的な議論についてー』(『教育実践学論集』第10号、21 年3月)にまとめ、発表した。			
<3年目(21年度)の研究活動>			
①日本のプロジェクト構成員が大阪サテライトにて1回(9月)の研究会を開催し、各構成員の研究の進捗状況、 及びプロジェクトの研究成果の公表について議論した。			
②日本教師教育学会第19回研究大会(10月3～4日:弘前大学)にて、渡邊満ら日本の構成員が「教員養成のス タンダード化に対する大学教員の意識ー日独調査の比較からー」と題する研究 発表を行った。			

- ③ 3月5日に兵庫教育大学において、連合大学院G P「組織的な大学院教育改革プログラム」と合同で、シンポジウム「日本とドイツの教師教育改革－未来のための教師をどう育てるか－」を開催した。
- ④ 3年間の研究成果を、渡邊満／カール・ノイマン編著『日本とドイツの教師教育改革－未来のための教師をどう育てるか－』（東信堂、22年3月）にまとめ、出版した。

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの 名称	社会系教科目の授業実践を支援する学習材の開発 ー教師・学習材・子どもの相互関係の解明をめざしてー		
研 究 期 間	平成18年4月1日～平成21年3月31日	プロジェクト記号	I
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎西村 公孝・教授・鳴門教育大学		草原 和博・教授・広島大学(平成20年度代表)	
岩田 一彦・特任教授・兵庫教育大学		中本 和彦・准教授・四天王寺大学	
梅津 正美・教授・鳴門教育大学		馬場 勝・指導主事・兵庫県教育委員会	
伊藤 直之・准教授・鳴門教育大学(平成22年度)		横井 香織・教諭・静岡市立観山中学校	
志村 喬・准教授・上越教育大学		石川 照子・教諭・兵庫県立西宮高等学校	
桑原 敏典・准教授・岡山大学		疋田 晴敬・教諭・愛知県立中村高等学校	
田中 伸・准教授・大阪大谷大学		Kaori Okumoto・ロンドン大学IOE	
坂井 誠亮・准教授・北海道教育大学		Anthony Haynes・The Professional and Higher Partnership	
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。 （平成20年度） 研究の初年度は、プロジェクト1年目ということで、プロジェクト推進のための基盤作りに専念した。 研究打ち合わせを、7月と11月と3月に開催した。各打ち合わせにおいて、学習材の理念と必要条件、および同条件を満たす学習材のフォーマット等について、意見交換を実施した。メンバーを、①試行、②初等社会、③中等地理、④中等歴史、⑤中等公民の5チームに編成した。全体の研究会に並行して、チーム単位での研究会・資料収集等も実施した。特に、試行チームは、他の4チームに先行するパイロット研究の役割を担い、研究を推進してきた。具体的には、以下のことを実施した。 ・先行研究の成果を批判的に摂取し、「世界の諸地域（アメリカ、インド、アフリカ）の理解」と「地域像のメタ理解」をうながす学習材の構成原理を仮説的に構築した。 ・同仮説に基づいて、副読本形式による学習材を開発した（16頁×4パターン）。学習材の有効性を検証するため、「授業の開発・改善に対する役立ち度」についてアンケート調査を実施した（量的検証）。 また、学習材を活用した実験授業を実施し、「授業での使いやすさ」「授業の分かりやすさ」について、教師・子どもへの聞き取り調査を準備している（質的検証）。 ・上の成果の一端は、2月21日～22日に開催された「第20回社会系教科教育学会研究発表大会」において発表した。 他のチームは、試行チームとの対比において、異なる理念・性格の学習材の開発を進めた。 ・初等社会チームは、「地域学習」における概念形成を支援する、デジタル媒体を含む学習材。 ・中等地理チームは、「系統・主題学習」「スキル学習」の改善を支援する学習材。 ・中等歴史チームは、「近現代史学習」の改善に資する、授業論にもとづく学習材・授業計画およびワークシートをセットにした「学習材キット」。 ・中等公民チームは、「人権学習」の改善に資する、事例研究とビジュアル性を重視した学習材。 また、「授業で使いやすい」「授業が分かりやすい」学習材の条件について知見を深めるため、3月に渡英し、以下の調査を実施した。 ・学校現場における教科書活用の現状。学習材に対する教師や子ども・保護者のニーズ。 ・出版社における教科書開発の現状。学習材の内容構成において編集者が留意している事項。 ・研究者における教科書研究の現状。学習材のあり方をめぐる論点・争点と研究の方法論。 （平成21年度） 1. 21年度は、プロジェクト2年目ということで昨年度の研究成果を踏まえ学習材の開発に専念した。 2. 研究打ち合わせ会を7月と11月と2月に開催した。各打ち合わせ会において、学習材の理念と必要条件、及び同条件を満たす学習フォーマットに従い、各グループは独自の教材を開発しその開発した教材を基に授業実践を行い、教材の有効性を検証した。			

3. 開発のチームは、昨年度からの継続性を重視して①試行チーム、②初等社会チーム、③中等地理チーム、④中等歴史チーム、⑤中等公民チームの5班で活動した。
4. 特に試行チームは、昨年度開発した「世界の諸地域（アメリカ、インド、アフリカ）の理解」と「地域像のメタ理解」をうながす学習材を再構成し、「インド」編の改善教材を作成し、大阪府、広島県内の中学校・高等学校において実践を試みた。
5. 中等地理チームは、図版資料と活動型の複合型教材を開発・精緻化するために「日本の商業と生活ー大型ショッピングセンターと地域社会ー」、「災害と防災」の学習材の開発に取り組んでいる。
6. 中等歴史チームは、図版を含む資料集型の学習材を活用した規範反省学習の小単元「管理された国民の健康」を開発した。今後、実践での検証を図ると共にもう一つの開発単元「日本の台湾における植民地政策の検証」を手がけた。
7. 中等公民チームは、中学校公民的分野で「裁判員制度」に関する教科書教材を開発し、西村が指導している教職大学院生の協力を得て、授業実践を行い教材の有効性について検証した。また、高校の公民科教材開発では「死刑制度」に関する学習材を見直し、新たな観点を加えた改善案を作成した。
8. 成果の途中報告を兼ねて、本プロジェクトの成果を深化させるために、特別セミナーとして「社会系教科目の授業実践における学習材の機能と活用」を企画した。イギリスからデイビット・ウィルキンソン博士を招いて、事前に石川照子教諭（兵庫県立西宮高等学校）が勤務校する日本史授業を参観してもらい、その提案授業を基にウィルキンソン博士が、イギリスでの証拠に基づく歴史授業実践を紹介し、日本とイギリスの学習材活用について検討会を開催した（12月）。
9. 2月の研究会では、それぞれのチームの実践の報告と学習材の改善の検討が行われ、合わせて3年目の研究推進について確認した。また、報告書のまとめ方も論文集の形に合意した。
10. 中等歴史チームと公民チームは、海外調査としてローマ、ベルリン、ベトナムなどで現地調査をおこない、裁判制度、歴史教材などの資料を収集し、学習材の開発に役立てた。

（平成22年度）

3年目にあたる平成22年度は、2回の研究会を実施するとともに各グループは授業実践を行い開発した学習材の有効性を検証した。また、第2回の研究会は3年間のまとめとして研究の成果を発表するとともに、公開シンポジウムを行い外部に広く研究の成果を公表した。そして、3年間の研究成果としてA論文2編を含む成果報告書を作成し、学校教育現場の実践に開発した学習材が役立つように、教材のCD化を図り、関係の機関等に配布した。

1. 第1回研究会（8月）

本年度の第1回（通算第7回）会議では、5つのそれぞれのチームのこれまでの実践による取り組みが報告され、最終年度としての学習材の改善が議論された。また、2年目までの理論と実践の融合を目指す論文の成果として、連合規準のA論文2編が掲載される見通しが報告された。

最終成果報告書の作成及び成果を公開するシンポジウムの持ち方を議論した。

2. 第2回研究会（2月）

2月6日（日）午後、連合大学院・大阪サテライトにおいて「授業実践を支援する学習材の条件とは何かを考える」成果発表会とシンポジウムを開催した。外部評価として開発した学習材を活用して授業実践を行って頂いた迫先生（広島県廿日市立大野中学校）、青木先生（広島県立加茂高等学校）、また、プロジェクト成果の整理を峯明秀先生（大阪教育大学）にお願いし、①開発者の意図、②教師の活用、③子どもの理解のプロセスから成果と課題を指摘して頂いた。会場からは①学習材作成者と実践者とのズレをどのように克服するのか、②学習材が解明している論理の研究上の意義は何かなどが質問された。最後に本プロジェクト顧問の岩田一彦先生から①学習材を改めてどのように考えるのか、②色々な形の学習材が開発された意義、③子どもが面白く使えるものでありつつ、学習のプロセスを保障しているなどのまとめの総合的評価を頂いた。

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの 名称	「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践の総合的研究		
研 究 期 間	平成21年4月1日～平成24年3月31日	プロジェクト記号	J
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎安部 崇慶・教授・兵庫教育大学		浅川 潔司・教授・兵庫教育大学	
中村 哲・教授・兵庫教育大学		大畑 健実・校長・島田市立第五小学校	
佐藤 真・教授・兵庫教育大学		前原 敏雄・元校長・東広島市立志和中学校	
福本 謹一・教授・兵庫教育大学		永添 祥多・教授・近畿大学	
永木 耕介・教授・兵庫教育大学		アレキサンダー・ベネット・准教授・関西大学	
山本 宏子・教授・岡山大学教育学部		沈 明敏・准教授・華東師範大学	
西園 芳信・副学長・鳴門教育大学		金 延姫・教授・京仁教育大学校	
余郷 裕次・教授・鳴門教育大学		張 東浩・准教授・全州教育大学校	
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。 1. プロジェクトの概要 平成18年12月に我が国における戦後約60年間の教育指針であった教育基本法が改正された。その教育目標のひとつとして、「我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成」が明記された。この教育基本法改正を踏まえて新しい学習指導要領の検討が中央教育審議会においてなされ、本年3月に文部科学省から新しい幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領等が公示されたのである。この新学習指導要領では、「確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する『生きる力』」の育成を理念として、伝統と文化に関する教育が重要な役割を有するものとされている。そして、学校教育の教育課程においては、国語科の古典、社会科の小学校歴史学習、中学校の地理・歴史・公民の三分野、技術・家庭の伝統的な生活文化、音楽科の唱歌・和楽器、美術科の我が国の美術文化、保健体育科の武道などの内容が充実事項とされている。 平成23年度からは小学校、平成24年度からは中学校において新学習指導要領の内容に基づく伝統と文化に関する教育の具体化が切実な課題となる。この課題に対しては、国及び各自治体において先駆的に実践研究がなされている。例えば、平成17年度から東京都教育委員会では「日本の伝統・文化理解教育推進事業」が始まり、推進校（60校園）の幼稚園、小中高、特別支援学校において教育研究を進展させている。さらに、国立教育政策研究所の「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」が、全国の小中高の研究推進校（100校程度）において実施されている。また、東広島市と静岡県島田市では地域の全小中学校において推進されている。高等学校においては平成19年度から都立学校における学校設定教科・科目として「日本の伝統・文化」、兵庫県では高校設定科目としての「日本の文化」が実践されている。また、平成20年度からは埼玉県の高校設定科目「伝統・文化」が始まっている。しかしながら、これらの先行研究は各推進校における実践研究に留まり、「伝統と文化」に関する教育の目標論としての学力形成の性格、教育課程の編成、授業実践の方法に関する理論的研究が着手されていない現状である。したがって、これらの先行授業事例を参考に我が国における「伝統と文化」に関する教育の実践研究を根拠づける理論的研究の推進が求められる。 本研究は、今後の我が国の重要な教育課題である「伝統と文化」に関する教育を理論的・実践的に推進するものである。研究目的としては、東京都、東広島市、島田市などの「伝統と文化」に関する教育の先駆的地域の実践を研究対象として歴史研究、理論研究、比較研究、実践研究、心理研究の方法に基づき、次の8事項を具体的に設定している。 ①日本と外国における「伝統と文化」に関する教育の教育課程と授業実践に関する資料収集とそのデータベースを開発する。 ②日本と外国における「伝統と文化」に基づく教育の授業実践の中からモデル授業実践を撮影し、デジタル映像記録を作成する。 ③日本における「伝統と文化」に関するモデル授業実践の授業内容と授業方法を歴史研究、理論研究、実践研究の方法によって解明する。 ④日本における「伝統と文化」に関するモデル授業実践に関与している学習者の学力を心理研究の方法によって解明する。 ⑤日本における「伝統と文化」に関する授業実践の研究成果を外国における調査研究成果と比較し、教育課程の編成と授業実践の共通性と相違性を解明する。 ⑥日本と外国における「伝統と文化」に関する教育課程と授業実践の研究成果を国内外の研究者と教育者による			

研究発表交流会を実施する。

⑦日本における「伝統と文化」に関するモデル教育課程とモデル授業実践を開発する。

⑧「伝統と文化」に関する教育の研究成果を図書として刊行をする。

2 プロジェクトの研究成果

本プロジェクトは、戦後約60年間の教育指針であった教育基本法の改正を受けて改訂された新学習指導要領に基づく教育改革と平成17年度から実施されてきた「伝統と文化」に関する教育の先駆的取組の動向を視野に、今後の我が国の重要な教育課題である「伝統と文化」に関する教育を理論的・実践的に推進するものである。その為、東京都、東広島市、島田市などの「伝統と文化」に関する教育の先駆的地域の実践を研究対象として歴史研究、理論研究、比較研究、実践研究、心理研究等の総合的方法に基づく研究となっている。そして、研究組織は教育史、教育方法、教科教育、教育心理等の研究者、東広島市と島田市の教育実践者、さらに海外の教育研究者も含めた構成となっている。

平成21年度では、伝統と文化に関する教育実践を観察・調査することを主目標として、文献・事例の収集・蓄積と先駆的地域の概査に基づいてWEBデータベースの開発を行った。平成22年度では、伝統と文化に関する教育実践を解明することを主目標として、各構成の問題関心を踏まえた歴史研究（芸道稽古論）、理論研究（実践から理論解明）、実践研究（理論から実践開発）、心理研究（学習意識と学習効果の調査）、比較研究（韓国と中国における動向）を推進した。平成23年度では、伝統と文化に関する教育実践の研究成果を公表することを主目標として、学会での発表と研究成果の刊行を行った。このような研究期間において、構成員会議を毎年実施（平成21年度5回、平成22年度4回、平成23年度2回）し、単著、編著、学会論文、国内外での学会発表、雑誌論文など100を超える研究成果を公表している。これらの研究成果の核として、平成24年3月に『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』（風間書房）が刊行されたのである。なお、本著については「日本教育新聞」（平成24年5月7・14日）の書評において紹介されている。

このような本プロジェクトの研究成果の意義としては次のことが指摘できる。

- ①本研究では「伝統と文化」に関する教育の先行事例を収集し、データベースを開発し、伝統と文化に関する教育の研究情報を社会的共有システムとして活用できる研究環境を構築していること。
- ②本研究では「伝統と文化」に関する教育を歴史研究、理論研究、実践研究、比較研究、心理研究等の方法に基づいて研究し、過去・現在・未来という時間的関連、地域・日本・諸外国という空間的関連、教育者と学習者の心理的関連を視野に、教育実践の総合的研究を推進していること。
- ③本研究では総合的な学習の時間における授業実践だけでなく、国語、社会、音楽、美術、体育、家庭などの各教科における授業実践と教育課程の編成も研究対象とし、教育課程としての教科と教科外の関連、教科指導における指導方法と学力形成との関連も研究していること。
- ④本研究では外国（韓国と中国）における「伝統と文化」に関する教育研究も取り入れ、日本の「伝統と文化」に関する教育研究との比較によって「伝統と文化」に関する教育の理論と実践を国際的視野から検討できること。
- ⑤本研究では「伝統と文化」に関する教育研究の視点を踏まえて、東広島市と島田市などの地域の学校との協力関連に基づいて研究し、教育研究の成果が地域における学校づくりと地域づくりに活用できること。
- ⑥本研究では研究成果を国内外の研究者と実践者との研究発表の場を設定し、研究成果を図書刊行によって公開し、研究成果が限られた研究者のみに提示されるのではなく、国内外の多くの教育関係者の関心を誘発できること。

なお、本研究の基盤となる「伝統と文化（和文化）教育実践WEB データベース」のURLは、次のようになっている。

<http://28.pro.tok2.com/~hyogoshakai/wa/index.html>

3 研究成果の公表（主な著書と論文）

1. 中村 哲、伝統と文化に関する教育、加藤幸次、明石要一、『小学校の社会科を読み解く』、日本文教出版、2009 pp. 22-27
2. 中村 哲、伝統や文化に関する教育をどう充実させるか、「月刊高校教育」、学事出版、2009、pp. 28-31
3. 中村 哲編著、『伝統や文化に関する教育の充実』、教育開発研究所、2009、pp. 1-229
4. Akitoshi Sogabe, Taketo Sasaki, Mitsuharu Kaya, Kosuke Nagaki, Shunsuke Yamasaki, Correlation between Heart Rate on Morning Rising and Condition of Judo Players during Training Camp 2009 Archives of Budo Vol. 5, pp. 41-45.
5. 永木 耕介、嘉納治五郎は何をみていたのかー嘉納の柔道思想、友添秀則編『スポーツ思想を学ぶ』現代スポーツ評論23、創文企画 2009、pp. 101-108
6. 永木 耕介、伝統文化を保健体育科でどう指導するか、中村哲編著『伝統や文化に関する教育の充実』教育開発研究所 2009、pp. 152-155.
7. 永添祥多、東京都と兵庫県における日本文化理解教育の展開、『九州教育経営学会研究紀要』第15号、2009 pp. 45-53
8. 永添祥多「チャレンジスクールにおける日本文化理解教育ー 東京都立大江戸高等学校を事例としてー」『日本高校教育学会年報』第15号、2009、pp. 36-45
9. 永添祥多、我が国の伝統や文化の教育に対する児童・生徒の意識実態、『九州教育経営学会研究紀要』第16号、2009、pp. 63-71
10. 中村 哲、和文化教育の動向と特色ー 東広島市、島田市、東京都の先進的取り組みを手がかりにー、『社会系諸科学の探究』、法律文化社、2010、pp. 89-101
11. 中村 哲、伝統文化教育の性格と教育実践、「国語科教育」明治図書、No. 717、2010、pp. 28-30
12. 余郷裕次『絵本のひみつー 絵本の知と読み聞かせの心ー』徳島新聞社 2010 pp. 1-115（本書は、絵本モニタージュ論に基づく絵本の分析とその読み聞かせの効果について、先行研究を踏まえながら仮説的に提起したもの

- である。絵本のキャラクターのベビーシエマの効果、画面構成の効果、色彩の効果、絵本モンタージュの効果等について、実際の絵本の分析を通して指摘するとともに、その読み聞かせの効果、母親語（育児語）との類似性、視覚的共同注視等の観点から追求している。さらに、絵本の読み聞かせの効果について、日本の伝統的言語文化の基盤になっている「呼吸」の問題と関わらせながら論じている。日本の伝統的言語文化の基盤となる「呼吸」とは、相手の呼吸を「引き込む」ことで、相手の呼吸と自分の呼吸とをシンクロさせるような「呼吸」であると指摘し、そのような「呼吸」の育成が絵本の読み聞かせの効果として期待できることを提起している。）
13. 永木 耕介、ヨーロッパにおける柔道普及と「柔道世界連盟」構想、生誕150 出版記念委員会編 『気概と行動の教育者－ 嘉納治五郎』(筑波大学出版会) 2010 pp. 188-201
 14. 永添祥多、我が国の伝統や文化に関する教育の充実という観点から見た『高等学校学習指導要領』の問題点、『和文化教育研究紀要』第5 号、2011, pp. 6-9
 15. 永添祥多、我が国の伝統や文化の教育に対する教員の意識実態、『和文化教育研究紀要』第5号、2011, pp. 21-24
 16. 中村 哲、武道におけるく ころゝ の鍛錬と武道教育の意義、『教育フォーラムく ころゝを育てる』、金子書房、No. 47、2011 、pp. 70-80
 17. 中村 哲、豊かな心をはぐくむ伝統と文化に関する教育活動、『兵庫教育』、兵庫県教育委員会 、No. 720、 2011 、pp. 4-9
 18. 西園芳信、デュイ芸術論にみる異民族芸術を経験することの意味、『鳴門教育大学研究紀要』第26 巻、2011 pp. 297-304.
 19. 永添祥多『日本文化理解教育の目的と可能性－ 小・中学校の事例を中心として－ 』風間書房、2011, pp. 1-26 0
 20. 永木 耕介、嘉納による柔術のスタンダード化と海外普及、菊幸一編『日本体育協会創成期における体育・スポーツと今日の課題－ 嘉納治五郎の成果と今日の課題－ 平成22 年度・日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ 』(日本体育協会) 2011 pp. 7-13
 21. 佐藤真、総合的な学習の時間・協同的な学習を生かした学習指導の創造と展開、『初等教育資料』文部科学省編・東洋館出版社 第861 号 2012.6 pp. 130-135
 22. 中村 哲、伝統と文化に関する教育の動向と意義、「日本教育」、日本教育会、 2012pp. 1-4
 24. 中村 哲、武道教育の意義と展望、國學院大学人間開発学会、人間開発学研究、 第3 号、2012 、pp. 27-36
 26. 中村 哲、どうする新教育課程の評価・指導要録く 中学校編ゝ 伝統や文化の教育の尊重、『週間教育資料』、教育公論社 2012 年1 月16 日号
 27. 安部崇慶・中村 哲、「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践、風間書房、2012、pp. 1-263
 28. 安部崇慶、「伝統と文化」に関する教育のパラダイム―芸道稽古論を中心に―、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012、pp. 3-15
 29. 中村 哲、「伝統と文化」に関する教育に基づく授業実践の新動向と特色、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012 、pp. 16-32
 30. 大畑健実、「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業展開― 静岡県島田市の小学校実践事例を中心にして―、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012 、pp. 23-50
 31. 余郷裕次、国語科における呼吸を育てる絵本の読み聞かせと音読活動、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012、pp. 53-67
 32. 西園芳信、音楽科における伝統音楽の指導内容と授業実践、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012、 pp. 68-82
 33. 山本宏子、音楽科における日本音楽についてのコミュニケーション能力の育成、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012 、pp. 83-100
 34. 福本謹一、図画工作・美術科における「伝統と文化」の学習、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012 、pp. 101-110
 35. 永木耕介、体育科における「武術あそび」による体ほぐし、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012 、pp. 111-125.
 36. アレキサンダー・ベネット、保健体育科における武道指導の問題点と教育プログラム、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012、pp. 126-139.
 37. 前原敏雄、保健体育科における杖道の教材化― 東広島市の取り組みを事例に―、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012、pp. 146-190
 38. 甲斐純子、家庭科における「伝統と文化」教材の開発―「博多織」と「久留米絨」―、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012、 pp. 161-171
 39. 佐藤 真、総合的な学習の時間における「伝統と文化」に関する授業の要点、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012 、pp. 172-182
 40. 永添祥多、我が国の伝統や文化の教育に対する小・中有学生の意識実態― 質問紙調査結果の分析を中心として―、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012、 pp. 199-207
 41. 浅川潔司、和文化教育プログラムと中学新入生の学校適応感形成との関連に関する学校心理学的研究、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012 、pp. 185-198
 42. 金 廷姫、美術教育的観点からの文化教育の内容と学習戦略― 韓国における美術科を手がかりとして―、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012、 pp. 211-225
 43. 張 東浩、韓国における「伝統と文化」に関する教育動向―全羅北道における伝統文化教育を中心として―、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012、 pp. 226-238
 44. 沈曉敏、中国における伝統文化教育の現状と課題、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、風間書房、2012 、pp. 239-252
 45. 中村 哲、「伝統と文化」に関する教育実践WEBデータベースの構成と意義、安部崇慶・中村哲編著『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』、2012 、pp. 253-260

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの名称	情動知能を育む教育「人間発達科」の新たな展開 ―児童生徒の問題行動防止教育プログラムの開発に関する実践的・学際的・国際的アプローチ―		
研究期間	平成 21年 4月 1日～平成 24年 3月 31日	プロジェクト記号	K
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー，所属は実施当時）			
◎ 松村京子・兵庫教育大学教授	柘植雅義・国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員		
西岡伸紀・兵庫教育大学教授	鬼頭英明・兵庫教育大学教授		
立屋敷かおる・上越教育大学教授	吉本佐雅子・鳴門教育大学教授		
並木茂夫・日本学校保健会事務局次長	植田悦司・兵庫教育大学附属小学校教諭		
柴田順次・兵庫教育大学附属小学校教諭	永倉仁貴・兵庫教育大学附属小学校教諭		
稲垣明美・滋賀県栗東市立治田東小学校教頭	笹口浩子・福岡県新宮町立新宮東小学校教諭		
細谷里香・博士課程学生（兵庫教育大学）	江寄和子・博士課程学生（鳴門教育大学）		

プロジェクトの研究成果

I. 研究の目的

近年、子どもたちのなかで、いじめ、不登校、喫煙・飲酒・薬物乱用、自殺、少年犯罪など、深刻な問題が多発している。これらの問題に対しては、対症療法ではなく、問題の発生そのものを未然に防ぐ一次予防が極めて重要である。そのためには、子ども自身が自分を律する調整能力を身につけることや、他者と適切にかかわることができる対人関係能力の育成が欠かせない。それは「情動知能」として注目を浴びている能力でもある。申請者らは、平成 14 年度から 6 年間、文部科学省研究開発学校指定を受けて、兵庫教育大学附属小学校に特設教科「人間発達科」を設置し、「情動知能」に関する学習プログラムの開発を行なってきた。本プロジェクトでは、その研究を基盤として、児童生徒の情動社会性の問題解決に向けてのプログラム開発を目的として、実践的研究を多面的、国際的に進めることとした。

II. プロジェクトの推進体制

研究プロジェクトの推進体制を図 1 に示す。プロジェクトを校種及び研究対象によって 7 グループに分けて研究を進めた。

各年度に 1 ～ 2 回、全体の推進会議を開催し、研究の推進状況の報告及び進め方について検討を行った。

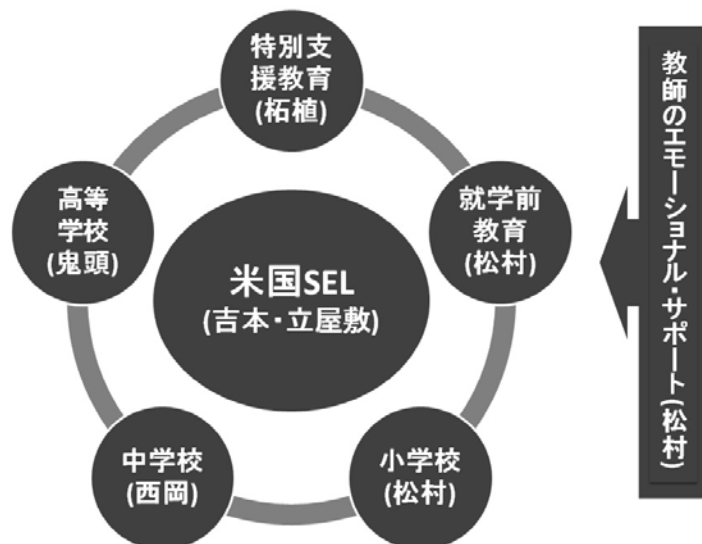


図 1 プロジェクトの推進体制

Ⅲ. 研究成果の概要

1. 米国の情動・社会性の学習 (SEL) 調査グループ

子どもたちの問題は、北米やヨーロッパでも起きている。しかし、日本より早くから深刻な状況に陥っていた米国では、対症療法ではない、予防としての教育の重要性が提言され、予防教育が推進されてきた。その中心的役割を推進してきた組織が The Collaborative for Academic, Social and Emotional Learning (CASEL) である。CASEL は Emotional Intelligence の著者 Daniel Goleman が中心になって、1994 年に設立されたものである。CASEL では、学校や職場で成功するために、子どもの基本的な社会情動コンピテンスを促進する社会情動学習 (Social and Emotional Learning: SEL) を進めている。この学習は、いじめ、仲間の圧力、性・薬物・アルコールに関する危険要因など、子どもたちのウェルビーイングや学校の秩序を脅かすこれらのネガティブな行動に対する予防策となると述べられている。そして、CASEL のミッションは、就学前から高等学校までの教育として SEL プログラムを導入することにより、子どもの健やかな発達とウェルビーイングを促進することであるとしている。

このグループは、米国の SEL を最も強力に推進しているイリノイ州の SEL スタンダーズについて、調査を行い、発達に応じた SEL の内容を明らかにした。また、22 の SEL プログラムの活動の特徴などもあげられた。これらは、他のグループの情動・社会性の学習推進のための基礎的研究となった。

2. 就学前教育グループ

University of Maryland, Baltimore County の Schultz 博士らと共同研究を行い、日本の小 1 プロブレムの予防を目的とした START (Social Thinking & Academic Readiness Training) プログラムを開発した。その中から実行機能に関するレッスンを抽出し、START プログラム就学準備教育版を作成した。加西市教育委員会と連携して、就学直前の年長児に対してプログラムを実施した。プログラムの効果について、子どもたちの実行機能の測定、指導者の指示に対する子どもの行動応答性、指導者による行動観察、指導者に対する意識調査によって検討した。その結果、プログラム実施によって実行機能の向上が見られた。また指導者についても、子どもの集中状態に注目するようになったこと、集中を促す具体的な指導方法が身についたことなど、効果がみられた。

3. 小学校教育グループ

上で述べた START プログラムを福岡と兵庫の小学校 1 年生に対して実施した。その結果、実施群では集中して話を聞く能力、教師の指示への応答性が向上し、START プログラムの効果が実証された。また、兵庫教育大学附属小学校では、「人間発達科」を継承する学習として「情動学習」を立ち上げ、UCLA 実験校で開発された情動コントロールのためのプログラム「COOL TOOLS」も取り入れた実践を行った。500 名以上の参加者がある研究大会で、「情動学習」の授業公開とシンポジウムを行い、多くの学校への普及にも貢献している。

4. 中学校教育グループ

加西市立北条中学校において、総合的な学習の時間を中心にライフスキル教育を実践した。特に 2 年生では、対人関係スキルを重点に、「良い友人関係」「自己主張」などについて 8 時間実施した。それらの指導は、道徳、教科、課外活動等の指導にも関連づけた。また、ライフスキル教育先進校の管理職であった (財) 日本学校保健会次長並木茂夫氏の講演を受けて、全校生徒を対象に、ライフスキル教育に関わる質問紙調査を実施した。その結果、本プロジェクトで実施した対人関係スキルに重点をおいたライフスキル教育の有効性が確かめられた。

5. 高等学校教育グループ

薬物乱用に対する意識と生活習慣、クラブ活動との関連性等を分析した結果、運動部に所属する生徒は薬物乱用の経験はわずかであり、薬物との接触の機会が減少することによるものと推察された。しかしながら、校外スポーツクラブ活動参加による外的環境がきっかけとなって、薬物乱用に対する関心が高くなり、薬物乱用経験に繋がる可能性も明らかとなった。また、高校生の「医薬品の正しい使い方」理解のための効果的な指導方法について、保健学習および総合的な学習の時間での授業実践を行った。グループディスカッションや実験、空箱や医薬品の説明書等を活用し、実生活での場面を想定させる等の工夫により、生徒の医薬品に対する意識が顕著に向上した。高校生のメディア活用についても、研究を進めた。

6. 特別支援教育グループ

ソーシャルスキルトレーニング (Social Skills Training; SST) の中でも、近年特に話題になってきている、学級規模で行うクラスワイド SST (以下 CSST) 及び学校規模で行うスクールワイド SST (以下 SSST) について取り上げ、その意図、方法、特色について検討を行った。さらに、研究動向及び実践事例から、SST 及び SSST の有効性と限界について明らかにした。

7. 教師によるエモーショナル・サポートグループ

教師による子どもとの情動的関わりの質は、子どもの教育において非常に影響の大きいものであるため、優れた教師の日々の情動的関わりのあり方を知ることは、教師と子ども双方の発達にとって意義のあることと考えられる。また、教師によるエモーショナル・サポートはアカデミックサポートにも影響を与え、子どもの学力向上にも関わることが報告されている。そこで、優れた教師が子どもと関わっている際の情動体験と情動表出パターン、および情動調整プロセスを明らかにし、教師のエモーショナル・サポートの在り方及び教員養成教育について考察した。

IV. 研究成果の公表

〔論文〕(計 19 件)

- 細谷里香, 松村京子 (2012) 児童と関わる時の教育実習生の情動能力—優れた教師との比較—, 発達心理学研究, 印刷中
- 富岡 剛, 上田裕司, 鬼頭英明, 西岡伸紀 (2012) 新高等学校学習指導要領による科目「保健」の医薬品に関する授業実践研究. 教育実践学研究 第 13 巻, 21-30
- 尾崎朱, 柘植雅義 (2012) 幼稚園と小学校で行うクラスワイド S S T による移行の効果. LD 研究, 21(1), 102-115.
- 田中淳司, 柘植雅義 (2012) 中学校におけるスクールワイド S S T の効果に関する研究—生徒指導に特別支援教育の視点を取り入れた支援の効果と限界について—. 国立特別支援教育総合研究所ジャーナル (特総研ジャーナル), 創刊号, 16-22.
- 西岡伸紀 (2012) 喫煙, 飲酒, 薬物乱用防止に活かすライフスキル教育, 健康教室 735 集, 23-25
- 細谷里香, 松村京子 (2011) アフタースクールにおける小学校 1 年生の学習行動と内発的学習意欲に関する研究. 教育実践学研究 (日本教育実践学会) 12 (2), 1-8
- Hosotani R, Imai-Matsumura K (2011) Emotional experience, expression, and regulation of high-quality Japanese elementary school teachers. Teaching & Teacher Education. 27, 1039-1048
- 細谷里香, 松村京子 (2011) 認知特性と個別ニーズに基づいた学習支援—算数の遅れが顕著な小学 4 年生の事例—. 臨床発達心理学研究 (日本臨床発達心理士会) 6, 115-121
- 鬼頭英明 (2011) 薬物乱用の現状と学校教育での対応—青少年の薬物乱用—, 犯罪と非行, 169, 20-49
- 鬼頭英明 (2011) 医薬品に関する指導の充実を目指して, RAD-AR News Vol21 No.4, 4-6
- 西岡伸紀 (2011) 安心・安全の新常識 危険行動防止① 青少年の喫煙, 飲酒, 薬物乱用の実態と, その関連要因について, 週刊教育資料 NO. 1176, 18-19
- 西岡伸紀 (2011) 安心・安全の新常識 危険行動防止② 喫煙, 飲酒, 薬物乱用に対する防止教育の進め方, 週刊教育資料 NO. 1177, 24-25
- 西岡伸紀 (2011) 安心・安全の新常識 危険行動防止③ 喫煙, 飲酒, 薬物乱用防止とライフスキル育成, 週刊教育資料 NO. 1178, 18-19
- 西岡伸紀 (2011) 安心・安全の新常識 危険行動防止④ 喫煙, 飲酒, 薬物乱用の防止に向け個人と社会環境を包括した対策を, 週刊教育資料 NO. 1179, 24-25
- 松村京子 (2010) 情動知能が子どもを伸ばす, 子ども学 (甲南女子大学国際子ども学研究センター) 第 12 号, 29-49
- 柘植雅義 (2010) わが国の最近 1 年間における教育心理学の研究動向と展望 特別支援教育部門: 特別支援教育に関する教育心理学的研究の動向と展望—発達障害関係の研究を中心に—. 教育心理学年報 (日本教育心理学会) 第 49 集 (2009 年度), 130-139..
- 西岡伸紀 (2010) 児童・生徒の傷害防止のための包括的な安全対策とセーフティプロモーション, 日本健康教育学会誌 18 巻 3 号, 219-229
- 西岡伸紀 (2010) ライフスキル教育 危険行動を避け, よりよい人間関係を育むためのスキルを学ぶ, 児童心理, 2010 年 10 月号臨時増刊, 54-59
- 松村京子 (2009) 豊かな情動を育む教育. 児童心理 (金子書房) No. 895, 60-64

〔図書〕(計 10 件)

- 松村京子編著 (2012) 学校における情動・社会性の学習—就学前から高等学校まで—, 日本学校保健会/丸善
- 柘植雅義・篁倫子・大石幸二・松村京子編著 (2012) 対人援助専門職のための発達障害者支援ハンドブック, 金剛出版
- 松村京子 (2011) DVD: 小 1 プロブレム予防のための STRAT プログラム vol.1 感情についての論理的な考え方. 医学映像教育センター
- 松村京子 (2011) DVD: 小 1 プロブレム予防のための STRAT プログラム vol.2 注意集中と興奮・イライラへの対応. 医学映像教育センター
- 松村京子 (2011) DVD: 小 1 プロブレム予防のための STRAT プログラム vol.3 友だち間の問題解決と感情コントロール. 医学映像教育センター
- 松村京子 (2011) DVD: 小 1 プロブレム予防のための STRAT プログラム vol.4 不快な感情の理解と善意の解釈. 医学映像教育センター
- 西岡伸紀 (2011) 現代的な健康課題—喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育, 性行動, 生活習慣, 情報リテラシー—, 学校保健マニュアル<改訂 8 版>, p77-88, 南山堂
- 鬼頭英明 (執筆編集), (2011) 「医薬品」に関する教育の考え方・進め方, 日本学校保健会
- 柘植雅義・秋田喜代美訳 (2010) 教室の中の気質と学級づくり—縦断研究から見てきた個の違いの理解と対応—. (Barbara K. Keogh, 2003, Temperament in the Classroom: Understanding Individual Differences. Paul H. Brookes Publishing Co., Maryland, USA.), 金子書房.
- 柘植雅義 (2011) 特別支援教育関連項目執筆 (「特別支援教育」「院内学級」「フリースクール」). 加藤敏・神庭重信・中谷陽二・武田雅俊・鹿島晴雄・狩野力八郎・市川宏伸編集, 現代精神医学事典. 弘文社

〔学会発表等〕（計 15 件）

- Imai-Matsumura K (2012) The effect of the START program on self-control in first grade and preschool children: A video-based eye-tracker study. Visiting Scholar Guest Lecture in Center for Advanced Study of Teaching and Learning (CASTL), University of Virginia.
- 藤原奈奈子, 松村京子(2012) 就学準備のための START プログラムの実践とその効果. 日本発達心理学会第 23 回大会
- 細谷里香, 北川里奈, 松村京子(2012) 児童のニーズに応じた算数支援による学習意欲の変容. 日本発達心理学会第 23 回大会
- Imai-Matsumura K, Sasaguchi K, Betkowski J A, Schultz D A. (2011) The effect of the START program on self-control in first grade elementary school children: A video-tracking study. 15th European Conference on Developmental Psychology
- Hosotani R, Imai-Matsumura K. (2011) Emotional Strategies used by Elementary School Teachers when Interacting with Children. 15th European Conference on Developmental Psychology
- Hosotani R, Imai-Matsumura K. (2011) How do good elementary school teachers express and regulate their emotions in front of children? European Conference on Educational Research 2011
- 松村京子, 笹口浩子(2011) 小 1 プロブレム防止のための START プログラムの開発と効果ー視線分析による集中力の変容の検討ー. 日本発達心理学会第 22 回大会
- 山口香織, 松村京子(2011) 小学生の乳児情動の認知に関する縦断研究. 日本発達心理学会第 22 回大会
- 細谷里香, 松村京子(2011) 子どもに対する教師の情動的アプローチ. 日本教育実践学会第 14 回研究大会
- 藤原奈奈子, 松村京子(2011) 就学準備のための START プログラムの実践とその効果. 日本教育実践学会第 14 回研究大会
- 細谷里香, 松村京子(2010) 教育実習生の児童に対する情動調査・表出に関する研究. 日本発達心理学会第 21 回大会
- 富岡剛, 上田裕司, 足立節江, 菊地素史, 佐々木佳祐, 西岡伸紀, 鬼頭英明 (2010) 医薬品に関する高校生の意識と効果的な授業法について, 第 57 回日本学校保健学会
- 津田英也, 湯浅美香, 大倉幸子, 鬼頭英明, 西岡伸紀 (2010) JSPD 調査に基づく高校生の生活習慣と薬物乱用・ドーピングの要因に関する検討, 第 57 回日本学校保健学会
- 湯浅美香, 津田英也, 大倉幸子, 鬼頭英明, 西岡伸紀 (2010) JSPD 調査に基づく高校生の部活動と薬物に対する意識の検討, 第 57 回日本学校保健学会
- Hosotani R, Imai-Matsumura K. (2009) Learning Motivation among Early Elementary School Aged Children. 14th European Conference on Developmental Psychology

〔新聞掲載等〕（計 13 件）

- 教育医事新聞 (2012) 2 月 25 日号「小 1 プロブレム予防『START プログラム』DVD 全 4 巻」原案監修者インタビュー (松村京子)
- ニュースセルフメディケーション (日本 OTC 医薬品協会) No.3 (2012), 巻頭インタビュー, (鬼頭英明)
- 日本教育新聞 (2011) 4 月 18 日号「小 1 プロブレム予防 DVD 作る」(松村京子)
- 神戸新聞(2011) 4 月 12 日号「小 1 プロブレムを防げ」(松村京子)
- 日本教育新聞(2011) 4 月 4 日号「連載：特別支援教育コーディネーターを育てる・生かす(1) - 誰を指名するか 学校経営戦略から考える」(柘植雅義)
- 日本教育新聞(2011) 4 月 11 日号「連載：特別支援教育コーディネーターを育てる・生かす(2) - 年度初め全児童生徒のニーズの調査から-」(柘植雅義)
- 日本教育新聞(2011) 4 月 18 日号「連載：特別支援教育コーディネーターを育てる・生かす(3) - 授業改善助言, 研究会の工夫で教員を支援-」(柘植雅義)
- 日本教育新聞(2011) 4 月 25 日号「連載：特別支援教育コーディネーターを育てる・生かす(4) - 充実に向けて分掌, 学校評価に位置付け組織で推進-」(柘植雅義)
- 神戸新聞 (2011) 2 月 7 日号「学習意欲の向上にはー『ほめる』重要性強調」(松村京子)
- 日本教育新聞特集 (2010) 4 月 5 日号「特集：生徒指導健康教育に生かすライフスキル教育」意志決定スキルを育てる教育(1) 選択肢と結果を幅広く考える (西岡伸紀)
- 日本教育新聞特集 (2010) 4 月 12 日号「特集：生徒指導健康教育に生かすライフスキル教育」意志決定スキルを育てる教育(2) 具体的場面を設定し意見交換 (西岡伸紀)
- 日本教育新聞特集 (2010) 5 月 24 日号「特集：生徒指導健康教育に生かすライフスキル教育」対人関係スキルを育てる教育(1) 情報や感情を整理し伝える (西岡伸紀)
- 日本教育新聞特集 (2010) 6 月 7 日号「特集：生徒指導健康教育に生かすライフスキル教育」対人関係スキルを育てる教育(2) 役割演技での話の効き方を学ぶ (西岡伸紀)

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの 名称	健康と適応を守る学校予防教育の国際比較研究 ー独自性と共通性の探究から、新たな発展への模索ー		
研 究 期 間	平成22年4月1日～平成25年3月31日	プロジェクト記号	L
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎山崎 勝之・教授・鳴門教育大学		井上 和臣・教授・鳴門教育大学(H24.3退職)	
安藤美華代・准教授・岡山大学		葛西真記子・教授・鳴門教育大学	
越 良子・准教授・上越教育大学		廣瀬 政雄・教授・鳴門教育大学	
富永 良喜・教授・兵庫教育大学		前田 英雄・教授・鳴門教育大学	
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。			
近年、児童・生徒の健康と適応上の問題の発生率は、上昇の一途あるいは高止まりの傾向にある。この問題の抜本的な対策は、予防にある。とりわけ、すべての子どもが健康、適応上の問題をもつ可能性があると考え、問題を持たないうちに、すべての子どもを対象にして学校で実施するユニバーサル予防教育の重要性が強調される。 このユニバーサル予防を学校において実施することは世界の学校教育の最近の強い傾向であるが、その試みはまだまだ不十分な状況である。しかし、その広まりの勢いはすさまじく、現段階でも、多様な教育目標、理論、そして方法があり、その多様性にふれながら今後の発展の方向と可能性を検討することが急務になっている。 この教育が遠い先に目指していることは、子どもの健康や適応を守る学校での予防教育が、すべての学校において恒常的に実施されることであろう。このことは、世界のどこの国においても実現されていない。見果てぬ夢のような目標である。しかし世界では、夥しい数の予防教育プログラムが開発されている。また、限定的、短期的であっても、学校教育に適用されてもいる。 そこで、本プロジェクトは、まず、この学校予防教育の発展の方向を探究するため、日本ならびに海外諸国での予防教育の現状と課題を文献ならびに実地調査、さらにはアンケート調査を実施し、日本と海外での予防教育の特徴と内容を把握することを試みた。その後、国際会議や国内外の学会でのシンポジウムを経て、日本と海外の予防教育を比較しながら、それぞれの独自性と共通性を探究し、そこから今後の世界の学校予防教育のあり方、発展の方向を検討した。			
このような目的から、メンバーは海外研究者との交流を密にし、国内外の予防教育を精査した。またその間、日本国内でメンバーが進める予防教育関連の基礎ならびに応用研究を充実させ、国内の予防教育の発展と海外への発信の基盤を構築し続けた。			
下記には、この3年間にわたる研究活動を、大きく、海外視察ならびに情報交換、国際カンファレンスの開催、海外の学会でのシンポジウム開催、日本の学会でのシンポジウム・ワークショップ開催、国内での予防教育に関する調査研究に大別して記載する。			
1. 海外視察ならびに情報交換（以下、時系列にそって記述）			
（1）オーストラリア・クイーンズランド（平成22年5月22日～6月1日） まず、オーストラリア・クイーンズランドの予防教育の特徴と現状の視察を行った。具体的には、ブリスベンにおける私立小・中学校、公立中学校、クイーンズランド州教育省を訪れ、さらには、予防教育の研究者との情報交換のため、クイーンズランド大学医学部、クイーンズランド工科大学大学院心理学部を訪れた。また、社会・感情学習（SEL: Social and Emotional Learning）の普及のための3つの講演会にも参加し、オーストラリアにおける社会・感情学習の普及状況を目の当たりにすることができた。			
（2）アメリカ・デンバー（平成22年10月13日～16日） アメリカ・デンバーの安全な学校とコミュニティのためのセンター(Center for Safe Schools and Communities)を訪問し、センター・ディレクターのSara Salmon博士と会議をもった。そこでは、予防教育に関して情報交換と討議を重ねた。その後博士とともに、デンバー内の矯正施設や公立学校を複数校訪問し、博士が進める予防教育を実際に視察し、そこでの教職員のみなさんと情報交換ならびに討議を行うことができた。			
（3）アメリカ・シカゴ（平成22年10月18日、19日） アメリカ・シカゴでは、まず、ノース・ウェスタン大学のBarton Hirsh教授の研究室を訪れ、大学院生とともに、互いの予防教育についてプレゼンし、今後の世界の予防教育の発展について討議を行った。そして翌日には、イリノイ大学シカゴ校にて、社会・感情学習の中心的センターといえるキャセル（CASEL: Collaborative for Academic			

c, Social, and Emotional Learning) のプレジデントであるRoger Weissberg教授の研究室を訪問し、先方から10名ほどの出席者をむかえて、相互の予防教育のプレゼンから始まり、今後の予防教育としての社会・感情学習の発展について討議を行った。その後同日中にキャセルを訪問し、そこで働く4名の研究者にキャセルの活動状況を伺い、社会・感情学習を含めて世界の予防教育の動向と今後の発展について討議を行った。

(4) オーストラリア・アデレード (平成22年10月29日～11月6日)

オーストラリア・アデレードにて、複数の学校におけるいじめ対策等を見学し、資料を収集した。また、いじめ予防を中心とする予防教育の研究者との情報交換のため、フリンダース大学の研究者らと交流した。その交流では、予防教育に関して、相互のプレゼンテーションを通じて意見交換を十分に行った。

(5) 中国・重慶 (平成23年2月23日～2月28日)

重慶第二外国語学院を訪問し、中高生の心の健康に関する課題及び心の健康教育の取り組みを教師8名と意見交換した。また、重慶大学の学生とその担当教員、そして心理学教員約100名へ、日本の心の健康教育に関する情報を提供し、学生のメンタルヘルス、特に自殺問題への予防教育について意見交換した。

続いて、西南大学心理学院にて、大学院生、大学教員、学校教師約300名と、災害後の心理健康教育のあり方について、加えて、日中の文化の共通性と相違性に関して意見交換した。さらに、西南大学心理学院において、事件後の心のケアのあり方、そして、予防教育、日本で開発されたトラウマ回復プログラム、災害後の防災教育、心のケアについて意見交換した。

(6) イギリス・ロンドン (平成23年6月28日)

イギリス、ロンドン大学ゴールドスミス校を訪れ、Peter Smith教授の研究室と今後の世界の予防教育について情報交換と討議を行った。Smith教授は、いじめの研究では世界的に著名な研究者である。こちらのグループから、日本で進めている代表的な予防教育についてプレゼンを行い、先方からも教授をはじめ4名の教員や大学院生がいじめ、レジリエンス、ピア・サポートなどのテーマについて国際比較研究のプレゼンを行った。その後、今後の予防教育について、世界的視野で現在の問題をとらえながらそのあり方を討議した。

(7) フィンランド、Turku及びEspoo市 (平成23年8月29日～9月7日)

フィンランドにおいてTurku市及びEspoo市で小学校2校を訪問し、学校・授業見学と先生方との話し合いを通して、いじめ対策のKiVaプログラムの実践状況を詳細に知ることができた。Turku市では、Puolala Schoolの1年生のSirpa Isolauri教諭のクラスで授業見学等を行った。その際にルーマニア警察からも見学者があり、意見交換することができた。また、少し前に同校を訪問した日本人の私立中学校教員(1年間の長期滞在中)を紹介いただき、その方からフィンランドの学校について詳しく聞くこともできた。Espoo市では、Karamzinin Schoolを訪問し、KiVaプログラムの全校での運用状況を校長らから聞き取った。ちょうど、スウェーデンからの見学団体があり、一緒に話を聞くことができた。さらには、フィンランドの政府機関の方との面会や幼稚園の見学も行い、多方面から情報を得ることができた。

(8) 中国・四川省 (平成23年12月23日～26日)

中国、四川省の四川師範大学にて、教育学院長・遊永恒教授から中国での心理健康教育について説明を受け、そのあり方について討議した。また、教授と大学院生、現職教師など約50名に日本の心理健康教育の現状を説明した。翌日には、同大学の張告教授より高校3年生への過酷な受験ストレスへの対処法について聴取した。その後、四川師範大学附属実験小学校にて副校長と健康教育師・李宇氏から、小学5、6年生への心理健康教育の授業の頻度・内容について、また道徳と心理健康教育の相違について、さらには、効果研究の現状、実施者の専門性、心理健康教育と教育相談の関連について聴取した。

2. 国際カンファレンス

(1) 国際専門家会議平成22年年9月25日(土) 12:30～18:30

場所:キャンパス・イノベーションセンター(CIC) 3階多目的スペース(大阪市北区中之島)

招聘講演者

- ・Dr. Yongheng You
(Dean, College of Teacher Education, Sichuan Normal University, China)
講演タイトル"School mental health education in china"
- ・Dr. Kris Ojala
(Co-Director, Pathways Health and Research Centre, Australia)
講演タイトル"Preventive CBT based interventions for children"
- ・Dr. Melissa DeRosier
(Director, 3-C Institute for Social Development, USA)
講演タイトル"Implementing effective social-emotional interventions in schools"
- ・Dr, Paul Naylor
(F/T Senior Research Fellow, Institute for Health Services Effectiveness, Aston University)
講演タイトル"Bullying, anti-bullying peer support systems, and mental health"

日本からは、40名ほどの予防教育の専門家が集まり、招聘者が行う予防教育についてプレゼンが行われた後、世界の予防教育について、目下の課題と今後の展望、発展を討議した。討議は十分に時間がとられ、あらかじめ設

定された世界の学校予防教育の課題に関する討議から自由討議へと展開された。会議は、すべて英語（通訳なし）で運営され、言語の壁にとらわれることなく、意義深い情報交換ならびに討議がなされた。

（２）国際専門家会議平成22年11月28日（日）12:30～18:30

場所:キャンパス・イノベーションセンター(CIC) 4階多目的スペース(大阪市北区中之島)

招聘研究者

- Dr. Sara Salmon
(Executive Director, Center for Safe School and Communities, USA)
講演タイトル“An evidence-based social intelligence curriculum is necessary for academic and behavioral success”
- Dr. Michael Bernard
(Professor, The University of Melbourne, Australia)
講演タイトル“Social and emotional learning: best practices in school-wide implementation”
- Dr. Thomas Lickona
(Professor, New York State University at Cortland; Director, Center for 4th and 5th R's, USA)
講演タイトル“Helping students become both smart and good: Strategies that work in classrooms and schools”

日本からは、50名ほどの予防教育の専門家が集まり、招聘者が行う予防教育についてプレゼンが行われたあと、2時間以上の総合討議時間を設けた。前回の会議を受け、その後の新たな問題と課題を中心に討議テーマを設定した。その後、自由討議の時間を設けた。今回の会議では、今後の世界の学校予防教育の発展方向についてさらに多くの示唆が得られた。

（３）国際専門家会議平成24年10月6日（土）9:30～18:00

場所:大阪大学中之島センター(CIC) 4階多目的スペース(大阪市北区中之島)

招聘研究者

- Dr. Roger Weissberg
(University of Illinois at Chicago and CASEL, USA)
講演タイトル“Strategies to enhance the social, emotional, and academic learning of all students”
- Dr. Christina Salmivalli
(University of Turku, Finland)
講演タイトル“Evidence-based prevention of bullying: Experiences from the national KiVa program in Finland”
- Dr. Celene Domitrovich
(Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning, CASEL and Pennsylvania State University, USA)
講演タイトル“Social-emotional learning in children and adolescence: Scientific evidence and practical implications”

日本からは、50名ほどの予防教育の専門家が集まり、招聘者が行う予防教育についてプレゼンが行われたあと、2時間以上の総合討議時間を設けた。今回は本プロジェクトのまとめにもなる国際会議であったので、今後の世界の学校予防教育のあり方と展開をまとめた。予防教育では中心的役割を果たすキャセルからの招聘、また、いじめ予防では世界をリードするKiVaプログラムの開発者の参加ということで、最後を締めくくるにふさわしい、顔ぶれと討議内容であった。

3. 海外シンポジウム主催開催

（１）アメリカ心理学会でのシンポジウム（平成22年8月14日）

アメリカ・サンディエゴで開催されたアメリカ心理学会（APA）で、シンポジウム「Preventive education in Japan: What we incorporated or changed」（日本における予防教育：何を取り入れ、何が変わったのか）を企画し、プロジェクトにかかわる3名が話題提供を行った。セッションでは活発な議論が行われ、セッション終了後にも引き続き多くの質問が寄せられ、今後の教育の世界的な展開の展望が得られた。

（２）子どもの社会・感情能力ヨーロッパネットワーク会議（平成23年6月30日）

英国マンチェスターで開催された子どもの社会・感情能力ヨーロッパネットワーク会議（European Network for Social and Emotional Competence in Children: ENSEC）において、「Innovative preventive education for health and adjustment」（健康と適応のための革新的な予防教育）と題したシンポジウムを企画・開催し、本プロジェクトにかかわる3名が各自の予防教育について発表し、Paul Naylor 博士（イギリス・アストン大学）の指定討論を経て、予防教育の課題と発展について討議を行った。

4. 国内シンポジウム、ワークショップ開催

(1) 日本教育心理学会自主シンポジウム開催早稲田大学(平成22年8月27日)

タイトル「日本になじむ予防教育の導入—学校のホンネ—」

研究者と学校教員がペアになり話題提供を行い、日本で実施されている学校予防教育の課題、そして学校側からの要望について話題提供と討議を行った。

(2) 日本心理学会ワークショップ開催大阪大学(平成22年9月22日)

タイトル「心理的健康教育・予防教育実施における学校のアセスメント」

健康教育や予防教育を実施した場合の学校での評価について現状と課題が話題提供され、問題点を列挙しながら、今後の発展を討議した。

(3) 日本心理学会ワークショップ主催日本大学(平成23年9月16日)

タイトル「新しい学校予防教育—健康・適応から学業まで—」

広く健康と適応を守り、学業面にまで好影響を及ぼす予防教育について話題提供がなされ、課題と発展について討議された。

(4) 発達心理学会自主シンポジウム主催名古屋国際会議場(平成24年3月11日)

タイトル「学校予防教育の革新—健康と適応を守るユニバーサル予防の広域・恒常的適応—」

日本の学校予防教育の中、普及がめざましい教育に焦点を当て、その紹介を話題提供として行い、課題と発展について討議した。

(5) 日本教育心理学会自主シンポジウム開催琉球大学(平成24年11月25日)

タイトル「世界の学校予防教育」

このプロジェクトの最終報告の一つを兼ねたシンポジウムを開催した。アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ諸国の予防教育が紹介され、今後の世界の学校予防教育について情報交換と討議がなされた。

5. 日本国内での予防教育に関する調査研究

今日、日本の学校現場では様々な予防教育が導入され実施されている。しかしながら、どのような予防教育がどの程度行われているのか、その実態は明らかとはいえない。学校では子どもたちにどのような問題を感じ、何を予防しようとして、どのような予防教育を実施しているのか。また、予防教育の必要性を感じながらも必ずしも実施していないとしたら、それは何故なのか。これらの現状についての質問紙調査を実施した。調査は、予防教育実施の全国的傾向の把握を目的とした、全国の教育センターでの教員研修において予防教育が取り上げられている実態に関する〈調査1〉と、現場教師を対象とした、予防教育の実施程度と予防教育に対する教師の認識に関する〈調査2〉からなる。その結果、教育センターや教師が認識している子どもたちのニーズ(不足していると考えられている能力・特性)に対して直接アプローチしうる予防教育が、必ずしも実施されていない可能性と、より積極的な予防教育の実施を教師に躊躇させる要因が示唆された。

その他、メンバー(研究員含む)は、大阪サテライトでの会議、メールやスカイプを利用して互いの活動情報交換や方向づけを頻繁に行ってきた。特に、最終年度においては、書籍として成果をまとめるにあたり、頻度高く接触することとなった。

また、メンバーは、各自の予防教育にかかわる基礎・応用研究を深め、書籍や論文でその情報を発信し続けた。さらに、海外の研究者と共著で書籍や論文を公表し、そのなかで自然と相互の交流と討議がなされ、互いの理解が深まり、今後の世界の予防教育の展開についての討議がスムーズに行われる下地となった。

上記のように、国内外で予防教育の情報収集ならびに研究者との討議を重ねてきた。その結果、海外ならびに日本の予防教育の現状と課題が明らかになった。さらには、このプロジェクトでは、今後の世界の学校予防教育の発展の方向を日本や諸外国の比較により示唆することができた。

重要な結論としては、次の諸点が指摘された。

- ・学校予防教育は、学校において継続して常時実施する必要がある。
- ・予防の中でも、すべての子どもを対象にしたユニバーサル予防の実施が特に求められる。
- ・共通点も多いが、日本の教育事情の特異性から海外で実施されている予防教育はそのまま日本で実施できない。教育カリキュラムの可塑性、予防教育の対象として特定の子どもの選別の可能性など、各国の事情を考慮した予防教育の開発と実施が重要である。
- ・予防教育の恒常的实施のためには、日本の学習指導要領など公的な教育課程に参入する必要がある。
- ・予防教育の実施者のために円滑な研修システムを構築する。
- ・大規模な効果評価研究を遂行すること、などである。

この3年間のプロジェクトの成果は、平成25年3月に金子書房より「世界の学校予防教育」として刊行し、その詳細を広く伝えているので参照されたい。

6. 国内のA論文誌に公表された成果

●日本のA雑誌論文において、予防教育を実施し効果を調べたもの(日本の予防教育の発展と発信に寄与した)

葛西真紀子・岡崎陽子(2011). LGB Sensitiveカウンセラー養成プログラムの実践—臨床心理士養成指定大学院での試み— 心理臨床学研究、29, 257-268.

* 予防教育科の特定領域でのカウンセラーの養成であるが、予防教育の開発に寄与した。

岡崎由美子・安藤美華代 (2011). 児童の学校ストレスに対する心の健康教育—養護教諭による授業の試み— 学校保健研究、53, 437-445.

富永良喜・三浦光子・山本奨・大谷哲弘・高橋哲・小澤康司・白川美也子・渡部友晴(2012). 大規模災害後の子どものこころのサポート授業日本トラウマティック・ストレス学会誌、10, 11-16.

Yamasaki, K., Uchida, K., & Katsuma, L. (2010). Re-examination of the effects of the “finding positive meaning” coping strategy on positive affect and health. Psychologia, 53, 1-13.

* 子どもの研究ではないが、ポジティブ感情と適切なコーピングを育成する介入研究で、予防教育の開発の基礎研究として重要な位置付けにある。また、海外への発信も多く行われた論文。

●日本のA雑誌論文において、予防教育の開発のために基礎研究として発表されたもの（予防教育の開発寄与した）

貴志知恵子・内田香奈子・山崎勝之(2012). 正感情と認知的再解釈コーピングの関連について—高校生における抑うつ予防プログラム構築のための基礎研究— 小児保健研究、71, 259-266.

貴志知恵子・内田香奈子・山崎勝之(2010). 正感情・負感情と認知的再解釈コーピングが抑うつに及ぼす影響について—高校生を対象とした予測的研究— 学校保健研究、52, 390-397.

三浦浩美・山崎勝之(2012). 児童期の健康・適応に及ぼす正負感情易感性と感情表出性の影響 学校保健研究、54, 404-411.

三浦浩美・勝間理沙・山崎勝之(2011). 児童期における感情表出尺度日本語版の開発 小児保健研究、70, 646-651

内田香奈子・貴志知恵子・山崎勝之(2011). 高校生の感情表出によるストレス・コーピングが抑うつに及ぼす影響学校保健研究、53, 127-134.

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの名称	地域における理数教育活性化のための教員研修モデル・プログラムの開発・評価に関する教育実践学的研究		
研 究 期 間	平成23年4月1日～平成26年3月31日	プロジェクト記号	M
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎小林 辰至・教授・上越教育大学		松 岡 隆・教授・鳴門教育大学	
天野 和孝・教授・上越教育大学		曾布川拓也・教授・岡山大学	
久保田善彦・教授・上越教育大学（～H25.3.31）		松本 榮次・学生・兵庫教育大学（～H25.3.31）	
本 間 均・教授・兵庫教育大学（～H25.3.31）		藤本 孝昭・校長・新潟市立板倉中学校	
長谷川敦司・准教授・上越教育大学（H24.4.1～）			
松本 伸示・教授・兵庫教育大学			
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
平成23年度			
【研究会の開催】			
第1回（平成23年7月9日：上越教育大学）			
①教材となり得る因果的關係（定性的なものも含む）をもつ観察・実験の抽出			
②既存のモデル教材の因果的關係の観点からの再検討と再評価			
③因果的關係を定量化できる題材の小・中・高等学校間の整合性の検討			
④事象と要因との関係を関数として捉える数学指導の可能性の検討（理科との連携の可能性）			
⑤事象と要因との関係を関数として捉える理科指導の可能性の検討（数学との連携の可能性）			
⑥自然事象と要因間、あるいは変化の予測に対する確率論的な見方・考え方の育成に適した素材			
第2回（平成23年10月15日：上越教育大学）			
①A A A S（American Association for the Advancement of Science）のアトラス「第9章 数学の世界」（和訳）についての討論（曾布川）			
②関数（一次関数、二次関数、三角関数等）の指導に関する研究の状況（松岡）			
③自由落下運動、斜面上の運動、単振り子等の指導と表現法としての関数（本間・久保田・小林）			
【調査活動】			
目 的：米国における基本的科学概念の習得を目的とした教材・教具及び教員研修プログラムの実際に関する情報収集を目的とする。			
旅程等：平成23年12月6日～12月11日の日程でサンフランシスコのExploratorium及びCalifornia Academy of Sciencesを調査した。なお、California Academy of Sciencesでは、館長のPeter Roopnarined氏と教師教育担当のMeg Burke氏から聞き取り調査を行った（小林・久保田・松本・本間・曾布川）。			
成 果：Exploratoriumにおいては、例えば物理学における類推の基本の一つである逆二乗の法則に関する展示物が参考になった。逆二乗の法則は磁力や線源からの放射線量等にも適用できることから、今後のプログラム開発の重要なヒントが得られた。California Academy of Sciencesにおいては、教師教育プログラム開発のコンセプトや米国における科学教育スタンダードに関する新しい情報を得ることができた			
平成24年度			
【研究会の開催】			
第1回（平成24年9月14日：上越教育大学）			
・逆2乗則を理解させることを目的としたオリジナル教材を用いた授業を実施した。			
第2回（平成25年2月12日・13日（上越教育大学）			
・逆2乗則を理解させることを目的としたオリジナル教材を用いた授業を対象を変えて再度実施し、その効果をより詳細に検討した。			
【教材開発と実践】			
1．教材開発			
昨年度、米国サンフランコ科学博物館の展示物を調査した際、光の放射に関する逆二乗則を視覚的に体感できる装置が展示されていた。逆二乗則は、一点から全方位に広がる放射線の減衰等の現象において、光の減衰からの類推で式を立て、解釈することができる等の理由から、物理の法則の中でも重要であるとされている。しかし、力についての逆二乗則を取り入れた教材の開発は行われていない。そこで我々は、光の放射、磁場の放射、磁力についての逆二乗則を測定できる装置の開発を行った。場の発生部は、水銀灯とネオジウム磁石の2種類、検出部はフォトディテクター、ガウスメーター、フォースゲージの3種類に交換可能としている。これにより、放射、力の逆二乗則の計測が可能となる。			
2．授業			
開発した教材を用いてCST育成プログラム受講者と修士課程の学生12名に対して授業を行った(図)。流れとしては、実験、結果のまとめ、考察、講義の順に進めた。最初に光強度の減衰についての実験を行い、測定結果を理論値と合わせることで、			

関数の意識付けを行った。続いて類似の現象の推測として磁場をとりあげ実験を行い、結果のまとめを行った。その後、放射における逆二乗則が成り立つ理由に関する考察を行うために、視覚的な光の放射実験を行い、理由の説明を行った。最後に力における逆二乗則について、磁力をとりあげ演示し、力と放射の逆二乗則について、その違いを説明した。

3. 考察

受講生のノートは授業後、一旦回収し、コピーを取った後返却し、記載内容を確認した。ノートにあった感想に、は以下のような記載があった。

- ・実験結果を数式で表す過程は理解できた。
- ・物理（理科）に数学は重要であるという認識はできた。
- ・実験装置と実験は印象に残った。

以上の結果から、実験と教材について強い印象を与えるとともに、関数を用い定量的な解釈を行うことで、深い物理現象の理解が可能となることを実感させることができたと判断した。

【2年目の成果】

- ・逆二乗の法則を理解させることを目的としたオリジナル教具を製作した。
- ・逆二乗の法則を理解させることを目的としたオリジナル教具を用いて、上越教育大学のCST育成プログラム受講者と修士課程の学生12名に対して授業を実施し、関数を用い定量的な解釈を行うことで、物理現象の深い理解が可能になることを実感させることができた。



平成25年度

【研究会の開催】

第1回（平成26年2月18日：上越市ロワジュールホテル）

- ・3年間の成果としてまとめた報告書「兵庫教育大学連合学校教育学研究科共同研究プロジェクトM（平成23-25年度）地域における理数教育活性化のための教員研修モデル・プログラムの開発・評価に関する教育実践学的研究」（全356頁）に基づいて、総括を行うと共に今後の課題を検討した。なお、報告書の項目と執筆者は以下の通りである。

（報告書の項目）

○共同研究プロジェクトM報告概要－緒言にかえて－（小林 辰至）

○連合研究科共同研究プロジェクト（M）「地域における理数教育活性化のための教員研修モデル・プログラムの開発・評価に関する教育実践学的研究」のチーム編成（小林辰至）

Essay編

○自然事象にみられる逆二乗則の理解を目的とした教材開発と教員研修プログラムの開発と評価（長谷川敦司）

○算数・数学での関数指導の理科への応用における課題（松岡隆）

○中等理数教育における「数学化」の持つ意義（曾布川拓也）

○日本と西欧の自然観と科学（小林辰至）

○仮説形成に至る思考過程（山口真人・小林辰至）

○探究における仮説形成に関わる一考察（山口真人・小林辰至）

論文・報告編

○物理教育 第61巻 第3号 別刷

○日本理科教育学会 理科教育学研究 Vol. 53, No. 2 別刷

○日本理科教育学会 理科教育学研究 Vol. 54, No. 2 別刷

○平成23年度第7回日本科学教育学会研究会

○日本理科教育学会 北陸支部大会（2012）研究発表要旨集

○科教研報 Vol. 27 No. 6

資料編

○海外調査－Exploratoriumの報告－（松本伸示・久保田善彦・曾布川拓也・小林辰至）

○Atlas of Science Literacy（2001）の翻訳（松本伸示・久保田善彦・曾布川拓也・松岡隆・本間均）

○小・中学校理科教科書に掲載されている観察・実験等で育成できる探究の技能の評価規準

【査読付論文】

（A論文）

○植木幸広・久保田善彦：振り子の学習における数値の処理が、数値比較の判断に与える影響，理科教育学研究，日本理科教育学会，第53巻第2号，pp. 219-227，2012.

○長谷川直紀・吉田裕・関根幸子・田代直幸・五島政一・稲田結美・小林辰至；小・中学校の理科教科書に掲載されている観察・実験等の類型化とその探究的特徴－プロセス・スキルズを精選・統合して開発した「探究の技能」に基づいて－，理科教育学研究，日本理科教育学会，第54巻第2号，pp. 225-247，2013.

（B論文）

○長谷川敦司・小林辰至：教員養成系大学生の物理学的素養の向上を目指した授業，物理教育，日本物理教育学会，第61巻第3号，pp. 131-136，2013.

（注）氏名欄は適宜増減してください。

* 字数の制限はありません。記述欄が不足する場合は、複数枚になっても構いませんので適宜行数を増やしてください。

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの 名称	社会科授業研究における教育実践学的方法論の構築と展開 ーPDCAに基づく授業理論の有効性の検証と社会科授業研究スタンダード開発ー		
研 究 期 間	平成24年4月1日～平成27年3月31日	プロジェクト記号	N
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎梅津 正美・教授・鳴門教育大学	森 才三・教諭・広島大学附属福山中・高等学校		
原田 智仁・教授・兵庫教育大学	佐藤 章浩・教諭・鳴門教育大学附属小学校		
關 浩和・教授・兵庫教育大学	加藤 寿朗・教授・島根大学		
米田 豊・教授・兵庫教育大学	峯 明秀・教授・大阪教育大学		
吉水 裕也・教授・兵庫教育大学	中本 和彦・准教授・四天王寺大学		
茨木 智志・教授・上越教育大学	Todd Kenreich・准教授・米国タウソン大学		
桑原 敏典・教授・岡山大学	権 五 ・教授・韓国慶尚大学校		
山内 敏男・D3・兵庫教育大学(H27.3修了)	Nasution・講師・インドネシアスラバヤ大学		
紙田 路子・D3・岡山大学	井上 奈穂・准教授・鳴門教育大学		
祐岡 武志・D3・兵庫教育大学	伊藤 直之・准教授・鳴門教育大学		
大西 慎也・D2・兵庫教育大学	小谷恵津子・講師・畿央大学		
菊地八穂子・			
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動（研究会開催，調査活動，研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について，簡潔に箇条書きでお書きください。 1. 研究会の開催 ①平成24年6月10日（日）大阪大学中之島センター406室 研究発表：梅津正美「社会科授業研究の教育実践学的方法論の構築をめざしてー問題の所在ー」，井上奈穂「授業改善におけるPDCAの検討課題」 ②平成24年8月12日（日）大阪大学中之島センター406室 研究発表：米田豊「鳴社学授業カンファレンスの検討に基づく社会科授業研究方法論の課題と提案」，峯明秀「堀川小学校授業研究の検討に基づく社会科授業研究方法論の課題と提案」 ③平成24年11月24日（日）大阪大学中之島センター406室 研究発表：菊池八穂子「小学校社会科政治学習の改善」，桑原敏典「社会科教育研究における授業開発の方法と課題」，梅津正美「社会科授業研究の教育実践学的方法論の枠組みと作業課題」 ④平成25年6月1日（土）大阪大学中之島センター507室 基調提案：梅津正美「社会科授業研究の教育実践学的方法論の探求」 本研究会において，授業研究方法論に関する研究仮説を検討し，4つの仮説を立て，仮説実証のための授業研究を展開していくこととした。 a. 授業の開発プロセス解明研究， b. 授業の評価プロセス解明研究， c. 授業の改善プロセス解明研究， d. 社会認識発達の解明と授業開発研究 ⑤平成25年7月20日（土）兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス4号室 小谷恵津子実践（中学校），紙田路子実践（小学校）に基づく授業研究方法論の検討 ⑥平成25年12月8日（日）大阪大学中之島センター406室 研究発表：森才三・原田智仁・桑原敏典「批判的思考力育成の開発と分析」，佐藤章浩・伊藤直之・井上奈穂「教員養成における授業評価研究」，紙田路子・峯明秀「小学校児童の開かれた価値観形成をめざす授業実践と分析」，小谷恵津子・大西慎也・米田豊「社会科授業改善のためのPDCAプロセスの解明」，加藤寿朗・梅津正美「中学生の社会認識発達に関する調査的研究」 ⑦平成26年6月1日（土）大阪大学中之島センター406室 平成25年度研究成果の総括と出版書『教育実践学としての社会科授業研究の探求』のプロット及び執筆内容の検討 ⑧平成27年3月1日（日）大阪大学中之島センター607室 シンポジウム「教育実践学としての社会科授業研究の探求ー授業研究のパラダイムシフトー」の趣旨・展開・発表内容についての検討 ⑨平成27年3月23日（月）大阪大学中之島センター402室			

シンポジウムの反省と3カ年の授業研究プロジェクトの総括

2. 調査活動の展開

①国内調査：平成24年12月23日（日）東京八重洲ホール102会議室

研究員の梅津正美と峯明秀により、小学校における社会科授業研究の現状と課題及び本プロジェクトの作業課題の妥当性について、佐藤克士氏（東京都神津小学校教諭）、永田忠道氏（広島大学大学院教育学研究科准教授）にインタビューを行い、評価と助言を受けた。

②海外調査：○プロジェクト参加院生の紙田路子氏が、平成24年11月4日（日）～9日（金）アメリカ合衆国ハワイ州ホノルルにて調査を行った。Center for ADR in Hawaii Judiciaryにて社会科授業開発研究のための資料収集を行うとともに、Leilehua High Schoolにて同校教諭Carla Lum氏に社会科授業研究についてインタビュー調査を行った。

○研究員の梅津正美と加藤寿朗により、平成25年2月20日（水）～2月24日（日）に韓国・慶尚大学校師範大学（晋州市）及びソウル市教育史料館にて調査を行った。

○研究員の原田智仁が、平成25年12月24・25両日インドネシアのスラバヤ大学を訪問し、ナスティオン氏から当地の授業研究の現状について聞き取りをするとともに、日本の社会科授業研究について講義をした。

3. 研究成果の公表

①研究著書

・梅津正美・原田智仁編『教育実践学としての社会科授業研究の探求』風間書房、平成27年3月、全388p.

②研究論文（A相当論文）

・加藤寿朗・梅津正美他「生徒の社会認識発達の変容に関する調査的研究－中学校歴史学習の場合－」歴史教育学会（韓国）編『歴史教育論集』第52集（韓国語、権五鉉訳）（韓国研究財団登録雑誌、査読有）、平成26年2月、pp. 163-194

・佐藤克士・吉水裕也「科学の論理と子供の論理との統合をめざす社会科授業研究のケーススタディー小学校第5学年「日本の水産業」を事例として－」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科編『教育実践学論集』第15号、平成26年3月、pp. 153-167

・山内敏男「相互連関の導出による認識の深化を図る中学校社会科歴史授業の開発－小単元「分立する権力と武士の登場」を事例として－」社会系教科教育学会編『社会系教科教育学研究』第26号、平成26年12月、pp. 11-20

・森 才三「社会科授業における「なぜ」発問の実践方略－「問いの対象」と「問いの観点」に注目して－」全国社会科教育学会編『社会科研究』第82号、平成27年3月、pp. 13-24

・井上奈穂「社会科授業における授業者の評価方略の構成－授業実践「震災からの復興を考える」の場合－」全国社会科教育学会編『社会科教育論叢』第49集、平成27年3月、pp. 93-102

・加藤寿朗・梅津正美「中学生の社会的思考力・判断力の発達に関する縦断的調査研究－歴史的分野の調査を中心として－」日本教科教育学会編『日本教科教育学会誌』第38巻3号掲載予定（印刷中）

③研究発表

・第3回全国社会科教育学会・韓国社会教科教育学会研究交流会（平成25年8月24日土曜・キャンパス・イノベーションセンター東京）に参画し、「日韓社会科授業研究の最前線」をテーマに、本プロジェクトから下記の3氏が発表した。

加藤寿朗「児童・生徒の社会認識発達に基づく社会科授業の開発研究」、吉水裕也「日本の社会科授業研究の特徴と課題」、井上奈穂「社会科授業における授業者の評価方略の構成」

・平成26年2月9日（日）に、社会系教科教育学会第25回研究大会（大阪教育大学）において、本プロジェクトからラウンドテーブル「社会科授業研究の教育実践学的方法論の探求」を立てた。

④シンポジウム・公開セミナー

・公開セミナーの開催

平成26年3月23日（日）大阪大学中之島センター406室にて、「社会科授業研究公開セミナー」を開催した。

・シンポジウムの開催

平成27年3月22日（日）13：00から大阪大学中之島センター406室にて、シンポジウム「教育実践学としての社会科授業研究の探求－授業研究のパラダイムシフト－」を開催した（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科と全国社会科教育学会の共催）、参加者48名。

プログラムは、下記の通り。

開会挨拶・趣旨説明 梅津正美（鳴門教育大学）

シンポジウム

コーディネーター 伊藤直之（鳴門教育大学）・中本和彦（四天王寺大学）

1. 成果発表

（1）「授業開発」研究についての新しい提案

①森才三（広島大学附属福山中・高等学校）・桑原敏典（岡山大学）

②祐岡武志（奈良県立法隆寺国際高等学校）・原田智仁（兵庫教育大学）

（2）「授業評価」研究についての新しい提案

紙田路子（島根県浜田市立松原小学校）・峯明秀（大阪教育大学）

（3）「授業改善」研究についての新しい提案

大西慎也（兵庫県淡路市立北淡小学校）・米田豊（兵庫教育大学）

2. ディスカッション

指定討論者 吉水裕也（兵庫教育大学）

3. 本研究のまとめ～社会科授業研究の課題と展望～

コメンテーター 梅津正美（鳴門教育大学）・権五鉉（韓国慶尚大学校）

閉会挨拶 原田智仁（兵庫教育大学）

⑤ウェブによる研究成果の公表

・研究概要等を、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科HP及び全国社会科教育学会HPにリンクして公表した。

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの名称	持続可能な社会を構築する学校安全、防災教育・防災管理の実践的研究		
研 究 期 間	平成23年4月1日～平成26年3月31日	プロジェクト記号	○
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎藤岡 達也・教授・上越教育大学(現滋賀大学) (H24年4月～H25年9月)		◎宮下 敏恵・教授・上越教育大学 (H25年10月～H26年3月)	
◎村田 守・教授・鳴門教育大学(H26年4月～)		西岡 伸紀・教授・兵庫教育大学	
加藤内蔵進・教授・岡山大学		香西 武・教授・鳴門教育大学	
五十嵐素子・准教授・上越教育大学		佐藤 真・教授・兵庫教育大学	
那須 悦代・学生・岡山大学		澤田 一彦・学生・鳴門教育大学	
前原 裕樹・学生・兵庫教育大学		戸倉 則正・学生・上越教育大学	
高瀬 育子・養護教諭・上越教育大学附属中学校		川真田早苗・教諭・徳島県立石井町石井小学校	
小野麻美子・養護教諭・宮城県仙台第一高等学校		丸山 美貴・養護教諭・上越教育大学附属中学校	
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間における研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。 本プロジェクトはチームリーダーの藤岡上越教育大学教授が、平成25年10月より滋賀大学教育学部教授に転出のため、その後半年を宮下上越教育大学教授がチームリーダーを務め、最後の1年を村田がチームリーダーを務めた。チームリーダーの変更はあったものの、研究経過は順調で、毎年研究成果を成書として出版することができた。藤岡教授の他にも、佐藤兵庫教育大学教授が平成26年4月に関西学院大学教授として転出され、五十嵐上越教育大学准教授も北海学園大学准教授として転出された。転出された教員への予算配分等に問題が残った。一方で、連合博士修了生で、本プロジェクトの協力員であった戸倉則正氏博士（上越）は愛知教育大学准教授に、吉川武憲博士（鳴門）は近畿大学講師に採用される嬉しいニュースがあった。本プロジェクトでの研究成果が、彼らの新たな旅立ちに貢献できたことは、望外の喜びであった。 本プロジェクト研究期間内にも、台風・集中豪雨・土石流・地震・火山噴火等の自然災害により多くの命が奪われ、自然災害に対する学校安全・防災教育の実践的研究は喫緊の課題であることの認識を新たにした。しかし、自然災害の対象はあまりに広汎であり、地域特性にも左右される。そこで、本プロジェクトでは、各構成員が各自の専門性・地域性を活かし、「生きる力を育むこと」を基調にし、学校教育活動全体を通した防災教育の在り方を展開した。 研究会開催：神戸サテライトをはじめ、各種学会や日本教育大学協会研究集会時に開催した。 調査活動：国内のみならず海外での研究授業の開催（台湾国立嘉義大学、内モンゴル民俗大学等）、調査（ポルトガル、エジプト他）を行った。また、海外研究者とも共同研究に努めた。 研究成果の公表：構成員、プロジェクト参加連合大学院生、プロジェクト研究員・同協力者により、毎年成書を協同出版より出版した。2013年3月の「生きる力をはぐくむ学校防災Ⅰ」は183頁・15論文、2014年3月の「生きる力を育む学校防災Ⅱ」は211頁・14論文、2015年3月の「生きる力を育む学校防災Ⅲ」は295頁・18論文と年々増加し、研究成果が順調にあがっていることを示している。また、これらの成果を基に普及講演等のアウトリーチ活動にも努めた。 <成書> 学校防災プロジェクトチーム（藤岡達也、西岡伸樹、村田 守、加藤蔵之進、佐藤 真、宮下敏恵、五十嵐素子、松井謙太、吉川武憲、宮川高広、戸倉則正、川真田早苗、高瀬育子、丸山美貴、前原裕樹） 編（2013）、生きる力をはぐくむ学校防災Ⅰ。pp.186、協同出版、東京。〈ISBN978-4-319-00254-2 C2037〉 学校防災プロジェクトチーム（藤岡達也、宮下敏恵、村田 守、西岡伸樹、加藤蔵之進、佐藤 真、五十嵐素子、松井謙太、吉川武憲、宮川高広、川真田早苗、那須悦代、大泉佐保里、高瀬育子、丸山美貴） 編（2014）、生きる力を育む学校防災Ⅱ。pp.211、協同出版、東京。〈ISBN978-4-319-00263-2 C2037〉			

学校防災プロジェクトチーム（藤岡達也，宮下敏恵，村田 守，西岡伸樹，加藤藏之進，佐藤 真，五十嵐素子，松井謙太，吉川武憲，宮川高広，川真田早苗，那須悦代，大泉佐保里，高瀬育子，丸山美貴） 編（2014），生きる力を育む学校防災Ⅲ. pp. 295，協同出版，東京.<ISBN978-4-319-00272-6 C2037>

<提出論文>

戸倉則正，藤岡達也(2013)，津波に起因する河川災害の取扱いについての一考察．理科教育学研究，54，51-60.
藤岡達也，佐藤健(2013)，国際的動向を踏まえた日本の防災教育の現状と課題．安全教育学研究，13（2），19- 25.
西岡伸紀，藤岡達也，松本容史子，丸山美貴（2014），小・中学校における養護教諭及び保健室の防災に関する役割－「備え」に関する重要性の意識と実施状況，及びそれらの関連要因－ 安全教育学研究14（1），3-12.

海外関連論文，学会発表及びアウトリーチ活動については大部につき省略する。

なお，この成果を基にした科研費が採択され，基盤研究(B)「持続可能な国際社会に貢献する日本型防災教育の構築と展開」（課題番号15H02915）が平成27年度より開始できるのも，本プロジェクトの成果の賜であり，謝意を表す。

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの 名称	システムの思考に基づいたイノベーション力の育成を図る技術・情報教育体系 に関する研究		
研 究 期 間	平成25年4月1日～平成28年3月31日	プロジェクト記号	P
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎森山 潤・教授・兵庫教育大学	菊地 章・教授・鳴門教育大学		
山崎 貞登・教授・上越教育大学	大橋 和正・教授・岡山大学		
伊藤 陽介・教授・鳴門教育大学	小山 英樹・教授・兵庫教育大学		
掛川 淳一・准教授・兵庫教育大学	阪東 哲也・D院生・兵庫教育大学		
川島 芳昭・D院生・鳴門教育大学	中原 久志・講師・大分大学		
村松 浩幸・教授・信州大学	宮川 洋一・准教授・岩手大学		
鬼藤 明仁・准教授・横浜国立大学	上之園哲也・准教授・弘前大学		
本村 猛能・教授・群馬大学	山本 利一・教授・埼玉大学		
市原 靖士・教授・大分大学	島田 和典・准教授・大分大学		
逸見 正・教諭・神戸市立科学技術高校	山尾 英一・教諭・大阪市立泉尾工業高校		
萩嶺 直孝・教諭・八代市立第六中学校	勝本 敦洋・教諭・西宮市立瓦木中学校		
末吉 克行・教諭・宝塚市立長尾中学校	世良 啓太・講師（非）・兵庫教育大学附属中学校		
角 和博・教授・佐賀大学	紅林 秀治・教授・静岡大学		
磯部 征尊・准教授・愛知教育大学	市村 尚史・教諭・柏崎市立第1中学校		
瀬下 裕介・教諭・佐久穂町立佐久穂中学校	桑野 浩彰・教諭・新潟市立光晴中学校		
岡 博幸・教諭・兵庫県立飾磨工業高校	竹口 孝志・講師・鳴門教育大学		
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
・3年間ににおける研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。 1. 研究協議会の開催及び研究推進体制の構築 平成25年4月 研究プロジェクトメンバーによる第一回研究協議会の開催（於 兵庫教育大学 自然棟 会議室） ・研究の目的、内容、計画、分担、推進体制について検討し、3年後に研究書籍の出版を目指すことが確認された。 平成25年5月 研究推進体制の構築 ・研究グループの組織、グループリーダーの決定。 ・オンラインによる情報共有、研究推進のため、専用ウェブサイトを構築し、運用を開始した。 2. 海外調査の実施 ・イングランドDesign and TechnologyのNational Curriculum動向調査（平成26年） ・International Technology and Engineering Educators Associationにおいて米国のTechnology Educationの動向調査、I3教材等の事例収集（平成26年） 3. 研究成果 (1) 著書 2件 ・森山潤・菊地章・山崎貞登編、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科共同研究プロジェクト（P）研究グループ著、イノベーション力を育成する技術・情報教育の展望、全284p., ジアース教育新社（2016） ・森山潤・菊地章・山崎貞登編、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科共同研究プロジェクト（P）研究グループ著、イノベーション力育成を図る中学校技術科の授業デザイン、全306p., ジアース教育新社（2016）			

(2) 審査付き学会誌 16件

- ・勝本敦洋・森山潤：児童・生徒のものづくりに対する意識の変化と設計・製作意欲の形成に対する学習適時性の探索的検討，日本産業技術教育学会誌，第55 巻，第4 号，pp. 271-280 (2013)
- ・上之園哲也・森山潤：技術科教育における生活応用力の形成に関する因果モデルの検討，科学教育研究 第37 巻第1号，pp. 38-46 (2013)
- ・角和博・菊地章：学習支援表に基づいたWeb ページ制作の授業実践，日本産業技術教育学会誌，第55 巻，第1 号，pp. 15-23 (2013)
- ・川島芳昭・小野勝也・石川賢・菊地章：学習導入時におけるICT 学習材利用能動学習の有用性，日本産業技術教育学会誌，第55 巻，第4 号，pp. 261-270 (2013)
- ・萩嶺直孝・宮川洋一・森山潤：中学校技術科「プログラムによる計測・制御」の学習における題材タイプの違いによる生徒の反応の差異，日本産業技術教育学会誌，第55巻第3号，pp. 181-190 (2013)
- ・竹口幸志・菊地章：行動と精神活動の方向性を考慮した情報倫理教育コンテンツの特徴分析，日本産業技術教育学会誌，第55 巻，第3 号，pp. 171-179 (2013)
- ・山尾英一・森山潤：工業高校3 年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影響，日本産業技術教育学会誌，第56 巻第3 号，pp. 205-214 (2014)
- ・本村猛能・森山潤：学習者の情報教育に対するカリキュラム・イメージの時系列的な変遷の検討，日本教育情報学会誌「教育情報研究」第30巻第3号，pp. 37-48 (2014)
- ・大森康正・磯部征尊・寒川達也・山崎貞登：2014 年実施のイングランドのナショナルカリキュラム「Design and Technology」と「Computing」の改訂に対するSTEM 教育運動の影響，日本産業技術教育学会誌，第56 巻，第4 号，pp. 239-250 (2014)
- ・鎮革，菊地章：PIC-GPEと連動したPIC-Monitor の開発，日本産業技術教育学会誌，第56 巻，第1 号，pp. 19-27 (2014)
- ・萩嶺直孝・森山潤：中学校技術科「プログラムによる計測・制御」の学習において形成される「技術的な見方・考え方」の実態把握，教育システム情報学会誌第31巻第3号，pp. 239-244 (2014)
- ・阪東哲也・市原靖士・森山潤：自他の権利尊重に関する情報モラルに影響する個人内特性の検討―自尊感情及び他者理解力に焦点を当てて―，日本教育情報学会誌「教育情報研究」第30巻第1号，pp. 19-26 (2014)
- ・中原久志・森山潤：技術科「材料と加工に関する技術」の学習における実習ストレスと日常ストレスとの関連性，日本教科教育学会誌第37巻第1号，pp. 1-9 (2014)
- ・Hidekazu Yamao, Jun Moriyama, Kazunori Shimada, Yasushi Ichihara, Hisashi Nakahara, Youichi Miyagawa, Tetsuya Uenosono: Effects of Career Guidance on Promoting Students' Job Self-Efficacy in Technical High School: A Longitudinal Case Study in Japan, Journal of Asian Vocational Education and Training Vol. 7, pp. 14-21 (2014)
- ・磯部征尊・山崎貞登：Design and Technology からのイングランドSTEM 教育の現状と課題，科学教育研究，第39 巻，第2 号，pp. 86-93 (2015)
- ・中原久志・森山潤・上野耕史：LED 照明機器の製作を通して工夫・創造力を育成するエネルギー変換学習の題材開発と試行的実践，日本産業技術教育学会誌第58巻第1号，pp. 21-29 (2016)

(3) 大学紀要 13件

- ・磯部征尊・山崎貞登：幼稚園から高等学校までを一貫した技術教育課程基準，上越教育大学研究紀要，第32 巻，pp. 331-344 (2013)
- ・森山潤・上之園哲也・中原久志・勝本敦洋：技術科「材料と加工に関する技術」の構想・設計学習におけるプラン形成のプロセス～木材を主とした自由設計題材を用いた実践事例の検討～，兵庫教育大学研究紀要，第43 巻，pp. 121-130 (2013)
- ・森山潤・竹内伸行・勝本敦洋・萩嶺直孝：技術科「材料と加工に関する技術」の学習における「学習記録」指導の実践意識―課題ポートフォリオとしての機能に着目して―，兵庫教育大学研究紀要第45巻，pp. 131-139 (2014)
- ・本村猛能・森山潤：我が国の初等中等教育における情報教育のカリキュラム研究の課題と展望 (I) 情報教育の成立過程，群馬大学教科教育学研究紀要，第13 巻，pp. 49-58 (2014)
- ・森山潤・本村猛能：我が国の初等中等教育における情報教育のカリキュラム研究の課題と展望 (II) 情報教育におけるカリキュラム研究の流れ，群馬大学教科教育学研究紀要，第13 巻，pp. 59-68 (2014)
- ・磯部征尊・山崎貞登：イングランドのナショナルカリキュラム「情報通信技術」と「デザインと技術」の学習プログラムと到達目標の変遷過程，上越教育大学研究紀要，第33 巻，pp. 217-235 (2014)
- ・島田和典・酒井寅平：環境・防災意識に焦点をあてた実践的・体験的な学びの効果，日本産業技術教育学会九州支部論文集，第21 巻，pp. 45-50 (2014)
- ・萩嶺直孝・森山潤：中学校技術科「プログラムによる計測・制御」の学習指導に関する実践研究の展望と課題，兵庫教育大学学校教育研究センター紀要「学校教育学研究」，第26巻，pp. 83-94 (2014)
- ・上之園哲也・中原久志・森山潤：中学校技術科材料加工学習における生活応用力の形成を支援する学習指導法の試行的実践，弘前大学教育学部紀要，第114 号，pp. 75-85 (2015)
- ・森山潤・竹内伸行・萩嶺直孝・勝本敦洋：技術科「材料と加工に関する技術」におけるまとめと振り返りの学習指導の実態把握―凝縮ポートフォリオとしての機能に着目して―，兵庫教育大学研究紀要第46巻，pp. 111-118 (2015)
- ・井本絵里・阪東哲也・森山潤：高校情報科の授業における生徒の学習意欲の促進・減退要因の探索的検討，兵庫教育大学学校教育学研究，第27巻，pp. 49-58 (2015)
- ・中原久志・上之園哲也・森山潤：中学校技術科の学習指導における情意的支援の在り方に関する研究課題の展望，大分大学高等教育開発センター紀要，第7号，pp. 53-64 (2015)
- ・ペーパープロトタイピングによる疑似的なアプリ開発体験を取り入れた技術科「情報に関する技術」の学習，兵庫教育大学学校教育学研究，第28 巻 (2015)

(4) その他
口頭発表13件

4. 出版物の内容構成

第1分冊

『イノベーション力を育成する技術・情報教育の展望』

森山潤・菊地章・山崎貞登編、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科共同研究プロジェクト（P）研究グループ著

全284p., ジアース教育新社（2016）

第1章 序章 研究の目的と内容構成

- 1.1 目的及び背景
- 1.2 研究の枠組み
- 1.3 本書の構成

第2章 技術・情報学習のシステムの考察

- 2.1 システム的考察から捉えた技術・情報学習の目的
- 2.2 教育・学習に対するシステムの考察
- 2.3 各教科の学習内容のシステムの解釈
- 2.4 技術・情報学習のシステムの捉え方
- 2.5 システム的考察から見た高等学校の技術・情報学習内容の検討
- 2.6 技術・情報学習のためのシステムの考察のまとめ

第3章 我が国の技術・情報教育の史的展開と課題

- 3.1 技術科教育の史的展開と課題
- 3.2 工業科教育の史的展開と課題
- 3.3 情報教育の史的展望と課題
- 3.4 技術・情報教育とキャリア形成

第4章 イギリスにおける技術・情報教育の動向

- 4.1 イギリスの社会情勢と技術科教育の歴史
- 4.2 教科「Design and Technology (DT)」
- 4.3 教科「コンピューティング」

第5章 アメリカにおける技術・情報教育の動向

- 5.1 米国の社会情勢と科学技術教育の経緯
- 5.2 技術教育とSTEM教育
- 5.3 技術教育とエンジニアリング教育
- 5.4 I3教材
- 5.5 米国における情報教育

第6章 学習者の認知的実態の把握に基づく技術・情報教育の検討

- 6.1 技術・情報教育における「学び」の構成
- 6.2 ものづくりの意識と設計・製作意欲の形成に対する学習適時性の検討
- 6.3 技術・情報教育における生活応用力の形成プロセス
- 6.4 生活応用力を育む技術・情報教育の実践形態
- 6.5 技術的な問題解決における生徒のセンスの検討
- 6.6 課題研究におけるプロジェクト学習に対する生徒の反応

第7章 エンジニアリングと教育の架橋

- 7.1 材料加工学からの教育内容・教材構成の視点
- 7.2 農学・環境科学からの教育内容・教材構成の視点
- 7.3 電気電子工学からの教育内容・教材構成の視点
- 7.4 機械・生産工学からの教育内容・教材構成の視点
- 7.5 システム工学からの教育内容・教材構成の視点
- 7.6 情報工学からの教育内容・教材構成の視点

第8章 まとめと今後の課題

- 8.1 技術イノベーションと技術ガバナンスとの関連性
- 8.2 今後のカリキュラム開発に向けて

第2分冊

『イノベーション力育成を図る中学校技術科の授業デザイン』

森山潤・菊地章・山崎貞登編、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科共同研究プロジェクト（P）研究グループ著、

全306p., ジアース教育新社（2016）

第1章 イノベーション力を育む技術・情報教育

- 1.1 技術リテラシーの考え方
- 1.2 技術リテラシーと技術・情報教育

第2章 イノベーション力を育成する技術・情報教育の授業デザイン

- 2.1 イノベーション力の育成を図る授業モデルの検討
- 2.2 イノベーション力を育成する学習支援と教材開発の視点

第3章 技術・情報教育への導入学習

- 3.1 技術・情報教育における学習意欲と主体的な学習
 - 3.1 ものづくり学習における小中連携のあり方
 - 3.2 工夫・創造に対する意識を高めるガイダンス指導
- コラム① 授業研究におけるデータ分析

第4章 材料加工の学習における実践研究

- 4.1 材料加工学習における導入教材としてのペーパーブリッジコンテストの実践
 - 4.2 自由製作題材における設計ミスの事例検討による自己評価力の育成
 - 4.3 プレインストーミングとマッピングによる構想・設計学習の支援
 - 4.4 多段階の題材設定によって生徒の生活応用力を高める材料加工学習
- [コラム②] 多様な材料を用いた練習題材の工夫
- [コラム③] 材料加工学習におけるCADの活用
- [コラム④] 自由設計題材における生徒の製作品例のデータベース化
- [コラム⑤] 工夫・創造を生かす教室環境の整備

第5章 エネルギー変換の学習における実践研究

- 5.1 エネルギー変換の学習における電力システムの体験的学習
- 5.2 模作・改作・創作を通して学習意欲を高める課題解決型の電気回路学習
- 5.3 エンジニアリングプロセスを通して工夫・創造を高めるLED照明器具の学習
- 5.4 照明器具の温度計測試験を通して安全性に対する意識を高める授業の実践

第6章 生物育成の学習における実践研究

- 6.1 育成条件の比較を取り入れた栽培学習
 - 6.2 ベビーリーフの生育条件を考える栽培学習
 - 6.3 評価活用力を育成する栽培学習
 - 6.4 生物育成における植物工場の題材開発
- [コラム⑥] 簡易植物工場を用いた育成条件の比較実験
- [コラム⑦] バイオテクノロジーに関する教材開発への期待

第7章 情報活用の学習における実践研究

- 7.1 情報活用実践力を育成する題材構成
 - 7.2 デジタルものづくり日記製作の実践
 - 7.3 学校間連携による協働的なWEBページ作成の学習
 - 7.4 先端技術に触れる情報学習
 - 7.5 人間の行動方向性に着目した情報倫理学習
- [コラム⑧] ゲームに考えさせる情報と意味
- [コラム⑨] アンプラグド・コンピュータ・サイエンスの考え方
- [コラム⑩] テクノロジーに関する調べ学習

第8章 プログラミングの学習における実践研究

- 8.1 学習意欲を高めるScratchプログラミングの実践
 - 8.2 システム的思考力を高めるアルゴリズム学習
 - 8.3 問題解決能力の育成を図るプログラミング学習
 - 8.4 ペーパープロトタイピングによるアプリ開発疑似体験の学習
- [コラム⑪] プログラミング学習における論理的思考力の育成

第9章 システムの学習における実践研究

- 9.1 機構シミュレーションを活用したロボット製作学習
 - 9.2 体験的知的財産学習法を取り入れたロボット製作学習
 - 9.3 システム的考察に基づいた制御学習
 - 9.4 創造的にシステムを構築する制御学習
- [コラム⑫] 3Dプリントなどのデジタル・ファブリケーションの可能性

第10章 まとめと今後の課題

- 10.1 実践研究を振り返って
- 10.2 今後の課題

7 学生研究発表会の記録

学生研究発表会は、平成16年より構成大学副研究科長企画事業として全構成大学合同で実施しています。これまでの実施内容は次のとおりです。

【実施の趣旨】

博士課程の学生は、修士課程の学生と異なり、専門性が一段と強くなり、指導教員とのつながりが深くなる反面、他分野の教員や博士課程に在籍する他の学生との学問的なかわり合いはややもすれば希薄なものとなりがちである。本課程は教育実践学の構築をめざす大学院博士課程であるが、教育実践学は学校教育に関わる総合的な学問であり、専門性に強く限定されることが必ずしもよい結果を生じさせないことは、これまで多方面から指摘されていることである。そこで標記の研究発表会を開催することによって、学校教育の他領域との研究上の相互交流を促進し、それによって教育実践学構築への各学生の寄与を促進し、この課題に対応するものである。

●実施日 平成16年12月4日～5日

実施場所 富士ゼロックス総合教育研究所スペースアルファ神戸（神戸市）

学生発表 6講座

題目

- ・教育分野におけるジェンダー研究の現状と課題
- ・Social Facilitation and Error-Related Negativity
- ・Effects of Oral Reading Practice on Reading Comprehension for Japanese Senior High School Students of English
- ・近代農村社会と労働力移動 ～移住・出稼ぎを中心として
- ・理科学習コミュニティの成立に関する研究
ー大集団コミュニティと小集団コミュニティの関係からの考察ー
- ・師範学校における聴覚訓練の実態 ー国民学校「芸能科音楽」との関連からー

講演 講師：松本剛 氏（大阪学院大学助教授）

演題：博士課程3年を振り返って

●実施日 平成17年11月19日～20日

実施場所 富士ゼロックス総合教育研究所スペースアルファ神戸（神戸市）

学生発表 7講座

題目

- ・自律的学校経営を促す教員人事に関する事例研究 ー東京方式からの示唆と課題ー
- ・「総合的な学習の時間」における「話し合い活動」の意義と活性化の方略に関する研究
ーハーバーマスの「コミュニケーション的行為理論」を基盤にしてー
- ・中世勅撰集雑歌部の研究 ー歌群に紡ぎ出される物語とそのゆくえー
- ・高等学校公民科における見識ある市民のための生命倫理の授業構成
ーダリル・メイサーの教材構成を手がかりとしてー
- ・算数教育における「速さ」の概念獲得過程に関する研究
- ・近代洋画の先駆者・百武兼行に関する研究 ー西洋文化受容の教育的視点からの考察ー
- ・題目不明（生活・健康系教育連合講座）

講演 講師：谷田増幸 氏（広島市教育センター指導主事）

演題：博士課程3年を振り返って

●実施日 平成18年12月9日～10日

実施場所 岡山大学教育学部講義棟（岡山市）

学生発表 7講座

題目

- ・戦後日本の平和教育の課題を踏まえた教材内容開発研究 ー科学的認識から人権へー
- ・抑うつへの反応スタイルに関する研究
- ・プロセス・ライティング指導におけるピア・レスポンス活動が日本人英語学習者のライティング力向上に及ぼす効果

- ・台北帝国大学理農学部製糖化学講座について —浜口栄次郎の研究業績を中心に—
 - ・評価を視点とした理科学習デザインに関する臨床的研究
 - ・「手工」時代における創造的な造形教育について
 - ・小学校体育授業における教師の反省的実践のあり方に関する実証的研究
—授業に対する反省的思考と「出来事」への気づきとの関係について—
- 講演 講師：松枝睦美 氏（岡山大学教育学部助教授）
演題：連大での学生生活をふり返って
-

- 実施日 平成19年12月1日～2日
実施場所 四国電力株式会社総合研修所（高松市）
学生発表 7講座
題目
- ・児童期における関係性攻撃傾向の高さが共感関連反応に及ぼす影響
 - ・幼少期における自然との関わりを豊かにする環境構成と保育実践
 - ・A Search for Factors Determining Global Intelligibility of EFL Learners' Oral Communication
 - ・「地域に根ざす社会科」授業実践の歴史的展開と授業開発
 - ・題目不明（自然系教育連合講座）
 - ・ものの見方を育てる図画工作科の授業
 - ・優れた体育授業の創造に資する教師の戦略的思考に関する実証的研究
- フォーラム 講師：カール・ノイマン氏（ドイツ・ブラウンシュヴァイク工科大学名誉教授/大学教授学センター所長）
演題：良い教師—資質・能力（コンピテンス）のある教師
教職の専門性に関するドイツならびに国際的な議論について
-

- 実施日 平成20年12月6日～7日
実施場所 金沢都ホテル（金沢市）
学生発表 7講座
題目
- ・韓国の小学校音楽科における評価基準の研究 —教育課程に基づいた評価基準設定に着目して—
 - ・学校における児童・生徒と教師の勢力使用の副次的効果～児童生徒の自己認知・印象形成、教師への勢力付与のダイナミクスに関する研究
 - ・Investigating the Nature of EFL Dyadic Interactions in Computer-mediated Communication Tasks
 - ・近代日本の「外地」における高等商業教育 —台湾を事例として—
 - ・ESD教材としての防災教育プログラムの開発 -自然災害に対する行動力を持った高校生の育成を目指して-
 - ・市民教育における環境芸術の教材化の研究
 - ・小学生の給食時間における健康行動評価
—行動変容段階、意志決定バランス、自己効力感尺度の作成—
- フォーラム 講師：ハンナ・キーパー氏（ドイツ・オルデンプルク大学教授）
ヴォルフガング・ミシュケ氏（ドイツ・オルデンプルク大学教授）
演題：教育実践学における新しいストラテジー
-

- 実施日 平成21年11月28日～29日
実施場所 ホテルNCB（大阪市）
学生発表 7講座
題目
- ・正感情と認知的再解釈コーピングが心身の健康に及ぼす影響について
—高校生を対象とした横断的・予測的研究—
 - ・発達障害をともしう子どもに対する音楽活動のアイコンタクト促進効果
 - ・自己との関わりを意識化する古典学習指導の考察 —大村はまの「古典入門」を中心に—
 - ・中等地理教育内容開発研究—社会認識形成のための地誌学習—
 - ・文化的発達の視点からとらえる学習者の科学概念形成とその変容について
 - ・阿波人形浄瑠璃の教材化の研究—教材化する楽曲の選択について—
 - ・日本的死生観に基づく異世代の生き方論考察～あの世にまで渡るネットワーク～

シンポジウム 講師：アンディ・ファン・シャーク氏（アメリカ・ヴァンダービルト大学教授，教育学，教育方法学）
ラインハルド・ウーレ氏（ドイツ・リュネブルグ大学教授，教育哲学）
ディビット・クルック氏（イギリス・ロンドン大学講師，教育史）
テーマ：新しい時代における教育実践学のストラテジー

●実施日 平成22年12月11日～12日

実施場所 ホテルグランヴィア岡山（岡山市）

学生発表 8講座

題目

- ・子どもの視点から見た幼稚園教育と小学校教育との接続に関する研究
- ・高校運動部活動における指導者の関わりと生徒の依存性 ―生徒への質問紙調査を通して―
- ・美術館における幼児期の鑑賞体験とその援助
- ・円地文子の自己救済文学 ―謡曲「砧」の流れ・「男のほね」から短編「砧」へ―
- ・日本統治時代における高雄築港事業 ―砂糖積み出し港から工業港への変遷―
- ・Cyclic Codes with Skew Polynomial Rings
- ・造形美術の通底性を基盤とした中学校美術科における統合的カリキュラムの研究
- ・オントロジーによる学習リソース検索システムに関する研究

特別講演 講師：山根文男氏（岡山大学教師教育開発センター副センター長，前岡山市教育委員会教育長）

演題：岡山市の「連携と協働による人づくり」の取り組み

―学校・教育行政と大学との連携の在り方―

●実施日 平成23年12月17日～18日

実施場所 ANAクラウンプラザホテル大阪（大阪市）

学生発表 8講座

題目

- ・授業における材との対話に関する研究 ―バフチンの対話論を手がかりに―
- ・悩みの相談に関する信念が co-rumination および抑うつに及ぼす影響
- ・生活科に繋がる幼児の自然との関わりにおける気付きの検討 ―KJ法を用いた年長組担任教員の記録から―
- ・キリスト教と作家ヒサエ・ヤマモトおよび作品「祝婚歌」
- ・陳公博における「民生主義革命論」の形成と理念そして挫折
- ・森林土壌の役割とその教材化
- ・美術教育における体験と言葉との関係性について ―写真媒体を用いた教材開発を通して―
- ・身体接触を伴う運動の教育的効果に関する研究 ―共感を促す体育授業の構築に向けて―

特別講演 講師：津田芳見氏（鳴門教育大学教授）

演題：小児期からすすめる生活習慣病予防～保健・医療と教育の連携～

●実施日 平成24年12月15日～16日

実施場所 ANAクラウンプラザホテル大阪（大阪市）

学生発表 8講座

題目

- ・「専門職性をはぐくむ管理栄養士養成制度のあり方」の研究中間報告
- ・EMDR 適用中の脳血流及び自律神経系生理指標の変化 ―パイロットスタディ経過報告―
- ・高機能広汎性発達障害者の実態に基づく就労支援に関するプログラムの開発及び効果の検討
- ・L2 多読が L2 ライティング能力に与える効果 ―先行研究のまとめと今後の課題―
- ・地域社会の形成者育成を目指した単元開発 ―第3学年「農家の仕事」を事例として―
- ・植物ホルモンの働きを学ぶ教材開発に関する研究
- ・障がい者を対象とした粘土による造形活動の場におけるボランティア学生の共感的態度の育ちについての考察
- ・二人は一人よりも力発揮もタイミングも安定する

特別講演 講師：長谷川春生氏（富山大学人間発達科学部准教授）

演題：連合大学院での研究と毎日の生活 ―小学校教員として，大学院生として―

●実施日 平成25年12月14日～15日

実施場所 兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス（神戸市）

学生発表 8講座

題目

- ・戦後における郷土教育実践の創造過程に関する研究 ―相川日出雄の場合―
- ・新任保育者の困難感に着目したメンタルヘルスに関する研究
- ・保育者養成教育における人との関わりから展開する即興的な身体表現の実践
- ・小学校外国語活動において長期的授業取組みと動機付けの混合方法研究調査
- ・世界史教育における内容編成論の研究 ―ESD（持続発展教育）の観点からの再編成―
- ・構成主義（constructivism）に基づく科学的概念の形成過程に関する研究
- ・対話型鑑賞法を生かした美術鑑賞教育の価値と実践への視座
- ・ものづくり学習における「癒し」と「ストレス」の状況分析に基づく情意的支援の検討

特別講演 講師：中瀬勲 氏（兵庫県立人と自然の博物館館長）

演題：ランドスケープ研究40年 ―恩師からのバトン―

●実施日 平成26年12月20日～21日

実施場所 大阪大学中之島センター（大阪市）

学生発表 8講座

題目

- ・校内授業研究会における教師の授業の再認識
- ・知的障害特別支援学校に在籍する児童生徒の身体的不器用さの評価尺度に関する研究
- ・「認知図」を組み込んだ概念形成と「思考」の評価
- ・想像力の触発を目指す初等英語教員養成プログラムの開発
- ・高等学校公民科における討論を通じた社会形成力の育成をめざす授業開発
- ・高校化学の国際化に関する研究 ―化学の内容の国際標準化と化学英語の活用―
- ・対話による美術鑑賞授業における学習過程の記述分析に関する研究
- ・能動的知識定着を支援する情報教育の体系化に関する研究

特別講演 講師：佐々木弘記 氏（中国学園大学子ども学部准教授）

演題：学位取得への道 ～仕事と学修の両立～

●実施日 平成27年12月19日～20日

実施場所 大阪大学中之島センター（大阪市）

学生発表 8講座

題目

- ・概念獲得を促進する操作的思考課題を用いた授業の開発
- ・セクシュアルマイノリティの説明モデルの体系化
- ・児童の学業的延引行動に及ぼす愛着の内的作業モデルと内発的動機づけの影響
- ・中学生に対する絵本の読み聞かせの効果の研究
―教師による読み聞かせに対するメッセージ文の分析を中心に―
- ・小中高一貫の経済教育カリキュラム研究
- ・地域に根ざした科学と教育 ―郷土の花崗岩の解明に基づく教員研修による授業づくり―
- ・ピアノ演奏における視線移動と演奏のエラーとの関連性
―学習モデル開発のための実験的研究―
- ・拡張現実技術を用いた教育支援システムの開発と応用

特別講演 講師：金網知征 氏（甲子園大学心理学部准教授）

演題：イギリスの大学院でPh.Dを取得するということ

～10年間の留学生生活を振り返って～

兵庫教育大学連合学校教育学研究科 20周年記念誌

平成 28 年 9 月発行

編集 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科
創立 20 周年記念式典記念行事实行委員会
委員長 松村京子

〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1
TEL:0795-44-2068, FAX:0795-44-2269
office-rendai-r@hyogo-u.ac.jp
<http://www.hyogo-u.ac.jp>

兵庫教育大学 上越教育大学 岡山大学 鳴門教育大学

兵庫教育大学連合学校教育学研究科 20 周年記念式典・講演会

平成 28 年 9 月 24 日（土） 神戸ポートピアホテル